東方魔王伝～人間だけど吸血鬼～

あっくすぼんばー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方魔王伝～人間だけど吸血鬼～

【Ｎコード】
Ｎ５９９４Ｕ

【作者名】
あっくすぼんばー

【あらすじ】
ある世界を統べていた吸血鬼は言いました。
「思ったよりも魔界統治とかつまんね」
そういった吸血鬼は身体を放棄し輪廻を外れ、色々な世界を旅する事にしました。色々な世界を旅して色々な生命になり、悠久の生を数多の世界で楽しんでいた吸血鬼。
これはそんな吸血鬼が、ある一つの世界に縛られてしまう物語。

主人公設定（前書き）

設定が追加され次第随時更新

主人公設定

名前：遠成（えんじょう）　翔夜（しょうや）
年齢：外見２２歳程度（中身？歳）
身長：１７０ｃｍ
体重：５７ｋｇ

容姿：黒髪黒目、造形は整っている方だがよく頑張って上の下辺りが精一杯。目は鋭い方、だが、中々に力の入っていないような印象の瞳、良く言うなら自然体、悪く言うなら人を食ったような色を感じさせる。髪は短すぎず長すぎず、丁度いい具合。

服装：黒を好む、普段は黒の着流し、若しくは生前着ていた服（Ｔシャツ　Ｇパン　両方黒）

能力：ありとあらゆるものを突破する程度の能力

武器：殴る、蹴る、魔法など

性格：子供かと思えば大人のような、大人かと思えば子供のような掴み所のない性格。のらりくらりと他人の追及から逃れつつ、アドバイスを欲している他人などにはさり気無くヒントを与える、外見に似合わずかなり懐が深く貫禄がある。基本的には享楽主義で自由奔放、面白そうな事は放置しない。
　努力や我慢といった事柄が苦手で、努力や我慢を認めていないわけではないが、自分が努力や我慢に時間を使うならば楽しい事をして過ごすと言う享楽主義者であり、努力と言うものをあまりしなくてもそれなりにいい結果を残せる天才肌気質の人物。
　基本的に自分本位で、自分勝手、何をおいても自分が第一と言う

性格であり、傲慢である。
　しかし、案外と悪い印象が無いのは、自分勝手の方向性であり、自分が楽しむ為に他人を喜ばせる事が必要ならば、迷わず実行し、楽しむ為に他人に優しくしなければならないならば当然そうする。
　つまりは、自分のやりたい事を自分の意思でするという事が重要、と言う意味での自分本位であり、自分勝手である。
　何処までも自分の意思を大事にし、それを妨げる物は例外なく排除していく為、決して優しくはない。
　むしろ、他人からすれば、他人の気持ちを汲み取って行動すると言う原理をあまり持たない為、残酷で冷徹な人物であるとも言える。

苦手なもの：努力、我慢

備考：とある世界を統べていた吸血鬼の魂が入った人間。世界の統治が思いの他面白くなく、面倒臭くなった吸血鬼が魂だけで、文字通り色々な世界を旅している内に、東方の世界にたどり着き、世界に枷を掛けられ、東方の世界で悠久の時をすごす事が決定付けられた存在。世界からの枷とは能力の事で、人を形どった瞬間から寿命と老化と言う概念を突破してしまい、死による世界からの解放が不可能となった。
　元々吸血鬼と言う種族である事から、目に見えない力を行使するという点については得意な部類に入る、吸血鬼として過ごしてきた力の使い方の経験や知識も相まって、能力、魔力、霊力の扱いについては特に問題ない所か、ともすれば一流と呼ばれる部類に入る。
　吸血鬼の魂が入っている事から、魔力について高い資質を持っている。量については元々魂に癒着している魔力に限界がないので能力を使わずとも限界量を突破している。
　霊力については人間の身体なので元から微々たる量が存在していた所を能力で限界量を突破してしまい膨れ上がっている。
　妖力、神力は共に皆無、一ミリたりとも身体の中に存在していな

い為、能力を使っても増やす事など出来はしない。
　現在の身体は一番最近生きていた世界で使っていた身体が全盛期の時の身体を再構成されている。
　しかし、あらゆる能力が突破してしまったので既に人間かどうかが怪しくなっている。
　そして、何故か周りに色々な存在が寄ってくる出所不明なカリスマ性あり。

能力について：文字通りありとあらゆるものを突破する能力、自分の身体に起こっている能力の突破はパッシブスキル、もう外せないし戻せない。自分の事以外だと、量や距離、果てには時間や空間まであらゆるものを突破する。

好きな言葉：全ての努力が必ずしも報われるわけではない（自作）

現在の持ち物
　ザック（中身は野宿に必要な用品）
　黒のシャツ、黒のズボン
　永琳に買ってもらった黒の着流し
　紫から貰った扇子（魔改造済み）

主人公設定（後書き）

うーん、やっちゃったねぇ、ＩＳの方も止めてたくせに何書いてんだろうね？
まぁ、こっちは暇つぶしと言うか、ＩＳが行き詰った時でもちょこちょこっと書いていこうかなーと思ったしだいです。
定期的な更新はあまりないと思ってくれると幸いです。

プロローグ兼現状把握

ここはとある世界、生まれたばかりの世界、生命が誕生する前の世界。そんな世界であるはずだが、そこに突然現れる存在。まさしく人の形を取った生命は、生まれたばかりの世界の地面に横たわるようにして刹那の瞬間にそこに存在していた。
世界の次に現れたその存在は、黒い髪に、それなりに整っているであろう顔の造形。身長と比較して長めの手足は黒の衣服に包まれていた。
そして時間の概念すらはっきりとしないこの世界の地で横たわっていた人の瞳が開かれる。

「次の世界に着いたのか？」

鋭さを感じつつも何処か力の入っていない瞳が開かれると同時に発せられた言葉は、確かに『次の世界』と発した。
生命が誕生する為に必要なプロセスである所の位置づけで言う所である、男という区分けの生命は、旅人だった。人の形を取っているがその魂までは人ではない男は世界を旅する旅人だった。
その男の常識としては今までのセオリー上、明確な言語が発する事が出来る程に声帯が発達した生命に誕生する事は初めてだった。
男の信念上、既に誕生してしまっている生命の自我を奪い存在することはタブーだったはずなのだが……。

「それにしても……生命がいない？　何だこの世界？」

立ち上がり、周りを見渡しつつ、そう言葉を発しながら、自らが言った言葉と今の自分か置かれているこの状況に対しての矛盾に気が付く。

生命がいない世界に自らが入り込む為の生命などいる筈がないという矛盾、それに気が付いた男は特に反応を示す事無く、それを事実として受け入れた。
と、そこで、男の頭の中に一つの文、と言うか説明のような物が浮かぶ。

『ありとあらゆるものを突破する程度の能力』

それを理解した瞬間、諦めたように息を吐き出す。

「ついに世界から枷を掛けられたか……俺の旅もここで終わりって事か」

男が如何に強大な存在といえども、生まれたばかりとはいえ、世界に勝てるほど強大だと思えるほど、男は人生経験が浅くはなかった。何処までも続く地平線を見渡しながら、鏡と言う物すら存在する事が遥か先の世界で今の自分が自分を確かめる手段を講じる事にする。男が存在していた以前の世界では、その存在すら架空の力である、魔力を起動させる。

「使う事がなかったからな……鈍ってなきゃいいが……」

今まで眠っていた魔力を起こす事に成功し、身体を駆け巡るその力の一部を体外へと排出、男の意識の中で丁度男の目の前に輩出された魔力を自らの意識下でコントロール、排出された極一部の魔力を一点へと濃縮し、それを体内にある魔力で視神経とその魔力を繋ぎ、第三の目とする。この作業を特に苦もなく無造作に行う。
そうして得られた第三者的視点で見た男の容姿は、黒髪黒目、目は鋭い方だが、気の抜けたような色なので威圧感は軽減されている。
身長は１７０ｃｍほど、それと対比して手足は長めで、全体的に見

た所それなりに整った容姿。
三の目に映る男を、男自身は見た事があった。

「前の世界の身体か……寿命を迎えたからな、爺だったはずだが……世界が俺の魂に残った最新の記憶を再構成したか」

男自身が見覚えのあるこの身体、間違いなく人間であるこの身体の時、男は、遠成翔夜と名乗っていた。

「まぁ、名前なんざ前の引継ぎでかまわねぇな」

そう結論付けると、男――翔夜は魔力を霧散させ、特に当てもなく足を動かし歩き出す。
特に問題なく起動できた膨大な魔力、世界から掛けられた枷は能力と言う形で存在し、その能力の恩恵の一つとして、人間の身体ならば誰しもあるが、翔夜は極々微量だった筈の霊力と言う力が膨大なまでに膨れ上がっている、この現状を踏まえ、翔夜はこう結論付ける。

「これなら大体何が起こっても大丈夫だろ」

特に気負う事もなくそう結論付けた翔夜は取り合えず足を動かしながら、少し困ったように眉根が寄せられ、取り合えず現状の不満点が口をつく。

「取り合えず、これから何千年か何万年かしらねぇが、その間は暇って事か……はぁ……」

その間の時間を潰す方法を延々と考えつつ、翔夜の永い生は再び始まった。

プロローグ兼現状把握（後書き）

まぁ、ほら、プロローグだから、原作キャラとか、次の話で出てくるよ、うん、多分……永琳出せる所までいけたらいいなぁ……。
ちなみに次の更新は未定です、と言うより気分次第です（え

いち　世界を三週は回ったね

生まれたばかりの世界がある存在を受け入れてから、数えるのも億劫になるほどの月日がたったある時。世界の次に誕生したある男、翔夜が、この世界を文字通り歩いて旅している時、生命体など欠片も見なかったこの始まったばかりの世界で、ある存在と偶発的に出会う。
その、ある存在とは……。

「妖怪、だと？」

翔夜の目の前にいるのは、地面から漏れ出たような暗い影、いや、蜃気楼のように揺らめいた黒い霞といった表現が正しいような物だった。自我すら存在していないような妖怪、低級も低級で、具体的に意味のある形すら取れないような妖怪ではあったが、正しく妖怪である。
その存在に対して眉根を寄せ、呑気に視線を寄越す翔夜。その間にも目の前に存在するものを喰らおうと黒い霞は翔夜との距離を詰めている。
無論、翔夜はその存在に対して何も思う所はない、翔夜が解せないのはその存在が現在存在している事に関してである。

（妖怪は人の恐怖から生まれていると言うのは常識だ……居るのか？　感情を持ち知識を持つ生命体が）

面白い、翔夜はそう思う、何時だか分からないこの時代に知性を持つ生命体が居る事は、翔夜の中でほぼ確信へと変わった。
そして、この世界に存在してから初めて、ぶらりぶらりと当てもなく世界を歩いてきた翔夜に明確な目的が出来る。目的が決まった途

端に、翔夜の口元がみるみる内に笑みの形を作る。とは言っても、その笑みの形は爽やかという印象には程遠く、悠然と笑むその顔は不敵な、と言った表現が良く似合う。既に悠久の時を生きる男が浮かべるその笑みは、溢れんばかりの自信を感じさせる。
そして、眼前へと迫った自我すらない妖怪へと視点を合わせる。

「失せろ、低級の妖怪に興味はない」

只でさえ鋭い瞳が、確固とした意思を持ち、細められるようにして妖怪を睨みつける。只それだけの事だが、翔夜の目の前にいる妖怪は自身の身体である黒い霞を端から削るようにしてその体積を少なくしていく。いや、目に見えない何かによってその体積を削られていると言った方が正しい表現だろうか？
そして数秒後、体積を著しく減らした黒い霞は忽然と翔夜の目の前から消え去った。

「行ったか……消すのは容易いが、まぁ、逃げてくれるのなら面倒がなくて済む、さぁて、行くか」

翔夜の目の前にいた妖怪が逃げていったのを確認したのか、この世界に着いて自分の姿を確認する以外に使わなかった魔力を起こし、大気と魔力を融合、後に風とする。膨大な魔力と練られた大気は勢いを増し、ついには人の身体をも浮かすほどの暴風へと変貌する。
そうして黒髪や服の裾を激しく靡かせながら浮かび上がった身体を確認して、翔夜は満足そうに一つ頷く。

「よし、コントロールは衰えていないな、空を飛ぶのに一々魔力や霊力を使うのは少し面倒だが、この際仕方ない」

翔夜の身体を包む暴風は徐々に高度を下げ、翔夜の足を支えるほど

までに高度が下がった時、翔夜の身体は１０ｍほど浮き上がり、靡いていた髪や服も無風状態のように落ち着いていた。
しかし、翔夜の足元は生えていた草や地面の砂を巻き上げるようにして渦巻いている。魔法で出来た極小規模の竜巻は、今や翔夜の身体を支える為の足場と化していた。そしてその砂や草などでようやく視認出来る風は翔夜の体を乗せたまま徐々に高度を上げ、伴っていた砂や草を撒き散らし、ようやく風本来の無色透明を取り戻し、傍目には何もない空間に翔夜が浮かんでいる様にしか見えない光景が出来上がる。その様子に殊更満足そうに笑みを浮かべる翔夜。

「さて、突然現れた知性を持つ生命体探索ツアーに出発だな」

夜といわれる時間帯、月の明かりだけが頼りの夜空に浮かび上がり、ニヤリと笑みを浮かべた翔夜が文字通り飛んで行ったのは言うまでもない。

かなりの速度で夜空を翔けていた翔夜が探す事数時間、翔夜自身が予測していたよりも早く知的生命体は見つかった。正確な表現をするならば、知的生命体が住んでいるとしか思えないような場所を見つけた、と言った方が正しい表現だ。
翔夜が見つけたその場所、周りには未だ荒野のような景色が広がっている中で、ぽつんとある明らかに人工物であろう光が輝く都市と言った方が正しい表現になる場所。夜になっても都市が眠る気配はなく、光り輝いている。
そんなアンバランスな光景を、翔夜は上空から見下ろし、感嘆したように、ほぅ、と腕を組み言葉を漏らす。

「世界の文明を置き去りにして発展する都市、ねぇ？　面白いじゃ

ねーか」

眠る気配のない近未来的な都市を見下ろし、くつくつと夜空に浮かびながら笑う翔夜。と、そこで、ピクリと眉尻を一瞬動かす。
そして翔夜の表情は更に面白そうに笑みを深める。

「あの都市の中から、視線？　面白い、行ってみるか」

面白そうにそう呟く翔夜だが、実際にはありえない話だ、翔夜はあの都市の一番高い建物から見ても約２０ｍ上空に浮かんでいるのだ、普通ならばその様な存在を、光り輝く都市の中から夜空に浮かぶ人を視認出来るなどありえない。だが、何時の世もありえない存在などごまんと存在する事を翔夜は知っていた。
だからこそ思う、面白い、と。

「さて、と、あれだけ周りの文明を置き去りに発展している都市だ、上空からの侵入と言うのは少々きついか？」

辺りに文明の欠片も見出せない世界の中で、あれだけの発展を遂げている都市、それはもう一種の要塞のようなものと考えた方がいい。都市の出入り口には無論、見張りが居るだろうし、あれだけの文明で、尚且つ辺りには妖怪の存在も翔夜には確認できる。
なればこそ、妖怪と言う存在がどのような存在かも理解できているはず。と言う事はつまり、常識の通用しない存在相手の警戒方法として上空からの侵入も警戒していて当然。
ならばどうすればいいか？　そう自問してすぐさま回答を口にする。

「気付いている生命体が居るのならば、正面から行けば良いだけの事だろ」

つまりはそう言う事、あれだけの発展を遂げる事が出来る生命体が居て、尚且つその様な生命体がこちらの存在に気が付いた、それはつまりこちらが動きを見せれば否が応でも向こうも動かざるを得ない。そして翔夜自身が正面から赴けば、向こうからも何かしらリアクションがある。直接ではないにしても、見張り役を通して何らかの反応はあるはずだ。

そう結論付けた所で、翔夜は高度を下げに入る、地面から１０ｍと言った所で、またもや草や砂を巻き上げ、風の形が顕になり、竜巻を形成していた風が緩やかにその形を崩し、翔夜の足が地面を付く頃には風があったと言う事実すら無かったかのように魔力と共に霧散していた。

足が地面をしっかり踏みしめている事を確認した翔夜は満足そうに笑みを浮かべ、自身の１００ｍ程先に存在する都市を確認して、更に笑みを深める。興味をそそられるその都市へ向けて足を向ける翔夜だが、その翔夜の形が整った眉が不機嫌そうに歪められる。

「目と鼻の先でこれか、まぁ、そうだろうな、食料が目の前に居るのに食料が警戒してテリトリーから出て来ないとなればこうなるか」

都市への興味を邪魔された事と、都市への興味に気を取られすぎてこの状況に陥る事を失念していた自分に対して舌打ちを打つ。

そしてその不機嫌そうな視線は好奇心を満たす事を邪魔する存在へ向けられた。

「久しぶりの人間……」

ニタリと笑うその存在は、妖怪、その中でも生命の恐怖心の近くで生まれたからか、人型を形どっている、そして頭部には角。鬼と呼ばれる妖怪にカテゴライズされる妖怪。その他にも熊に似たような妖怪、虫のような妖怪、様々な妖怪約数十が都市へと続く道を邪魔

していた。
その光景を苛立たしげに睨みつける翔夜。

「調子に乗るな、名も無き鬼如きが、雑魚妖怪を引き連れてきただけで俺を食えると思うなよ？」

そう呟くと、何を思ったか、苛立たしげに睨んでいたその視線の雰囲気は変わり、翔夜の表情は不機嫌そうな表情から、ニヤリ、と不敵な笑みへと変わり、ズボンのポケットに手を入れ悠然と佇む。月を背に悠然と立つ翔夜の姿はある種の風格を感じさせた。
暗闇と月光が支配する夜の時間に、夜が自分達の領分である妖怪、その存在を前に翔夜からは緊張も恐怖も感じられない。それ所か、持て余すほどの余裕すら感じさせる翔夜の様子から、妖怪達は逆に威圧感を感じる。
だが、その様な翔夜を前にしても、自らの空腹を前に獲物に対する違和感など些細な事なのか、威圧感を無視するようにして、土埃を立てながら多数の妖怪が翔夜へ殺到していく。
それが、虐殺の合図だった。

「やれやれ……食えると思うな、そう言ったんだがなぁ？」

自らの身体に渦巻く霊力を起こし、軽く解すようにポケットから片手を出し、掌を首の後ろに当てて、首を軽く回す。その動作をしている間にも妖怪達は迫ってくるが、一番最初に翔夜との距離を正面から詰めてきた狼のような妖怪は音も立てずに正面から真っ二つにされ、翔夜の身体を避けるようにして左右のパーツが距離を詰めてきたのと同じ勢いで翔の後方へ飛んで行き、生々しい音を立てて地面へと落下し、狼のような妖怪であったものが生命活動を停止する。
その不可解な光景に妖怪達は足を止め、翔夜へと視線が集まる、返り血すら浴びる事無く、只そこに立っている翔夜はまさしく絶対者

のような風格があった。

「死にたくなけりゃ、失せろ」

比較的軽く、笑みを浮かべながら放たれた言葉は、恐ろしいまでに冷徹で、夜が領分の妖怪達にすら薄ら寒さを与える、そんな声音だった。

不敵に笑みを浮かべ、冷徹な眼差しの翔夜が緩やかな動作で、ズボンのポケットに片手を入れたまま一歩を踏み出す。砂を踏みしめる、ジャリ、と言う小さな音に、ぴくりと身体を振るわせる妖怪達だが、翔夜の放つ極上の霊力を前にその恐怖を振り払ったのか、再び怒号と共に翔夜へ数の暴力が殺到する。

そんな妖怪達の行動に、諦めたように肩をすくめるが、その歩みは止まらない、不敵に笑みを浮かべたまま、妖怪の群れと翔夜がぶつかる。その瞬間、先頭を切っていた熊のような妖怪は、爆散、文字通り血飛沫を撒き散らしながら肉片へと変貌する。

熊のような妖怪が肉片へと変貌した瞬間、翔夜の右から猿の形をした妖怪、それも既に分かっていたように、霊力を操作、大気と融合させた風で刃を形成、その刃で持って胴体と首を切断。

その後に鳥のような妖怪が空中から迫り来るが、それも霊力で大気に干渉、妖怪の周りの大気を加速させ、妖怪はそのまま炎上、塵も残らず灰へと姿を変える。

その様に、ある妖怪は細切れに、ある妖怪は灰燼へ、ある妖怪は数多の肉片に、ある妖怪はミイラに、など、翔夜に襲い掛かった妖怪が次々と物言わぬ物体へと姿を変えていく中、翔夜だけはその歩みの速度を変えず、進行方向も都市へと向けていた。

異常なまでの光景に妖怪達の勢いも段々と弱まり、怒涛の勢いで翔夜が２０程の妖怪を屠った時点で妖怪達は完全に翔夜へと迫る足を完全に停止させていた。

「終わりか？　なら失せろ」

変わらず不敵な笑みで妖怪達を見渡す翔夜を前に、戦意を喪失したのか、最初に言葉を発した鬼を残して、他の妖怪は恐怖から来る声を上げて散り散りに逃げていった。
残ったのは人の形をしながらも、角を持っている鬼だけだった。

「お前は逃げねぇのか？」
「鬼である我が逃げるわけにもいくまい」
「へぇへぇ、気高いのも悪くないが、命あっての事、そう思わないか？」
「恐怖故に存在している我らが人間に怯えるとあっては本末転倒」
「その考えが死に繋がるとしても、か？」
「無論」

考える間もなくそう言い切った鬼に、翔夜は心持ち嬉しそうに笑う。
妖怪とはこうでなくてはならない、翔夜はそう思う。何かに恐怖する妖怪など、それは既に妖怪の本分から外れている。恐怖から生まれた妖怪が何かを恐怖する。これほど滑稽な事も無い、だが現実はそう優しくない、恐怖から生まれた存在であっても、それは生きている限り死と言う概念が怖いものだ。翔夜の目の前の鬼は理性によって恐怖を殺しているが、本能しかないような低級の妖怪ほど、恐怖心を隠すという事は出来ない、だからこそ格上の相手から逃げると言う行動を取る。だからこそ自らを滅する危険性のあるお札等には近寄れない。
その矛盾を孕んでいるにもかかわらず、妖怪と言う存在は世界に存在する。
翔夜はここに着てようやく、妖怪らしい妖怪に出会えた。その事実が翔夜を身震いさせ、笑みはますます嬉しそうに深まっていく。

「そうだ、妖怪とはそうでなくてななならない」
「何を？」
「いや何、久しぶりに妖怪としての生き様を見せてもらったと思ってな」
「そうか……」
「あぁ、だから俺は、人間として全力でお前を殺してやる」
「あぁ……何とも幸せな話だな」

嬉しそうな笑みから一転して、不敵にニヤリと笑みを浮かべる翔夜に対して、目の前の鬼は少し嬉しそうに、にやりと笑う。夜の冷え切った空気の中、鬼と翔夜の間にある空気は更に張り詰めていく。鬼の纏う妖力が漏れ出しているのか、鬼の持つ長く艶のある黒髪が風も無い無風の中ふわりと浮かび上がる。
対して翔夜には特に何の変わりも無く、相も変わらず笑みを浮かべて、何処か楽しそうに鬼を見ている。

「じゃま、いざ尋常に、ってか？」
「応」

翔夜の軽く放った言葉に短くも重々しく応える鬼、そのやり取りを皮切りに、二人の足元に存在する砂が弾けた様に舞い上がり、鬼と翔夜は刹那の時で肉薄し、鬼はその気質通りに何処までも真っ直ぐな拳、対して翔夜は左手をポケットに突っ込んだままだが、リーチの長い右足からの霊力を乗せた渾身の蹴り。
尋常ではない鬼の拳に対して真っ向から無造作に繰り出す翔夜の蹴りが激突し、その衝撃で翔夜と鬼を中心に半球状の砂塵が舞い上がる。その光景に驚愕したのは鬼の方、人外特有の整った造形である男性の表情が驚きに彩られる。鬼の表情を見て楽しそうに笑う翔夜との温度差が酷い。

「驚いたぞ、人の身でありながら、鬼である我と正面から打ち合うとは」
「そりゃどーも、ま、真っ当な人間とは言えねぇから、勘弁な？」
鬼の声ににやにやと笑いながら答える翔夜、そう短くやり取りをした後、弾かれたように距離を取る鬼。鬼が距離を取った事で掲げていた足を下ろし、鬼を見据える翔夜。
油断無く翔夜を見据える鬼の目は、スゥ、と細くなり、更に妖力を凝縮しつつ、自らの身体の中に収める。
鬼と言うのは小細工が嫌いで、真っ向から勝負をしたがる輩が多く、この鬼もその例に漏れては居ない。

「おー、単純に力を上乗せってか？」
「いかぬか？」
「否、鬼らしくていい」
「それは、僥倖」

妖力を凝縮して自らの身体に収める事によって、得られるのは、極単純、身体能力の強化。速さ、力、その全てが底上げされる。
その戦法を取った鬼に対して、翔夜は思う。実に鬼らしい、と。
そして、戦闘中であるにも拘らず、翔夜は星と月が輝く夜空を仰ぎ見る。そして独り言のように呟きを漏らす。

「楽しいな？　だが、残念ながら俺の興味は向こうの都市へ行っている、お前が妖怪だった事は運が悪かったな」

夜空を見上げながら少し残念そうな声音でそう呟かれた台詞を聞いた鬼は、誠に、と苦笑しながら翔夜を視界に納めている。そして、夜空から視線を戻した翔夜と、互いに苦笑を交し合い、もう一度対峙する。

鬼は既にこの時点で自らの死を覚悟していた、それを覚悟してのこのやり取り、妖怪ながら天晴れと言うしかない。

「では往こう」
「あぁ、じゃあな」

短いやり取りの直後、鬼は目視が難しい程の速度で翔夜へ肉薄、そして、そのまま空気の壁を切り裂くほどの貫き手を翔夜の心臓へと向ける。が、その勢いは、ドムッ、と言う重く何かを貫く音と共に、翔夜の身体に触れる１０ｃｍほど手前で停止し、力を失ったようにだらりと下げられる。
神速と言ってもいい貫き手を停止させた原因、それは、鬼の身体を貫く翔夜の拳。

「くくっ、笑えるな、最後は我の自滅とは……」
「ま、それだけアンタの力があったって事だ」

文字通り目にも留まらぬ速度で翔夜に肉薄した鬼に対して翔夜がした事、それは、鬼が翔夜へ到達する直前に、身体が来るであろう場所へ右腕を真っ直ぐに伸ばした拳を置いた、単純に言えばそれだけである。
人体の間接と言うのは、元々衝撃を和らげる効果があるが、それを真っ直ぐ伸ばすと言う事は言うなれば一本の棒のような存在になるといっても過言ではない、翔夜はそれに霊力で間接が壊れないよう強化を施し、それを鬼の前に置いた、只それだけで、鬼は自らの速さで翔夜の拳へ突っ込んで行った、それを見ていない鬼ではない、だからこそ鬼は自ら自滅と言う言葉を使った。
鬼の名誉の為に言って置くならば、彼が馬鹿正直に突っ込んで行った訳ではないという事だ、彼が置いてある翔夜の拳に気が付いた時には、既に進路の変更が不可能なタイミングだったのだ。仮に翔夜

が、もう少し早いタイミングで拳を突き出していたら、鬼は迷う事無く進路を変更していただろう。その逆に遅ければ鬼の貫き手が翔夜に決まっていた。つまり、引くも押すも不可のタイミングで出された拳だったと言う事だ。

「じゃあな、それなりに楽しかったぜ」

「うむ、我も最後に良い時を過ごさせてもらった」

そんなやり取りを最後に、鬼の瞳は閉じられ、それを見届けた翔夜は腕を引き抜き、鬼の死体を捨て置く。力なく地面へと吸い込まれていった鬼へ向けて軽く礼を言って、翔夜の足は都市へと向かう、その足取りは妖怪たちが現れる前と何も変わらない。浮かべる表情も変わらず不敵な笑みを浮かべていた。

いち　世界を三週は回ったね（後書き）

言い忘れましたが、作者は東方に関する知識はそう深くありません、なので、これおかしいんじゃね？的な所があっても軽くスルーしてもらえると幸いです。

と、一応の複線を張った所で……永琳出せてねぇｏｒｚ

有言実行ぐらいしろよ、俺！

次回、次回こそは必ず！次回がいつになるか分かりませんが！（え

に　ボケとツッコミ、両方出来るって便利だよね

荒野のような地にぎらぎらと光り輝く都市と言う矛盾したような景色に向かって緩やかな歩調で歩く男が一人。その男の歩調は緩やか、しかし、その風貌は一見してみれば酷い有様だった。黒のTシャツから覗く右腕は肘から指先に掛けて赤に染まり、頬にも少しばかり赤が付着している。そしてその顔が浮かべる表情は笑み、所々に赤色が目立つ中で浮かべる笑みは、その印象だけ見れば凄惨な光景だ。だが、その男――翔夜からしてみれば、そんな事はどうでも良かった、もう何千年も何万年も昔、翔夜が吸血鬼と呼ばれていた時代はこんな物ではなかった、視界一面を飛びかう肉片と鮮血が日常茶飯事だった。世界を手に入れるために殺し、世界を手に入れたいが為に仲間を殺され、そしてようやく手に入れた世界は思いの他つまらない物だった。そんな世界が普通だった翔夜からしてみれば、殺すと言う事は手段であって目的ではない、つまり、殺すと言う事も倒すと言う事も結局は同じ事、目的の為に倒す、殺す、言うなればそう言う事。翔夜としては、目的を満たす為に、妖怪を屠った。只それだけの事、今更何の感慨も沸かない程に、当たり前の事だった。鮮血に染まった右腕や、頬に付着する赤など気にも留めていないように光り輝く都市へと足を動かす。翔夜の感情を占めるのは言うまでも無く好奇心。好奇心に突き動かされるままに足を動かし、翔夜の視界には、近未来的な都市が段々と近づいてくる。

都市の門がはっきりとその姿の細部まで確認できる距離まで来て、ある一人の人影を視界に納め、待ち構えるように門に立つその人物を認識した瞬間、翔夜の表情は更に楽しそうに笑みを深める。

距離を詰めるに連れて、その人物の全貌が明らかになる。性別は女、すらりと高い身長に、メリハリのあるプロポーションは赤と青が同時に存在している衣服に身を包まれている。普通の感性を持つ男ならば必ず視線を惹き付けるであろう豊満な双子山を抱えるようにし

て腕を組み、特徴的な銀髪を一つの大きな房の三つ編みにした美女。そう確認できる時には、翔夜とその女性との距離は５ｍも無く、その距離は普通に歩いている時点で詰めるのは数秒の事だろう。そして件の数秒後、女性と翔夜との距離は１ｍあるかないか、その時点で翔夜は足を止め、女性と視線を交わしあい、改めてその女性の容姿を再認識して、へぇ、と感心したように声を上げる。

「出迎えご苦労」
「初対面の癖に態度が大きい男ね？」
「まぁ、そう言うな、俺とお前の仲じゃないか」
「初対面って、さっき言ったはずだけど？」
「俺は遠成翔夜だ」
「人の話を聞かない人ね、全く……八意永琳よ」
「聞いているが聞かないようにしているだけだ、よろしくな、八意」
「余計に性質が悪いわ……まぁ、よろしくね」

血まみれの右手を上げながら、女性――八意永琳へ親しみを込めたようなそうでもない様な掴み所の無い笑顔を向けながら、旧友に会ったように話しかけてくるという何ともアンバランスな事をした翔夜に、呆れたようにため息を吐きつつも、律儀に翔夜の言葉に反応する。
返り血にまみれた男と、美しい女性が都市の門の前で話し込んでいるのは非常に異様な光景だが、本人達にとってそんな事はどうでもいい事、いや、それは翔夜だけなのかもしれない、何故なら、永琳は翔夜の姿を見て、ため息を吐いている。

「そんな格好じゃなんだし、私の家へ来なさい、その血を洗い流す場を貸してあげるわ」
「あん？　別に気にしちゃいないが、貸してくれるってんなら、遠慮しねーぞ？」

「しなくても良いわ、会ってまだ数分だけど、遠慮するあなたなんて見たくも無い気がするわ」
「よせよ、照れるだろ？」
「照れる要素なんて何処にあったのかしら……」

永琳自身、会って数分と言っているにも拘らず、二人の間の空気とやり取りは、そうとは思えないほどに息が合っている。翔夜が適当な事を言って、永琳がそれに呆れつつも律儀に突っ込む、そんなやり取りをしながら、二人は門を潜り、都市の中へ入っていく。

都市に入ってからと言うもの、翔夜は近未来的な都市の風景を面白そうに楽しみながら、永琳と言葉を交わしつつ永琳と言う女性にどう言う評価を下すべきか、観察していた。その結果の一つとして、彼女はこの都市において、かなり高い地位を持っていると翔夜は判断を下す。翔夜と言う異端な存在、しかも血にまみれた姿の人間が都市の中で闊歩しているのだ、それを不審に思わない人物などいないし、不審に思うのが普通だ。だが、都市に入ってから、翔夜を怪しむ視線は一瞬向けられても、永琳を視界に納めた途端にその視線から険が消える。もしそれで拭えなかったとしても、永琳が一言二言事情を説明すればすぐさまそれも引いた。
何よりもその言葉の端々で、八意様、と来た、住人の対応も、一市民にする対応とは思えないほどに馬鹿丁寧だ。つまり、それ相応に信頼があり、住民達に影響を及ぼすほどには高い地位にいる、と言うのが翔夜の見解だった。
と言っても、そんな事は都市に入ってから約１０分程度で分かった事だ、そんな事よりも翔夜が興味を引き、一番に評価した所、それは……。

（八意は非常に頭が良いな、俺との会話での切り返しを見るに頭の回転も非常に速い）

そう、八意永琳と言う女性は、容姿もさる事ながら、非常に頭が良い、いくら地位があっても、住民達に状況を説明する上で一言二言で説明が済むような人間は普通ならばいない。これは、永琳が持ち前の頭を使い、要領よく説明する事で一言や二言で済む話になっているだけだ。それに何と言っても彼女の説明は理路整然としていて質問を挟む余地が無いほどに正確だ。

そうなって来ると、自ずと彼女がどの様な地位にいて、その職種がなんなのか、朧気ながらも見えてくる。

（感情を挟む事無く必要最低限の事を伝え、理解させる、科学者、研究者……医師、何にせよその様な所か？）

政治家と言う選択肢は初めの方で選択肢から落下した。政治家と言うものは良くも悪くも住民達に接する時、感情が無ければなり得ない者だ、住民に接すると言う要素を省けば、確かに感情を挟まない事が必要とされてくるが、住民から支持を得たい時には住民達に感情を寄せていく政治家でなければ支持されない。これらの理由と、最低限の説明だけでも永琳が住民達から悪い感情を持たれていない事から考えて政治家ではないと言う結論に至った。

その事を踏まえた上で、高い地位を得やすい職業、そう考えた所で、凡その結論を翔夜ははじき出した。

（研究者……かねぇ？）

そう、研究者、これならば、大きな功績を残す事が出来れば高い地位を得る事も可能、更にその功績が住人達にとって益のある功績だったとしたならば？　そう考えれば住人達から永琳への感情も説明

がつく、そこまで考えて、腕を組み、血まみれの右手で気にする事無く口元を隠そうとした時、誰かに腕をつかまれ、翔夜の行動は阻害される。

「そんな腕で顔を触ると更に酷い事になるわよ？」

「別に俺は気にしないけどな……」

「私が気にするのよ、口元が血まみれの人の隣を歩く私の気持ちにもなって……」

「ん？　おぉ、それはすまねぇな」

「はぁ……」

今気がついた、と言うように軽く謝ってくる翔夜に、永琳は会ってから数十分にも拘らず板についてきたため息を漏らす。

と、目的地に着いたのか、永琳が足を止め、それに釣られるようにして翔夜も足を止める。ここよ、と永琳から掛けられた声に奇妙な形のポストらしき物に気をとられていた視線を正面に移す。視線を移した翔夜の目に映ったものは、疑いようも無く豪邸だった。その辺りのちんけな豪邸っぽい家ではなく、真の豪邸、庭は広く、庭師かそれに似た様な者が管理している事が分かる程に整った庭。庭と家を囲む柵は複雑なれど無骨さや粗雑な印象を感じさせない文様を描く金属製の細い柵。玄関と思わしき扉までの道のりはそれなりに長く、石畳が敷き詰められ、石畳の道の脇には簡素にならぬよう色とりどりの花が咲き誇っている。その様な外観を誇っている敷地の中にある家が外観に劣っているはずも無く、家自体も大きく、計算されつくした芸術がこれでもかと言う程に使われている事がぱっと見ただけで分かる。

それほどまでに豪華な家、いや、もはや屋敷と言った方がしっくり来る建物を見て、翔夜は……。

「よし、じゃ行くか、案内してくれ」

「驚かない上に家主より態度大きいわね」
「よせよ、照れるだろ？」
「何処に照れる要素が……ってコレ、デジャビュなんだけど？」
「同じネタを許容しないとは、八意のハードルは高いな……」
「つまり今までのふざけた言動、態とだったわけよね」
「何を当たり前の事を」
「それが当たり前なのはあなただけよ……って、はぁ……振り回されてばかりだわ、今までこんな事一度も無かったのに……」
「初めて……だったのか？」
「妙に慎重そうに言うのやめて、会話だけだと凄く誤解されそうだわ」
「仕方ない、自重しよう」
「そうして……はぁ、ようやく話が進む、取り合えず、血を洗い流す場所に案内するから、着いてきて、話はそれからね？」
「おー、わかった」

気の無い返事をする翔夜に振り回されている事を自覚して、ため息を吐きつつも、翔夜を案内する為、二人して屋敷の中に入っていく。頑なに一人身を守っていた天才・八意永琳が遂に……などと近隣で噂が立つのは仕方のなかった事なのかもしれない。

「おー、さっぱりしたー」
「あら、上がったのね？」

永琳に案内された風呂場を使い、身体を洗い流し、上がったら自分の部屋に来るようにとの言葉に従って、永琳の自室にかなりの無遠慮さで入室する。そんな翔夜の態度に対して、気にした様子が無い所か、それを自然と受け入れている永琳。この短い間で永琳と翔夜

は、旧友です、と言っても違和感は無いほどの気安さになっている。
ちなみに翔夜が風呂場から上がったら侍女が待機しており、その人物の案内で翔夜は永琳の自室まで来る事が出来た。
そして現在、風呂から上がった翔夜の髪は風呂に入るまでにはあったくせが無くなっており、髪自体が水分で湿って艶のある黒髪に変わっていて、それだけで随分と印象が変わる。その証拠に、永琳は少し驚いた様子で翔夜をじっくりと見ている。そんな永琳の様子に疑問を覚えたのか、何処からとも無く出したタバコを咥えながら不思議そうな表情を浮かべる翔夜。

「あん？　どした？」
「いえ、血に濡れたりしてよく分からなかったけど、それなりにいい男だったのね？」
「だろ？　所で、構わねぇか？」
「別に私は気にしないわ」

永琳の評価を受けても、特に気にしない所か、こちらの方が重要だと思ったのか、咥えたタバコを上下させながら永琳に伺いを立てる。
他人の容姿に興味の無い永琳から評価を貰えるのがどれだけ珍しい事なのか知らない翔夜は呑気に魔力を使って人差し指に灯した小さな火でタバコに火をつけ、紫煙を吸い込みつつリラックスモードに入る。
永琳の自室にある椅子に腰掛け、だらけた格好でタバコを燻らせる人物が多くの妖怪を屠った人物とどうしても重ならず、永琳は可笑しそうに笑う。

「ん？　何だ？」
「いえ、ふふっ、何でもないわ、私は気にしないけど、健康に悪いわよ？　とか言った方が良いのかしら？」
「んー、まぁ、俺は多少特殊だからな健康云々はどうでもいいが、

仮に健康に問題あったとしても止められねぇぜ？」

短い時間ではあるが、それなりに翔夜の人となりを理解していた永琳は、翔夜の『らしい』言葉に、でしょうね、とまた可笑しそうに笑う。椅子に座り、専ら書類整理などに使われる机に両肘を突き、組んだ掌に顎を乗せ、上品に且つ楽しそうに笑う永琳は確かに美しい。翔夜は知らないが、こうして永琳が笑う事は今までに極端に少なく、笑う事自体が珍しい。その変化を永琳自体も気がついていない。驚くべき事だが、翔夜と言う意思を投げ込まれた事で、この短い時間で、本人も気がつかないほどの自然さで永琳は変わり始めていた。

「さて、じゃあ、少し真面目な話をしましょうか？」

「……」

「ふふっ、ほら、面倒臭そうな顔」

「予想してたならこのタイミングで出してくんなよ……」

「ふふふっ、ごめんなさいね？」

面倒臭そうに表情を歪め、更にだらりと格好を崩す翔夜の反応が予想通りの反応で、何故か楽しく、嬉しく感じて笑いが漏れる。大人のやり取り、と言うか、子供同士では出せないやり取りの雰囲気。それが二人からは感じられた。

ちなみに永琳が言った少し真面目な話と言うのは嘘ではない、この都市でそれなりに高い地位にいる永琳は、個人的には心許しつつありながらも、この翔夜と言う男との関係をはっきりさせておかなければならなかったのも事実だからである。現に、永琳は翔夜の事を何も知らない。昔からの友人のような雰囲気を感じながらも、やはり知らないのだ。

その事実から考えれば、この翔夜と言う男は不思議な男だ、永琳はそう思う。他人の心にするりと入ってきて、何の違和感も無く隣に

いる。恐らく今この瞬間に翔夜が居なくなれば、少し心配して探すであろう程には心許している。しかし、永琳から見れば心許してくれているのかそうではなく本心は未だ閉ざされたままなのか判断が曖昧で、のらりくらりと話を別の方向へ持っていかれたり、かと思えば気安げに話を弾ませる。永琳は都市のためにと言う事も事実だが、個人的にもこの男の事が知りたかった。

「まぁ、いいけどよ、で？　何が聞きたい？　今ならおじさん話せない事以外何でも答えちゃうぜ？」
「おじさんって……あなたまだそんな歳じゃない様に見えるけど？」
「いやぁ、見てくれだけで判断するべからず、多分八意よりは年上だぜ？」
「私コレでも３００は越えてるんだけど……」
「あっはっは、何だ、まだ嬢ちゃんじゃねぇか」
「何を？」

３００歳を越えていると言った永琳に笑い飛ばして、尚且つ嬢ちゃんと言い放つ翔夜に、初めて永琳は訝しげな表情を翔夜に向けた。翔夜はそんな永琳を見て、ふっとタバコから手を離し、手を離れた瞬間に炎上、灰も残らぬほどに燃やされる、タバコの処理を終えた翔夜は、にやにやと笑いつつ、しっかりと椅子に座りなおし、椅子についている肘置きに肘を置き、右腕を立て右の拳の上に頬を置き、左手はそっと肘置きに這わせるようにして置き、足を組む。そうして変わらず、にやにやと余裕そうに永琳を真っ直ぐ見つめる翔夜に、永琳はある種の威圧感を感じ、一瞬息をする事を忘れる。

（気圧された？　私が？）

その事実に疑問を覚える。翔夜は威圧感など出していない、そんな空気も感じられない、ならば何に気圧されたのか？　少しの間、翔

夜を観察してみるが、先程と雰囲気が変わった様子も無い、だが確実に何かが違っていた。でなければこんなにも存在が大きく感じる事などない。

永琳は今までに、自分よりも地位の高いものと腹の読み合いをした事もあるし、都市の権力者の議会等にも出席した事はあった。

しかし、その様な場でも永琳がこんな短い間で気圧される程の人物に出会った事は無かった。この翔夜と言う男にはあるのだ、この都市の権力者では歯が立たないほどの、風格若しくは、ある種の気高さと言い換えてもいいそれが、今まで気安く話していたこの男にはある。

「俺は少し特殊って事だ、今ならその辺りも質問すれば少しだけだが答えてやるぜ？」

「えぇ……」

胸を貸してやる、と言われたように感じたその言葉に、ふるり、と身震いした後に、艶を含んだ笑みで翔夜の言葉を受け入れる。

「じゃあ、あなたは今何歳ぐらいなの？」

「そうだな……この世界の次に生まれた、とでも言っておこうか」

「地上人よね？　何故存在してるの？」

「その辺りは……簡潔に、世界に呼ばれたって所か」

「そんなにも昔から生きているのなら寿命で死んでても可笑しくないと思うのだけれど？」

「ま、俺も能力持ちでな『ありとあらゆるものを突破する程度の能力』ってのでな、この世界に存在した瞬間に寿命と老化の概念を突破した、ってのが俺の推測だ」

「魔力と霊力どちらもかなりの量みたいだけど？」

「魔力に関しては黙秘、霊力も能力の恩恵だな」

「魔力は能力が関係ないと言う事は元々持っていたのね、人間なの

に魔力を持つなんて、おかしな事ね？」
「あぁ、全くだな？」
「狸……」
「くくっ……」

大事な所をのらりくらりと惚ける翔夜に、拗ねたように永琳は言葉を漏らす。その姿は非常に可愛らしいが、翔夜は可笑しそうに笑うだけ。結局答えてもらえないと悟ったのか、ため息を一つ吐き、永琳は気を取り直すように質問を投げ掛けていく。

「身長は？」
「１７０ｃｍぐらいだと思うが」
「体重」
「５７ｋｇ前後」
「趣味は？」
「旅だ……って質問内容おかしくなってきてねぇか？」
「気のせいよ、異性をどう思う？」
「どう思うって、異性だろ」
「私をどう思う？」
「何言ってんだ……美人だとは思うが？」
「美人だなんてそんな……」
「自分で質問しといて勝手に照れてんな」

その後いくつも質問が続くが、特に気分を害した様子も無く、翔夜は質問に答えていく、都市にとって有益であるのか疑問が残る質問がいくつも混じっていたような気がしなくも無いが、最初に言った通り、答えられない質問以外は特に気にせずに真実を答えていく。そんなやり取りが何十も繰り返された後に、これで最後、と永琳から通達が入る。

「私のボディーガード兼この都市の守護をする気は無い？」
「そこはボディーガードの方を後にもって来るべきだろ……」
「失礼ね、か弱い女性に護衛が付くのは当然でしょ？」
「か弱い、ねぇ？」
「そこに疑問を持つとはいい度胸ね？」
「怖ぇ怖ぇ」

威圧感を伴った笑顔で翔夜を威圧する永琳に、翔夜は、変わらずにやにやと笑いながらからかう様に身震いさせる。
と、翔夜に乗せられて話が段々とずれてきている事を理解した永琳は軌道修正を図るように咳払いを一つ。

「ってそうじゃなくて、どうなの？　今なら三食寝床付よ？」
「三食寝床付き……その話乗った」
「いい返事で安心したわ、これからよろしくね？」
「あん？　あぁ、やっぱ寝床ってここなのか……」
「やっぱりあなた、頭の回転速いわね、話が早くて助かるわ」
「そりゃどーも」

どうでもいい、と言うように再びだらけながら永琳の褒め言葉に気の抜けた返事を返す。そんな翔夜を見ている永琳は、楽しそうに、少し嬉しそうに笑っていた。
こうして、月人の天才と、後に幻想郷の御意見番と呼ばれる便利屋は、しばらくの間同じ道を歩む事になる。

に　ボケとツッコミ、両方出来るって便利だよね（後書き）

はい、ＩＳがスランプ中でこっちを書き殴ってるあっくすぼんばーです。
前の話しでも言ったように、この作品は作者の妄想や勝手な知識改変が入っているかもしれませんが、その辺りはご容赦を……。
よし、伏線も張り終えたぞ！しかし、良く知らない作品を書くって難しいねぇ、今痛感しております。
精々作者が知ってる東方知識ってキャラの容姿と名前ぐらいなんですよねぇ……。
まぁ、その程度の事しか知らないで手を出すなって話なんですが…
…やっちゃったものは仕方ないと覚悟しております。はい。

さん　能力の使い道とかフラグとか

世界の次に生まれた黒髪黒目の男、翔夜と、天才・八意永琳が共に暮らし始めてから約3年、永琳のボディーガード兼都市の守護者として過ごす翔夜。この3年間で永琳に付き合う事が多く、永琳の仕事場にもある程度顔が通るほどの月日。その間に翔夜が永琳から離れる事など、それこそ年内に数回あるかないかの妖怪との小競り合いのある時ぐらいが現状。

そんな密度で過ごしている二人の間には、男女間の機敏と言うものがあまり存在していないように感じられるほど、二人で居る事が自然に思えるほどにはお互いを信頼しあっていた。

だが、信頼していても、片や変化を求める人間、片やこのまま過ごしていきたい月人。変化を求める翔夜に、永琳が振り回されると言うのも、また事実で、この3年間翔夜の言動や行動に永琳が振り回されるのも致し方ない事だったのかもしれない。

そして現在食事時、顔をつき合わせて食事をする永琳と翔夜。他愛も無い会話を重ねながら食事をしていく穏やかな二人の空気をぶち壊すのも、最早翔夜の仕事といってもいい。

「あ、八意、明日から少しの間仕事から外させてもらうぞ」

「別に構わないけど……どれくらい？」

明日から別行動をしたいと主張する翔夜に、少し顔を顰めつつ、それを認める。この3年間、翔夜と二人で居る事が当たり前になっていた永琳にとって、翔夜の意見は、永琳個人としてはあまり認めたくないものだった。しかし、休み無く永琳のボディーガードをやっていた翔夜にそれを認めないと言う事は、永琳には出来なかった。

「あーんー……そうだな、１０日ぐらいか？」
「それ位なら……えぇ、構わないわ」
「そうか、その間ここにも帰ってこないが、別に構わねぇよな？」

この時点で既に、翔夜が仕事を休む事を認めてしまった永琳にとって、翔夜との間に絶望的なまでの食い違いがあった事に薄々気が付く。

「帰ってこないって……何処に行くつもり？」
「んぁ？　都市の外」

永琳の質問に対して軽く答える翔夜。翔夜から帰ってきた言葉に内心悲鳴を上げる永琳だが、既に認めてしまっている手前、今更その休暇は無しとも言えず、泣く泣く年単位での翔夜不在を認める事になった。
無論、翔夜は都市の中と外で時間の流れが違う事など百も承知、その上で１０日と言ったのだ。
こうして、翔夜にとっては１０日、永琳にとっては数年単位での別行動が決定した。

「ふぅむ、やっぱ、外でサバイバルってのも悪くねぇな」

翔夜が都市の外に出てから既に８日目、都市で買った、と言うか永琳に買ってもらった普段着の着流しと、ＴシャツＧパン、サバイバル生活に必須の道具数点をザックに入れて都市を出た翔夜は現在、昼の陽光を浴びながら寝転がって日向ぼっこと洒落込んでいた。
翔夜が外に出たのは特になんて事のない理由、重大な何かがあるわけでもなく、只単に、少し外での生活が懐かしくなったから出て

みたかった、それだけの事だった。都市での生活に不満は無いが、こうして自然の中でのんびりするのも悪くない。翔夜はそう思う。

「さぁて、いい加減肉も食い飽きたし、そろそろ魚っぽいものが食いてぇなぁ」

翔夜の言う、ぽいもの、と言う表現はあながち間違いではない、この時代に未来の魚が存在しているわけも無く、それの先祖が居る時代、未来の魚の事を知っている翔夜にとって、現在の時代の魚は、魚ではなく、魚っぽい物で何の間違いも無かった。

そして、唐突に魚が食べたくなった翔夜は、気ままに進路を大陸の端のほうへ向ける。無論、只飛んでいくだけでは、予定日の１０日を少し過ぎてしまう。２日で飛んでいける距離ではないのだ。

ならばどうするか？　こうする。

「さぁて、さっさとこの距離を突破しちまいますかね」

『ありとあらゆるものを突破する程度の能力』とは、こう言うもの、距離であれ何であれ、突破する。物理的に突破すると言うわけではなく、概念として存在している距離と言う概念を突破するのがこの能力の真骨頂。それを翔夜は理解していた。勿論、物理的な事象に対して能力を行使できないと言うわけではない。概念をも突破する能力。それはつまり、空間や時間、果てには世界の壁すらも、理論的には突破する事が可能。だが、もしそんな事が出来るのならば、翔夜もこの世界で生きていく覚悟など決めず、さっさと次の世界へ行っている。それが出来ないと言う事は、つまり、言うは安し、と言うこと、世界の壁を突破するには、少なくともその世界を一人で左右出来るほどの存在で無ければならないと言う事と同義、つまり、純粋に世界の壁を越えるには翔夜では力が足りないと言う事。

無論、翔夜は生物単体としては破格の能力を持っている。霊力、

魔力の量、それを扱う技術、身体能力にそれを生かすだけの技術、戦闘における思考、観察眼など、ありとあらゆる事を総合して、超ド級の一流である事は疑いない。それだけの実力を持ってしても世界と言うものには届かないのだ。

と、そこで景色が変わる。それこそ、瞬きの瞬間に、と言ってもいいほどの唐突さで、翔夜の目の前には穏やかに押しては引く水面が鎮座している。その波打ち際から翔夜までの距離は２ｍと言った所。

その光景を見て、翔夜は満足そうに頷く。

「さすが俺、ほぼ狙い通りの場所だな、さて、基点作って、獲物の魚っぽい物を捕まえるか」

魚っぽいものを捕まえる前に、魔力を操作し、固定、今現在自分が立っている場所から距離を突破した方向へと魔力を少し伸ばす。これで翔夜自身がどの方向から距離を突破してきたかの基点が出来上がる。これをしておかなければ、翔夜は元居た場所へ戻る事が出来ない。突破するのは距離であって、必ず目的地に着くタイプの能力ではない。そう言う点から翔夜は移動手段として能力を使う事は無かった。いちいち基点を作るのが面倒だからである。

基点を作り終えた翔夜は、押しては引く波に近付き、霊力を解放、そのまま海へと流し込む。

「よし、一応生き物っぽい反応はあるか、じゃ、早速」

次は魔力を起動させ、広範囲に渡って海へ流し込み、半径約１０ｍ程の半円を描くような形で魔力を流し込み、停滞させる。自分が想い描いたとおりの形で魔力が広がった事を確認すると、一気に魔力を振動させる。只の振動ではなく、細かく、速い振動を魔力を通

して送り込む。すると、何匹か魚っぽい物が浮かび上がってくる。それを見て満足そうに頷いた翔夜は、早速飛び上がり、魚っぽい物の回収に取り掛かる。

そうして得られた魚っぽい物は全部で１６匹、その全てが既にある程度熱が通ったように目が白くなっている。

「分子加速を使えばこんなもんだな」

そう、分子加速、翔夜がしたのはまさにそれ、魔力を媒体として超高速で振動を起こす事により、分子を加速させ、海水の温度を一気に引き上げ、その変化に耐えられなくなった魚っぽいものは死んで浮かび上がった。それだけの事。

無論、こんな事を翔夜の居た時代で行えば色々と法律だのなんだのに引っ掛かるが、今はそんなものは無く、遠慮する必要も無い。

「さぁて、まずは焼いてから食ってみるか、どんな味がすんのかねぇ」

意気揚々と魚っぽい物を焼く準備をする翔夜、翔夜の１０日間の休暇は、彼にとって実に有意義な休暇となるようだ。

さて、永琳達月人の言い分によれば、地上には穢れと言うものが存在し、それこそが寿命と言う概念だと言う言い分、つまり寿命とは穢れ、その穢れが蔓延しているのが地上と言う理論である。確かに、現在この都市に存在する者以外の地上の生命には寿命がある。それを穢れと表現するとして、この都市には永琳を含めて長く生きているものばかり、それは何故か？　簡単な事だ、穢れがこの都市に入ってこないようにしている。只それだけ、そして穢れのないこ

の都市の住人にとって、時間の概念など無いのも同然。それならば、外での一日を一年に引き伸ばした所でここの住人には何の痛手もない。そう言う言い分から、都市には能力を応用した時間を引き延ばす技術と穢れを防ぐ技術が使われている。

そして今までその技術で何か弊害となるような事態など起こりえなかった。だが、今現在その技術のおかげで苦悩の真っ只中に居る人物が居る。それがこの、艶のある銀髪が特徴的な美女である八意永琳である。

二つの技術を作り上げたのが八意永琳と言う女性ならば、その所為で苦悩するのも八意永琳と言う女性。まさに本末転倒、いや、その技術を作って目的が彼女の苦悩の原因ではない事から、後悔先に立たずという言葉がぴったりであろう。

美しき美女が苦悩しているその内容、それは……。

「つまらないわね……翔夜が来る前の生活ってこんなものだったかしら？」

つまりそう言う事、美しき天才を悩ませるのは、十数年前にふらりとこの都市にやってきた一人の男。初対面からやたら馴れ馴れしくて、でも不快ではない、そのくせ本心は中々見せてくれず何を考えているのか掴めそうで掴めない、のらりくらりした男。遠成翔夜と名乗ったその男は誰よりも大人で誰よりも子供な不思議な人物だった。

思えば、永琳は誰かに振り回される、と言うのは初めての経験で、翔夜の絶対的な戦闘能力に驚き、年齢に驚き、言動に振り回される、かと思えばこちらのやる事を受け止められる器量もある。

誰にも甘やかされた経験の無い八意永琳と言う女性は、初めて自分のやる事を何だかんだ言いながらも受け止めてくれる人物に出会った。それが遠成翔夜と言う人物、自分勝手で馴れ馴れしくて人の

言う事を聞かなくて、でも、受け止めてくれる、包み込んでくれる。矛盾しているが、翔夜はどちらの面も持ち合わせていた。

永琳がつまらないと言ったのはそう言う事、遠成翔夜と言う男の前では、同年代の友達のように、またある時は、まるで子供のように振舞える。振舞うように持っていかれてしまう。

「きっと、翔夜の前だと、自由だったのね……私」

今まで生きてきて初めて思う、寂しい、と。いつも頼る相手がいない、馬鹿な話をして一時の自由を感じる時間が無い、自分を、仕方ねぇな、と甘やかしてくれる存在がいない。まだまだガキだな、とにやにやと笑う顔が居ない。漠然とした寂しさを抱えたまま数年が経ってしまった。だがそれももうすぐ終わる。約束した外での１０日ももうそろそろ終わり。翔夜が帰ってくる日が近い。

「やっと当たり前だった時間が帰ってくる……」

上がってきた書類を整理しながら、その瞬間を想ってふわりと一人笑みを浮かべる。楽しみだ、本当にそう思う。

自室を見渡し、初めて会ってこの自室に来て翔夜が座っていた椅子に視線を移し、永琳が自室で仕事をしている時に本を漁りながらガードの役を全うする為に立っていた本棚へと視線を移し、書類整理を手伝ってもらっていた時に翔夜が使っていたペンに視線を移し、一つ一つ翔夜の居た残滓を感じるように視線を移す。こんな生活ももう少しでお別れだ。そう思うと書類整理にも力が入る。

書類を一つ一つ閲覧し、中身を確かめ、問題なければペンを動かし、サイン。この作業をここ数日飽きる事無くやっている。これはこれで地味だがきつい作業なのだ。

（帰ってきたら……そう、帰ってきたら褒めてもらいましょう）

木製の事務机に積み上げられた処理前の書類の山を見て、銀髪の特徴的な美人、八意永琳はそう思う。

そして、翔夜の休暇が終わる約束の１０日、翔夜は問題なく都市の傍まで帰ってきていた。

「良い息抜きになった、たまにはこう言う生活も悪くないもんだな」

そう言う翔夜の顔は意気揚々と言えばいいのか、堪能したような表情だった。

相も変わらず、都市の周りには何も無く、あの都市だけが時間を置き去りにしたように発展している。そのアンバランスさに翔夜は少し苦笑を浮かべる。青空の下、荒野のような地上に立つ近未来都市など不思議な光景過ぎて笑うしかない。雑草と砂利の感触を懐かしみながら、初めて来た時と同じような緩やかな歩調で都市を目指す。

蒼穹の青空の下、ゆったりゆったりと都市に近付く、今は時間が時間なので、あの時のように妖怪達の妨害にあったりはしない、無論、この小旅行中何回か妖怪達から襲撃にあったが、何の問題もなく撃退していた。永琳のボディーガードや都市の守護をやっている内に手加減を覚えたので、今では追い返す程度造作も無い。

「毎回血まみれになってたんじゃ、色々大変だと言われちゃ仕方ねぇよな」

勿論それは永琳からの要望である。今では妹のような位置に収まっている永琳からの要望では聞かざるを得ない。元々の年齢も加え

て考えるならば、永琳よりも翔夜の方が遥かに年上である為、翔夜の中で永琳は出来のいい妹のように見えるのだ。永琳がどう思っているかはまた別の話だということは、この男も百も承知だが、今の所そんな兆しはあるかないか、判断するには微妙な所なので、翔夜は今の所考えないようにしている。

そんな事を考えている内に、都市との距離は目と鼻の先だ、１０日前に永琳が見送ってくれた門が見える。と、１０日前と同じように、人影が立っているのを認識する。その人物が一体誰なのかほぼ確信の領域で予想がついた翔夜は、思わず苦笑を浮かべる。向こうからも翔夜が歩いてきているのが見えているはずだ。

右手で紐を持ち、肩に担いでいたザックの位置を直しながら、そのまま緩やかに歩き、門へと近付くにつれて、その人物が持つ銀色の髪が目を引く。

そうこうして、その人物――八意永琳の目の前まで来て、足を止める。果たして永琳の表情は薄く笑みを浮かべていた。これは彼女なりのポーカーフェイスである事は翔夜が良く知っている。

「おかえりなさい」
「おぅ、今帰った」

静かに声を掛けてくる永琳に、特に何の気負いも無く、軽く手を上げて翔夜は帰ったと返事を返す。それなりのプレッシャーを永琳は醸し出しているが、まさに柳に風と言う風に、何も気にした様子が無い。そんな翔夜に変わらず薄く笑みを浮かべながら永琳は声を掛ける。

「随分と長い旅行だったわね？」
「俺にとっては１０日だが」
「私にとっては１０年だったわ？」
「さて？　酷い話だな？」

相変わらず惚けた表情でそう言ってくる翔夜の物言いに、流石の永琳も毒気を抜かれたのかため息を吐く。

「あなたは相変わらずなのね……」

「よせやい、照れるだろ？」

「褒めてないわよ」

「酷い話だな？」

「何を言ってるのよ……」

この良く分からないやり取りに懐かしさを感じたのか、永琳は少し嬉しそうに笑う。陽光に反射する銀色の髪と相まって、嬉しそうに笑う永琳の笑顔は非常に美しい。そんな永琳を前にしても、翔夜はただにやにやと出かける前と変わらぬ笑い方で永琳を見返している。

「俺がいない間寂しかったか？」

前と変わらぬ調子でそう問うて来る翔夜の言葉に、永琳はすぐに笑って、何言ってるんだか、と続けようとして、失敗、翔夜の居なかった生活が脳裏を過ぎり、儚く悲しそうな笑みが浮かぶ。そして出てきた言葉は……。

「寂しかった……」

「そうか」

「一人がこんなに味気ないものだなんて、初めて知ったわ」

「そうか」

「それに私、頑張ったわ？　仕事も一人で頑張った」

「どうしろって？　褒めて欲しいのか？」

「そうしてくれると、私は元気になるわ？」

「ん、そうか、良く頑張ったな」

そう言って翔夜は永琳の頭を一撫で、細い銀色の髪が翔夜の指の間をするりと抜けていく、永琳はその感触と翔夜の言葉に、普段の落ち着いた笑みではなく子供のように、嬉しそうに笑う。そんな笑みも、アンバランスだが彼女が浮かべると非常に可愛らしくも美しい。

翔夜が帰ってきたら褒めてもらうと言う永琳の目的も達成されたため、満足した永琳は頭に置かれている翔夜の右腕を取り、自らの腕と絡ませながら嬉しそうに都市の中へと促す。

「早く帰りましょ？」
「あぁ、それはいいけどよ、これは何だ？」
「別にいいでしょ？」
「別に文句はねぇが……」
「ん、よろしい」

そう言って、更にぐっと翔夜の腕を抱きしめるようにして腕を組んでくる永琳に、仕方ねぇなぁ、と苦笑しながら右手で持っていたザックを左手に掴み直し、左肩に担ぎ直す。そして自らの腕に当たる、ふよん、とした感触を堪能する。

「９１のＧ」
「はぁ、そう言う事は思っても口に出さないのが普通だと思うけど？」
「否定はしないのな」
「正解だもの」

腕を組み、前と同じように馬鹿な話を交わしながら都市の仲へと入っていく二人の姿は、仲のいい兄妹か、恋人同士にも見えなくも

無かった。独特の雰囲気を持つ二人が、再び揃い、帰ってきた日常はまだしばらく続く。

「あ、こう言う旅行定期的に行こうと思うんだがどうだろう？」
「ダメ」
「君が何を言ってるのか俺には分からないよ……」
「私の精神上良く無いわ」
「酷い話だな？」
「どっちがよ」

兄妹の様な、恋人のような、そんな関係のまま続く日常はもうしばらく続くのである。

さん　能力の使い道とかフラグとか（後書き）

いつの間にか……と言う感じでフラグが立ちました。
激的なイベントも無く、日々を過ごしていたら何となく居て当たり前みたいになった、とかそんな感じのフラグの立たせ方です。難しいです。
次は更に時間が飛びます、その話が終わって、二話以内に永琳は一旦退場の予定です。

よん　逆プロポーズ、後じゃれあい

ぺら、ぺら、ぺら、紙を扱う軽い音が、部屋の一室を飛び交っていた。本棚と多くの本と少しの調度品で埋められた実益一点の部屋に飛び交う紙の軽い音の音源は二つ。この部屋に置いてある物で二番目か三番目に大きい木製の事務机とその事務机の前にある応接机と一緒に置いてある四脚の椅子の内の一つ、この二つが紙の音を鳴らす音源の二つ。

そしてその音源を発している人物、事務机で書類の山と格闘している音源は、この部屋の主、八意永琳が音源のうちの一つ。

彼女は現在、ある一つの計画に関わっており、それの為の書類の整理と処理に追われていた。凄まじいスピードで減らされていく書類の山から発せられる音の感覚は非常に早い、彼女の本分は研究や医学、薬学と言ったものなのだが、この天才は一つの事だけでは満足出来ないと言わんばかりにあらゆる方面でその才覚を発揮していた。事務処理の早さも彼女が生まれ持った技能の一つに過ぎない。

もう一つの音源は椅子の方からで、その音は永琳の発している音の速度と比べて非常に緩やか、その音源である本のページを緩やかに捲る音を出しているのは、八意永琳の同居人であり、彼女のボディーガード兼都市の守護を仕事としている男。名を遠成翔夜と言った。

この男、実力も確かで、永琳と言う天才の仕事を手伝える程には性能の良い頭を持っているのだが、いかんせん気分屋というか、興味のある事には全力で当たるが、興味のない事には見向きもしないという享楽的な所がある。更に性質の悪い事に他人の目を気にしない大物臭い所もあり、それを体現したのが今の状況。居候の身でありながら、家主である永琳が仕事をしている傍で読書に興じると言う如何にも神経の太そうな行動を平然としているのである。読書をしていても永琳のガードをこなす自信が有る表れだと言われてしま

えばそれまでだが……。

「ねぇ？　翔夜？」
「何だ？　八意？」
「それよそれ」
「どれだ？」

唐突に、だが、仕事をこなすその手は止めないままに、翔夜へと話しかける永琳。それに対し、翔夜もページを捲る手を止めないままに、それに応える。無論、二人の視線は交わる事無く互いが行っている事へ向けられている。即ち、永琳は書類に、翔夜は本へ、互いの視線は注がれている。

それでもきちんと会話が成立し、本人達なりに考えた言葉を交し合っている。一種異様な光景だが、二人の能力が高い事を証明する何気ない行動の内の一つであることも確かだ。

「一緒に暮らし始めてもう６０年を越えてるのよ？　いい加減、八意って言うのやめない？」

月人の天才は少し不満そうな声で翔夜へ抗議する。

６０年、そう、６０年を越えても未だに翔夜は永琳の事を八意と読んでいた。前々からそれが不満だったのだろう、それには永琳も訂正しなかったと言う事もあるが、普通そう言うものは交流が深まっていくに連れて、自然とそうなるものだ。無論、永琳もそう考えていたからこそ、訂正しなかったと言う事もある。だが現実には、今の今まで翔夜は自発的に永琳の事を名前で呼ぶ事は無く、天才・八意永琳の頭脳を持ってしても、翔夜との距離がきちんと縮まっているのかどうか量りかねていた

呑気に読書に興じるこの男は、静かにページを捲る表情とは裏腹

に、それなりに表情は豊かではある。だが、その心を隠すというか、見せないと言う事にかけては類を見ないほどに巧い。他人の心を動揺させ掻き乱すくせに、自分は揺らがないし悟らせない。

「ん～？　別に俺はそう拘りがあって八意と呼んでる訳じゃねぇから、別に呼び名を変えるのは構わねぇけど？」

今もそうだ、読書に神経を割いているくせに、声の調子で感情を読む事が出来ない。名前を呼べることが嬉しいのか、それとも煩わしいと思っているのか。そういった感情が見えてこない。抑揚はあるくせに、嬉しさと煩わしさ、どちらの感情も乗っている様な声に聞こえる。

こんな調子だから、永琳の方が先に焦れて、翔夜へ希望を申請する事になる。結局何か物事を頼むのは永琳から翔夜へ物事を頼む場合が圧倒的に多い。逆に翔夜から永琳へ頼み事をする時は、決まって永琳は張り切って、そして嬉しそうに物事に当たる。いつも一喜一憂させられるのは永琳の方なのだ。

「じゃあ、これからは名前で呼んでみてくれない？」
「りょ～かい、っと」

そう返事を返して、読書へのめり込んで行く翔夜。何も言う気配が無い翔夜に今回もやはり永琳の方が痺れを切らし、書類に向かっていた視線と手を止め、心持ち頬を膨らませながら翔夜を睨みつけながら抗議の声を上げる。

「普通そこは直ぐに名前を呼ぶ場面じゃないの？」
「何？　呼んで欲しいのか？」
「そりゃあ……」

抗議に対して質問で返してきた翔夜の言葉に永琳は、ほんのりと頬を色付かせ、曖昧ながらも肯定の返事を返す。

永琳の返事を受けて、翔夜も本から視線を外し、本を読んでいた表情のままに、少し真剣な眼差しで永琳を見返す。その翔夜の態度から、永琳の頭脳は今までの経験上また自分が振り回されると警告を鳴らすが、もう既に遅く、翔夜の口は既に言葉を発する形になっていた。

「永琳……」

もうそれだけで永琳は色々と駄目になった。

低く落ち着いた声音で、恋人に熱く囁くように情熱の篭った、それでいて余韻を残すような翔夜の名前を呼ぶ声に、辛うじて表情を変化させる事だけは回避するが、頬は、パッ、と紅色へと変化し、歓喜でだらしなく頬が緩みそうになるのを必死に我慢している。が、精神は既に蕩けていた。

「っ～～～～！」

声にならない声を上げつつ、永琳は必死に書類整理へ精神を傾け、落ち着こうとしている。その視線の端で捕らえた翔夜の表情はにやにやといつもの笑みを浮かべていた。

この男は既に自分の気持ちを把握した上でこのような行動に出ているのではないかと、永琳の頭をそんな考えが過ぎる。もし本当にそうならば酷い男だ、永琳はそう思う。だが……。

（もし本当にそうだったとしても翔夜なら……と思ってしまうのも翔夜の雰囲気がなせる業なのか、それとも惚れた弱みなのか、多分両方ね）

そんな思考をしていると若干落ち着いたのか、自分の思考に苦笑するほどの余裕が戻り、覚束無かった手元も正確さを取り戻し、また規則正しい紙を扱う軽い音が戻ってくる。永琳を相変わらず一喜一憂させるのが巧い男は、既に読書へと神経を傾けていて、少しばかり悔しくなった。

と、そこで、最初自分が話そうとしていた事柄とは別の会話をさせられていた事に気がつき、自分が伝えようと思っていた事を思い出す。どうも昔から翔夜と話すと話が横道に逸れる事が多い、だがこれは永琳に限った話ではない事を彼女は知っている。翔夜と言う男は、意識的なのか無意識的なのかは知らないが、他人を自分のペースに巻き込むのが上手な男だ。

「そう言えば、私明日休みなのよ？」
「おぉ、そうか」

永琳は、自身が明日休日だと言う事を作業を止めないままに伝え、翔夜はそれに読書を止めないままに応える。そこで会話は途切れるが、何かの念を押すように、先程よりも若干強い調子で、永琳は同じ言葉を繰り返す。

「そう言えば、私明日休みなのよ？」
「あん？　ちゃんと聞いてたぞ？」
「私、明日休みなのよ？」

同じ事を繰り返す永琳に、彼女が翔夜に対して、暗に何かを求めている事は分かったが、それが何を求めているのか明確には察していない翔夜は思わず本から眼を離し、永琳の方へ視線を向ける。と、彼女は翔夜の方を不満そうに見つめていた。

「明日、休みなのよ？」
「何だ？　デートにでも誘って欲しいのか？」
「これだけアピールしてようやく意図にたどり着くの、多分翔夜くらいよ？」
「わりぃな、男女関係については鈍いもんでな」
「嘘ばっかり……」

陶酔した様な艶を含んだ笑みを返した永琳には、相変わらずにやにやと笑う翔夜の真意はやはり分からなかった。だからこそ永琳と言う女性は翔夜と言う男を追いかけるのかもしれない。

「じゃまぁ、行くか？　デート」
「えぇ、エスコートよろしくね？」
「面倒な……」
「酷い話ね？」
「俺の常套句じゃねぇか」
「ふふっ……」

男女間の関係において、追いかけられる方から追いかける方へ回った月人の天才は嬉しそうに微笑む。それから後の書類との格闘は恐ろしいまでのスピードで片付き、3時間後には机を埋め尽くすほどにあった書類の山が綺麗に整理、処理されていた。

翌日、暗闇の中で存在を主張していた人口の光は消え、陽光照らす蒼穹の空が広がる午後。翔夜と永琳は、昨日の約束通り、デートへと出かけていた。服装に関しては、二人とも普通の感性とは違うのか、めかしこむとかそう言った様子は無く、極普段通りの格好、永琳は赤と青、翔夜は黒一色と言う、まさに代わり映えのしない格

好。

デートだと感じられる所を探すとすれば、これでもかと言うほどにがっちりと翔夜の腕に絡みつく永琳の腕と、落ち着いたように、されど、何処か嬉しそうに笑う永琳の表情だろう。落ち着きと、嬉しさが同居したような微笑みは、他の人から見ても、幸せである事が伝わるような、そんな魅力的な微笑だった。

逆に、腕を捕縛され、幸せな感触のするふくらみに腕をめり込ませている翔夜の表情は、少し顰められ、ため息を吐きそうな雰囲気。

「歩きにくい……」

「あなた、デートしてるって自覚あるの？」

「あんまねぇよ、今まで一緒に出かける事なんざ腐るほどあった訳だしな」

「相手が私じゃなければその台詞激怒物よ？」

「知った事か、怒るなら勝手に怒ってればいい」

そう言いながらも、翔夜は諦めたようにため息を吐き、永琳はそんな翔夜を見て、更に嬉しそうに微笑む。翔夜の台詞は大多数の人からすれば最悪の部類だが、永琳からすればそんな台詞も、『らしい』として悪くないらしい。捕縛した翔夜の腕をますます深く抱きしめ、自らのふくらみに埋めていく永琳の行動に対して、更に翔夜の表情はうんざりとしていく。

「んで？　デートに誘って欲しかったって事はどっか連れて行って欲しい所でもあったのか？」

「別に無いわよ？」

「なん……だと……っ？」

「私はただ、休みの日に自宅でのんびりするだけじゃつまらないから、翔夜と何処かに出かけたかっただけ」

「あぁ、そう……んじゃまぁ、適当にぶらぶらすっか」

「えぇ、私はそれで満足だわ？」

珍しい事に、と言うか、翔夜と知り合ってから初めて永琳が少しだけ優位に立てているこの状況を楽しんでいるのか、永琳の笑みはますます深まっていくばかり、逆に翔夜は最早諦めたようにため息ばかりが増えていく。普段とは完全に立場が逆転してしまっている。

都市の大通りには当然大勢の人が溢れかえっている。服や日常生活品、嗜好品、その他諸々を扱う店が立ち並んでいるのだ、人で混雑するのは当然の事。

だが、そんな状態にも関わらず、二人の行動は阻害される事は無く、前進するに当たっての障害はない。正確には、腕を組みながら歩く二人に道を譲るように人の波が割れていると言った方が正しい。考えてみればそれも当然、一般の住人が溢れている中に、顔が知れ渡っている人物が歩いているのだ。しかも、超ド級の権力者、道を譲る気が無くとも、一歩引いて見るという行動を全員がすると、自然的にそうなってしまう。そうして出来た道を何も気にする事無く歩く二人は、きっと神経が太いのだろう。

羨望、嫉妬、尊敬、そんな一歩引いたような視線を受けても、何処吹く風と言わんばかりに、ついさっき決まった今日の目的、取り合えずぶらぶらしてみる、を実行しながら二人は大通りを闊歩していく。周りに、日常の中のちょっとした非日常を振りまきながら。

あれから、最初に言った通り、本当にぶらぶらとするだけで終わりを迎えようとしている永琳と翔夜。辺りには既に人口の光が視界に入ってくるほどまでには時間が経っている。そこまで来てこの二人、翔夜と永琳は相も変わらず腕を組んだまま未だにぶらぶらとしていた。やった事と言えば、適当にぶらぶらする、それだけの事し

かしていない、だと言うのに、永琳の表情は満足そうに笑みを浮かべており、その様なデートで済ませた翔夜は悪びれも無く腕を永琳の好きにさせている。
　いかにも大人の女性と言うような喜び方をしながら腕を絡ませている永琳に、翔夜から声が掛かる。

「十分堪能したか？」
「えぇ、それはもう」
「そか、んじゃまぁ、飯でも食って帰るか」
「そう、じゃあ、少し豪勢にいきましょ？」
「あん？」

　珍しく大人としての落ち着きを忘れたように、ニッコリと笑う永琳に無理矢理連れて来られたのは、衣服が買える場所、それなりに遅い時間なので、店自体は閉まっていたのだが、店員は帰る前だったらしく、店に入りたいと永琳が店員に告げた所で、二人は店の裏側から中へと通され、永琳は店の奥へとずんずん歩いていった。翔夜は試着スペースの近くで待っているように言われ、動くのも面倒だと思ったのか取り合えず永琳の指示に従って試着スペースの傍でやる気なさげに立っている。

　こうしてやる気なさげにぼけっと立っている翔夜だが、実はこれでも、それなりに有名な人物なのだ。それも当然、永琳のボディーガードとして日夜彼女に傍にいる翔夜が有名でないはずが無い。今まで護衛らしい護衛など就けた事の無い永琳が初めて自分の独断で就けたボディーガードだ、有名になるのは当然の事、そして有名な者は男女問わず視線を集めるのも世の中の定石。翔夜も例に漏れずに最初は男女問わず視線を集めていたが、最近は女性から視線を集める事が多くなってきている。その理由として、多くの視線に晒されているが、それを全く気にしないクールな態度と、女性からの視

線にも浮き足立った様子を見せない落ち着きが多くの女性から好感触を得ていた。そんな理由もあり、翔夜は女性のファンが圧倒的に多い。容姿こそ、そこそこ整っている、というだけでしかないが、振る舞いや雰囲気が女性のプライドに火をつける形になったと言う事だ。

そんな翔夜がいつもと同じように店内に立っている、勿論定員の中には女性も多く居り、その女性達から視線を集めるが、やはり本人は気にした素振りすら見せず、只やる気なさげに立っているだけ。私的な場面でも公的な場面の態度と変わりない様子で立っている翔夜が二面性が少ない人物として更に人気が上がる事になったのは言うまでも無い。

そうして翔夜が女性の定員達から視線を集めてから十分ほどして、ある服を持って永琳が店の置くから出てくる。そしてその服は変わっており、落ち着いた藍色の胸元がそれなりに大きく開いたフォーマルドレスに身を包み、普段三つ編みにしている髪を解いて、大きく開いた背中を隠すようにして流しており、ふわりと揺れるドレスの裾と後ろに広がる細く柔らかそうな艶のある銀髪が絵になっていた。

無論、永琳の落ち着きつつも艶のある姿に見惚れるほどこの男の神経は普通ではなく、翔夜の視線は永琳よりもむしろ、永琳が右手に持っている服に視線が固定されていた。

「それを俺に着ろと？」

「えぇ、きっと似合うと思うわ」

「勘弁してくれ、肩が凝りそうだ」

有無を言わさぬようにして翔夜に手渡された服は、永琳の服装から予想されるように、フォーマルなスーツと言えばいいのか、それなりの場に出る為に着るような服。白いYシャツに黒のジャケット

黒のスラックス。ネクタイは無く、別に付けなくてもいいと言う永琳の意思表示だと判断する。

「もう既に買っちゃったから着ないとダメよ？」
「へいへい、ネクタイが無いのが唯一の救いだな」
「ふふっ、そう言うと思ったから持ってこなかったのよ」
「仕方ねぇな……」

永琳が翔夜に頼み事をする時の常套句にすらなっている言葉が出て来た時、永琳は嬉しそうに笑う。ここが高級なパーティ会場だったとしたらさぞかし映えたであろう永琳の姿を華麗にスルーし、試着スペースへ入り、即座に着替え終わって出てくる。試着スペースの扉を開けて店員に着ていた服を渡しながら出てきた翔夜は、完全に化けたとしか言いようのない格好だった。

相も変わらずやる気の無い表情だが、元々それなりに鋭い瞳が落ち着いた黒のスーツと良く合い、苦しかったのか、ボタンを上から二つ開けた白のYシャツから除く肉体は細身ながらもしっかりと筋肉が絞り込まれている事が分かり、一緒に見える鎖骨が何故か怪しい雰囲気を演出。有り体に言えばよく似合っていた。

「あ～、これだけでも肩が凝りそうだ」
「似合うとは思ってたけどね……変な気分になりそうよ」
「何言ってんだ？　まぁ、お前も良く似合ってるな」
「あ、あら？　そう？」

本当に珍しくストレートに永琳を褒める翔夜の言葉に、思わず永琳は言葉に躓く。翔夜の褒め言葉に照れ照れ、となっている永琳に、スッ、と肘を差し出す翔夜。その顔はいつものようににやにやと笑いを浮かべていた。

「ほら、行くんだろ？」
「え、えぇ……ありがとう」

永琳をエスコートする為に、取っ手の様に折りたたまれた肘を自然な動作で差し出された永琳は、少しぎこちない動きで、翔夜の右腕に自らの左手を引っ掛けるようにして、そっと置き、右手で肘をそっと掴む。エスコートされる体勢の整った永琳を確認した翔夜は歩き出す前に永琳へ声をかける。

「じゃ、行くか」
「えぇ」

そうして晩餐の為に必要な準備を終えた翔夜と永琳は営業時間外に態々開けてもらった衣服店に一言礼をいい、入ってきた時とはうって変わった優美さと優雅さを備えて店を後にした。その後店内では異様な盛り上がりを見せたが、この物語には全く関係ないことである。

エスコートは翔夜で、案内は永琳と言う状態で、人口の光が目に映る夜の街を、昼間とはまた違った視線を集めながら今日の晩餐の場へ問題なく到着し、二人の服装が全く浮かないような晩餐の場にて、現在その雰囲気に似合う夕食が広げられている。永琳の前に腰掛け、普段とは一線を画する上品さと気品を持ち合わせながら完璧にマナーを守りつつ食事を勧めている翔夜は、永琳の知っている翔夜の姿と中々重ならなかった。

少し気崩したスーツ姿と言う格好とは裏腹に、食器の音を最小限に抑えながらナイフとフォークを軽やかに扱う翔夜に少し永琳は見惚れる。

「驚いた、あなたこんな事も出来たのね」
「ま、さる事情があってな、こう言う事は好かねぇが、一通りは問題ない」
「その、さる事情って言うのは聞いても教えてくれないんでしょ？」
「まぁな、それに男も秘密が多い方が魅力的だろ？」
「話すのが面倒なだけの癖してそんな事を言う貴方は相当な女の敵ね」
「酷い話だな？」
「翔夜の事よ？」

にやにやと笑いながらも、食事の姿勢は崩さず、音量も普段より抑えた声で喋る翔夜に、このマナーや品格は付け焼刃でない事を悟る永琳。無論、そんな翔夜の新たな一面に驚いている永琳もマナーは完璧で場数を踏んできた為、品格もあるし、何より女性がそうして食事をする姿は非常に優雅である。暗すぎず明るすぎない落ち着いた雰囲気の光で満たされた店内の中で、永琳のドレスの色は良く馴染みながらも、彼女自身が持つ銀色の幻想的な髪が彼女を雰囲気に溶け込ませず、それがある種の神秘さを伴って彼女を儚い存在へと昇華させていた。

マナーも完璧で品格と優雅さを備えた二人が粛々と食事を終えるのは当然の帰結だった。今現在は食後のティータイムと洒落込んでいる。コースの最後にはデザートと言うものがついてくるものだ。

「ね、ねぇ？　翔夜？」
「あん？」

優雅に飲み物とデザートに舌鼓を打っていた永琳からの名前を呼ぶ声に反応した翔夜が出した声は、明らかにその場にそぐわない口調。ある種滑稽だが、翔夜の食事風景を見ている者は誰も咎める者

が居ない。勿論、普通態々そんな所まで口を出してくる他人が居るかと言われれば居ないだろう。だが、もしそう言う人が居たとしても黙らざるを得ないほどに翔夜の纏う風格は高かった。

「私達それなりに長い事一緒にいるわよね？」
「おぉ、まぁそうだな、それがどうした？」
「もうそろそろ、いいんじゃないか……と思うのよ」
「はぁん？　何の事だ？」

それなりに真剣味帯びた声でそう語る永琳に対して、翔夜は意図を理解できないのか、不思議そうに永琳を見返す。そんな翔夜の反応に頬を赤くさせながら必死に言葉を紡いでいく永琳だが、その言葉は更に要領を得ない言葉へと変貌する。

「だ、だから、アレとかアレとか、もう一緒にいて６０年越えてるのよ？　ねぇ？」
「ねぇ？　とか言われてもな……さっぱり分からん」

全てを理解しているようないつものにやにやした笑いではなく、眉根を寄せて腕を組み、右手で顎を撫でながら落ち着いて考えている様子は本当に理解できていないらしい。対して永琳は落ち着いた様子と言うか、ポーズは崩れていないのだが、どうも精神的には落ち着いていないようで、段々と声が尻すぼみになりながらも、自分が考えている事を分かっていない様子の翔夜に言ってしまう。

「だから……け、結婚……とか……」
「はぁん？　結婚？　結婚ねぇ？　やぶさかじゃねぇが……」
「じゃあ？」

いつもとは違い少しもじもじと身体を小さくしながらそう言う永

琳。翔夜から返ってきた言葉に表情を明るくさせるが、結果を急ぐなと言うように、翔夜は永琳を止める。

「まぁ、聞け、多分したら後悔するのはお前だぞ？」

「どう、言う事？」

天才・八意永琳らしからぬ自信の無さで、まるで普通の少女のように勇気を振り絞って形にした言葉に、翔夜は軽い調子でそう返す。断られたのかそうではなかったのか判断できない永琳の表情はどんどん不安げな色を帯びていく、そこに、自信に溢れた天才・八意永琳は居らず。ただ自分の思い人の反応を見ている普通の女性、八意永琳が居た。

「まぁ、そこで後悔する原因は、今お前が進めてる月面移住計画だな」

「それがどうしたの？」

「ほら、俺月いかねぇし」

「……えっ？」

「結婚しても一緒には居られないし、離別はほぼ確定的だぜ？　な？　後悔するだろ？」

「何、それ？　私初めて聞いたわよ？」

軽い調子で語られる翔夜の言葉に、何を言っているのか分からないとばかりに呆然とする永琳。心なしか、顔も少し青ざめている気がする。

「まぁ、言ってなかったからな」

飄々とそう答える翔夜に今だけは苛立ちを感じた。未練も後悔も寂しさも無いように軽く語られている翔夜の声が、出会って初めて

煩わしく聞こえた。

「翔夜は……それで、寂しくないの？　離別が決まっていても飄々としていられるほど貴方の中で私の存在はちっぽけだったの？」

「何か勘違いしてるみてぇだけどな、別に俺はお前が大切じゃないと言ってる訳じゃない」

「じゃあ、どうしてそこまで……っ」

「生きてりゃいつか会えるんじゃね？　縁なんてそんなもんだろ？」

切れ長の美しい瞳から涙を溢れさせる永琳の言葉に、やはり飄々と翔夜は答えを返す。いっそ清々しいまでに無計画と言えるほどの答えに、永琳は一瞬激情を何処かに置き忘れたかのように翔夜を見返す。一瞬でも激情を忘れた永琳に向かって翔夜は言葉を重ねる。

「それにまぁ、やぶさかじゃねぇが、もう少し俺がくらっとする位にいい女になってもらわねぇとな？」

今はまだ妹みたいなもんだ、とにやにやしながら永琳をからかう様な翔夜を見ていると、永琳は、もう会えないかもしれない、と考えていた事が馬鹿馬鹿しくなってきた。何時も通りの翔夜を見ていると、会えないというビジョンが、永琳の頭の中から音も無く消えていった。それに伴って、もう止まっているが、流れていた涙の残滓はそのままに、自然と永琳の顔に微笑が戻る。

「ふふっ、魅力が足りないなら仕方ないわね？」

「おぉ、もっといい女になれ、永琳」

「えぇ」

そう言って笑う永琳は、確かに美しい女性なのだ。そして、この美しい月人の天才が穏やかに微笑を浮かべる事が出来るのは、遠成

翔夜と言う男の隣だった。

晩餐の帰り道、一悶着あったが、結局収まる所に収まった永琳と翔夜、その二人の内永琳は何処か吹っ切れたような、暗い夜空とは間逆の晴れやかな表情をしていた。

「でも、翔夜が居ない生活がまた来ると分かって憂鬱だわ……」
「はぁん？　そこまでか？」
「そこまで、よ、それだけ翔夜は私にとって大きな存在なの」
「へぇ、ま、何にしても我慢してくれ」
「まぁ、それは仕方ないけど……私が居ない間に他の女が翔夜の周りをうろつきそうで心配なのよ」
「さぁて、な？　どうかねぇ？」
「心配だわ……やっぱり結婚だけでもしない？」
「うへぇ、結局そこに帰結すんのかよ……」
「やけに反発するわね……結婚を嫌がる本当の理由は？」
「縛られるの嫌いな性質なもんで」
「他の女作る気満々じゃないの！」
「何でそう言う結論に落ち着くかねぇ……？」

この日、そう言って怒られながら逃げるスーツ姿の男と、怒りながら追いかける藍色のドレスを纏った美女が追いかけっこをしている姿が、大昔の近未来都市の中で数多く目撃された。

よん　逆プロポーズ、後じゃれあい（後書き）

言っておきますと、作者は永琳好きですよ？
それはそれとして、今回も作者の妄想全開でお送りしましたよ、ええぇ、スーツだとかドレスだとか、フォークだとかナイフだとかマナーだとかそんなもん存在してるのか？
などと疑問を抱きつつも、脳内で勝手にＧＯサインを出してしまったので、やっちまいました。
さて、こうして計画が進んでいくわけですが、次かその次辺りで永琳編は一旦終了と相成ります。
早く出したいキャラ一杯居るんですよねー、大抵はまだまだ先なんですけどね……。
ＩＳの方がスランプ中はこっち書いてると思います。
中々いい感じに筆が進まないんだよね、今現在。なので、次もこっちかもしれません。
ＩＳ待ってる人たちに申し訳ない……ｏｒｚ

ご　悪い男とその理由

月に移り住むと言う計画が、いよいよ現実味帯びてきた中、翔夜はいつもと同じように永琳のボディガードを全うしていた。月面移住計画が軌道に乗り、本格的になってきてから、永琳と翔夜は家に帰らない生活がもう何年も続いている。都市の研究機関が手配したホテルに寝泊りする日々が続いており、現在二人はこの日最後の会議を終わらせ、ホテルへの帰路を並んで歩いていた。

ここ数年で永琳は勿論の事、翔夜の知名度も鰻上りに急上昇しており、それに比例して人気も急上昇。年に数回あるかないかと言う妖怪との小競り合いも、テレビで中継される事があり、誰もがその圧倒的な強さに憧れ、魅せられた。実際に、指一つ動かさずに妖怪達を撃退していく様は圧倒的で、更には妖怪を一体たりとも死なさず消耗させるその戦いは、既に戦いではなく、妖怪達と一人の人間による遊びの様に感じられた。

テレビにすら出てくる有名人が、月面移住計画の会見の場において、俺は行くつもりは最初からねぇ、と言った事で、大きな波があったが、最近ようやくそれも落ち着いてきた所。

そんな有名人が二人並んで夜空の下を歩く姿は、人目を引く、と言うより、普通にしていても惹きつけてしまう。そして二人は有名人でありながらも、平然と住人の前へ出て、人通りの多い店で適当に買い物をするような、一般住民にとっては、身近な有名人の為、歩いているだけで色々な人物から声を掛けられる事が多々ある。永琳は主に男性から、翔夜は主に女性から。永琳が話し掛けられている時、翔夜は極普通に対応している事を理解しながらも、結構な目力で翔夜と話している女性を睨みつけている。翔夜に話し掛ける女性は、有名人と気軽に話せたという事実に舞い上がって気がつかず、翔夜

は気がついているが、特に害は無いので放置している。
　とまぁ、その様に住民達に人気のある二人だが、今現在は誰にも話し掛けられないままに、ホテルへ向かっている。その理由として、妙に意気消沈しながらも憤慨すると言う理解不能な行動をしている永琳にあった。

「計画が順調に進みすぎてるわ……憂鬱だわ……大体皆私の言う事にはいはい頷きすぎなのよ！　ねぇ！？」
「ねぇとか言われても知るか、大体お前に真っ向から意見できる奴なんて居る訳ねぇだろ」
「翔夜が意見すればいいじゃない！」
「何言ってやがる、俺はボディーガードだっての」
「でもこのまま問題なく進めば２０年以内には計画発動可能だわ、そうなると翔夜が居ない生活が……はぁ、憂鬱だわ……」

　と言うこと、永琳は、翔夜との別れに憂鬱になりつつ、誰も自分の計画の進め方に意見をしてこない事に憤慨していた。誰かが意見してくれれば、それを検討する為、会議が開かれ、計画の遅延に繋がる。と言うプランだったのだが、そうするには八意永琳と言う女性は天才過ぎた、片手間で仕上げた計画書には何の問題もなく、意見する方が馬鹿らしいほどの出来、もし、それ以上のプランに仕上げようとするならば、少なくとも永琳に匹敵する頭脳が必要になってくる。

「決まった事を一々騒いでも仕方ねぇだろ？」
「本当に、憎たらしい位冷静よね……」
「起こった事は受け入れる、これ基本だぜ？」
「それでも納得できない事もあるわ」
「なら俺を諦めた方が楽だと思うが？」
「確かに楽でしょうね、でも無理ね、私を追いかけさせたのって今

まで生きてて貴方だけだもの」
「そーかい、なら我慢するんだな」
「こんな所でもまだ私に追いかけさせるなんて……酷い話ね？」
「だから、俺の常套句……まぁ、良いか……俺は自由が好きなんでね」

天才と言う弊害なのか、永琳と言う女性は、男女間の恋愛において、追いかけられる事にはあまり興味を示さない、だが、追いかける方になると途端に情熱的なまでの追いかけっぷりを見せる。捕まえられそうで、捕まえられない、そこに居るのに触れようと思えば身を引く、そんな、自分の思い通りにならない男の方が燃える。とは本人の談である。この事実は永琳にとって、翔夜と出会い、自分自身を分析して初めて理解した自分の恋愛観である。そんな永琳にとって、少し突き放したような翔夜の言葉は、更に永琳を燃えさせる原因となっていた。

と、道中永琳が憤慨したり憂鬱になったりと忙しい行動をしている内に、ホテルは既に目の前、そのままフロントへ行き、預けていた鍵を貰い、部屋へと上がる。無論、永琳の様なＶＩＰの為に取った部屋、最高級の部屋である事は疑いなく、部屋は最上階のフロアにある。部屋の前へ着き、カードを通しロックを解除、そのまま何の疑いも無く部屋に入る、二人で。

そう、永琳と翔夜は同じ部屋で寝泊りしていた。ホテル暮らしが決定した瞬間、研究機関の方へ、二人で一つの部屋の方が連絡の時に困らない、費用も安い、自分達は同じ家に暮らしていたのだから何の問題もない、等と、ありとあらゆる理由を駆使して永琳が強引に同じ部屋へ翔夜を押し込む事に成功。その時の永琳は、普段のクールな面持ちなど欠片も無く、あふれ出る情熱のままに脳を高速回転させながら理由を挙げていく、その姿を見た研究者達はかなり引き気味で了承の返事を出した。

そのような経緯でもぎ取った同室だが、今の所、永琳の期待したような展開は全く無い。ルームサービスで取った夕食、受け取った時に作っておいた興奮剤と精力剤を料理の内の一品に入れると、それがまるで分かっているかのようにその料理だけ食べる事は無い。離別の前に既成事実を作ろうと練った作戦は今の所全弾不発。永琳の人生の中で、これほど負け越した事は無い。

部屋に帰ってきて直ぐ、翔夜はシャワールームへ引っ込む、１０分か１５分程で上がってくるのが基本だ。そして今回も例に漏れず、１３分で上がってくる。くせのある髪は濡れて艶のある黒髪へ変貌し、黒に包まれていた肉体も、白のバスローブへと変わっている。そしてそのまま、二人掛けのソファーの左端へ腰掛け、長い足を組みながらルームサービスのメニューと睨めっこをするのも何時も通り。

「私もシャワー浴びてくるわね？」

「あいよ」

翔夜に軽く声を掛け、翔夜から気の無い返事が返ってくると、嬉しそうに永琳もシャワールームへ消えていくのもここ最近ではいつもの光景。後にはシャワーの水音と外から入ってくる音以外は静かな空間が残る。その静かな空間で、翔夜は、部屋のソファーに座り、見ていたルームサービスメニューを閉じて、前にあるテーブルへと放り投げ、左にある大きな窓から外の光景を何をするでもなく、ぼけっと眺める。そこには大小様々な人口の光が点在する光景が映っており、ある種幻想的な光景にも見える。

その光景を見ながら、バスローブのポケットに入れてあったタバコを取り出し、一本口に咥え、魔力で大気に干渉、指先に小さな灯を灯し、それでタバコの先端に火をつけ、魔力と灯を霧散させるのと同時に紫煙を吸い込み、右手の人差し指と中指でタバコの根元を

挟み込み、口から離し、紫煙を吐き出す。吸い込むたびに、ちりちりと音を立てながら葉が燃え、灰へと姿を変えていく、落とした灰は漏れる事無く灰も残らぬほどに燃やされ姿を消す。

「ここでの生活もあと少しか、まぁ、悪くは無かったな」

ポツリと呟き、紫煙を吸い込み、静かに吐き出す翔夜の表情には、未練も後悔も無く、あるのは先がどうなるのか楽しみだと言わんばかりに笑む、いつもの、にやりとした笑いだけが存在した。自分のしてきた事に恥じる事が無くば後悔も無い、忘れえぬ過去はあれど、興味は常に前へ、それが遠成翔夜と言う男の在り方だった。

自らの在り方を再確認し、気分を害する事無く不敵に笑みながら紫煙を纏わり付かせるその姿は、翔夜と言う人間の本質を良く表していた。人ではあるが人に在らず、その本質は魔に近い、それが良く出ている笑み。永く生きているが故に世界の楽しみ方を理解している。幸多き事も、苦悩多き事も、悲哀多き事も、起こり得る全てを受け入れ、理解してこそ世界を楽しめる。幸も不幸も悲しみも嘆きも怒りも嫉妬も愉悦も喜色も快楽も、全ては世界を楽しむ為の手段に過ぎない。そう理解している男が浮かべる不敵な笑みは、壮絶でありながら全てを受け止める大きさも感じる。老獪な魔としての笑みが翔夜の浮かべる笑みの本質なのだ。

出てきた魔としての本質をうまく隠し、短くなったタバコを灰も残らぬほどに燃やし尽くした時には、いつものやる気を何処かに置いてきた目に戻り、そのまま立ち上がり、ベッドとベッドの間にあるフロントへ通じる内線を取り、ワインを所望し、またもとのソファーの位置へと座る。

１０分もしない内に、部屋の呼び鈴が鳴り、翔夜が所望した品が来た事を告げる。その音と共に、聞こえていたシャワーの水音が止まる。それに対して特に反応を見せずに、部屋のドアまで歩き、ドアを開け、運ばれてきたカートを受け取る。

「サインをお願いします」
「あぁ、これで良いか？」
「はい、確かに、ではこちらを」
「ご苦労さん」

カートを運んできた男と短く受け取りのやり取りを済ませ、ドアを閉める。カートに乗っていたのは二つのワイングラスと、ワインサーバーの中の氷に埋もれているワイン。カートに乗せられているそれらを一瞥し、カートを部屋の奥へ運ぶ為に転進した所で、シャワールームから、いつも一本の三つ編みにしている銀髪を解き、波打つ銀色を惜しげもなく見せつけ、男であれば惹きつけられずには居られないその肢体を、翔夜と同じバスローブに包んでいた。やたらと胸元が開いているのは、無論、態とであるのは言うまでも無い。

シャワーから上がったらしい永琳は、翔夜の手に持つカートを見て、艶の含んだ妖しい笑みを翔夜へ向ける。

「お酒を飲ませてどうしようって言うのかしら？」
「どうもしねぇだろ」
「あら、冷たい反応ね」

永琳の艶の篭った声に、間髪入れずばっさりと切った翔夜に、永琳の笑みは、心なしか更に艶帯びてくる。そしてさっさとカートを奥へ運ぼうと動く翔夜の腕にすぐさま永琳は自らの腕を絡ませ、悩ましげに覗くふくらみの素肌を翔夜の腕に当てる。

「歩きにくい」
「全く、他に言う事あるはずよ？」
「さてな？」

自らの腕に当たる感触等気にする事などないというように、自らが純粋に思った事を翔夜は声に出し、それに永琳は不満そうに拗ねたような表情を浮かべる。

がっちりと永琳によって捕縛された腕を翔夜は器用に動かし、ふくらみの頂点部分に当てこする様にして自らの腕を、クイと動かす。

「あっ……んんっ……」

翔夜の動きに何かを感じて、永琳が妖しい声を漏らした瞬間に翔夜の腕を捕縛していた拘束が少し緩む、その瞬間に掴まれていた右腕を引っこ抜き、何事も無かったようにカートを動かし部屋の奥へ移動し、ソファーの前にあるテーブルにグラスとワインサーバーを並べていく、そんな翔夜の行動に、永琳は頬を少し赤くしながらも、不満そうな表情を浮かべる。

少しの間恨めしそうに翔夜を睨んでいた永琳だったが、翔夜がソファーに腰掛けると、パッと表情を一転、妖しい笑みを浮かべて永琳も翔夜の右側に腰掛け、翔夜へとしなだれかかる。見るもの全てを魅了しそうな艶のある笑みを浮かべ、永琳の右手は翔夜の胸元へ当てられ、そのままゆっくりと胸板を永琳の手が這い回る。

「貴方はいつもそう、私をその気にさせておいてつれないんだから……」

「別に他意はないけどな、このエロ娘が」

「あら酷い、私が抱かれたいと思ってるのは貴方だけよ？」

「そりゃ光栄な事で、ま、処女がよく頑張ってるとは思うけどな、恥ずかしいだろ？」

妙に妖しい手つきで胸板に手を這わせられていた翔夜の軽く出された言葉に、手は止まり、切れ長の落ち着いた光を灯す瞳は大きく見開かれ、見る見る内に頬だけでなく、耳まで赤く色付かせながら、

少女の様に慌てる永琳。翔夜はそんな永琳を見ていつもの様に、にやにやと笑っている。

「な、なな何で知って……じゃなくて！　え、えっと……」
「ふふん、7割方確信してたが、本人からの答えも頂けたな」
「か、カマを掛けたのね！？」
「ま、そう言うこった、しかし、良くこんなのに引っ掛かるな？」
「貴方が言うからこんなに反応するんでしょ？　普通なら私だって流すわよ」
「なるほどねぇ、ま、よく頑張ってるとは思うがね」
「そ、そう言う貴方はどうなのよ？　言うからには経験あるんでしょうね？」
「さて？　どうだろう？　どっちであって欲しい？」
「それは……勿論、貴方もした事無いなら私は嬉しいけど……」
「じゃ、そう言う事にしといてくれ」
「何よそれ？　そう言うからにはしてくれるの？」
「いや？　それとこれとは話が別だ」
「もう……意地悪ね？」
「今更だな」

にやにやと笑う翔夜に、不満そうに頬を膨らませる永琳。二人の間では見慣れた光景になりつつある表情だった。一頻り永琳をからかった翔夜は、満足したのか、ワインに手を伸ばし、敷き詰められた氷がぶつかる涼やかな音を楽しみながらワインを取り出し、コルクを抜く、小気味良く空気が抜ける音と共にコルクを取り除くと、無造作とも思える手つきでワイングラスにワインを注ぐ、グラスに溜まっていく鮮やかな赤を、翔夜は何処か懐かしむように目を細めながら見つめる。一滴も零す事無くグラスの底から4分目程まで注ぐと、ワインを持ち上げ、もう一つのグラスにすかさず同じ量を注ぐ、注ぎ終わるとすかさずワインの口を軽く拭き、ボトルを置く。

鮮やかな赤が注がれたワイングラスを、翔夜と永琳は互いに持ち、軽くグラス同士を触れさせる。

「乾杯」
「おぅ、乾杯」

静かに二人だけの乾杯を終えると、互いにワインに口をつけ、少し飲んでから口を離す。赤独特の舌に味が残る感触を楽しみつつ、ワインをもう一口含み、喉を通るアルコールを楽しむ。

ワイングラスを傾け、口を離してグラスの中の赤を楽しむようにワイングラスを回す翔夜を見つつ、自らの持つワイングラスをテーブルへ置き、翔夜の首に自らの両腕を回し、首の後ろで手を組み、翔夜の顔が永琳の方へ向き、そのまま静かに永琳は自らの唇を翔夜のそれへと吸い込ませようとして……。

「どさくさに紛れて何しようとしてんだ」
「そう言う雰囲気だったと思ったのよ」

無常にもその行為は、永琳の肩を抑える翔夜の手によって止められていた。別段迷惑そうでもない翔夜の声に止められながらも、自分に非は一切無いと言う様に、次は翔夜の首を引っ張り、翔夜の顔の方を引き付け様と永琳は腕に力を込める。

「油断も隙もねぇな」
「あん、もう」

永琳の肩を抑えていた手をあえて離し、近付く永琳の顔を避け、先ほどまで抑えていた肩へ顎を乗せる形で回避、永琳のふくらみが翔夜の胸板によって、その柔らかさをアピールするかのように、ふにゃりと潰れるが、知った事かと言わんばかりに、翔夜は落ち着い

て首に回った腕を外しにかかる。翔夜の行動に不満そうな言葉を漏らすが、翔夜を抱きしめる形になった事が嬉しかったのか、その声音は上機嫌そうに弾んでいる。

そうして、翔夜によって腕は外され、身体は離れたが、離れてみると永琳の表情は嬉しそうに笑みを浮かべている。

「嬉しそうだな？」

「それはそうよ、一瞬でも貴方を私の腕の中に捕まえる事が出来たのよ？　いつも貴方は私の腕からするりと逃げていくから」

「そうかい、ま、嬉しそうで何より、これで一層酒も美味くなるだろうよ」

「そうね、本当にその通りだわ」

そこからは永琳からの襲撃も無く、翔夜と永琳は他愛も無い話を肴に、ワインを空けていった。

「さぁて、永琳、そろそろ寝ろ、ワインももうねぇしな」

翔夜は軽く伸びをしながら永琳へ就寝を促す、テーブルには中身の無くなったワインボトルが置かれ、宴会の終了を告げている。部屋にある大きな窓から覗く都市の光も先程よりもその数を減らしている。

だが、永琳へと就寝を促す翔夜に対し、彼女は不満そうに眉根を寄せる。

「いつも私が先に寝るからいつまで経っても翔夜のベッドに潜り込めないじゃない」

「まるで常識であるかの様に自信満々で言う台詞じゃねぇだろ、つ

ーか、俺はお前のボディーガードだ、護衛対象よりも先に寝るガードが何処に居んだよ」

不満そうに眉根を寄せながら、早くお風呂上がってよ次使えないでしょ？　と言うような台詞と同じようなノリで言ってくる永琳に呆れたような表情をしながら律儀に突っ込みを入れる翔夜。

と、そこで名案が浮かんだというような明るい表情を見せる永琳。対して翔夜は、また、余計な事を思いついたな……等と呆れながらため息を吐く。

「なら、最初から翔夜も私と一緒に寝ればいいのよ、それなら気がついてからでも即座に対応可能で私も嬉しい、まさに一石二鳥ね」

「ま、それで良いなら別に構わねぇけど」

「えっ？　え、えっと、今何て？」

永琳のまさにこれ以上の提案はない、と言うように自信満々に告げられた案に、軽く同意する翔夜だが、その言葉がまるで信じられないかのように、目を丸くさせながら翔夜に問い返す。

わなわな、と全身を震わせている永琳を、にやにやと見返しながら腕を組み、翔夜は同じ言葉を繰り返す。

「それで良いなら別に構わねぇけど？」

永琳の案を了承する内容の台詞を軽く告げた翔夜の言葉を理解した永琳は、局地的に爆発を起こしたような勢いで耳まで赤く染まる。そしてあからさまに慌てだし、意味も無く手をわたわたと動かしながら、翔夜に念を押すように確かめる。

「え、えっと、その、ほ、ホントに？　良いの？」

「あぁ、別に良いぜ？」

「あ、う、じゃ、じゃあその……よろしく、ね？」
「念を押すが、一緒に寝るだけだからな？」
「わ、分かってるわよ」

思わぬ所で一緒に寝ても良いと了承された永琳は、思わぬ急展開にパニックになっているが、翔夜はまだにやにやと笑いながら、普段自らが使っているベッドへもぐりこむと、人一人分のスペースを空けて、布団を捲り上げる。

「ほれ、一緒に寝るんだろ？」
「え、えぇ、じゃあその……しつれいしまーす」

普段のクールな雰囲気を何処かに置き忘れてきたように、顔を赤くさせたまま、心持ち縮こまってベッドへと上がる。その際、ベッドのスプリングが柔らかく受け止める音に生々しさを覚え、ピクリ、と永琳の身体が震える。その様子に翔夜はくつくつと面白そうに笑い声を漏らす。

「体勢に希望があるなら聞くぞ？　このまま並んで寝るだけで良いのか？」
「じゃ、じゃあ、向かい合って抱きしめたままが良いわ」
「了解だ」
「んっ……」

永琳からの要望を受け、翔夜は彼女の背中にある銀色の髪ごと包み込むように腕を回し、ぐっと力強く抱き寄せる。翔夜の胸に顔を埋める様にして抱擁された永琳は、何が起こっているのか理解できないほどに夢見心地な表情で力を抜き、されるがままに抱き寄せられる。彼女が感じた翔夜の腕は思ったよりも細かったが、絞り込まれた筋肉が力強さを感じさせ、彼女の精神を安心へと導く。

そうして落ち着いた永琳は、自分からも翔夜の身体に腕を回し、抱き合うようにして体勢を維持。そのまま素足を翔夜のそれと絡め嬉しそうに笑う。

「でもどうして今回の私の要望を了承したの？」

「拒否する理由が無かったからだ、こう言う要望があった時俺は断るつもりは無かったぜ？　今までは言われなかったからな」

不思議そうに見上げてくる永琳の顔を見返しながら、新たな事実を明らかにしていく。

「くっ、そう言う事……もっと早く言っていればあと２０年とは言わず、もっとこれを味わえたという事ね……」

「まぁ、そう言う事だな」

つまりはそう言う事、永琳のアピールに対して鉄壁のガードを見せていた翔夜に対して、一緒に寝ようなどと言う要望は即座に却下されると思い込んでいた永琳は、その要望を口にする事が無かった。だが、翔夜は寝ていてもガードの仕事を全うするだけの実力がある。それを総合してみると、護衛対象が翔夜と密着しているという状況は、翔夜のガードとしての実力から言って都合がいい、つまり、最初から拒否するつもりは無かったのだが、言われなかったので自分から提案する事も無かったと言う事。

永琳は自分の思い込みによる失敗を悔いると同時に、翔夜の身体をもっと密着させようと、ぐっと腕に力を入れる。

「こんなに温かかったのね……こんなの知っちゃったら、更に離れるのが嫌になるわ……」

「んじゃまぁ、後悔しないように後２０年、余す事無く堪能しとけ」

「そうね……このまま間違いも起こしてくれると嬉しいんだけど」

「それはない」

真顔になり、永琳の意見をばっさりと切り捨てる翔夜に、永琳は拗ねたように眉根を寄せ、唇を少し尖らせる。

「つれないわね？　私はいつでも良いのに」
「その瞬間に雁字搦めにされそうなんでな」
「それはそうよ、他の女の所にほいほい行かれたら困るもの」
「自由が好きなもんでな、それによ、月で別の男を好きになるかもしれないだろ？」
「ハッ……ありえないわね」
「鼻で笑う程にありえねぇのか……大した男がいないのか、それともそれだけ俺が愛されてるのか……」
「それだけ貴方を愛してるのよ……」

熱い吐息と共に永琳から発せられた言葉は、普通の男ならばそれだけで魅了されそうなほどに甘く情熱的なアピール、永琳も冗談で言っているつもりは無く、１２０％本気の言葉、だが、翔夜はいつもの様に、にやにやと笑いを浮かべている。悪い男の見本のようだ。

「情熱的でクラリと来そうだ」
「クラリと来て、そしてそのまま私を愛するといいと思うわ」
「冗談だ」
「酷い冗談ね、でも、愛してる」
「そうかい」

そんな悪い男に捕まってしまった永琳の表情はしかし、嬉しそうに笑みを浮かべている。そんな永琳を見返し、珍しく、本当に珍しく、永琳を包み込むような優しい眼差しを向けて、大切な物を見つめるような柔らかい笑みを浮かべる。

自らの思い人の、初めてと言っても良いような優しい笑みに、永琳は思わずその笑みから逃げるように顔を翔夜の胸に埋めて、くすぐったそうにもぞもぞと身体を小さく動かしている。その耳は紅葉もかくやと言うほどに赤く染まっている。

（あ、あんな顔して笑うの、初めて見たわ……）

「で、でも、自惚れる訳じゃないけど……私が惚れるような男なのよ？　絶対これから貴方の事が好きだって言う女性は沢山出てくると思うわ」

「そんなもんかねぇ？」

「そんなもんよ」

「だから心配だと？」

「そ、そうよ、私が振り向かせるのにこんなに苦労してるのに、ある日ふらっと誰かに靡かれでもしたら……絶対に諦めきれないわ」

「まぁ、そんな心配は無用だと思うけどな、基本的に縛られるの嫌いだしな」

心配ないと、行動でも示すかのように、永琳の細くしなやかな銀色の髪を撫で付けていく、するすると絡まる事無く抜けていく柔らかな触り心地の髪を何度も何度も撫で付けていく。

その感覚に安心した途端、段々と眠気を覚えてきたのか、永琳の反応が鈍くなっていく。

「さぁ、もう寝ろ」

「そう、ね、お休み、翔夜」

「あぁ、お休み、永琳」

そうして永琳が完全に寝付いた事を確認した翔夜は、苦笑を浮かべ、誰も聞いていない静かな空間でポツリと呟く。

「愛してる、ねぇ？　俺がもっと複雑だったなら迷う事無く受け入れてるんだろうが、な」

そう、この遠成翔夜と言う男は複雑な男ではない、誰よりも単純な男なのだ。複雑だったのなら、縛られる事が嫌いでも折れる事が出来るだろう、だが、この男はそれすらも出来ないほど愚直で単純。だからこそ、縛られるのが嫌いな生き方なら、それを曲げる事が出来ない。そう言う意味での単純と言う事。自分の生き方を曲げられるほど複雑な男ではない。

それ故にそんな生き方に憧れる存在を惹き付け、だからこそそれに応える事が出来ない、だが、そんな自分を悔いた事はないし、後悔した事もない、例え誰かを傷つける事になっても、それを後悔しない、後悔してしまえば自分の生き方を否定する事に繋がる。翔夜は、永く生きてきたからこそ、その生き方に対しての付き合い方も覚悟もある。誰かを傷つけ、糾弾されるなら、黙ってそれを受け入れよう。自分に付き合いきれずに離れていくならば、それも黙って見届ける。全てをひっくるめて、自分が自分である為の覚悟を、翔夜はしていた。

「ままならねぇもんだな……」

そう言って苦笑する翔夜は、しかして気がついていない、自分の生き方を貫く為に全てを受け入れる覚悟がある、そんな翔夜の生き方を感覚的に察している永琳は、だからこそ愚直なまでに翔夜と言う男を愛しているという事実。永琳は翔夜と言う男の容姿でも強さでもなく、自由を愛しているからこそ、本当に気がつかない内に誰かを包み込んでいるような大きさに惚れていると言う事実に、翔夜は気がついていない。

意識を底に深く落す直前に、翔夜が見たのは、これ以上無いほどに安心した顔で眠る永琳の寝顔だった。

ご　悪い男とその理由（後書き）

何度も言いますが、作者は永琳好きですよ？
何か、いい感じで話が纏まらない、こう、さくっと読めそうな短さで収めたいのですが……。
さて、まぁ、次ですな、次で永琳には月へ行ってもらいます。それから先の出番はもう少し先ですね、外伝とか番外編とか書いても良いけど……どうですかね？
そもそも作者にそんな余力があるのか？と言う疑問がありますが……。
要望と余力があれば、番外編とかＩＦとか書いてみたいなとも思いますが……その前にちゃんと更新しろ、って事ですね、わかります。

ろく　天才と人間、それは規格外です。

近未来的な建物の多く並ぶこの都市の中で、今一番注目を集めている場所は？　と聞かれると、間違いなく住人の全員が声を揃えてこう言う。月面移住計画の為に建造されたロケットの発射台とそのロケット、そう答える。それもそのはず、月面移住計画が本格的に始動して以来、約３０年、ようやく移動の為の手段と月へ降り立った後のスケジュールを遂行する為の準備が整い、ロケットの発射はいよいよ明日と言う所まで来ている。この計画では、都市の住民全てを月へ移住させる為の計画ではあるが、そのロケット発射の工程は、一日で終了する。つまり、一日でこの都市に住む住人全てがこの地上から居なくなると言う事。穢れが蔓延するこの地上から飛び立ち、穢れのない月の世界へと旅立つ、住人全てがその事に歓喜し、期待している。

そんな、月面移住計画発動に周囲が沸いている中、翔夜と永琳は何年かぶりに、永琳の家へと戻ってきていた。計画の為の最終チェックっを終えて、発動はいよいよ明日、明日の終わりには、永琳も月の住人となり、翔夜は引き続き地上の住民として暮らしていく事になる。今日が永琳と翔夜が同じ地に居る最後の日となる。

が、その最後の日に、永琳邸へ二人が帰ってきたのは深夜も回ろうかと言う時刻だった。その事に、永琳は一緒に暮らし始めてから数えるほどしか入った事のない翔夜の部屋で憤慨していた。

「なんなの！？　発進の進め方だとか、現場指揮は誰がとか、何でそんなつまらない事で会議を長引かせたのか、理解できないわ！」

「良かったじゃないか、何年か前に意見してくれと言っていた望みが叶ったな」

「それ皮肉！？　皮肉なの！？　こんな崖っぷちぎりぎりまで来て翔夜との時間を削られた私に対する皮肉なの！？」

「さぁ？　お前がそう思うならそうだろうよ」
「こんな時にまで飄々として……明日でこの生活も終わりなのよ？　何か無いの？」
「そうだな……」

何か無いかと言う永琳からの問い掛けに、ベッドへ腰掛けたまま、腕を組み、右手で顎を撫でる、翔夜が思考へ入る為のスタイル。そんな翔夜の横に腰掛け、いつもの様な会話を交わしつつも、その姿を焼き付けるかのように、永琳は瞳を細め、翔夜をじっと見る。

「ま、特に無いな」
「無いの！？　ほら、最後だから私を抱いてやる、とか……」
「寝言は寝てから言え」
「そんな……夢の中でまで抱いてやるだなんて……何て情熱的な……」
「最近、ただで転ばなくなってきたな……」
「当然よ、何年貴方と居ると思ってるの？」
「はぁん？　１００年位か？」
「正確には１０７年よ」

永琳の言葉を受け、思い出すように、長いな……と呟き、翔夜は苦笑を漏らす。そのまま、永琳にあてがわれた自らの部屋に視線を駆け巡らせる。元々翔夜の部屋は簡素なもので、ある物といえば、大量にある本ぐらいで、後は寝床だけ、無論照明はあるが、特別目を引く様な物でもない。

部屋の窓から覗く都市は、人口の光が多く集中している場所から離れた所にあるためか、時間に相応しく明かりがついている建物自体が少なく、静かな夜が広がっている。

部屋の中へ視線をめぐらし、窓から覗く都市へ視線を巡らせ、最後には永琳へ翔夜は視線を固定し、最後の夜を迎える。

「さて、寝るか」
「え？　ウソ？　本当に何も無いの？」
「おぉ、何も無い、ぐだぐだ言ってないで寝るぞ」
「ちょ、ちょっと！？　この、離しなさいって！　このまま捕まえられたら本当に何も無いまま寝ちゃうじゃない！　この不能！」
「失礼な、ま、何でもいいから寝るぞー」
「ちょ！？　待って、本当にこれで終わり？　最後の夜なのに！？　もっと何かあってしかるべきでしょ！？」

八意邸にて響き渡る家主の女性の悲痛な叫びが木霊するが、結局は翔夜の腕の中へと捕らわれ、抵抗したいが、抵抗する事を自分の精神が許さないままに、翔夜と永琳の最後の夜はあっさりと過ぎ去っていく。

翌朝、計画発動に何ら支障のない天候に恵まれ、翔夜と永琳は普通に起床し、互いに服を着替え顔を洗い、身だしなみを調え、いつもと何ら変わり無いように、永琳が食事を作り、互いに食卓へ着き、朝食を食べる。爽やかな朝だが、計画発動はもう後、数時間後。そこまで差し迫っても、翔夜は勿論、永琳までもが昨日の騒ぎようは何だったのかと思えるほどに普通に振舞っている。
と、いつもの朝食風景に永琳が口を開く。

「股が痛くないわ……私が寝てる間に抱いてくれてるとばっかり……」
「爽やかな朝が台無しだな」

爽やかな朝食風景の中から、真顔で永琳の口から飛び出した発言

に思わず突っ込みを入れる翔夜。朝食の並べられたテーブルに向かい合って座る翔夜と永琳だが、翔夜の目の前に座る永琳の表情は、本当に何故なのか分からない、と言った表情で首を傾げている。

そんな様子の永琳に、朝食を口に運ぶ動きは止めぬままに、呆れたような表情の翔夜。

「初めてが寝てる間にとか、どんな高度プレイだよ」

「私はそれでも構わないわ、相手が貴方であるなら」

初心な少女の様に、可憐に頬を染める永琳の姿は、普段外で見せるクールな態度とギャップを感じさせ、3割増しで可愛らしく映るが、その口から発せられた発言はとても初心な少女とは似ても似つかない。

何でこうなったんだか……と呆れつつ、翔夜はため息を零す。

「焦らしすぎるとこうなるの、少なくとも私は」

「言う割に、いざ押されると弱いな」

「そ、それは……私の、お、思い人だもの、私が夢中になって追いかけてるのに気まぐれで振り向かれて受け止められたら……嬉しいけど、恥ずかしいわ……」

先程、朝食風景をぶち壊した人物とは思えないほどに、今度は初心な発言。朝食を口に運ぶ量は少なくなり、身体を縮こまらせ、恥ずかしそうに顔を赤くしているくせに、視線はちらちらと翔夜へ送られている。

そんな少女の様な永琳を、翔夜は面白そうに、にやにやと笑いながらからかいつつ、並べられた最後の一品を口に運び、朝食を終わらせる。

身体を小さくし、顔を赤くしながらもそもそと朝食を口にする永琳を、目を細め、いつもとは少し違う穏やかな目で見つめる翔夜に

照れながらも嬉しそうに笑みを浮かべ、穏やかな時間が進む。
と、何かを思い出したのか、永琳は声を上げる。

「そうだわ、翔夜」
「はぁん？　何だ？」
「今日私達が行った後、地殻変動が起こるって予測が出てるんだけど……ホントに一緒に行かない？」

食事の手を止め、心配そうに翔夜を見つめる永琳に、いつもの様に、にやりと笑う翔夜の雰囲気は変わりなく限り無い余裕が見て取れる。

「俺がそんな事で意見を変えるとでも？」
「でしょうね、これで意見を翻す小物なら私が惚れるべくも無い、ままならないわね……」

身動ぎ一つせず、ただあるがままを受け入れるような余裕で、悠然と笑む翔夜に、自らの抱える矛盾対してため息を吐く永琳。
こうして、計画発動まで数時間を切った永琳と翔夜の朝は、永琳が己の難儀な理想の男性像に頭を悩ませ、永琳から与えられたこれから起こる災害へ楽しそうに思いを馳せる翔夜と言う形で幕を閉じる。

月面移住計画の中核である宇宙航行艦発射台（ロケット）の中央管制室、そこに翔夜と永琳の姿はあった。都市の住民を乗せ、順次発射を指揮する永琳の姿を見続けて数時間。
最初の発射は都市の高官達を乗せ、数時間前に発射した。次は住民達、永琳は最後の艦に乗る予定だ、故にギリギリまでここで

指揮を執る事が出来る。永琳の飛ばす指示に従って、中央管制室の職員達が慌しく動き回る。

「なるほどな」

中央管制室内の情景を、何をするでもなく翔夜は眺める。

今やこの都市一二を争うほどの有名人である永琳は発射シークエンスの指揮、その永琳と同じレベルで有名である翔夜の姿も管制室内にあるとして、最初は職員全員が緊張の渦に巻きこまれたが、順次発射していく艦を見送るたびにそんな事を考えている余裕はなくなったのか、結局忙しそうに動き回る事で事態は収束した。

「地殻変動までの予測時間は？」

「後2時間といった所です」

「そう、次で最後だから、問題ないわね、ではそこまでで手を止めて、ここに居る職員は先に艦へ乗り込みなさい」

静かにそう指示する永琳の言葉に従い、管制室の職員達はその場で手を止め。必要な書類や決算書を全員が小脇に抱え込み、管制室から退出、そのまま全員艦へと向かい、後には永琳と翔夜だけが残る事となった。

管制室中央の椅子に座っていた永琳は腰を上げ、房の大きい一本の三つ編みにされた銀色の髪をゆらゆらと揺らしながら翔夜の正面へと静かに歩み寄り、腕を翔夜の首へと伸ばす、その瞬間、翔夜はぴくりと動くが、永琳は構わず翔夜の首の後ろへ自分の腕を回し、翔夜の肩口に顔を埋めるようにして翔夜へと抱きつく。そのまま翔夜の耳元へ唇を寄せ、囁くように言葉を紡ぐ。

「今避けようとしたわね？」

「最後まで締まらねぇな、おい」
「貴方の所為でしょ」

苦笑と共に永琳へ話し掛ける翔夜に、永琳はくすくすと笑いを漏らしながら、可笑しそうに翔夜の所為だと囁く、銀色の髪を持った美女が、仕方ないと苦笑する黒髪の男を抱きしめ、その男もそっと女性の腰に腕を添えて引き寄せるその映像だけ見れば、とても素晴らしい絵なのだが、二人の会話には全く締りが無く、色々な意味で台無しである。

抱き合った状態で、互いの耳元で互いに囁きあうように最後の会話は重ねられる。

「覚えた？」
「俺を誰だと思ってやがる」
「そうね、そうだったわね」
「扱い方を覚えられるなら知識は必要ねぇ」
「そんな事が言えるの、多分貴方だけよ？」

自信満々に永琳へ向かって囁く翔夜の言葉に、何が可笑しかったのか、やはりくすくすと笑いながら翔夜へ答える。抱擁しあった状態で重ねられるいつもと同じような会話。

最後だからといって、特別な言葉を囁いてくれるような男でない事を永琳は理解しているし、永琳はそれが分かっているであろう事も翔夜は理解している。

むしろ、最後だからこそ、いつも通りの言葉を飄々と重ねる翔夜だからこそ、永琳は遠成翔夜という男を愛している。最後だからと変わった事をする事は誰だって思いつく、だが、それをせず、いつもの様に会話をして、いつもの様に笑い、そしていつもと変わらない様な雰囲気で自分を知らない間に包み込む翔夜が、永琳はやはり好きなのだ。

そうしていつもと同じ様な会話を幾つか重ね、満足したように抱擁を解く。

「それじゃ、行くわ」
「あぁ」
「つれない返事ね？」
「何だ？　何か問題あるか？」

そんないつもと同じ不敵に、にやりと笑う翔夜に、少女の様な可憐な笑みで、永琳は嬉しそうに笑う。

「いいえ、大満足よ、じゃあね？　私の愛しい人」
「へいへい、精々達者でな」
「もう、最後まで本当につれない……酷い男（ひと）」

少し頬を膨らませながらも、嬉しそうに永琳は管制室の出入り口の扉から姿を消す。そして、後に残ったのは翔夜のみ、永琳が管制室から出て行き、艦に乗り込むのをモニターで確認した翔夜は、徐に管制室にある制御デスクに座り、それを操作する。

「はぁん？　エネルギーは燃料じゃねぇのか、ならそっちの制御はオートモードに任せるとして……」

そう呟きながら、一つのモニターに表示される大量の情報を捌きつつ、一つのコマンドを実行。管制室の制御を翔夜の操る制御デスクを集約、成功。高速で流れる文字列を目で追いつつ、管制室制御システムを集約させる事に成功した事に、一つ満足そうに頷き、作業の続きの為、流れるようなモニターの処理を終えていく。

月への到達予想時間、どうせ到達する事には変わりない、処理は後回し。

到達に必要な推進力とそれによって掛かる乗組員への負荷、必要な推進力はオートモードで現在処理中、負荷は重力制御装置へ処理を回す。

月への進路軌道計算、この処理は翔夜が行う、高速でタイプされながら計算のコマンドが流れ、算出。問題なく軌道算出終了。

「面倒だが、仕方ねぇな」

そう呟きながら、管制室の職員全員でやっていた処理を淡々と一人で終えていく翔夜。永琳が覚えたかと問いかけていたのはまさにこれ、艦発射までの制御と処理の流れを覚えたかどうかと言うことである。その結果は、問題なく発射準備の整いつつある艦を見れば、結果は一目瞭然。

無論その頃、永琳と管制室の職員が乗る艦内では、自分達が居らずとも発射準備の整っていく艦に乗り、沸き上がるグループも居れば、落ち込んでいくグループも居り、はたまた翔夜と言う人物に対しますます疑問を膨らませていくグループも居り、様々な反応を示し、本人が居ない所でも話題になる遠成翔夜と言う男に、少し気分が良さそうに笑みを浮かべる永琳が居た。

そして、発射準備が整い発射の直前、口々に翔夜への賞賛の言葉を永琳へ送る職員に向かって、永琳は悠然と微笑む。

「私の思い人は凄いでしょう?」

そう誇らしげに、嬉しそうに、微笑みながら放った永琳の言葉と共に、彼女を乗せた最後の宇宙航行艦は発射した。

無事発射した最後の艦をモニターで見ながら、制御デスクの椅子に四肢を弛緩させた様にだらけて身体を預ける翔夜。その顔は艦を一人で発射させた男とは思えないほどに、やる気の無い表情だった。

「はぁあ、面倒臭い、もう二度とやんねーぞ、こんな事……」

そう呟き、翔夜はモニターの端に表示されている時刻を確認。永琳がオペーレーターに聞いた地殻変動の起こる予想時刻まで残り5分を切っていた。

それを見て、翔夜は、今までのやる気の無い表情は何だったのかと思えるほど、楽しそうな笑みを浮かべ、制御デスクから立ち上がる。そして、いつもの不敵な笑みを浮かべる。

「自然現象如きで俺が死ぬ？　ありえねぇな、元吸血鬼の魔法舐めんなよ？」

そうしてぼそりと呟いた瞬間、翔夜の身体は凶悪なまでに圧縮され、視界すら遮る程の空気の壁――竜巻に包まれ、管制制御室に破壊を撒き散らしながら上昇、金属で出来た制御デスクやモニター、その他諸々の機械は、翔夜の纏う風に触れた瞬間、見るも無残な、原型すら分からない状態までに引き裂かれ、捻じ切られ、そして最後には吹き飛び、更に破壊を広げる。

制御室の屋根を引き裂きながら外へでた翔夜が見たものは、地殻変動が起こる前の穏やかな大地、一つの大陸として存在しているその地が分かれる瞬間を、翔夜は自身の目で見られる事に楽しみを覚えていた。

風を纏い、空中で翔夜が制止してからきっかり4分、変化はまず山と呼ばれる大陸の起伏から起こった。大地が裂けるのに応じて、地の底にあった赤く全てを燃やし尽くすマグマが噴火、地上に誕生していた生命を残らず燃やし尽くしながら、大地の分割は広がる。

空へ浮かぶ翔夜の目に入る最大規模の地殻変動、変貌していく大地に、感心したような声を上げる。

「へぇ、これは凄いな……」

噴火したマグマがうねり、妖怪や他の生命を飲み込んでいく。妖怪は腐っても妖怪だ、マグマに包まれたぐらいでは死にもしないだろう。

次に起こったのは、翔夜の周り、風を纏い浮かんでいる翔夜の身体が少し揺れる。それを感じ、納得したように一つ頷く。

「あぁ……気圧の変化か、急に地表の温度が上がれば……分かりきった事だな」

凍てつくほどの寒気を纏った気圧の変化が起こり、地表を覆い隠すようにして広がる雲によって、世界は氷が支配する時代へと姿を変えていく。

無論、そんな冷気を伴った暴風の中、翔夜は何の変化もなしに浮かび上がっている。爽やかなそよ風が揺らす様に揺れる翔夜の姿は何の変化も無くそこにあった。

「魔法の真骨頂は自然を操る事にあらず、自然を凌駕する神秘を操る事にありってな」

今まで、翔夜が使ってきた術と言うのは、魔力や霊力を使い、自然に干渉して、自然現象を引き起こす。と言う術ばかりだった。だが、元吸血鬼であった彼の魔法の本質は違う。自身の魔力を変質させ、自然を操るのではなく、自らが意のままに操る事の出来る自然を局地的に作り出すというのが、翔夜の本当の魔法。つまり、翔夜が今纏っている風は、自然の風でありながら自然の風ではない。翔

夜が作り出した風。
その作り出した風とは、温度の維持を伴った風の結界、と言う所。つまり翔夜が使う真の魔法とは、属性魔法の事である。霊力に関しては、持ってから検証をした事が無いので、何が出来るのか翔夜にも良く分かっていない。だが、元吸血鬼、それも、とある世界の支配者であった翔夜からすれば、この程度の魔法などお手の物、蓄積された経験と知識において、霊力よりも魔力の方が一日の長があるため、こう言う時には魔力を良く使う。
そうして、未だ冷気と熱気が支配する死の世界に翔夜は何の躊躇も無く降り立ち、これからの自分の未来へとその意識は旅立っていた。

翔夜が厚く黒い雲に覆われ、大地が赤く色付いている時、宇宙航行艦に乗る永琳は、翔夜が残っている地上を、艦の中から見つめていた。
そして目を細め、翔夜へと思いを馳せる。

「大丈夫かしら……翔夜……あぁ言ったけど、まさか、死……」

そこまで言って、愁い帯びつつ心配そうだった表情が一転、ありえない、何言ってるんだか、と言うような感情がありありと分かる表情、自分の発言に呆れさえ浮かんでくるほどのあっけらかんとした表情で、先程発した自分の発言を唾でも吐き掛けるような勢いで馬鹿にした声で言葉が出てくる。

「ハッ……あの程度で翔夜が死ぬ？　それはそう、とても幸せな思考ね？」

彼女自身が発した後ろ向きな言葉を、自分自身でありえないと鼻で笑う永琳。そう言い切った表情は、強がっているわけでもなく、ただ純然たる事実だと思わせる余裕があった。そして、もしあれで翔夜が死ぬと思っているのはとても幸せな思考だと言い切る。あの程度で翔夜が死ぬと考える頭なら毎日がきっと幸せだろう、永琳は純粋にそう思う。

つまり、あれで翔夜が死ぬと思える思考は、彼女にとって、赤ちゃんはコウノトリが運んでくるのよ？　と教えられて、それを信じる子供と同じぐらいに幸せな思考だと言う事だ。

そして彼女はそこまで幼稚な思考でもなければ、翔夜と言う人物の規格外さを知らない訳でもなかった。むしろ、常日頃翔夜と一緒に居た永琳にとって、人工的に地震を治める事と、翔夜を倒す事、どちらが簡単かと問われれば、考える暇も無く、地震を治める事の方が万倍簡単だと言ってのける自信がある。

つまり、翔夜を信じているなどと不確定な事実ではなく、永琳は、あの程度で翔夜が死なない事を知っているのだ。

「またいつか会いましょう？　翔夜、その時こそ必ず……」

そう言って、地上の様子が見える艦のひっそりとしたスペースで、月人の天才・八意永琳は何やら妄想しているのか、頬を赤く色付かせながら目を閉じ、肢体を艶かしくくねらせていた。

こうして、月人の天才と後に幻想郷の御意見番と呼ばれる便利屋になる人物、二人の出会いと生活はここで一旦幕を閉じ、この二人が再会するのは、まだまだ先の話である。

ろく　天才と人間、それは規格外です。（後書き）

何だか、知らない間に永琳がエロ可愛い感じの人物になってしまった……好き嫌いはあるでしょうが、一つお許しを。
さて、永琳が良く分からない感じになってしまいましたが、何とか無事に月へ旅立ちました。
次が悩みます、幾つか妖怪と知り合う話を挟もうか、それとも一気に神様の話まで飛ぶか……。
まぁ、その辺りは直ぐに決めます。
次はー、ＩＳになるかこっちになるか、悩み所です。
ＩＳの方の話が浮かびそうで浮かばなさそうで、微妙な感じなので。
浮かんだらＩＳ、結局浮かばなかったらこっち書きます。
ではでは、これからもよろしくー！

なな　神と人と人間っぽい何か

大地を覆う氷が解け、気候が安定し、晴間が顔を覗かせるようになったのはもうどれくらい前の事だろうか、大地が氷に覆われる前から存在し続ける一人の男が、氷の解けた大地を悠然と歩みながらそんな事を思う。

相変わらず黒い衣装に身を包むその男は、遠成翔夜と言う名の男だった。彼は今に至るまでこの世界を見続けていた。氷が支配する時代が終わりを告げ、形の変わった大地には、徐々に生命が顔を出し、生き残った種も居れば絶滅した種も居る。その中で、今の翔夜と同じ種、つまり人間が誕生したのは、この世界と言う尺度から見ればつい最近の事なのかもしれないが、それでも優に数百年は前の話だ。

誕生した人類は、翔夜が遥か昔に暮らしていたある文明程の急激な進歩は無いものの、この世界の時間の流れとしては、今居る人類の歩みこそが正しい歴史としての進歩なのだろう。

今居る人類が身に纏う服の形状に近い黒の着流しを纏っている事からして、現在の文明は、人が集落を作るほどには成長したという事、それと同時に、翔夜は、ある存在も同時に生まれた事を感じていた。

「神、か……興味深いな」

そう、ある存在とは、翔夜の言う、神。妖怪や魔、ある意味ではそれと同じ様な幻想の一つ。今現在の時代に存在する人々の願いが形を成した結果の存在。

世界が落ち着いた時から、霊力の扱いを検証した翔夜は、その過程として、霊力で存在を感じるという事を日課としてやっており、それに引っ掛かったのが神と言う存在。人が敬い信仰し誕生した神

の存在は大きく、探知するには造作も無い事だった。

そして今現在は気候が安定し、蒼穹に澄み渡った空を見上げながら、翔夜は思う。

「会いに行ってみるか……」

そう言って、にやりと笑う翔夜の笑みは、太古の昔から寸分たりとも変わっていなかった。

ひゅるりと風が吹き、風が集まってくるのを感じた時、そこに存在していたはずの翔夜は忽然と姿を消し、残ったのは何処までも続く空と大地だけだった。

神と言う存在は、人が災厄を避ける為に、災厄を避ける程の力のある何かに頼りたいと思った事が始まり。その願いを聞き届け、願いを叶える。その為に生まれたのが神と言う存在。人の願いから生まれた神は、願いを叶える為に生まれただけあって、生まれた瞬間から大きな力を持っている。

だが、一言で神といっても色々な神がいる。翔夜が空を飛び、向かっている神はどの様な神なのか、想像するだけで興味がそそられると言う様に、楽しそうな笑いは隠せていない。髪と服を靡かせながら空を飛び、向かった先には一つの集落。

その集落には、一つ、一際大きな建物が建っている事を翔夜は認め、急停止、しばらく上空からその集落を見つめ、霊力を通して見た集落には、確かに神の存在が確認できる。その結果に、翔夜は満足そうに一つ頷き、集落の近くへと降り立っていく。

「へぇ……人の生活ってのもそれなりに発展してるもんだな」

そう感心しながら、集落へと入り込み、そこで暮らす住人達を観察していく。男、女、子供、あらゆる人間が存在し、その全てがきちんと服を着ている。

翔夜の今身に纏っている着流しも、似ているというだけで、住民達の着ている服とは明らかに質が違った。翔夜の着流しはどちらかと言うと簡素なつくりだが、それでも住人達よりは細やかな作りをしており、住人達から注目を集めていたが、特に気にした風は無く、上空からみた一番大きな建物へ向かって迷い無く進み、何食わぬ顔でその敷地内へ堂々と入っていく。

翔夜が入っていった建物は、荘厳としている建物、日本にある神社の前身となるような建物と言えばいいのか、つまりは、神社と似たような作りをしていた。

「ふぅん？　一応参拝しておくか」

生憎と翔夜は賽銭となるものを持っていない、それに賽銭箱のような物も見当たらない、次いで翔夜は辺りを見渡すが、手や口を漱ぐ手水舎も見当たらない。神道が確立する前の、本当に神を奉る為の建物として、ある種完成されていると言っても良かった。ならばと、翔夜は取り合えず拝礼だけを行う事にする。

鳥居のような物も見当たらなかった為、略に略して二拍手一拝、取り合えず参拝はした。黒一色で服装を固め、やる気のなさそうな色の瞳をした人物が参拝している光景など、神を奉る場所には似つかわしくない光景である。

だが、神社としてあるべき物は無いが、巫女と言う存在は居るらしく、この神社の巫女らしき女性と目が合い、軽く頭を下げておく、すると女性の方も静かな笑顔を浮かべ、翔夜へ頭を下げてくる。

と、そこで、翔夜の霊力の網に先程から引っ掛かっている膨大な神力の持ち主が動く気配が感じられる。翔夜が感じる所、建物の奥

から真っ直ぐ翔夜の方へ向かってくる。
そうして現れた神力の持ち主は、翔夜の印象としては、小さいという印象がまず一番。次いで翔夜の目を引いたのは、何故かつぶらな瞳を持った奇妙な帽子。現れた小さな神は、感情を上手く隠した無表情で翔夜を見据える。

「人間、この集落の者ではないな？」
「あぁ、つい今しがた入らせてもらった」

翔夜の口調に感じる所があったのか、肩眉をピクリと動かすが、知った事ではないというように、翔夜は神を前にして、悠然と不敵な笑みを浮かべる。

「まぁ、良いだろう……何用だ？」

声音も幼いが、その言葉には神と言う事がはっきりと感じられる威厳が確かに存在した。はっきりと目の前に確かな幻想が存在している事を感じ、翔夜は更に嬉しそうに笑みを深める。

「特に重要な意味は無い、ただ単に、最近生まれた神ってのを見たくてな？　神のお嬢ちゃん？」

目の前の少女が神として発する威圧を受け流し、逆に威圧するように翔夜は悠然とそこに立ちながら、にやりと笑う。ただの人間の纏う雰囲気ではない翔夜に、神の少女は眉根を寄せる。しばらく睨み合いが続くが、最後に、負けた様に折れたのは、特徴的な帽子を被った神の少女の方だった。ため息を一つつきながら、自らの家の中へ招くように促す。

「良いだろう、私を一目見たかったというなら、茶でも出してやる、

着いて来るがいい」

そう言って身を翻し、建物の奥へ進む少女の後をついていく翔夜。その途中、ずっと翔夜を見ていた巫女とまた目が合い、何なのか、と疑問を浮かべながらも小さく頭を下げる。

「失礼するぞ」
「はい、どうぞ」

簡潔に巫女に挨拶をした翔夜に対し、巫女の方もふわりと笑みを浮かべ、翔夜を歓迎する。翔夜が建物の奥に消える寸前に見た巫女の頬は少し赤く上気していたが、無論、そんな事は翔夜の知った事ではない。

神の少女によって案内された部屋は、無論の事木で作られた部屋、だが、その部屋は他の部屋とは違い、神力が特に濃く満たされており、ここが少女の自室だと理解できる。

そして現在、翔夜と神の少女は、互いに向かい合い、茶を啜っていたが、風通しのいい木製のこの部屋へ入ってから五分もしない内に、我慢できなくなった様に、翔夜よりも家主である少女が格好を崩す。正座だった足を崩し、足を投げ出すその姿は、姿相応の少女として映る。

「あー、つっかれたぁ、あの話し方疲れるんだよねー」
「それが普段のお前か」
「そうだよー、それで？　君は何ていう名前なの？」

目の前の少女が格好を崩したので、それに習う形で、翔夜も足を

崩し胡坐へと変更。神としての喋り方よりも違和感がなくなり、投げ出した足をぷらぷらと左右に揺らしているその様子は、神と言うよりもまごう事なきまでに、ただの少女に見える。

ただの少女に見える神の少女からの問い掛けに、翔夜は何処からともなくタバコを取り出し、一本口に咥えながら、軽く答える。

「あぁ、自己紹介ね、俺は遠成翔夜、少し長生きなただの人間だ」

「神様の前でよくそんな嘘つけるよねー、もうそれでただの人間じゃないよね」

そう言って朗らかに笑う少女はまさしく姿相応で可愛らしく映る、そんな少女に合わせて笑みを浮かべる翔夜は、ピクリ、と何かを感じる。大きな力、どの様な力かは理解しかねるが、確実にそれは翔夜へ害を及ぼす力。それを察知した翔夜は、霊力を起こし、向かってきた力を軽く払い退ける。

と同時に、指先に小さな灯を灯し、それでもってタバコに火をつけ、紫煙を吸い込み、吐き出す。

そうして向けられた力を、火をつけるついでの様に、無造作な霊力で振り払った翔夜に、目の前の少女は大きく目を見開く。少女の驚嘆している様子に、にやりと笑い、タバコを一口、吸い込んだ紫煙を吐き出し、翔夜は満足そうに一つ頷く。

「何をして試したのかは知らんが、その程度じゃあな？」

「ミシャグジ様の力をただの人間が退けるなんて聞いた事無いよ、しかもすっごい適当だし」

「ほーん、何だこれ？　呪い……違うか、それに近いとは思うが……」

驚きに目を丸くする少女を軽くスルーし、翔夜は先程自分に向けられた力の欠片を霊力で回収し、その力の意味を魔力で解析してい

るが、どうも良い言葉が思い浮かばないらしく、しきりに首を傾げている。
やる気なさげに力の解析をしている翔夜の目に、少女の頭に乗っているつぶらな瞳をした帽子の目がぱちくりと瞬いた事を見て、興味深そうに帽子へ視線を注ぐ。

「何だ？　その頭の帽子らしからぬ物は……」
「あーうー、何でもないよ、ただの帽子」

翔夜の疑問の声に、特に気にした様子も無く、ただの帽子と言い切り、帽子の裾を、ぎゅと掴み、引き下げるようにして深く帽子を被る。少しの間頭を捻っていたが、実際の話、どうでもいいと思ったのか、まぁ、いいか、と翔夜は特に気にした様子も無く納得する。

「それより、さっきの力は祟りだよ」
「おー、そうそれだ、すっきりした」

そうか、祟りだ、そう言いながら納得する翔夜の姿は、少女の目から見れば、新鮮に映った。ふらりとついさっきこの集落に表れ、神である少女の圧力を受け流し、あまつさえ神に向かって逆に圧力を掛ける人間など、少なくとも少女は知らなかった。
そして、現在、やる気のなさが感じられる瞳の色をした男が、どうしても少女を少し圧倒させた男と重ならなかった。どうしても少女の中で重ならない男は、タバコの灰を落す先から燃え散らせ、風通しの良い建物の隙間から、微妙に残った灰を風に乗せ外へ運び、処理しながら少女への問い掛けを口にする。
その瞳は相変わらずやる気が感じられない。

「んで？　そっちは何の神で、何て名前だ？」
「え？　あぁ、えっと祟り神として祭られてる、洩矢諏訪子だよ」

「ほーん、洩矢、ね、まぁよろしく頼むわ」

そう言ってやはり瞳と同じくやる気なさげに挨拶する翔夜は、少女――諏訪子の目には興味深く映った。神にも御する事の出来ない人間、神に膝を折らない人間、そんな人間を諏訪子は初めて見た。顔は、悪くは無い、ハッとするような美形ではないが、どちらかと言うと整って見えるであろうその顔は、目を合わせても緊張しすぎない適度な美形と捕らえれば好印象にも思える。

遠成翔夜と言う男を観察していた諏訪子は、この目の前の男に興味を持った。投げ出していた足をたたみ、身を乗り出すようにして、太ももの間に両手をつき、翔夜の方へ顔を近づけ、にこにこと諏訪子は笑みを浮かべる。

「ねぇ？　これから行くあてとかあるの？」
「あん？　いや、別にそう言うのはねぇが……」

妙に嬉しそうな表情を翔夜に近づけながら、翔夜の予定を聞いてくる諏訪子に、特に気にした素振りを見せずに茶を啜りながら特に予定はないと言う翔夜の言葉に、更に嬉しそうに諏訪子の表情はニッコリと笑顔を浮かべる。

「じゃあさ、ここにしばらく住まない？」

膝立ちの様な体勢になり、小さな身体についている小さな手を目一杯大きく広げ、この建物を示す為の行動だろうが、翔夜の目には、子供が誰かに大きい建物を表現する時のような動作に見えていた。

無論その事を口に出すほど翔夜は馬鹿ではなく、思った事を口に出さぬまま、茶を啜り、諏訪子の提案を了承する。と同時に、タバコを投げ捨て、灰も残らぬほどに燃え散らせる作業も同時に行っていた。

「別にいいぞ」
「ホント？　じゃあ、何処の部屋使ってくれてもいいから！　何ならここでも良いよ？」
「酷い話だな？」
「あーうー、それってどういう意味？」
「さてな？」

相も変わらず女性に対して礼節のなっていない翔夜の言葉に反応する諏訪子の声は低く威圧感があるが、そんな事は知った事じゃないとでも言わんばかりに、飄々と呆ける翔夜。
そんな翔夜に食って掛かる諏訪子、のらりくらりと呆けながら、隙あらば更に口撃を加える翔夜。今ここにこれから先の二人の力関係が出来上がったといっても過言ではない。

翔夜が諏訪子の家、と言うか屋敷のような建物で暮らすようになってから、数週間がたった。諏訪子の家は、神の住まう場所と言うこともあり、この時代における建築技術の粋が結集されている様で、悪くない快適さを誇っている。今は季節的には夏にあたるが、家の中にいる限り、風通しがいいのか、それほど暑いと思う事がなく、木製である事を考えれば、日当たりの良い場所に建てられたこの木製の建物は、昼の内に日の光を吸収し、温かい事が予想できる。
変わらず黒の着流しを身に纏い、諏訪子の屋敷の廊下をゆったりと歩きながら、観察している翔夜はそう考えつつ、屋敷の外へ足を向ける。
その途中、この屋敷で最初に出会った巫女が翔夜の前から静々と歩いてくる。巫女の方も翔夜に気がついたのか、心持ち嬉しそうな表情を浮かべ、翔夜へ近付き、話し掛けてくる。その動作は、女性

として洗練されたもので、物静かなと言えばいいのか、嫌味のない動作で近付き、人が落ち着かない距離までは入ってこない距離の取り方は、気遣いとしても完璧に見える。

「遠成様、お出かけですか？」

現在翔夜は、諏訪子の友人として、対外的には通っており、この巫女は、翔夜と諏訪子がつい数週間前に出会った事を知っているのだが、他の人に対してのボロを出さない為か、誰も居ない所でもこう振舞ってくる。

他の巫女が働いている中、この巫女は諏訪子を呼びに行く為だったのか、諏訪子の部屋へと続く静かな廊下で、嬉しそうに、だが、穏やかに、翔夜へ問いかけてくる。そんな巫女の声に、翔夜はいつもの調子である、やる気のない瞳を向けながら巫女に答える。

「あぁ、農作も終わっただろうからな、真昼間からおっぱじめてる奴が居ないかどうか見回りだ」

「まぁ、ふふっ……それはそれは、ですが、覗きはご遠慮くださいね？」

「あいよ、釘刺されちゃ仕方ねぇな」

口元を隠しながら、くすくすと笑う巫女は、長い髪を笑うたびに波打たせ、いつも優しげな色を浮かべる瞳は楽しそうな色を浮かべている。控えめに笑う巫女の姿は、有り体に言ってしまえば美しかった。

ちなみに、ここは将来的に日本と呼ばれる国である。その日本に住まう民族は、農耕民族と言うのはよく知られている事だ、そして農耕民族は、春の収穫が終わり、夏になるとやる事がなくなる。その中でする事といえば、この時代では子孫繁栄の為の情事と言うわ

けだ、翔夜の発言はつまりそう言う事であり、それを言っている事を理解した上で、冗談めかしつつ、翔夜に釘をさしてくる巫女は中々の兵だ。

勿論、巫女は翔夜がそんな事をしないと理解した上での冗談であるからこそ、笑っていられると言える。

「では、遠成様も民の皆さんに習ってはどうでしょう？　お相手は、私などどうでしょうか？」

翔夜の冗談に、控えめながら、乗っかってきた先程の雰囲気とは一転して、妙にしなを作った腰つきと、上気したような赤く艶のある表情。この時代の女性にしては珍しく、巫女服を押し上げる程に大きいふくらみに、そっと添えられた手。しなを作った腰に纏わりつく艶のある長い髪が、更に妖艶な雰囲気を感じさせる。巫女と言う神聖な職から完全に外れた雰囲気が、翔夜の目の前に居る美しき女性から発せられている。

そして、音もなく、すすっと翔夜に近付き、黒の着流しの裾へそっと手を伸ばし、その手が裾へ触れる瞬間に、巫女の手は目的の物を失う。あら？　と声を上げながら不思議そうな表情を浮かべる巫女に、翔夜は一歩身を引き、にやにやと笑って巫女を見返している。

「今の所、遠慮しておく、縛られるのは嫌いなんでな」
「では何時なら？」
「さてな？」

艶のある笑みはそのままに、翔夜へ問いかけてくる巫女に、受け流すような雰囲気で呆けてみせる翔夜。雰囲気に流される気配はなく、それを認めた巫女も、雰囲気を正し、元の清廉な巫女へと雰囲気を戻す。

この巫女は、翔夜がここで生活すると決まった時から、何故かこ

のような雰囲気に持って行きたがる節が多々見受けられる。何故か、と一瞬翔夜の頭に疑問が浮かぶが、瞬時にどうでもいい事と判断したように、その疑問は霧散する。

「んじゃまぁ、行ってくるわ、華苗（かなえ）」
「はい、いってらっしゃいませ、遠成様」

そう言って静かに、恭しく頭を下げて、翔夜を送り出す華苗と呼ばれた巫女の髪は、新緑を思わせる鮮やかな緑色だった。

諏訪子が自らの仕事をこなしている間、翔夜は集落を見て回るのが日課だ、春の作物は既に収穫され、その一部が集落中から諏訪子の元へと捧げられる。そうして収穫を終えた畑ばかりが翔夜の目に移り、この時代に既に蝉と言う虫は存在していたのか、うるさいまでの泣き声を撒き散らす。が翔夜は気にした風もなく、漠然と思う。

「これも風情ってやつか」

夏の風物詩としての泣き声を耳に留めながら、翔夜はゆったりと集落を闊歩する。収穫の終わった集落はひっそりとしており、外へ出ている人を見かけるのは稀だ、大体が家屋の中に引っ込み、翔夜の予想通りであったり、収穫した作物の整理に追われていたりするのだろう。

様々な人の暮らしを目に入れながら、ゆったりと時間の流れる集落の中を緩やかに歩む翔夜。暫く続くこんな生活も、飽きるまでは悪くないと、翔夜はいつものように、にやり、と笑みを浮かべ、空を見上げた。

そんなゆったりとした夏の昼下がりに、翔夜の耳に届く夏の風物詩ではない、情事の声と音。この時代の家屋は、防音等と便利な機能が木にあるわけもなく、情事の声と音は易々と家屋の壁を突き破ってくる。その声と音を耳に入れながら、辺りを見回し、にやにやと笑いを浮かべる。

「まぁ、仕方ねぇか、確かにやる事ねぇもんな？」

くつくつと笑いを漏らしながら、集落中を闊歩し、子孫繁栄の意識を羞恥心が凌駕する時代は大体いつごろなのかと考えつつ、可笑しそうに笑う翔夜の散歩は夕暮れ時まで続いた。

夕暮れの日を見てから、散歩を切り上げ、諏訪子の屋敷へ帰った翔夜を待っていたのは、既に用意された夕餉だった。いつも夕餉を取る部屋の扉を開けた翔夜の目に入ったのは、華苗が翔夜の茶碗にご飯を盛り、嬉しそうに翔夜へ笑いかけている様子だった。

既に諏訪子は食卓の席に着き、帰ってきた翔夜に対して文句を垂れていたが、華苗に諌められるその姿は、言う事を聞かない子供が母親に怒られている図と言われれば、何の疑いもなしに信じてしまいそうな光景だった。

そんな諏訪子の威厳の欠片もない姿を呆れながら、席に着き、華苗から茶碗を受け取る。

「いかがでしたか？　集落の様子は」

「んお？　まぁ、何時も通りだな、子孫繁栄ご苦労さんってな」

「そうですか、皆元気そうで何よりです」

そっと渡される茶碗を受け取りながら、華苗の問い掛けに、軽い

冗談を交えながら話す翔夜に、くすくすと笑いながら、受け流すように、されど、完全に受け流すわけでもない対応を取る華苗の姿はまさしく古き良き女、それを地で行っている。気立てが良く、料理上手、冗談も通じ、柔らかく全てを受け止めてくれそうなその雰囲気、おまけに美人と来た。これほどの人物が人気でないはずはなく、諏訪子に仕えている為、諏訪子の屋敷からあまり出る事がないにも拘らず、その人気は絶大。

そんな性格も良い、緑の髪が特徴の美人と、翔夜が仲の良さそうに話している様子に突っ込みを入れてくるのは、当然第三者、何故か諏訪子の屋敷である筈だが、第三者になってしまっている諏訪子から、二人へ突っ込みが入る。

「何か二人ってさ、ホントに夫婦みたいだよね？」

「そ、そんな……す、諏訪子様ったら……私と遠成様が、ふ、夫婦などと……」

ご飯を口に放り込み、にやにやと笑いながら突っ込みを入れる諏訪子の台詞に、華苗は、ぱっと頬を赤く染め。心持ち嬉しそうに、だが、そんな事は恐れ多いと言う様に言葉を発している。逆に、翔夜は呆れたような視線を諏訪子に送りながら、自らも華苗が作った夕餉に箸を伸ばす。

「そんな勘繰りをしてる暇があったら料理の一つでも作れるようになったらどうだ？　ん？」

「う、うるさいなぁ、私は神だからいいんだよ……」

尻すぼみではあるが、そんな事を言いながら、夕餉を口に運ぶ諏訪子に、翔夜は生ゴミでも見るような目を向ける。見るものに屈辱感と絶望感を与えるその視線は最早人に向けるべき視線ではない。

だが、何故か諏訪子は翔夜の生ゴミでも見るような視線を受けて、

頬を赤くし、心なしか身体を震わせている。

「神だからと言って、それに胡坐をかいてるお前はまるで役に立たない奴だな、この役立たずめ」

「あふぅ……んんっ……っはぁ、あーうー、そ、そんな事言われても負けないよ、神様だもん！」

「神をも恐れぬ発言を諏訪子様に会うたびに落としていく遠成様は、ある意味誰よりも凄い存在ですね」

華苗と見比べるように諏訪子を見て、完全に見下したような目で、尊厳を貶める発言を堂々と諏訪子に言い放つ翔夜の声音は、完全に諦めお前には期待していないと言うように冷たい。

数週間前に会ったばかりの翔夜にそんな発言と態度を取られた諏訪子は、何故かますます頬を赤く上気させ、目も蕩けた様に締りがなくなり、何故か息が上がったように浅く呼吸を繰り返す。

神だろうが何だろうが、役に立たない奴は結局役立たずだと、堂々と諏訪子に言い放つ翔夜に、華苗は呆れ半分、もう半分は何か良く分からない感情で支配されたような声音で、翔夜を賞賛しているのかそうでないのか良く分からない評価をポツリと呟く。

「料理も出来ない、掃除もしない、やる事と言ったら神事に関わる事だけ……本当に何でお前は神なんだろうな？」

「っふ……はぁ……そ、そう言う翔夜だって、何も……」

「俺が、何だって？　どうした？　言ってみろ」

「あふぅ……あーうー、何でもないです、ごめんなさい……」

更に諏訪子を貶めるような翔夜の言葉に、ますます吐息は荒くなり、何かを期待するように、翔夜へ反論しかけるが、発言の途中で翔夜に睨みを送られ、その瞬間に何やら妖しい吐息を吐き、何処か満足したように翔夜へ謝る。

そんな諏訪子に、翔夜は肩をすくめて、諏訪子の言おうとしていた翔夜への反論に対する諏訪子の勘違いを解きに掛かる。

「大体な、俺は華苗の手伝いをしてるぞ、今日はたまたまだ」

なぁ？　と翔夜は、先程より何処か不機嫌さを感じる華苗に問いかけると、華苗は確かに翔夜の言葉に頷く。その反応に諏訪子の瞳は見開かれ、信じられないものを見るような目で翔夜を見つめる。

「そんなに見るな、照れるだろ？」
「全然照れてる顔じゃないよね」
「きっと遠成様は諏訪子様のその言葉を引き出したかったのだと思います」
「まさにその通りだ、照れるな……」

そこで何故か本当に照れたように頬を赤らめて後頭部を手で掻く翔夜に、華苗は見惚れ、諏訪子は身を乗り出し、色々と芸の細かい翔夜へ我慢できず突っ込む。

「本当に照れたように顔を赤らめるな！　アンタどんだけ器用なんだよ！　て言うかそもそも照れる場所ないし！」
「酷い話だな？」
「何が！？」
「ふふっ、賑やかな食卓になりましたね」

人間と神の立場が逆転したような翔夜と諏訪子を見て、華苗は嬉しそうに、そして静かに、くすくすと笑いを漏らす。人と神と人間っぽい何かの夕食は賑やかを極め、数週間前までひっそりと静かだった集落が少し賑やかになった。それは多分、とても幸せな事だ、華苗はそう思う。

そして……。

（遠成様に出会えた事も、私にとっては幸せな事、ですね）

目の前で食い掛かり、良い様にあしらい、見下され、何故か興奮している様子の諏訪子と、神さえも悠然と見下し笑う翔夜を見て、華苗は楽しそうに笑う。

そして思う、こんな楽しい日々が続けばいいと、楽しそうに笑う諏訪子がいて、自分がいて、そして何より、飄々としていて掴み所のない不思議な彼が居る毎日が続いて欲しい。そして欲張るならば……。

（私のこの想いも、実れば……そう想うのは欲張りすぎでしょうか？）

穏やかな夏の夜に、一人の巫女が、生まれて初めて欲を抱き、後にも先にも巫女にとって唯一の願いは、とけて消えた。

なな　神と人と人間っぽい何か（後書き）

うーん、どうしてこうなったのか……主に諏訪子が。
諏訪子ファンの皆様には最早謝る以外に道はありません。
さて、オリキャラの華苗さんですが、勿論伏線です。この人がどう言う意味を持つのか分かってしまった人は心の内に止めて置いてください。作者の頭ではこれぐらいの伏線を張るので精一杯なのです。
さて、主人公ですが……相変わらずの酷い男です。これから先も更に酷い男っぷりに磨きが掛かってくると思うので、引き返すならばこの話ぐらいが見切りの付け所かもしれませんよ？
では、今回はこの辺で、次は一日常だと思います、何年後かの、それ終わったらもう神奈子との対戦に入る予定。
ちなみに主人公はこの対戦に参加せず、大戦とは名ばかりと言うような感じでさっくりと終わらせようと思っています。
ではでは～

はち　巫女の失恋話、好きな男は究極の自分勝手

人間らしくない人間が、洩矢諏訪子と言う小さな神の少女が治める国に現れてから、５年目の春になっていた。国に来た人間らしくない人間は、名を遠成翔夜と言い、現在は、諏訪子の治める国の諏訪子宅で５年前と変わらぬやる気のない色の瞳を浮かべながら朝餉の一品である筍を口に運んでいた。そんな翔夜の隣では、相変わらず、華苗が嬉しそうに翔夜のその姿を見ながら、自分の朝餉を食べる姿も、５年前から変わらぬ光景。

そしてそんな二人の向かいに座リ、二人と同じ様に朝餉を食べる神、諏訪子から、突如、今更とも言えるが、５年前から寸分違わぬ容姿の翔夜への疑問が、行儀悪く箸先を咥えたままの小さな口から投げ掛けられる。

「翔夜って、人間だよね？」

「何を当たり前の事を言ってやがんだ？　このケロ子は」

この５年の間に、神・諏訪子からケロ子へと翔夜の中でクラスチェンジを果たした諏訪子に、翔夜はやる気のない瞳はそのまま、呆れた表情を諏訪子へと投げかける。

その無造作な扱いに諏訪子は思わず身体を震わせるが、自分が感じている疑問が余程気になるのか、それを抑え、翔夜への疑問を続ける。

「同じ人間の華苗はこの５年で柔らかそうな胸が更におっきくなって男好きのするやらしい身体になったのに、翔夜は全然変わってないよね？　一体何歳なの？」

「す、諏訪子様……」

成長した胸の部分の指摘に恥らったのか、男好きのする身体と言う所に恥らったのかは判断しかねるが、諏訪子の指摘に、自らの身体を抱きしめるようにして身体を小さくする華苗。その際、きゅっと抱きしめるようにして腕が食い込むふくらみは、ふにゃりと音が聞こえてきそうなほどに柔らかく潰れ、ボリュームも5年前よりも2～3割り増し位に思える。完全に大人になった華苗の輪郭は、柔らかな雰囲気を感じる輪郭はそのままに、年を重ねるたびに落ち着いた雰囲気の増す目元が、更に彼女の美しさを引き立てるように成長させていた。

年々美しくなっていく華苗が諏訪子の指摘に恥らう姿は非常に可愛らしく美しいが、そんな華苗の隣に座り、朝餉をつつく翔夜は、チラリと華苗を一瞥しただけで、更に呆れた表情を浮かべ、諏訪子を見返す。

「5年も経った後で今更そんな事を聞いてくる奴はお前だけだと思うぞ……」

「あ、あーうー、い、いいじゃん！　今気になったんだもん」

呆れたようにため息を吐きつつ、朝餉を食べ終わり、手を合わせて華苗に軽く礼を言った翔夜は、食後のお茶を飲みつつ諏訪子に今更だと告げる。そんな翔夜に、若干慌て、誤魔化す様に諏訪子は声を張り上げる。

翔夜は正面に座る諏訪子へ視線を向けるが、すぐに考えるように視線は虚空へと漂う。数秒翔夜の視線が虚空を彷徨った後、まぁ、いいか、と考えるの面倒になったのか、いつものやる気のない雰囲気のまま、軽く事実を放り投げる。

「年齢ね……確実にケロ子よりは年上だな、世界の次に生まれたしな」

湯飲みに手を掛けつつ、軽く放り投げられた事実に、諏訪子と、翔夜の食器の片づけを終えた華苗が理解できていない様に言葉をなくし、しばし、翔夜の湯飲みを啜る音だけが空気を震わせ、華苗と諏訪子の耳に入っていく。

翔夜の言った言葉が完全に理解できた瞬間、諏訪子と華苗の目は大きく見開かれ、二人の口が意味の無い叫びを発するための形を作った瞬間に、翔夜は魔力を起こし、自身の耳の周りの空気を停滞させる。

「……！」

「……！」

諏訪子と華苗が驚いたように叫んでいる様子が見て取れる翔夜だが、音が入ってこないので、取り合えず湯飲みを啜り茶を堪能する。諏訪子と華苗が叫び終わったのを見て取り、魔力を霧散させると、翔夜の世界に音が戻ってくる。

音の戻ってきた世界で、諏訪子と華苗は、驚愕の後に疑問が浮かんでいるようで、二人とも興味深そうに翔夜へ視線を投げかけている。

「で、では、遠成様は見た目通りの年齢ではないという事ですか？」

何処か驚き以上に焦った様子の華苗の言葉に、翔夜は軽く頷く。

「あぁ、２０００から先は面倒になって数えてねぇからな、これからも寿命なんてものはないだろうな」

「そうですか……」

翔夜から告げられた言葉に、何処か落胆したような華苗。その落胆の原因を疑問に思うような翔夜ではなく、その原因は理解してい

るが、あえて追及しない様に、素知らぬ顔で茶を啜り上げる。
諏訪子もそんな華苗をそっとしておくように、そっかー、私より全然年上なんだ、と一人何故か納得している。

「俺から見りゃ、ケロ子なんざまだまだ小娘同然だ、身体も小娘だしな」
「あーうー、翔夜は一言多いよ！」

少し怒った様に声を上げながら、祟りの力を翔夜へ投げつけるが、あっさりと翔夜の霊力に祓われる。その光景に、悔しそうに声を上げる諏訪子だが、翔夜はにやにやと笑うばかり。

「年季が違うんだよ」

悔しがる諏訪子に、にやにやと笑いながらそう告げる翔夜の目に、開け放たれた扉の向こうにある庭にひらひらと舞う一枚の花びらが映る。小さな桜色の花びら。それをじっと見つめた後、突然思い出したかのように、少し落ち込んでいる華苗へ声を掛ける。

「華苗、酒と肴になるものを用意しろ」
「はい？」

翔夜からの突然言われた要求に、華苗は、何を言っているのか、と呆けたような表情をするが、そんな華苗の表情を見て、翔夜はにやりと笑うが、いつもより、少しばかり楽しそうな笑み。

「花見だ」

翔夜の突然の思い付きにより、仕事を無理矢理休みにさせられた諏訪子と華苗は、翔夜に言われた通り、酒と持ち運びが可能な肴を用意し、諏訪子が治める国の外にある山へ来ていた。無論、諏訪子が治めている国の外と言う事は当然、妖怪が居る。だが、今の所、一行の花見への進行工程は順調なもの、妖怪が襲い掛かってこないというわけではない。現に、今現在も妖怪が翔夜達に襲い掛かろうとしている所、だが、神である諏訪子はともかく普通の人間である華苗にもその姿は見えているはずなのだが、華苗に慌てた様子はない。その理由……。

「花見はいいんだが、こうも妖怪が多いと面倒だな」

面倒臭そうに諏訪子を背負いながらうんざりした声を翔夜が出した瞬間、襲いかかってきた妖怪は全て不可視の何かによって森の奥へ吹き飛ばされるようにして姿を消した。このような光景が森へ入った瞬間から何度も繰り返されている。華苗に慌てた様子がないのはその為である。

森へ入った当初は当然華苗も慌てた様子はあったが、このような光景が何度も目の前に広がり、その全てに打ち漏らしが無いとなれば、この段階で華苗に慌てる要素がないと思わせるには十分な理由だ。

そんなこんなで、華苗の目下の敵はこの歩きなれない山道と相成ったわけで、翔夜によって背負われ、上機嫌な諏訪子には特に悩みも心配もなく、翔夜の背中と景色を楽しむだけで、そんな諏訪子に華苗から厳しい視線を向けられているが、諏訪子が得にそれを気にした様子もなく、本人は翔夜の背中に頬をぐりぐりと擦り付けたり、擦り付ける部分が頬から額に変わったり、背中に顔を埋めて不自然なまでに大きく呼吸をしたりと、とにかく忙しそうだった。

「入った当初から不思議だったのですが、遠成様は先程からどうや

って妖怪達を追い返しているのですか？」

翔夜の背中にへばりつくようにして背負われている諏訪子を気にしても仕方がないと悟ったのか、諦めたように疑問だった事を翔夜へと問う。ちなみに酒も肴も華苗が持っているため、森に入る時少し怖がっていた華苗に、勘違いさせるような台詞を翔夜が使った為、諏訪子がここまで翔夜にべったりくっ付いていても機嫌は悪くはない。

山道の景色を目で楽しみながらも途中で襲ってくる妖怪が面倒だと思っている翔夜は、華苗から投げかけられた疑問に対し、特に何も考えていないような気軽さで答えを返す。

「大した事じゃねぇ、風で追い払っているだけだ」

「風？　それにしてはやけに威力が高いように思うのですが……」

背中ですーはぁ、と息をする諏訪子のおかげで背中がやけに湿っており、その不快さに、このまま落としてやろうかと考えつつも目の前に広がる新緑と色とりどりの花で自らの精神を落ち着けながら、簡単に華苗の疑問に答えるが、それによって新たに疑問が浮上したのか、腑に落ちない表情をしている。

「まぁ、説明していくと小難しいから端折るが、要は風を大量に集めて、その集めた風をぶちかましただけだ」

「何となく分かりましたが、簡単に言いますね……」

華苗の言葉は実際最もなもので、自然の物を操るという事は、かなりの技量を伴う事で、決して翔夜のような気軽さで使えるレベルの術ではない、霊術は自然現象を操る事は出来ないが、代わりにあるのは人間の生命力を強くし魔を弱める力、言うなれば退魔の性質と身体強化が可能と言う事。つまり、自然現象を操っている時点で、

翔夜は霊力を使っているのではないという事。どうやって翔夜が自然現象を操っているのか華苗には理解できないが、それでも翔夜の術における技量が、気軽に凄いといえるようなそう言う技量でない事だけは華苗にも理解できた。

「お、この辺りがいいな、おら、降りろケロ子」
「えー、もうちょっとだけ！　もうちょっとだけだから！」
「うるせぇなぁ、そんな提案は通らん」
「あふん……もうちょっと強く……じゃなかった、もう少し優しく降ろしてよね！」

円状に少しばかり大きく広がる小さな広場のような形の場所へ出た瞬間に、翔夜の足は止まり、満足そうに辺りを見回し、無造作に諏訪子を背中から地面へ落す。その扱いに対して、何やら不穏当な雰囲気になりかけた諏訪子だが、持ち直したように翔夜への追求を始めるが、既にその時翔夜は聞いておらず、華苗の持っている酒を受け取りに行っていた。そんな翔夜の態度に何やら頬を赤く上気させ、身体を小さく震わせるが、ふと我に返ったように、酒を受け取っている翔夜へ近寄り、自分にもお酒をとアピールしている。

翔夜達が見つけたその場所は、まさに花見にはもってこいの場所、地面には柔らかな新緑が自然のクッションとしてそこに存在し、円形の広場のような円周を囲むのは、現在満開の桜。散り際に来れば、桜色の吹雪が広場に降り注ぐ幻想的な光景が見られる事がわかるそんな場所。

その絶好の花見広場の円周に存在する一本の桜の下に陣取り、花見の準備を進める。酒を持ち、胡坐をかいて座る翔夜の左側に華苗が静かに座り、何故か諏訪子は翔夜の胡坐の上に鎮座する。

「おいこら、何やってやがる」

「あーうー、別にいいじゃんこれぐらい」
「諏訪子様……」

諏訪子の身体は小さい為、視界を遮るほどではないが、何かが乗っている事が気に食わないのか、目線だけを下に向け、諏訪子に向けて抗議の声を上げる翔夜に、諏訪子は頤を逸らし、顔全体で翔夜を見上げるようにしながら、何とか押し切ろうと声をあげ、華苗がその美しい顔を何やら暗い雰囲気を纏い、いつもの声とは思えぬほど低い声で諏訪子の名前を呼ぶ。

満開の桜を前に何とも賑やかな一行だが、一番最初に事態を投げたのは、当然と言うか、翔夜だった。桜を前に一悶着起こすのが面倒だったのか、本当に面倒臭そうにため息を吐き、胡坐をかいて組んでいる足の上に座り、両手でお猪口を持つ諏訪子の身体の前に右腕を回し、自身の身体に引き寄せるようにして、諏訪子の尻を足と股の間にあるスペースへ落し、安定させる。

「ふわわ……あーうー、良いの？」
「これだけの桜を前に言い争いなんぞ面倒臭ぇからな、別に俺は気にしちゃいねぇから、華苗も気にすんな」
「遠成様がそう仰るなら……」

翔夜の右腕に抱き寄せられるようにして固定された諏訪子は嬉しそうに、だが、頬はしっかりと赤く上気させながら、翔夜の機嫌を伺うように恐る恐る声を上げ、翔夜からの了解を取ると喜色満面と言うような嬉しそうな表情でお猪口を煽る。

華苗の方は、翔夜から釘を刺され、渋々引き下がるが、対抗するように翔夜の肩に頭を預ける形で翔夜へ身体を預ける。

「風流だな……」

左肩に華苗の重みを感じ、右手で諏訪子を抱き込み、左手でお猪口を煽り、目を細めながら満開の桜を見て満足そうに翔夜は息を吐く。

翔夜の見つめる先には、視界一面に広がる桜。散り際の季節ではないが、これぐらい惜しくないと桜が言うように、ひらひらと舞い散る花びらはまさに桜の雪と言う表現がぴたりと合う。陽光の明るさによって更に鮮やかに舞う桜は、春と言う季節には似つかわしくない雪を降らせ、新緑に落ちる桜色の雪は解けて消える事はなく、新緑であるはずの絨毯を桜色に染め上げていく。その光景は十二分に幻想的で、翔夜の目を大いに楽しませ、粋な演出をする桜の演出はとどまる所を知らず、翔夜の酒で満たされているお猪口に、ひらりと舞い散り、その水面に小さな波紋を作る。

その粋な桜からの贈り物に、翔夜は楽しげに目を細め、桜色の雪の一片が浮かんだ酒を一口に煽る。

「美味いな……」

静かに、それでいて楽しそうにそう呟く翔夜の視界に、徳利の口が差し出され、差し出されている先を視線で辿ると、鮮やかな新緑を持つ華苗が、静かに微笑み、徳利の口を差し出していた。

「もう一杯、如何ですか？」

「あぁ、ありがたく頂くぜ」

鮮やかな新緑を湛えながらも、春の様に穏やかに笑う華苗を見ながら、翔夜は、ふっと笑みを浮かべながら華苗の言葉に応じる。お猪口に酒を注がれ、それを一気に煽ると、翔夜が持っていたお猪口を華苗に持たせる。

そして華苗が持っていた徳利を取り上げ、不思議そうな顔をしている華苗に徳利を掲げてみせる。

「返杯だ」
「ふふっ、では、一杯だけ」

いつもとは違い、楽しそうに笑いながら返杯を促す翔夜に、華苗は可笑しそうに、それでいて嬉しそうに笑いながら、翔夜の返杯に応じ、注がれた酒を、スッと口に入れ飲み干し、翔夜へお猪口を返す瞬間、華苗の視線はお猪口へ固定され、そのままじっとお猪口を見ていた華苗の顔がみるみる内に赤く染まっていく。

明らかに酒による変化ではない華苗の様子に、くつくつと翔夜は笑い声を上げる。

「初心な奴だな？」
「わ、わかってたんですね！？」
「当然だろ、くくっ」

からかうような翔夜のその声に、華苗は、酷いです……と恥ずかしそうに声を上げながらも、その表情は確かに嬉しそうな表情を浮かべている。そのようなやり取りの中、翔夜の顔の下で不満そうに声を上げる神が一人。

「あーうー、華苗と翔夜だけ楽しそうでずるい！　私も翔夜にお酒注いであげるよ」
「子供か……まぁ、良いか、ほれ」
「むぅ……」

自分の分の徳利を掲げ、身体を反転させて翔夜と向かい合うように体勢を変えると、翔夜のお猪口へ酒を注ぐ、華苗は不満そうにむくれて諏訪子に恨めしそうな視線を向けているが、そんな事は知った事ではないとばかりに翔夜へ酒を注ぎ、翔夜がそれを飲むのを楽

しそうに見ている。
　一口でお猪口を空にした翔夜は、諏訪子の徳利を受け取り、諏訪子のお猪口へ返杯しようとするが、その瞬間に、諏訪子が声を上げる。

「私も翔夜のお猪口がいい！」
「あん？　まぁ、良いか」
「あぅ……」

　諏訪子の意見を翔夜が了承した瞬間、華苗から残念そうな声が上がるが、諏訪子はこの要望が通らないと駄々をこねると見た翔夜はすんなりと自らのお猪口を渡す。
　そして諏訪子から受け取った徳利を傾け、酒を注ぎ、酒で満たされた翔夜のお猪口を、諏訪子は嬉しそうに眺め、翔夜がつい先程酒を飲んだ部分と寸分違わぬ位置に諏訪子は口をつける。

「あぁ！　諏訪子様ずるい！」

　物静かな華苗から珍しい事に大きい声が出るが、その華苗の声を聞き、勝ち誇ったように、嬉しそうに目を細めながら、お猪口の中身を堪能し、ゆっくりと中身を堪能した諏訪子は満面の笑みを浮かべて翔夜へお猪口を返す。諏訪子から返されたお猪口をじっと見つめ、真顔のまま徐に、諏訪子の口をつけた部分を着流しの裾で拭く。

「あぁ！　そんなさらりと！　でもそんなつれなくて冷たい所がまた良い！」
「諏訪子様……私の知らない扉を開いてしまわれたのですね……」

　翔夜の行動を目の当たりにして、興奮したように翔夜の胡坐の上で身をクネクネと捩じらせ、赤い顔で嬉しそうな声を上げる諏訪子

に、華苗は一歩引いたような遠い目で、しみじみと諏訪子が開いてはいけない扉を開いてしまっている事を悟っていた。胡坐の上に座りなおして、正面を向き身体をくねらせる諏訪子を見下ろしながら、にやにやと面白そうに笑う翔夜。本気で嫌がったわけではなく、態とあんな行動を取ったのは最早明白である事がわかる。

何時間桜を見続け、お猪口を煽ったかわからないほどに時間が経ち、辺りが薄赤く染まる頃、持ってきていた酒も切れ、同時に充電が切れたかのように騒がなくなった諏訪子は、翔夜の胡坐の上で、安らかな表情ですやすやと幸せそうに眠っている。

翔夜は諏訪子を気にした風もなく、諏訪子を抱えたまま、昼間とはまた違った顔を覗かせる桜を見つめ、華苗は桜をじっと見つめる翔夜を熱の篭った視線で見つめる。

昼間とは違い、静かで穏やかな時間が流れ、それにあわせる様にして桜の散る勢いも緩やかになったように感じられる。太陽が傾く事によって辺りが暗くなりつつある中で見る桜は、鮮やかな桜色ではなく、薄赤く辺りを包む光に同調するかのように薄赤く染まっていた。

「こう言う中で見る桜も良いもんだな」

「はい、誠に……」

色々な姿で翔夜の視線を独り占めする桜に嫉妬するように視線を向ける華苗だが、満足そうな声でポツリと呟かれた翔夜の言葉に、熱の篭った声で同意の声を上げる。実際に、薄赤い世界の中で見る桜は美しく、色々な感情を排斥して、改めてみた桜は、華苗の目にも、言葉を失うほどに美しく見えた。

だが、華苗は、その美しい桜から直ぐに視線を外すと、また翔夜へと視線を戻す。そうして見た翔夜の表情は、確かに満足そうな表情をしており、この穏やかな時間を楽しんでいるようにも感じられ

た。

楽しそうな翔夜の表情を見た華苗は、自らの鼓動が早くなるのを感じ、同時に熱が顔に集まるのも感じる。そして、華苗自身が駄目だと思った時には既に、あふれ出した想いが華苗の口をついていた。

「お慕い申しております……遠成様」

「あ～、まぁ、わかっちゃいたが……何でだ？」

自らの意思が止めた時には既に出ていた言葉に、華苗は後悔した。何故なら、不思議そうに問いかけてくる翔夜が、華苗の想いを受け入れない事を、何となく知っていたからだ。だが、言ってしまったものは取り返しがつかず、身体を小さくしながら、嬉しそうな表情から一転して悲しみを溜め込んだ表情が、華苗の顔に浮かぶ。

「何故と申されましても……あの時、初めてお会いした時から魅了されたとしか言えません」

「一目惚れ、ね？　まぁ、気付いちゃいるだろうが、俺はお前の想いを受け入れられない」

翔夜のその言葉に、半ば予想はしていたのか、悲しそうな表情を浮かべながらも、涙を堪える為に、視線を桜へ固定している華苗、今ばかりは、鮮やかな新緑が精彩を欠いているように感じる。

「理由を、お聞きしてもよろしいですか？」

「俺はな、自由が好きなんだ、その所為で構ってやれなくて可哀想だからとかそんな他人の身に着せた事を言うつもりはねぇ、ただ俺は俺の為に自由でありたい、そんな大層な理由じゃねぇ、だが、それを曲げられるほど俺は複雑に出来てねぇんだ、ただそれだけの理由だ、だがそれを守る為なら俺は誰からの責めも罪も受け入れる、そう決めた、それは俺が俺として生きていく為の覚悟なんだよ」

翔夜が語った、翔夜が翔夜であるための理由、それはある意味究極の自分勝手、だが、翔夜らしさをなくさない為の絶対の法則。その法則を守る事で後ろ指を差されようとも、叱責を受けようと、恨みを買おうと、全て受け入れる覚悟はあるし、今までもそうしてきた。そう語る翔夜。

我ながら酷いな、と全てを受け入れたような顔で笑う翔夜を見て、華苗は翔夜へ、涙を流しつつも嬉しそうに微笑み、翔夜の言葉に首を振る。同時に華苗は、翔夜の事をとても大きいと、そう思う。

「酷くなど、あるものですか、それはとても素敵な事、今まで貴方様が貴方様であったからこそ、私は遠成様……翔夜様を好きになったのかもしれません、だから私は胸を張って言えます、私の思い人はとても素敵な方なのだと、好きになって良かったと思えるほどに素敵な方なのだと」

そう言って涙を流しながら嬉しそうに微笑む華苗は、翔夜の視線を桜から取り返すほどに美しく、そして強さを感じる微笑だった。そんな華苗の顔を見て、翔夜もいつもとは違う、包み込むような柔らかな笑顔で笑う。翔夜の浮かべる、柔らかく包み込むような笑みに誓いを立てるように華苗は囁くように、歌うように、言葉を紡ぐ。

「これからも、ずっとお慕いしております、翔夜様、願わくばこの尊き素敵な気持ちが、いつかもし生まれる我が子へと受け継がれる事を……」

歌うように紡がれたその願いを言い切った瞬間、薄赤く染め上げられた世界で、瞳を閉じた華苗の身体が、一瞬新緑の光に包まれる光景を見て、翔夜は焦ったように慌て、汗をかいていたが、そんな翔夜の様子に、華苗は可笑しそうに、ころころと鈴の鳴る様な声で

笑うだけだった。

「さぁ、そろそろ帰りましょう、翔夜様」

「はぁ、わぁったよ……はぁ」

諦めたようにため息をつく翔夜は、これ以上ないほどに嬉しそうに笑う美しい華苗を見ながら、相変わらず幸せそうに眠りこけている諏訪子を背負い、華苗の手を引きながら山を降りていった。

はち　巫女の失恋話、好きな男は究極の自分勝手（後書き）

華苗が失恋しました。
実は華苗はオリキャラですが、それなりに好きなキャラです。
そして諏訪子……いや、諏訪子も好きなんですよ？ホントですよ？
これも一つの愛の形といいますか……何て言うかごめんなさいｏｒｚ

さて、翔夜ですが、今回思いました。
こいつ……とことん笑顔って言う爽やかなワードが似合わねぇキャラだな、笑顔って言うよりも、笑みって言った方が似合ってるような気がするんですよね、だから途中で笑顔って打とうとしたんですが……指がどうしてもそのワードを打ってくれませんでした。

さて、次回ですが、予定通り、神奈子と闘って、諏訪子と神奈子、セットになってもらおうと思います。
ではでは、この辺で～

きゅう　新しい名前

寿命、それは生ける者なら持っている運命のようなもので、最後には必ず寿命が来て、死を迎える。それがこの世界に生まれた生物が昔から繰り返してきたサイクルの一つである事は疑うまでもない。草も木も花も生物も全てが寿命を持っている。一部例外のある生物もいて、それが妖怪だったり神だったりするが、その中でも特別に例外といえるのが、祟りの神、諏訪子が治める国にふらりと現れた人間の男、遠成翔夜である。

彼は人間でありながら、世界と言う強大な存在によって寿命を取り払われた人間であり、その分彼は、数多の死を見てきた。この世界に来てからも、その前も、その前も、悠久の時を生きる彼が他の存在の死を最後に見るというのは最早それも一つのサイクルであり、今現在、諏訪子の国で消えかかっている命の灯火を見届けるのも、数多の死を見てきた彼にとっては、当然の最後であり、それによって今更如何こうする事が出来ない事を彼は知っている。だからこそ、いつも通りにその死を受け止め、見届け、いつも通りに見送ってやる、それが彼のすべき事であると知っていた。

一体何があったのか、そう問われると結果的にはこう言える。諏訪子の巫女であった華苗の命の灯火が今まさに消えようとしている。と

「翔夜様、私は、どうなるのでしょうか?」

この時代における人間の寿命は短い、４０歳まで生きられない者も数多くいる。その中で、華苗は３５を迎えるその年に床に臥し、そして今まさにその灯火を消そうとしている彼女は、この時代においては長生きできた方だった。そんな彼女だが、衰弱で幾らかは美貌に陰りが見えるが、それでも死の間際まで彼女の美しさは損なわ

れる事なく輝きを見せていた。
　弱々しくそう翔夜へ問うて来る華苗に向かって、翔夜はいつも通りの口調で彼女へ真実を口にする。

「俺の見た所によると、恐らく今日を乗り越える事は出来ねぇな」
「そうですか……」

　相変わらずの翔夜の言い方に、苦笑と共に納得する華苗。恐らく自分でもそう思っていたのだろう、彼女が取り乱す事は無く、死の間際に来ても翔夜の声を心地良さそうに聞いている。
　現在華苗が居るのはいつも通り諏訪子の屋敷だが、その家主であるはずの諏訪子はここには居らず、席を外している。それも、華苗自身が、最期を看取るのは翔夜が良いと言い出した為だ、これは、普通ならばありえない事でもあった、自らが信仰している神よりも、文字通り一目で自らの心をさらった男を優先したという事だ。華苗は、そんな自らの心を一瞬にして魅了した男の顔へ、布団の中から手を伸ばし、昔から変わらないその頬へ触れる。

「貴方は、変わりませんね？　昔からずっと素敵なまま、こんな時でも私は貴方に夢中です」
「それは光栄なこった、望んだ形でないとは言え、子供も出来た事だしな？」
「もう、意地悪な方、私は貴方との子供が欲しかったのですよ？」
「酷い話だな？」
「誠に……」

　にやにやと笑う翔夜に、少し拗ねたような華苗。話しにあった通り、華苗には子供が居た、それは翔夜以外の男との間に出来た子と言うわけではなく、諏訪子との間に出来た子供だ。諏訪子曰く……。

「翔夜が振り向いてくれないねー、って二人でくんずほぐれて慰めあったら出来ちゃった」

華苗の信仰心と霊力が諏訪子と身体を重ねた事で、諏訪子の神力と結びついた結果生まれたらしく、その子供はすくすくと大きくなり、現在、7歳になる男の子である。

その子供が生まれてから、母親は華苗と諏訪子、何故か関係ない筈の翔夜が父親と呼ばれている。訂正するのも面倒だと思ったのか、その呼び方を矯正させる事はなく、恐らくこれからも無い。

「私は人に生まれた事を後悔した事はありません……ですが、今になって少しだけ残念に思うことがあります」

「なんだ？」

翔夜の頬に手を添えたまま寂しく笑う華苗の行動を、特に気にした様子も無く問いかける。

「これから先の貴方を見る事が出来なくなる事、それだけが残念です」

そう言って寂しく笑う彼女の言葉に、翔夜は少し驚いたように目を見開く。そして、仕方ない奴だ、と語るように笑みを浮かべ、頬に添えられている華苗の手を握る。

「死の間際でさえ、俺の事を考える程に夢中になってるとはな……少し驚いた」

「あら、知らなかったんですか？」

ふっ、と笑みを浮かべる翔夜に、悪戯っぽく、くすくすと笑う彼女は非常に珍しく、彼女の命の灯火が消えかかっているとは思えな

いほどに魅力的で、生命力の溢れている笑いだった。
だが、そのやり取りが終わると同時に、華苗の顔には疲れたような色が混じり、もう限界だと翔夜に悟らせる。今まで元気そうに、翔夜へ話し掛けていた人物とは思えないほどに、死相が浮き出ている。翔夜との穏やかに話す時間を、自らの精神力で捻出したのだろう。徐々に生命力が途絶える彼女の手を握りながら、いつかの包み込むような、全てを受け止めるような柔らかな笑みを翔夜は華苗に送る。

「翔夜様、もう限界のようですね？」
「人が居なくて良かったな、下手すれば勘違いされる台詞だ」
「もう、最後までそんな事を、ですが、こうして穏やかに逝けるのも貴方がいつも通りだからなのでしょうね」
「さてな？」

そう言って少し嬉しそうに笑う華苗に、いつもと同じ様に、飄々と惚ける。掴めそうで掴み難い男は、こんな時までその態度を崩さない、その事が、華苗には無性に嬉しく思えた。
そこで、嬉しそうに笑っていた華苗は、真剣な表情を浮かべる。いや、懇願するようなと言い換えてもいい。そんな表情を浮かべる彼女から出てきた言葉は、こんな言葉だった。

「翔夜様は……私が死んだら、涙を流されますか？」

懇願するような声音で、華苗から言われた問い掛けの言葉に、翔夜は乾いたような笑みを浮かべる。

「いや、俺は一人の人間の死を見て涙するには死を見すぎた」

薄情とも取れる翔夜の言葉と、笑みに、華苗はそこで本当に安心

したように笑顔を浮かべ、力の入っていない手で、翔夜の手を握り返す。死の間際に咲かせた彼女の笑顔は、華苗の印象そのままを表したような、春の陽だまりの様な優しい笑顔だった。

「良かった……私の死が、貴方様の心の傷の一つにならなくて……これで安心して逝けます」

「そうか……ゆっくり休め、ご苦労さん」

いつもの翔夜からは考えられないほどに柔らかな声音で、出された見送りの言葉に、華苗は嬉しそうに笑い、はい……と翔夜に応える短い言葉を最後に、翔夜の手を握る手は力を失った。

数多の死を見てきた翔夜の中でも、これほど穏やかに、安らかに逝った人間を、彼は知らない。そんな穏やかにこの世を去った華苗を見て、ポツリと呟くように言葉を零す。

「涙は流れねぇが……俺はお前の死を忘れねぇさ、今までがそうだった様に、これからも俺は俺が見取った死を忘れる事はねぇ」

静かに華苗の死を見届けた翔夜は、その言葉を落とし、部屋から静かに去っていった。

とある蒸し暑い夏の夜の出来事だった。

華苗の死から、もう何年経ったか数えるのも億劫になる程の年月が過ぎ去った夏、翔夜は華苗の墓の前で手を合わせ、華苗を見取った時の事を鮮明に思い出す。あれから、華苗の一族は途絶える事無く続いている。そしてその死を諏訪子と一緒に何度も見取ってきた。そしてその全てを、翔夜は鮮明に思い出すことが出来る。

そこで何処からとも無く、タバコを取り出し、吸おうとするが、華苗がタバコが苦手だった事を思い出し、それを仕舞う。

「あれから何年経ったのかもうわからねぇが、諏訪子は相変わらずだ、俺もそれなりに楽しくやってる」

昔を思い出すように遠くを見つめる翔夜の脳裏には、華苗と過ごした時間が鮮明に流れていた。そして、色々な事を思い出しながら、ある一つの華苗が残した軌跡を思い出し、苦笑する。

「お前の子孫が途絶えていないのは何よりだが、女が生まれた時が大変なんだぜ？」

苦笑しながら翔夜の脳裏には、華苗が自らが持っている事を自覚していなかった能力を発動させた花見の夜が浮かんでいた。一度発動した華苗の能力は、能力者本人が居なくなってからまともに効力を発揮する能力だった。華苗が能力を発動させた時、翔夜には、はっきりとその能力がどの様な能力なのかがわかった、だが、その能力者はもうこの世に存在せず、効力は存在し続ける。

苦笑を浮かべ、もうどうしようもないな、と諦めたように呟く翔夜、その効力によって、翔夜の身に降りかかった華苗の一族特有となった出来事、それは、華苗の一族に女が生まれた時、決まって恋をするのは翔夜に対してと言う事、幸い、何故か華苗の残した一族は美形が生まれてくるので、翔夜としても悪い気はしていないが、それでも誰に応えるつもりも無い翔夜としては、何度も対応に困ったものだ。

花見の夜、華苗が発動させ、後にも先にもその一回しか見る事の無かった華苗の能力。

「『想いを継承する程度の能力』か、術者が居ない事にはどうにも

ならねぇな……」

華苗の墓がある新緑が息づく森の中で、線香の匂いが翔夜の鼻をくすぐり、苦笑と共にため息を吐く。そして、目の前に広がる新緑の光景を視界に入れて、翔夜は華苗の髪の色を思い出す。

「まぁ、近々、他の神が攻めて来るみたいでな、それを取り合えず見届けようかと思う、それが終わって暫くしたら、俺はまたふらりとどこかへ行くとするよ、そしたら暫くは会いにこれねぇが、勘弁な？」

そう言って、いつもと同じ様に、にやりと笑みを浮かべ、華苗の墓を後にする直前に、翔夜の身体を夏には似つかわしくない暖かいそよ風が包む。数多の死を見てきた翔夜は、この世を去った人間が、今を生きる人間に対して何かをしてくれるとか言ってくれるなど、根っこから信じては居ないが、その時だけは、何故か華苗が何か言ってくれた様な気がして、何となく楽しそうに笑いながら、翔夜は蝉の鳴き声と共にその場を去った。

新緑が視界を覆う山の中の華苗の墓の前、昼にあった翔夜の姿は無く、代わりにあったのは、諏訪子の姿だった。気温の落ち着いた夕暮れの中、金色の髪を夏にしては涼しい風に靡かせ、目を閉じて静かに手を合わせる諏訪子の顔は非常に優しく穏やかだった。

そして、目を開き、優しげにふわりと笑うその表情も、華苗が居た頃よりもずっと大人びているように思える。

「華苗が居なくなってから、華苗の子孫達の中に女の子が生まれたら大変なんだ華苗を見送った時みたいに、見取るのは翔夜が良いっ

て言うんだよ？」

私を信仰してる巫女なのにねー、と言葉の内容は拗ねたような言葉だが、その顔は楽しそうに笑顔を浮かべている。そうして、完全に日が落ちるまでの短い時間、最近起きた出来事を華苗の墓に向かって断片的に話していく。その内容は、大体が翔夜の関わっている話だったりする。その方が華苗も喜ぶと思ったと言う理由もあるが、諏訪子が良く覚えている出来事には必ず翔夜が居る。それはつまりどう言う事かと言えば、そう言う事なのだろう。

何も翔夜に惹かれていたのは華苗だけではなかったと言う事。

そうして、あらかた話し終り、日も暮れてきた頃、諏訪子は何かを思い出したような顔つきに変わり、神力を発動させる。その神力が向かう先は、華苗の墓の石。

「あのね？　神の血が入ってる家系に苗字が無いのもおかしいって事になってね？　華苗の一族に苗字をつける事にしたんだ、だから今華苗にもつけてあげるね？」

嬉しそうにそう言いながら、神力を使って、華苗の墓に彫られている文字を書き換え、それが終わると、諏訪子は、うん、と一つ満足そうに頷く。

「これでよし、それじゃあ、私も行くね？　翔夜も来たみたいだけど、多分翔夜もう少ししたらここから居なくなると思うから、華苗の新しい名前知るのはもう少し後になっちゃうかもね？」

そう言ってにこにこと、悪戯を考える子供のように笑いながら、華苗の眠る墓石をゆっくりと撫でる。そして何かを決意したように、よし、と気合を入れる。

「華苗の一族と勝負だね、どっちが翔夜の心を射止めるか、私負けないよ？」

小さな手をぐっと、握り締め、ふふん、と一つ笑いを漏らし、また来るね、と別れの挨拶を済まし、諏訪子も華苗の下を去る。

誰も居なくなった華苗の墓石には、諏訪子が刻んだ華苗の新しい名前が刻まれていた。

『東風谷　華苗』と。

きゅう　新しい名前（後書き）

前の話で神奈子に登場してもらうとか言う嘘情報を言ってしまった事に、深くお詫び申し上げます。
よく考えたら、この話しなくして先には進まないと思い出しまして、いつもに比べて少し短めでしたが、急遽この話を入れました。
次回こそ、次回こそ、神ＶＳ神、でも視点は遠くから見ている翔夜、でお送りしたいと思います。

じゅう　鍛錬、戦、恐怖に怒り

「私に稽古をつけて！」
「はぁん？」

翔夜が諏訪子の下で暮らし始めて数えるのも億劫になる程の月日が経ったある日、一緒にとっていた昼食の場で、机に手をつき、正面に座る翔夜の方へ身を乗り出しながら、諏訪子が気合の入った表情でそんな事を言ってきた。懸命に真顔になって真剣に頼んでいるのは翔夜にも分かっているが、諏訪子の容姿から見て、泣き出す寸前の子供のように見えてしまうから不思議である。

諏訪子の意気込んだ様子で翔夜に頼んでくる姿に、翔夜は疑問の声を上げる。と同時に、現在秋である為、いつ紅葉を見に行こう、この椎茸美味い、などと考えているのは翔夜だからだろう。

ご飯粒を頬にくっ付けたまま真剣に頼んでくる諏訪子に対して、如何にも面倒臭そうに翔夜は諏訪子へその原因を問う。

「そりゃまた何で？　いくらなんでも急じゃねぇのか？」
「うん、えっとね……」

話を総合すればこうだ、つい最近、大陸から来た八坂神奈子なる軍神から、宣戦布告を受けた。その場では何とか取り繕ったが、実際の所勝てるかと問われれば、敗色濃厚、そこで、諏訪子の神力をものともしない翔夜に鍛えてもらえば、勝機を見出せるかもしれない、と、そう言う事。

昼食である秋刀魚を頬張りながら必死に翔夜へ説明し、翔夜が納得のいった様に一つ頷くが、己が解体し、見事なまでに原形を残し骨と内蔵だけになった秋刀魚を見ながら、状況に納得はしたが、諏訪子のやろうとしている事に理解が出来ないと、首を左右に小さく

振る。

「何故鍛える？」

「そりゃあ、勝つ為に……」

「違う、俺の疑問は、成長しないのに鍛える意味は何だと聞いてるんだ」

そう、成長しない、神は成長する必要性など無いのだ、鍛えれば筋力が成長したりと成長性に可能性がある人間などとは違い、神は生まれた瞬間から力量が決まっている。身体能力も元々高く、神の力のステータスである神力は信仰によってのみ増える。人間の様に、精神統一や身体を動かして鍛えても成長しない、故に意味が無いのだ。

そう言う意味での翔夜の疑問に、諏訪子は高圧的に聞いてこられた事に興奮したのか、少し顔を赤らめながら、ぽつぽつと説明していく。

「戦い方と言うか、戦略と言うか、そう言うのが欲しいんだ、翔夜の経験が欲しいんだよ」

「何？　俺の経験が欲しいだと？　エロ幼女め」

「ち、違うけど！？　あ、でも、そっちもくれるって言うなら喜んでもらうよ？」

「ケロ子のくせに何言ってやがる」

「自分で言ったのにぃ……」

だばだばとギャグ漫画の様に涙を流す諏訪子を尻目に、翔夜は納得したように頷き、諏訪子も昼食を食べ終えた事を確認して、諏訪子に表へ出るように声をかける。

「表に出ろ、ケロ子、テストしてやる」

ここ数年ですっかり神社らしくなった諏訪子の神社。翔夜の目には記憶の彼方にある日本の神社と段々作りが似てきた光景が広がっていた。手水舎に賽銭箱も設置され、より翔夜が知る神社らしくなっている。信仰に対する確固とした形式が固まってきたからだろう。

そんな神社らしくなってきた神社の境内も秋の深まる季節、紅葉や他の木の葉が色付き、非常に趣き溢れる光景が広がっている。

翔夜が咥えて吸っているタバコがちりちりと灰の部分が広がっている事から、空気が乾燥し、段々と秋らしく、そして冬へと変わっていく事が実感として、この先の季節を想像させる。

そして、翔夜がテストと称して出てきた境内で、翔夜と諏訪子は対峙している。諏訪子はやる気満々で構え、逆に翔夜はやる気がほぼゼロの風体で火をつけたタバコの灰を落す先から燃え散らし、腕を組みながら諏訪子の前に立っていた。

「あー、んじゃあ、そうだな、5分だな、5分以内に俺に一撃入れれば俺に師事しても良い、逆に俺にノックアウトされたらまた再テストな、5分過ぎても一撃当てられない場合も再テスト、いいかー？」

「ふふん、いいよー、絶対教えてもらうからね」

組んだ腕を解き、ぱりぱりとやる気なさそうに右手で後頭部を掻きながらテストの内容を説明する翔夜に、自信満々でそのテストの内容を了承する諏訪子。実際諏訪子に自信が無いわけではない、寧ろ5分以内に一撃翔夜へ当てればいいだけだ、土着の神の頂点に立つ諏訪子にとっては簡単な事。

そう考えていた事が、諏訪子の地獄の始まりだった。

「んじゃあ、はじめー」

やる気の無さそうに翔夜が開始の合図を告げた瞬間、諏訪子は集中し、坤を創造し、操ろうとするが、それよりも先に、翔夜からの声が先に入る。

「遅いぞー」

やる気の無い翔夜の声が聞こえた瞬間、諏訪子の身体は不可視の強烈な何かの衝撃に吹き飛ばされ、激しく内臓を揺さぶられながら境内の中を景気良く、それこそ漫画のように地面に足が付かない状態で身体が流されるままに一直線に吹き飛び、境内に植えてある太い木に激突し、ようやく停止。翔夜が様子を見に近付いて見た諏訪子は完全に気絶していた。

「あー、やっちまった、こいつの仕事まだ残ってんのになぁ」

紅葉溢れる境内を見渡しながら、若干困ったように眉を歪めながらタバコを吸い、紫煙を吐き出す翔夜の姿は、やる前と変わらずやる気が全く無かった。

あー、と困ったように声を上げる翔夜だったが、そのままと言うわけにもいかず、気絶した諏訪子を抱えて、神社の中へ入っていった。

諏訪子が目を開けた時、そこは秋の気配が深まっている境内の光景ではなく、見慣れた自分の部屋の天井が目に入る諏訪子の部屋だった。視野からいって、寝かされていると理解した諏訪子は身体を起こし、周囲を見渡してみるが、調度品や神具、机、そのどれもが

間違いなく自分の部屋である事を主張している。
掛け布団を半分捲り上げ、半身を起こして周囲を見渡す諏訪子の顔が、何かに気がついたように歪められる。いや、顰めると言った方がぴったり来る表情をした諏訪子は、その原因の訴えるまま、お腹辺りに手を当てる。と同時に、境内でしたテストでの翔夜の台詞がよみがえり、諏訪子は完全に状況を理解する。そう諏訪子は。

「負けた、んだ……」

そう、負けた、それも完膚無きまでに一瞬で、更にその相手は人間と来れば、諏訪子が呆然としている理由も良く分かる。人間の願いを聞き届け、叶える為に生まれた神、嫌な言い方をすれば、神と言う存在は、人間よりも完全に上位の存在なのである。それがあっさりと倒された、それも、攻撃をする暇も無く一撃で。
その事実に呆然としている諏訪子は視線を外が見える窓へ移す、そこにあったのは、月明かりに照らされる神社の建物と、乾いた空気の中で揺らされる紅葉。聞こえてくるのは夜だと言う事を告げる梟や虫の声だけ、普段はそれなりに活気のある神社に来る参拝客や民達の声も聞こえない。
つまり、それほどの時間諏訪子の意識が飛ぶほどに翔夜の一撃は諏訪子にダメージを与えたという事。それに、諏訪子が最後に聞いた翔夜の声、あれは恐らく……。

「全然、本気じゃ、なかった……」

そう声に出してから、悔しそうに諏訪子の手が掛け布団をぎゅうっと力強く握り締められる。
本気ではなかった、諏訪子はこの考えが間違いだとはどうしても思えなかった。諏訪子は遠成翔夜と言う男の性格をよく知っている。普段はやる気が無さそうにしているが、戦闘中までその態度を保っ

ていられるほど楽観的な性格でもない、いざ戦闘となれば、ウサギを狩るのにも全力を尽くす、そう言う性格だ。それが示す所はつまり、諏訪子は翔夜を本気にさせる所か、やる気の無さを取り払う事すら出来なかったという事実。

突き当たったその事実に、諏訪子は更に悔しそうに拳を握り締め、表情を歪めるが、決して諏訪子が弱いわけではない、それ所か、土着の神の頂点に立つ彼女の戦闘能力は破格と言ってもお釣りが来る。

だが、相手が悪かった、諏訪子は知らないが、翔夜の魂は一つの世界を支配していたほどの元吸血鬼の魂、知識も経験も継承した最高級の魂が翔夜と言う人物。一つの世界を統べるほどに強大な魔力にそれを操る術体系と技術が翔夜の魂の中に詰まっている。そんな存在と神として生まれて数千年と言う諏訪子では差があるのも当然の話だった。何せ相手の経験は優に万年を超えている。

強靭な神の肉体から一撃で意識を奪うほどの魔力の収束率に、それを感知させる前に発動させる事の出来る程に短い収束時間。実際に諏訪子も、何をされたのか理解できても、それがいつ放たれたのか理解できなかった。

何をされたか、と言う点については諏訪子も理解できている。恐らくは風を使ったのだろう、以前翔夜も風が一番汎用性があって使いやすいと言っていた。その話も含めて、風を大量に集めそれを高圧縮した風の塊を諏訪子にぶつけた。やった事と言えばそれだけ。だが、その『それだけ』が諏訪子には見切れなかった。

翔夜の言った再テストは明日もある。それまでに翔夜の攻撃を見切れるようにしなければ、翔夜の師事を仰ぐ事は出来ない。ぼう、と自室の天井の隅を見つめながらそう思考し、改めて気合を入れる。

「あーうー、明日、明日にはきっと一撃入れて見せるよ」

未だにズキズキと痛むお腹の痛みを無視するかのように、両手を天井へと突き上げ、拳を握り締め、気合を入れて明日の再テストの

為に諏訪子はもう一度眠りにつく。
八坂神奈子との戦いまで後1ヶ月。

結論から言うと、諏訪子は翔夜に一撃当てる事が出来た。しかし、その惨状は酷いもので、諏訪子が翔夜にようやく一撃当てた時には、もう身体の何処を動かしても体中が痛む程に、青痣だらけになり、しかも対戦まで後3日しかないと言う所まで来ていた。それでも、翔夜に一撃当てれる所まで動きはよくなり、打たれ強さも身についた。
最初の方はそれはもう酷い有様だった。

1週目は1日目で学んだ事を生かす、つまり、諏訪子の能力は確かに強力だが、翔夜相手ではそれが発動される前に終わっている。つまり、完全な隙がないと翔夜は能力を発動させてもらえないと言う事。その事を学んだ諏訪子は、能力ではなく、自らの神力による術で翔夜に対抗するようにしたが、神力で作った弾を飛ばす様に攻撃しても、風の結界で方向を変えられ、かすりもする事無く風の塊によって意識を奪われる日々が続き1週目が終了。
諏訪子が翔夜に風はズルイ、と進言し、別のものを使う事を了承させる事に成功し、その提案に翔夜は感心したような声を上げて始まった2週目は諏訪子にとって更に地獄を見る事になった。その週、翔夜は水を使って諏訪子の相手をしたのだが、諏訪子の神力弾は圧縮された水の結界を貫けず、神力を凝縮させて切ろうにも、翔夜の強大な魔力で強化された水を切る事は叶わなかった。それ所か、接近戦に持ち込もうと神力を凝縮させた刃が結界に触れた瞬間、結界は形を変えて諏訪子の刃を絡めとり、身体のバランスを崩されて、水を圧縮させた塊を高速でぶつけられ、激痛と共に意識を無くす日々が続く、高圧縮された水の硬度は半端ではないのだ。

１週目と同じ様に、水はやめろと翔夜に涙ながらに懇願した所、あっさり了承された3週目、これが諏訪子の中で一番厳しかったと感じる週だ。３週目は自然の中でも特に強力な部類に入る、雷、電気、電流、雷電、言い方は何でもいいが、つまりそう言う事、これだけは翔夜本人も拙いと思ったのか、再テストを始める最初に手加減すると宣言してテストは始まった。その結果は散々たる有様で、光速で降り注ぐ雷撃を必死で避けるだけで精一杯の週だった。ここで諏訪子は術の発動を感じ取れるようになった。そうしなければ身体を貫かれる等の危険性があったためにそうなったと言える。

そして、恥も外聞も投げ捨て、雷を使わないならどんな奉仕でもすると、妙に頬を赤くさせながら懇願してきた諏訪子に対し、やりすぎたと少し苦笑し、奉仕の件は丁重に断りを入れて不満そうに頬を膨らませる諏訪子の表情から始まった４週目。大戦が始まるまでの猶予としての最後の週、翔夜が使ったのは術としてはオーソドックスな炎。この時点で諏訪子は翔夜の術の発動タイミングを感じ取れるようになっていたので、避ける事自体は何とか出来ていた。問題はそれを行いながら攻撃を翔夜に当てる事。最初の週で、多少当たってでも一撃を、と言う考えを諏訪子は潔く捨てた。当たったらそこで終了。気がついた時自分は自室の布団の中、と言う経験が今の所１００％だったからだ。そこで諏訪子が考えたのは、とにかく面での攻撃に頼る事。様は下手な鉄砲も数撃てば何とやら、と言うやつである。その考えが功を奏したのかわからないが、無我夢中で諏訪子が放った無数ともいえる弾の一つが翔夜の肩に当たり、テスト合格となったのが、その週の４日目と言う事。

そして現在は、翔夜の戦闘における講習の最終日、諏訪子がこの二日で翔夜から習った闘いの知識は、接近戦における間合いの重要性と、間合いの取り方。術の発動速度を速くする為の術式構成方法。諏訪子の神力の最大量とそれを知った上での効率的な運用の仕方。など等、上げていけばキリが無いほどの知識を翔夜からこの二日詰

め込まれていた。そして最後は、戦術。

「戦闘には幾つかの部分に分ける事が出来る、時間的にな、何だかわかるか？　簡単に考えて良いぞ」

「そりゃあ……始まった瞬間と始まった後、終戦間近、じゃないの？」

普通に参拝客が来る中での戦闘講習、しかも神が人間に教わっているのだから目を引かないわけが無く、紅葉が散る量が多く、赤い絨毯のような光景が境内に広がる中、翔夜と諏訪子は民達から注目を集めていた。

だが、そんなものは知った事ではないとばかりに、二人は境内の砂地周辺に座り込み、砂地を黒板かホワイトボード代わりにして講習を進行していた。

そして現在、砂地には戦闘と書かれ、その文字の下に長い一本の線が引かれ、それが部分を分けるようにして一定の距離で区分けされている。

「まぁ、卑怯な戦法を取るなら、もっと区分は増えるが、まぁ、大体そんな所だ」

考えるように、空へ視線を向けながら気の無い声音で諏訪子の考えを肯定し、戦闘と言う文字の下に書かれていた3分割された一本の線の更に下に、戦闘開始、戦闘中、戦闘終了間際、と書き込む。

「じゃあ、区分した所には一つ一つ特徴があるんだが、その特徴をそれぞれ挙げられるか？」

子供に学を教える教師のような表情と口調で諏訪子に問いかける。その顔は楽しそうで、心なしか声の調子も少し弾んで聞こえる。誰

かに何かを教えると言う事が好きなのか、翔夜の問い掛けに、うんうんと唸る諏訪子を見る表情は、まるで子の成長を喜ぶ親のような表情。

そんな表情を翔夜がしているとも気がつかず、諏訪子はギブアップの声を上げ、砂地に完全に尻をつき、座り込む。そんな諏訪子に苦笑を浮かべながらも、翔夜は先程の問いを解説していく。

「まずは、戦闘開始直後だが、これは特徴として奇襲やそう言う類の戦術が効果的ではないと言う特徴がある」

翔夜が言っている事は理解できるが、何故効果的ではないのかと言う理由がわからない諏訪子は、地べたに座り込み首を傾げる。その様はまるで砂場で遊ぶ子供の目の前に何か不思議な光景が起きた時のような様子だが、時間がない事を理解している翔夜は悔しそうに諏訪子を見ながらも、砂地に書かれた戦闘開始の下に、奇襲×と書き込む。

「じゃあ、何故効果的ではないのか、これは、心身ともに万全な状態であるから、と言う事が理由となる。相手が周囲に気を配れるほどに精神的に余裕のある状態で奇襲をかけても成功しないし、したとしても効果は薄い、無論、これが敗戦撤退の追撃戦闘と言う場合はまた状況が違うが……」

翔夜の言葉に首を傾げる諏訪子に、まぁ、これは良いだろう、と説明するつもりは無い。色々と腹の中で考える諏訪子だが、今回の戦いは恐らくそう言う類のものではない、そう考えた翔夜は説明する事自体が時間の無駄と斬り捨てる。

「じゃあ、戦闘開始直後は何が有効なの？」

諏訪子の質問に、翔夜は満足そうに頷き、諏訪子から問われた質問に回答を返す。

「相手の頭を狙った先制攻撃がこの場合有効だろう、と今までの経験上思っている」

「先制攻撃と奇襲の何が違うの？　同じじゃない？」

「それが違うんだなぁ」

諏訪子の疑問に翔夜は、ふふん、と笑みを浮かべてみせる。その翔夜の笑みに、優位に立たれてる感じが悔しいけど、それが良い！などと訳のわからない事を言って悶える諏訪子を華麗にスルーし、説明を続ける翔夜。

「先制攻撃と奇襲の違いは「あぁ！　スルー！　その冷たさがまた良い！　はぁはぁ……」正面から直接行うのと隠れて行うと言う事の違いだ。奇襲は成功しないと意味がないが、先制攻撃は当たらなくても良い。こちらには頭を狙えるだけの気概と攻撃方法があるぞと、言う意思表示で相手に少し考える時間を与える事が出来る可能性がある。これが先制攻撃最大の効果だ」

妙なスイッチが入ってしまった諏訪子を完全に無視し、諏訪子の問いに回答してみせる翔夜。諏訪子の興奮メーターは鰻上りに急上昇し、とどまる所を知らない。

この様な諏訪子の行動を見た民は、勿論の事、幾らか距離を取るような節が見受けられるが、動き回る巫女達が全く気にしていない様子を見て、民達もある種の悟りを開いたような表情を浮かべる。そんなある意味異様な光景を横目で見ながらも、翔夜は関係ないとばかりに戦闘講習を続けていく。

「では次に、戦闘中の特徴だが、これは、一対一ならばそうでもな

いが、乱戦の場合は、誰もが味方の判別に何割かの意識を割いていると言う事が特徴だ」

翔夜はまるで荒れに荒れた高校で話を聞かない生徒達の教師をしているような感覚に陥るが、その感覚をも、華麗にスルー。興奮メーターが振り切れたのではないかと思うほどの諏訪子の身体の動きをチラリと見ながら説明を続ける。

「こう言う状況の場合、奇襲が成功しやすい事と、広範囲に渡って威力のある攻撃方法がある場合、味方の犠牲を覚悟すれば相手の戦力を大きく削ぐ事も出来る。奇襲が成功しやすい理由としてさっき挙げた事が理由になる。味方を見極める意識に思考を割いていると言う事は、一瞬だが、思考する時間が相手にあると言う事だ、それはこちらも同じ事が言えるが、それが同時に起こった場合は自然に大将同士の一騎打ちになるだろう」

そこまで説明し終えた翔夜は、チラリと諏訪子に視線を移す。翔夜の視線が捉えた諏訪子は、地べたに座り込む状態からへたり込むと言う状態へ移行し、どこか艶かしさを感じる雰囲気に、腰がぴくぴくと震えている。表情は、明らかに頬がほんのりと赤く染まり、瞳は何処か満足そうに垂れ下げられ、口元はだらしなく開き、口の端から少し涎も出ている気がする。

「お前、成り行き放置プレイでイくとか、気合入った変態だな」

「あぅ！　その罵りが、またっ……んんっ！」

乾燥した空気を吸い込み、晴れ渡っている気持ちの良い秋空を見上げ、無駄な爽やかさを感じる笑顔で翔夜は思う。

（諏訪王国、完！）

その後も、翔夜の戦闘講習は続くが、諏訪子が聞いていたかどうかは非常に怪しい、多分8割方聞いてはいないだろう。

翔夜の3日間の講習も終わった件の開戦の日、諏訪子は戦場へ趣き、翔夜は、戦場の様子が全て見える山の頂上にある岸壁に立って戦場を相も変わらずやる気の無い瞳で見据えている。

岩が露出し、辺りに木が無く、高低差の大きいこの山は、戦場を見渡すには絶好のポイントだが、問題は普通の人間がそこに立つと、高低差の大きい場所特有の強風に身体を煽られ、岸壁の下へまっさかさまと言う事だ。そこを翔夜は、魔力で大気に干渉して自分の周りの風を緩やかな風になるように操作している。

ちなみに翔夜が使う魔法だが、今使っている魔法は、この世界の自然に魔力を媒体として操作する魔法を現在使用している。軽い戦闘や、こう言う場合等は、元々ある自然に干渉する方が魔力の消費も少なく、魔法を行使するまでの時間が短いと言う利点がある。だが、問題点としては、ある程度その現象がどうやって起きるかと言う知識が必要だと言う事。例えば、発火には、酸素と燃料となる物、そして熱が必要だが、生物ならばある程度可燃性物質を有している生物が存在する。そう言う生物が対象の場合、大気に魔力で干渉し、酸素を取り出し、その対象の可燃性物質と結合させ分子加速させる事で熱を生み出し、発火させる。これが翔夜が普段日常的に使用したり、取るに足らない敵を相手する時に使う魔法。

それとは違い、諏訪子を鍛えていた時や、地上が地殻変動を起こした時に使っていた魔法は、そう言う魔法ではなく、翔夜が編み出した術式に自らの魔力を通す事で、魔力自体を、炎や水、雷と言ったものに変化させている魔法である。例えるならば、日本酒を搾り

出す機械のような物だろうか、米が魔力、機械が術式、米が機械を通る事で日本酒となって出てくるように、魔力が術式を通る事によって別の何かに変わる。そう言う事だと理解してもらえれば良い。この魔法の利点は何と言ってもバリエーションが豊富で、現象を引き起こす知識が必要ないと言う事。逆に問題点としては、修練で何とかなるものの、発動までの時間がある程度必要と言う事と、威力を引き上げる為には相応の魔力が必要だという事。この二点が挙げられる。

翔夜が持つもう一つの力、霊力に関してだが、これはまた別の機会に要検証。と翔夜は結論付け、魔法と言う言葉で思い出したのか、自らが若い頃に勢いだけで開発した大魔法と言うものがあった事を思い出し、妙にむず痒くなる。

「若気の至り……ってやつか」

若気と言うが、その時既に翔夜は齢２０００を数える強力な吸血鬼だった。

と、己の恥ずかしい過去を回想して、遠い目をしている翔夜の目に、既に始まっている戦いが目に入り、翔夜は自らの黒歴史を振り払うように、その運びに集中する。

そこで繰り広げられる戦いの展開に、翔夜は思わず顔を顰める。混戦が始まっていくらもしない内に、大将同士の一騎打ちの流れが出来つつあり、両陣ともに己の大将を残して戦線後退しつつある。

「チッ、一騎打ちのタイミングが早すぎるな……」

翔夜の頭の中でのシュミレーションとしては、混戦の中で奇襲をかけるか、それが成功しないほどに力量差がある場合は、混戦中に自らは消耗を抑えながら敵大将の余裕のある内は見つからぬ様に混

戦の中を駆けながら、少しずつ敵の戦力を削ぎ、敵大将が消耗してきた所で一騎打ちを仕掛けるというのが理想的。それを諏訪子にも説明したはずなのだが……。

「聞いてなかったか……もしくは、見逃す事の出来ない挑発を受けたか……だな」

その辺りを軽く受け流してこその一流なのだが、相手の大将の方がその辺りは一枚上手のようだ。恐らく相手の大将はいくつもの戦場を経験してきた猛者なのだろう、対して諏訪子は今まで戦う敵は自分と相手との力量差が大きく、そんな事を気にする必要はなかった。つまりは、経験不足と言う他ない、と翔夜は右手で顎を撫でながら、そう結論付ける。

「力も、相手の方が大きいみてぇだが……それならそれでいくらでもやりようはあるんだがなぁ」

寧ろ、こちらの方が劣っているという事で、付け入る隙はいくらでもあるようなものだ、相手が油断してくれれば万々歳、それでなくても油断を誘う方法などいくらでもある。

そこまで考えて、タバコを一本取り出し、火を付け、肺一杯に紫煙を吸い込み、虚空へと紫煙を吹きかける。

「ま、これ吸い終わったら行きますか……」

相変わらずやる気のない瞳で戦況を見守る人間っぽい何かは、終戦に備えてゆっくり魔法の準備を備えた。

神同士の戦いとは、結局最終的には力比べと言うこと、それを軍神、八坂神奈子は理解していた。そして今、神奈子の目の前に対峙しながら、神奈子がその小さき神の力を押し切ろうと、力を込めた瞬間、それは突然起きた。

天と地がせめぎ合っている中、そのせめぎ合いの横合いからの全てを切り刻み、全てを吹き飛ばす風の暴力によって、天と地は蹴散らされ、何事もなかったような青空が戻ってくる。横一線に天と地のせめぎ合いを割った凶悪なまでの風の暴力、竜巻が過ぎ去った後、そこに風を纏った人物が降り立ち、その人物に向かって、八坂神奈子と対峙していた小さき神、洩矢諏訪子と言った祟りの神が嬉しそうに駆けて行く。先程までの戦闘など無かったかのような満面の笑みだ。

諏訪子が何の躊躇も無く、風を纏い降りてきた人物の背中に飛びつくと、その人物は何も気にしていないようにこの戦いの終戦を宣言する。

「この戦い、ケロ子、じゃなかった、洩矢諏訪子の負けだ」
「あーうー、まだ負けてないもん！」
「うるせ、だまらっしゃ、あのままやってたら確実に負け確定だ、つーわけで、お前の負け、いいな？　ケロ子」
「あーうー、わかったよう、翔夜が言うなら……」

神の戦いに割って入り、諏訪子に対して歯に着せぬ物言いで諏訪子を黙らせた、翔夜と呼ばれた人物。やる気の感じられないその瞳と雰囲気は、とてもさっきの風の暴力で、神奈子と諏訪子の戦いを止めた人物とどうしても神奈子の中で一致しなかった。

「お前は……一体？」

神奈子の呟くように小さい疑問に、翔夜が神奈子の方へ振り向き、やる気の無いままに、軽く自己紹介を済ませる。

「俺は遠成翔夜、人間だ」

「人間が……神の戦いに割って入り、あまつさえ対等に言葉を交し合う、だと？」

「あーうー！　この女郎！　人間舐めんな！　て言うか、翔夜舐めんなよう！」

神奈子が呆然と言った呟きに、翔夜よりも先に諏訪子が反応し、猛抗議の声を上げる。当の翔夜は、呑気に辺りを見回し、神力の塊の様になっている神奈子の陣営を見渡し、おー、壮観だな、などと気楽な声を上げていた。

「こんな男が……」

「そう思うなら翔夜と闘って、ぼっこぼこにされるといいよ！　アレを味わった事が無いからそんな事が言えるんだ！　私の痛みを知れ！　この女郎！　私みたいにぼっこぼこにされろ！」

「ハッ、人間が神をぼこぼこ？　冗談は休み休みにしろよ、祟り神」

怒る諏訪子と諏訪子の言った事実を鼻で笑う神奈子。そんな二人を尻目に、諏訪子の台詞で何かを思い出したかのように、翔夜は背中にへばり付き、ぷりぷりと怒っている諏訪子を引っぺがし、諏訪子の両脇に手を差し込み、子供を抱き上げるようにして諏訪子を正面へ持ってくる。ある意味これ以上無いほどに屈辱的な体勢だが、今まで散々体型や体格の事で色々言われてきた諏訪子からしてみれば、この体勢もある意味諏訪子の興奮を誘う状態である事は言うまでも無い。その証拠に、諏訪子の頬は不自然なまでに赤く紅潮し、息遣いも荒くなっている。そして、正面にある翔夜の顔を見つめる大きな瞳は期待に輝いていた。

「頑張ったから褒めてくれるの？　それとも負けたからお仕置き？　どっちでもいいよ！」
「あれだけ鍛えてやったのにあっさり負けてやがんじゃねぇ、ケロ子が」
諏訪子の両脇に手を差し込んだ状態で、翔夜の両腕は、抱え上げている諏訪子の身体を圧迫するように両手で締め上げる。メキメキ、と聞こえて来そうなほどに力が入れられていたが、神の頑丈な身体はそんな事では潰れない、これがただの人間だったならわからなかったが……。
だが、実際の所、翔夜にそれだけの事をされているにも関わらず、何故か諏訪子の表情は恍惚とした表情を浮かべていた。
「あーうー、お、お仕置きだった……でもこの責めが、なん、とも〝っ！」
あまりに慣れた雰囲気で翔夜はお仕置きを敢行し、諏訪子はその責めを甘んじて、所かこれ以上無さそうなほど嬉しそうな表情でそれを受け入れる。そんな二人に、若干引き気味の神奈子だったが、その耳は翔夜の言葉を聞き逃さなかった。
「鍛えた？　人間が、神を？」
神奈子の中では信じられない事実を呆然と呟き、その言葉は、神奈子が率いていた神達の間で波紋を広げ、それは、人間如きに鍛えられる神など……と諏訪子をせせら笑う内容へと変わっていく。
神達の間で嘲笑が広がっていき、それはとどまる事を知らない、どんどんと大きくなっていく馬鹿にしたような密かな笑い声に、諏訪子に対してお仕置きを敢行していた翔夜の手は止まり、お仕置き

の手を止めた翔夜が出した声は、酷く威圧的で強大な存在感を感じさせる低い声。

「おい、誰だ？　今こいつを笑ったやつは？　全員か？　あん？」

抱え上げていた諏訪子を下ろしながら、その場に問いかけるような、比較的ゆったりとした翔夜の声。その声はそう大きくは無かったはずだが、何故か、神達の間で囁かれていた言葉が止まり、翔夜へ注目が集まる。

圧倒的な存在感を感じる翔夜の声に、一番最初に反応し、青ざめた顔をして反応したのは、この中で一番翔夜と付き合いの長い諏訪子だった。

「あ、あーうー、し、翔夜、べ、別に私は気にしてないから、ね？　落ち着こう？」

酷く狼狽した様子で、翔夜をなだめに掛かる諏訪子。翔夜の足にしがみ付き、翔夜の行動を制限しようとするが、翔夜は止まらない。

「こいつは少しの間だけだが、俺が鍛えた、それを馬鹿にされるのは、酷く気に食わない、それは何故か？　俺は自分がやった事で間違っていないと確信できる事に対して馬鹿にされるのが酷く嫌いでな？　俺がこいつを鍛えたのは間違いでも恥でもない、それを馬鹿にするって事は、間接的に俺を馬鹿にしたって事だよな？」

凶悪なまでに釣り上がっていく瞳は、元々鋭い瞳を、見るだけで狼狽させる程の威圧感を含み、何がそれほどおかしいのかわからないが、口元もそれに比例して釣り上がっていく。

周りの神達はその雰囲気と存在感に圧倒され、息をする事も忘れたのか、誰一人言葉を発することなど無い。周りの神が沈黙を守る、

いや、沈黙しか出来なかったこの場で、唯一聞こえてくるのは、諏訪子の翔夜を宥める声だけ。半分泣きべそをかきながら、もういいよう、もういいよう、と繰り返す諏訪子の顔を見て、ようやく翔夜は止まる。

そして、少しばかり怯えた表情の諏訪子に苦笑を浮かべ、悪ぃ、と軽く謝りながら、諏訪子を抱え上げる。翔夜に抱えられた諏訪子は、翔夜の首にかじりつくような勢いで顔を埋めて、またもや泣きべそをかいている。そんな諏訪子の様子に、困ったように苦笑を浮かべるが、少し神奈子に睨みつけるように視線を送り、回りの神を含めた全員に忠告を送る。

「軍神よ、諏訪子に感謝しろよ？　諏訪子に免じて許してやる、部下の教育は頭の勤めだって事を忘れんな？」

この場は見逃された、そう感じた神奈子は、そこでようやく思い出したかのように息を吸い込む。そして明らかに安堵した表情を浮かべ、翔夜に少し頭を下げる。この行動は、神奈子の部下である神達からすれば、異常な光景であったが、無論、そんな事は翔夜の知った所ではない。

「あ、あぁ、部下の非礼を詫びるよ、すまなかったね」

「おぅ、全くだぜ、んじゃまぁ、諏訪子はこの状態だしな、終戦後の処理は明日で構わねぇだろ？」

「あぁ、構わないよ、戦後処理の会談には私だけでそちらの神社へ行く事にするよ」

これ以上アンタの怒りを買うのは御免だからね、と翔夜がやる気の無さそうな雰囲気に戻った事で、軽口を軽く交わす様な神奈子の言葉を受け、にやりといつもの様に笑みを浮かべ、それはいい、と満足そうに頷く。

「ま、勝負したいってんなら、その処理が終わった後にでも一つ揉んでやる」
「言ったね？　後悔するかもよ？　その言葉」

神奈子の言葉に、にやり、と不敵に笑みを浮かべ、さてな？　といつも通り先を予想させないようにぼかしながら答えを返し、楽しそうな表情を浮かべる。

そこで、翔夜に抱え上げられている諏訪子が、無言で翔夜の首をきゅうっと締め付けるように、腕の力を強くしたのに気がつき、翔夜はそれに苦笑しながら、諏訪子の髪を落ち着かせるように一撫でし、改めて神奈子に向き直る。

「んじゃま、ケロ子が帰りたいみたいだからな、今日は帰るわ」
「あぁ、じゃあまた明日ね」

んー、と気の抜けた返事を返し、翔夜は風を纏って浮かび上がり、諏訪子の神社へ戻って行った。

後に残ったのは、翔夜の去った方向を見つめる神奈子と、安堵したように息を吐き、座り込む者まで出た神達だけだった。

じゅう　鍛錬、戦、恐怖に怒り（後書き）

神奈子の口調がこれから先安定しなさそうで怖い、お馴染みあっくすぼんばーです。
さて、出ましたね、神奈子……ごめんなさい、ホントに出ただけで終わってしまいました。
次回はきっと神奈子たくさん出ると思います、多分……きっと。

さて、今回の主人公ですが、普段諏訪子に無茶苦茶してるくせに、実は諏訪子はそれなりに大切と言う、この主人公の面倒臭い所が出ましたね、これも一つの情の形、と言う事にしておいてください。

そして、妙にだらだらと書きすぎた感が？
相変わらず話を上手く纏められない作者で、何か、ごめんなさいｏｒｚ

さて、次回ですが、メインは翔夜ＶＳ神奈子となると思います。
いや、戦闘はあっさりと終わる予定、なんですけどね？
相変わらすどうなるかわからない作品ですので……。

ではでは、今回はこの辺りで～

じゅういち　八坂神奈子、色んな意味で陥落

葉が色付いていた秋は終わりを告げ、気が引き締まるような冷たい空気と乾いた大気の元、晴れ渡った青く高い空を、神社の外が見える廊下にやる気なさげに座り、投げ出した足の太ももに両の手を置きながらぼけっと眺め、紫煙を天へ昇らせつつタバコを燻らせる男の姿があった。

黒い衣装に身を包み、青く晴れ渡った空をやる気のない瞳で見上げ、紫煙を吐き出している男は、遠成翔夜と言い、この神社にいる居候の人間だった。

つい最近、今年の秋に、翔夜が居候しているこの神社の家主である祟り神、洩矢諏訪子は、軍神・八坂神奈子と戦い、敗北すると言う出来事があった。そして現在、その戦いの終戦処理の為の会議が開かれ、今日でその終戦処理が終わる。色々と決め事を締結しているのだろうが、翔夜としては、そんな事は関係ないと言う様に、散歩へ出かけたり、縁側で茶を啜ったり、この様に外でタバコを燻らせたりといつもと変わらぬ生活をしてきた。周りが忙しく動いている姿を見て、自分も何かした方が良いのではないか、と考えるほどこの男の神経は細くない。

そんな男が、ぼうっとタバコを燻らせていると、何かを聞き取ったように耳を動かし、短くなっていたタバコを燃え散らし、処理して、誰かを待つように、その場で変わらず空を見上げる。

「ここにいたのか、探したよ」

「終戦処理の会議は終わったのか？　八坂」

突然翔夜へと掛けられた声に、翔夜自身は、驚いた様子も無く、その声に答えてみせる。声を掛けられたにも拘らず、視線は空へ固

定されている翔夜の態度に苦笑し、そのまま翔夜の隣へと腰掛ける。
翔夜に八坂と呼ばれた人物は、諏訪子と戦った軍神、八坂神奈子その人物、いや、神だった。諏訪子と違い、すらりと高い背に、肩に掛かるほどの長さの艶のある髪に、切れ長の瞳、出ている所は出て引っ込む所は引っ込んでいる理想的な体型。有り体に言えば、八坂神奈子は美人だった。それも、かなりの美人。しかし、そんな神奈子が隣に座ろうとも、翔夜の態度は変わらず、ぼけっとやる気の無い表情で空を見上げている。

「終わったよ、取り合えずね」
「そうか、そりゃあよかった」

まるで他人事のように話す翔夜に、神奈子はまたもや苦笑を浮かべて、翔夜を見るが、相変わらず空へ向けられている視線に釣られて、神奈子も空を見上げる。
雲ひとつ無い気持ちのよい青空。残念なのは、冬と言う季節柄、とにかく寒いと言う事だが、神奈子と翔夜、並んで座る二人に寒そうな様子は見えない。二人の間には特に接点が無く、話す事も特に無い二人の間には、鳥の鳴く声だけが通り過ぎていくが、それは決してこの二人の仲が悪いと言う事ではない、それは、この二人が一緒にいる雰囲気を見れば一目瞭然。話すのが気まずいと言う雰囲気ではなく、話したい時に話せばいいとでも言うような自然な雰囲気は、それなりに良い友人関係のような物を、見た者に感じさせる。

「遠成は……」
「あん？」

翔夜の隣に座る神奈子が、思い出したように翔夜へ話し掛け、沈黙が破られてようやく翔夜は空から神奈子へと視線を移動させる。
翔夜が神奈子に視線を移した時、神奈子の切れ長の瞳は真っ直ぐ翔

夜を捕らえており、そんな神奈子と翔夜の視線がぶつかるのは道理。
神に話し掛けられたとは思えないほどの気安さで神奈子に応える翔夜を認めると、神奈子は言葉を続ける。

「遠成は、私が諏訪子に勝って、諏訪子の領土を侵す事に何も感じてないのか？」

比較的真剣な眼差しで翔夜を見つめながら、投げかけられた質問に、やる気の無い気の抜けた表情から、神奈子の反応を見るように、にやにやと笑いを浮かべ、考える事無く答えを返す。

「別段何も？　俺は俺の生活が守られるなら何が起きても構わねぇ」

神すら圧倒した男が発した言葉は、これ以上無いほどに保守的で小さな男のように感じる言葉だったが、神奈子は翔夜の言葉を文面通りに受け取らなかったのか、嘲笑うでもなく、見下すでもなく、ただじっと翔夜の方を見て、翔夜の言った言葉の意味を考える。
神奈子は翔夜と接した時間は短いし、まともに言葉を交わすのも、これが2度目と言う所。だが、神奈子は遠成翔夜と言う男が、さっき発したような言葉を極平然と言う男ではないし、そもそも、そんな小さな事を言う男でもないと言う事を確信していた。

「それは……諏訪子と巫女達、それに民達が無事な生活が保障されるなら、諏訪子が負けようと、領土が侵されようとどうでも良いと言う意味で受け取っていいのか？」
「さてな？」

神奈子が翔夜の言葉を自分なりに解釈した答えを話すと、にやにやと笑っていた翔夜の顔が、にやり、と不敵な笑みへと変わり、その答えが本当かどうかわからないように、ぼやけた答えを返すが、

神奈子は、そんな翔夜を見て満足そうに笑う。
　要はこの男の言う生活と言うのは、諏訪子や巫女達に民達が生きており、非道な扱いを受けていない、翔夜自身が満足している現在の生活と言う意味。つまり、それが崩されなければ、領土を侵す事など、小さな事。翔夜の発言は、それをただ略し、その結果、ああ言う小物めいた発言になっただけ、つまりはそう言う事だ。
　翔夜を前にしていると、神奈子は自分が他の神を従えているという事実が、より自分を小さくしているような錯覚に襲われる。勿論、実際はそんな事はなく、他の神に尊敬され、信頼されている神奈子は間違いなく大きな存在であるのは間違いない。だが、そんな神奈子にそんな事を思わせる翔夜に、神奈子は更に興味を強くする。

「ねぇ？　遠成、あんた言ったよね？　終戦処理が終わったら勝負してやっても良いって」
「はぁん？　あー、んな事も言ったな」

　神奈子は楽しそうに笑みを浮かべながら翔夜に、戦いが終わった時言われた事を確かめる。神奈子の言葉に、太ももに置いていた手を身体の後ろへ回し、木の廊下に手をつき、身体を後ろへ傾け、浮かべていた不敵な笑みは姿を消し、何かを思い出すように視線を虚空に向け、神奈子の言った事を肯定する。
　翔夜の言葉を聞き、冬の冷たい風に髪を揺らして楽しそうに笑っていた神奈子の笑みはますます深まり、隣へ座っている翔夜へ上半身を寄せるようにして詰め寄る。

「じゃあ、やろうか、勝負」
「まぁ、別に構わねぇが……後で泣き言言うんじゃねぇぞ？」
「それはこっちの台詞だよ」

神奈子からの提案に、悠然と笑みを浮かべながら、神奈子の挑戦的な視線を受け止め、神奈子はそんな翔夜に楽しそうに笑い返す。
神と人間の闘いは、人知れず冬の青空の下、決定された。

それなりの大きさを誇った神社の境内と言うのはとても広い、と言うのも、神社と言う建物自体が大きい作りの為、その為の敷地がかなりの広さを誇るのも道理だ。
それなりの神社、と言うレベルでそれなのだから、諏訪子の住んでいる神社が、とても広いという騒ぎではないのは当然の事だろう。山を削られて作られた石階段を上った先にある境内は、最早広大といえるほどの広さを誇っていた。
その広大な境内に、現在は参拝客の姿が見当たらず、本来ならあるはずの、巫女の姿すらなかった。植えられた木の葉が散り、少し侘しさを感じる境内には、神奈子と翔夜が対峙し、その姿を外から観察するように、呆れた顔の諏訪子がいた。

「私に人払いまでさせてさぁ、やる事は闘いとか……どれだけ闘いたいのさ？」
「俺が言い出したわけじゃねぇし、元々はケロ子の所為だからな」

参拝客が居ないのは諏訪子が、今日の神社は近付くと危ないと人払いをした所為であって、その人払いをさせられた諏訪子の表情は疲れたような顔をしつつも、ここで勝負をする翔夜と神奈子に呆れた表情を浮かべている。
そんな諏訪子の言葉に、神奈子と対峙してもやる気の無い表情と声で翔夜が突っ込み、諏訪子は誤魔化すように笑いを浮かべる。
ため息を吐く翔夜は、乾いた笑い声を上げる諏訪子を放置し、改めて神奈子へと向き直る。背負う縄が神奈子の身体を大きく見せて

いるが、彼女の背丈は男の翔夜と比べるとそう大きくない。そんな彼女は、気の抜けたような翔夜の姿を見ても油断が生まれた様子は無い。その事に翔夜は内心、戦闘前の駆け引きが失敗した事を悟る。

戦闘では冷静さを失った者や、油断した者が負ける。これは最早ルールのようなもので、翔夜はその事を分かっているからこそ、戦闘前でもやる気の無い態度で挑む、これが翔夜の日常での雰囲気でもあるが、こと戦闘において、翔夜は誰が相手でも油断はしない、戦闘前でもやる気の無いスタンスで居るのは、翔夜なりの戦闘前の駆け引きと言う意味もある。翔夜の雰囲気に相手が驕ったり、油断したり、見下してくれればもうけもの、そう言う相手ほど倒す難易度はぐっと下がる。

伊達に神奈子が軍神と呼ばれているわけではないと言う事を、翔夜は悟る。相変わらず、自分を油断なく見据える神奈子の姿を認め、翔夜の顔に、にやりと笑みが浮かぶ。

「んじゃまぁ、面倒臭ぇが、やるか」

「私は楽しみで仕方が無いよ」

「翔夜ぁ、やるのはいいけど、顔に傷つけるのはやめてあげてよ？神奈子にはこれから人前に出てもらう事が多くなるんだから」

まるで神奈子が負けると言う事がわかっているように言われた諏訪子の発言に、神奈子は少しだけ顔を顰めるが、それも直ぐに消え、意識を翔夜へ集中していく。

そんな神奈子を見ながら、翔夜は諏訪子の言葉に、悠然と頷く。

「わぁってるよ、俺ってばほら、女性には優しいフェミニストだから」

「嘘だ！　だったら私の身体を青痣だらけにしないでよ！　ある意味顔に傷がつくより酷いよ！？」

翔夜の意見に、ノータイムで切り返す諏訪子の文句に、はいはい、と適当に応えると、翔夜は神奈子に意識を戻す。諏訪子との会話で油断も動揺も誘えた様子は無い。これ以上の茶番は無意味だと悟った翔夜は、さっさと始めようと声を上げる。

「じゃ、始め」

「やっとか、待ちくたびれたよ」

翔夜の開始の合図に、話を適当に流された諏訪子は未だに文句を言っているが、翔夜は華麗に諏訪子の話を聞いていない。その態度に変なスイッチが入って諏訪子が身を捩じらせていたのは、もう何の関係も無い話だ。

勝負開始直後に、何かを避けるようにして神奈子が真横に飛ぶ。直後、神奈子の耳に聞こえたのは、それなりの質量の物が凄まじい速度で通り過ぎる音。

その神奈子の行動を見て、へぇ、と翔夜は面白そうに、それでいて感心した声を上げる。

「最初の頃、諏訪子はそれで終わってたんだが」

「私も遠成の術を一度見ていなかったら避けられなかったよ」

感心したような翔夜の声に、神奈子も軽口で答え、にやりと笑みを交し合う。その後も、不可視の風の塊を射出するが、その全てを悉く神奈子は見極めていく。

途切れる事の無い風をやりすごしていく神奈子を観察しながら、魔力を練り上げていく翔夜の目に、突然一本の柱が飛んでくる光景が映る。それは二本、三本と増え、最終的に数えるのも億劫になる程の柱が翔夜へ向かって殺到していく。

翔夜の姿を隠さんばかりに飛来する巨大な柱に、翔夜は悠然と笑

みを浮かべ、神奈子を見据える。ここまでしても、神奈子は勝利を確信せず、相変わらず油断の無い瞳で、柱に覆い隠された翔夜を見据えている。

翔夜へ飛来する柱達は、あっという間に翔夜に衝突するが、その直前、大量の水が全ての柱を絡め取るようにして、一本一本の柱に渦巻き、翔夜への接触を許さず、全ての柱はその勢いを止められていた。

「冗談きついね、私の力なんだよ？　それ」

「まぁ、それでも届かないって事で一つ」

涼しい顔をして神奈子の放った全ての柱を受け止める翔夜に、一筋の汗を浮かべながら、引きつった笑いを漏らす神奈子に、翔夜は、にやにやと笑いを浮かべ、止めた全ての柱を一瞥し、神奈子が追加で柱を翔夜へ向けている中、翔夜は、柱を絡め取っている水を更に圧縮していく。

今度は柱と、純粋な神力で作られた弾が無数に翔夜へ向かっていくが、それを、じっと見つめ、圧縮していた水を一気に弾けさせる。

高圧縮させた水の破裂の衝撃で、翔夜の姿を埋め尽くしていた柱達は縦横無尽といわんばかりに、全方位へ向けて弾け飛び、翔夜へ向けられていた柱や神力弾を蹴散らし、最終的には何事もなく開始位置から動いていない翔夜の、傷一つない姿があった。

にやりと笑みを浮かべる翔夜へ、ならばと、神奈子は貫通に重きを置いた神力弾を生成、射出。貫通に特化すると言う事は、自然とその軌道は直線を描き、避けられやすいと言うのが特徴だが、それも目の前を埋め尽くすほどに放たれた弾に避ける場所など皆無。貫通させる弾の為、結界と言う面で守る類の防御は不可、触れた瞬間に防御を貫通して弾は目標へ当たる。

この様な弾を使う時点で、神奈子の頭の中で手加減という言葉は既に消えていた。それに恐らく、これも……と神奈子は思う。

「貫通弾ね……」

自らへ向かって高速で迫る神力の奔流を見据え、ぽつりと翔夜が呟いた瞬間、翔夜の眼前から、無数の閃光が幾重も筋を描き、その全てが神奈子の放った神力の弾を悉く打ち落とし、消滅していく。

紫電と神力がぶつかり合う中で、翔夜の上空に変化が現れる。小さな渦巻状のものが翔夜の上空に現れ、そして天が翔夜へ飛来する。

その様子を、じっくりと見物しつつも、魔力を練り上げ、天を押し返すほどの竜巻を形成、落ちてきた天は、途方も無い暴力を纏った風の奔流に押し返される。圧倒的な質量を持つ風を操る翔夜は、その中心で悠然と笑みを浮かべる。

意思一つで竜巻を形成し、神力を打ち落とす紫電を放ち、反射すら可能な水を操る翔夜の魔法技術はまさに圧巻の一言で、その様に、神奈子も内心舌を巻く思いだった。

事実、信じられない事に、翔夜の形成した竜巻は、天まで貫き、雲を蹴散らす程圧倒的な質量。これほどの事を成しえるのには、どれほどの魔力と技術が必要なのか、神奈子にも想像がつかない。

「まるで出鱈目だね」

「よく言われる」

そう言ってにやにやと笑う翔夜。実際に、神奈子の言った通り、翔夜は出鱈目、本来ならば有り得ないほどの事を先程から実行している。

本来力と言うのは質と言う物がある。力の質と言うものとしての格付けは、神力が一番強力で応用が利く力、それが通常の見解だ。その神力を先程から紙の如く打ち破る翔夜の力は、魔力、力の質として神力を越える事が出来ない魔力で神力を打ち破れる要因であり、翔夜が出鱈目だと言われる原因。

「まるで無尽蔵だね、その魔力は……」
「質より量、大は小を兼ねるとはよく言ったもんだな？」

量、それが神力の質をも上回る要因。単純な理論だが、それを成すと言う事は、通常ならばほぼ不可能な理論だ。神力と魔力の質の差を埋める為には、容易なことでは無い。例えば、神力を1使った術を魔力で破る為には10使った術でようやく相殺出来るかどうかと言う所。その様な力の差があり、尚且つ、神奈子クラスの神力を打ち破る為には先程、神奈子が言ったように、それこそ無尽蔵とも思えるほどの量が必要と言うこと。それだけの量の魔力を翔夜は所有していると言う事になる。

純粋に力だけの問題ならば、問題はあるが許容範囲内、性質の悪い事に、その膨大な魔力を繊細に操る技術も翔夜にはあった。

「手がつけられない、ってのはまさにアンタみたいな奴の事を言うんだね」
「酷い話だな？」
「今の私の状態の方がよっぽど酷いよ」

心外だと言わんばかりの翔夜の態度に、神奈子は苦笑を浮かべつつ、神力弾を形成、射出。その目的は翔夜だが、その途中で、爆散したように、一つ一つの弾が散らばり、翔夜の目の前でその面積を広げる。その様子を見ながら慌てる様子もなく、トン、と軽く足で地面を叩く。

その瞬間、突如、地面が意志を持つかのように翔夜の目の前に聳え立つ土の壁を作り、神力の弾を遮るようにして立ちはだかる。迫る神力の弾は土の壁に当たり、土を抉るが、抉れた場所からまた新たな土が盛り上がり、壁を埋めていく。視界の隙間も無いほど圧倒的な量の神力弾と言えども、抉れた先から修復される土の壁を破る

事が出来ず、避ける隙間も無かった神力弾はその全てを土の壁に無効化された。

悉く全てを無効化される光景を目の前に、神奈子が取れる行動は、もう多くない、貫通も駄目、量も無効化された、誘導は翔夜に避ける気が無い為意味が無い。有効かどうかわからない攻撃方法として、残されている方法は、神力を圧縮しての砲撃位しか残されていない。無論その事を理解している神奈子は、土の壁が現れた瞬間、既に圧縮の準備に入っていた。翔夜の存在する方向を見据えながら神力を圧縮していく神奈子。

だが、持てる全ての神力を圧縮していた神奈子の視界にあった土の壁が、突如爆散するようにして弾け飛び、そこから出てきたのは、圧倒的なまでの風の奔流を感じる竜巻。全てを飲み込む膨大な竜巻は、もう既に避ける受け止めると言った、そう言う次元を軽く飛び越えるほどに強大だった。その圧倒的な暴力を前に、神奈子は、ふっ、と笑みを浮かべ、圧縮を掛けていた神力を戻し、自らの身体を包み込むように纏わせた瞬間、神奈子の身体は風に包まれ、身体が浮き上がる。無論、神奈子は飛行する事は可能だが、神奈子を包む風はそれをさせてくれる程生易しい風ではなかった。

神奈子を包む風の奔流は天へと軌道を逸らし、神社の境内を傷つける事無く空へと進行方向を変えて上昇する。暴力を伴った風の奔流は神奈子の身体をさらったまま、天へと舞い上がり、そして霧散する。

自身の身体を引きちぎりそうな風の暴力が消え去った時、神奈子は、風の暴力とは違う、何か安心するような心地の物に身体を包まれている事を感じ、風で開けられなかった目を開く。まず最初に見えたのは、布で包まれた板の様に硬い何か、それが何かわからず、神奈子のほっそりとした指は、その板の様な何かに添えられ、視点を上げると、にやりと笑いながら神奈子を見下ろす翔夜の顔。

その事から考えられる自らの状態を自覚した神奈子は、少女の様に頬を赤く染める。

「俺の勝ち、だな？　何ならこれから守ってやろうか？　八坂」

所謂お姫様抱っこ、と呼ばれる状態で、悠然と笑みを浮かべた翔夜に告げられた言葉を理解し、神奈子は妙な安心感を感じると同時に、今までに感じた事の無かった羞恥心を感じる。だがそれは、不思議と嫌な感じはしなかった。

「か、神奈子……」

「あん？」

身を小さくしつつも、翔夜の胸板へ恥ずかしそうに顔を埋め、小さく呟かれた神奈子の言葉がよく聞こえなかったのか、風を纏い、神奈子を抱えて浮遊する翔夜から、聞き返すような声が神奈子へ落ちてくる。

「神奈子でいい……です」

小さく呟かれた声がようやく聞こえたのか、神奈子の言葉に、にやにやと翔夜は笑みを浮かべる。

「冗談だ、お前は強い、俺が守らなくても十分やっていけると思うぜ」

にやにやと笑みを浮かべながら、翔夜の言った言葉に、少し寂しそうな雰囲気を纏いながらも、認められたと思ったのか、神奈子は、赤みの抜け切れていない、頬で嬉しそうに笑いながら翔夜を見上げる。

と、そこで、下から、翔夜と神奈子へ文句を言うような声が上がる。

「こらー！　何やってんの！　て言うか、神奈子！　あんた飛べるでしょ！　さっさと翔夜から離れろ！　この女郎！」

両手を上に挙げ拳を作りながら、翔夜と神奈子、主に神奈子へ怒鳴る諏訪子を認めた翔夜は、にやにやと笑い、神奈子はますます顔を翔夜の胸へと埋めていく。そんな様子に、諏訪子は更にヒートアップし、翔夜はそれを面白そうに眺め、神奈子は諏訪子の言葉を聞き流しつつ翔夜の匂いを堪能する。

そんな光景が暫く続き、諏訪子の面白さを堪能した翔夜が満足し、諏訪子の元へ降り、最後に文句をぐちぐちと言われつつ、神と人間の勝負は人間の勝利で幕を下ろす事になった。

翔夜と神奈子の勝負の翌日以降、恥ずかしそうに翔夜の着流しの裾を握る神奈子の姿と、それに対抗するように、翔夜の手を握る諏訪子の姿が度々目撃されるようになったのは、特に関係の無い話である。

じゅういち　八坂神奈子、色んな意味で陥落（後書き）

どうも、あっくすぼんばーです。
戦闘描写って、難しいですよね、楽しいんですが、苦手です。
戦闘入れるたびに、毎回上手く書けてるのか不安で仕方ありません。

さて、今回、さくっと神奈子にフラグを立てた訳ですが、相変わらず口調が怪しいです。
そして、神奈子へフラグを立て終えた翔夜には、次回、京へ行って貰います。
ぐーやにはフラグ建設するかどうか未だに悩んでいます。

ではでは、今回は本編の様にあっさりとあとがきを切り上げておきます。
ではまた次回。

じゅうに　出発、旅の醍醐味は出会い、でもこんなのは面倒だ

木には青々とした葉が見せ付けるように風に揺れるうだるような暑さの季節、夏。二柱の神が暮らす神社へ翔夜が住み始めてから何百回目の夏か、翔夜自身にもわかっていない。何百回経験していても、この暑さに慣れる事はなく、そんなうだるような暑さの中、翔夜は毎年やっているように、川へ来て涼むように足を水に浸け、岩の上に座り、相も変わらずやる気の無さそうな瞳で、せせらぐ川の水を追っている。

いつもの様に、口にはタバコを咥え、紫煙を吸い込み、暑さを吐き出すように吸い込んだ紫煙を吐き出し、空気に溶けて消える紫煙の行く先へ、川のせせらぎから視線を移す。

「そろそろ、旅に出るかぁ」

翔夜が諏訪子の下に来て数百年、諏訪子をからかいながら生活し、妙に纏わりついてくる神奈子をあしらい、民達と世間話を兼ねた散歩をし、巫女達の仕事を手伝い、そうやって日々を安穏と過ごしてきた翔夜の心に、変化を求める心がまたもや首を起こす。ここへ来てからの生活を思いだす様に、目を細め空を見上げる。

そうしてふと、ここへふらりと来た数百年前の時を思い出す。

「確か、ここへ来た時もこんな季節だったっけか」

うだるような暑さに、うるさいと感じるほどに鳴いている蝉の声に、感じた強大な神力に、翔夜を見て笑う巫女、現れた神は小さな少女の神で……。

今まで出会い、別れた人物や、今も自分の傍に居る人物を思い出し、感じて、懐かしさがやってくる。

夏の暑さの中、涼むようにして冷たい水の川に足を浸け、のんびりと風情を楽しみ、今冷やしているスイカやキュウリが楽しみだ、そう思う今の平和な生活も、悪くは無い。翔夜はそう思う。

紫煙を吐き出し、短くなったタバコを燃やし、水に浸けていた足を上げ、だが、とも思う。翔夜自身は、そう言う日々を平和に暮らし、それで満足が満たされる男だったのか？　と自問自答。

「違うな、長めの休暇は、ここまでにするか……」

青々と葉が茂り、うるさいほどに鳴いている蝉の声を聞きながら、山間の水温の低い川で涼んでいた翔夜は立ち上がり、諏訪子と神奈子が治める領土を見渡せる所まで移動し、その全てを見渡し、瞳を細める。

随分と長い羽安めで、今やすっかり愛着の湧いたこの村を出て行くのは、少しばかり忍びないが、領土全域を見渡す翔夜の瞳は、既に次の場所への好奇心が宿っていた。にやり、と笑みを浮かべる翔夜は、この場所に来る前の好奇心に突き動かされて行動する、遠成翔夜へと戻っていた。

「ここへ来たのも似たような季節だし、ここを出て行こうと思ったのも同じ様な季節なら、丁度良いかもしれねぇな」

見納めだと言うように、川へ戻り、冷やしていたキュウリとスイカを持ち、キュウリを手にとって齧りながら、この村を出る事を諏訪子と神奈子に伝える為、山を下りていった。

「いやだ！」

「神奈子、落ち着きなって、って言うか離れろ女郎」

翔夜が帰って来て、夕餉の後、まったりと茶を飲んでいた諏訪子、神奈子、翔夜の3人だったが、現在、茶を放り出した神奈子が翔夜の腰にしがみつき、声を張り上げ、その様子に諏訪子が神奈子を諫めるように声を掛けつつ、鋭い目で睨みつけている。騒ぎの中心であるはずの翔夜は、まるで自分は関係ないと言う様に、神奈子を腰に張り付かせたまま茶を啜っている。

「何で出て行くなんて言うんだ!?」

そう、この騒動は、翔夜が夕餉の後、ここを出ると言った事が原因である。その翔夜の言った事実に、神奈子は慌て、諏訪子はやっぱりと言うような表情を浮かべていたが、翔夜が本気で言っていると見た神奈子が翔夜を引き止めるために、腰にしがみつき、そして現在の状況となっている。

滝の様な、と言う表現がぴたりと当てはまる様に、だばー、と涙を流しながら、嫌だ嫌だと言い続け、翔夜の腰にしがみつく神奈子に神としての威厳は微塵もなく、諏訪子も半分以上呆れが入った表情を浮かべている。

そんな周りの様子に、翔夜は茶を置き、静かに一言言い放つ。

「暑苦しい……」

「あうん……」

そっけなく一言呟くように行った後、しがみついていた神奈子を無理矢理に離れさせ、その辺りに転がしておく。口惜しそうに気持ちの残った声を上げる神奈子は、勢いのままに床を転がり、勢いが収まると、ぱたりとうつ伏せになり、動かなくなったと思えば、ぴくぴくと身体を震わせ、そこから、えぐえぐ、と子供の様な泣き声が聞こえてくる。

キャラが完全に崩壊している神奈子とは対照的に諏訪子は落ち着いている。と言うより、こうなる事がわかっていたように諦めた表情を浮かべている、と言った方が正しい。

「あーうー、やっぱり、こうなるんだねー」
「まーな、元々旅人だしな、俺」

ため息と共に吐き出された諏訪子の言葉に、翔夜は大きく頷き、意志が固い事を示す。元より、諏訪子は翔夜を止める気もないし、止めても止まらない男だと知っている。
未だにぴくぴくと身体を震わせ、嗚咽を上げる神奈子を翔夜と諏訪子は放置し、話は進んでいく。

「そろそろかなー、って予想はしてたけど、いざその時が来てみると、寂しいね」

寂しそうに、しかし、仕方ないなぁ、と言うように苦笑を浮かべながら言われた諏訪子の言葉に、翔夜はいつも通り、にやりと笑う。そして、胡坐をかいていた自らの膝を叩き、乾いた音が部屋中に響いたすぐ後、翔夜の楽しそうな声が未だにぐずっている神奈子と寂しそうに苦笑を浮かべる諏訪子へ向けられる。

「おら、めそめそしてんじゃねぇ、取り合えず今日で最後なのは変わらねぇんだ、飲むぞ、神奈子、諏訪子」

最後の締めだと言うように、翔夜から掛けられた言葉に、ぐずっていた神奈子は上体をむくりと起こし、寂しそうな諏訪子も、笑みを浮かべて翔夜の言葉に頷く。
二柱の神と一人の人間っぽいものによる宴会は、人数3人と言う小さな宴会だが、最高の盛り上がりを見せた。酒が入るまでは平静

を装っていた諏訪子の面は剥がれ、寂しいよう、寂しいよう、と泣き声を上げ、泣いていたはずの神奈子はそんな諏訪子を指差しながら笑い転げ、翔夜は暫くそんな二人を見ながら静かに酒を嗜んでいたが、そんな翔夜に二人が絡まないわけがなく、夏の夜、ひっそりと上げられた3人の宴会は、静まり返っていた筈の神社の巫女や住人を起こし、最終的に気がつけば、そこに住む住人を交えての大宴会となっていた。

そして翌日、これ以上無いほどにあっさりと、ふらりと現れた時に持っていたザックだけを持ち、去っていった。住人達や神が綴った伝承で、二柱の神と東風谷の巫女が愛した人間として、何千年もの間、永く語り継がれる事になった事実を翔夜は知らず、東風谷、と言う苗字が華苗の血筋の巫女の苗字である事も、翔夜は知らないままに旅立ち、翔夜が再び東風谷の巫女と再会し、その事を知るのは数千年も後の事だった。

翔夜が諏訪子の元を出て、早数年、翔夜が見ていた荒野のような大地は最早昔の事で、相変わらず黒尽くめで日の下を歩く翔夜の目の前には、まだ荒いが何度も人や馬が行き交い出来上がった街道らしきものがずっと続いている。翔夜の足が向かう先は、翔夜の視点でつい最近出来た京へと向かっている。

ここ数年、翔夜の行動と言えば、適当な村を見つけ、その村をふらふらと回り、その村で一夜を過ごせばすぐさま旅を再開する。時には迷わず野宿を選ぶ時もあり、本当に気の向くままに旅を続けていた。

紅葉が綺麗な山があると知ればそこへ行き、桜の綺麗な場所があると聞けばすぐさま見に行き、上手い団子が食える場所があると聞けば団子を食いに行き、とにかく一貫性のない旅。それを飽きる事

無く続け、今回京の話を聞いたのが切っ掛けで向かう事にした翔夜。
旅の間ずっと同じ様な服、と言うか、同じ服を着ていたのだが、その服に解れや破けと言ったものは見つからない。その最大の理由は、翔夜の身体から出ている霊力と魔力。何年にも渡ってそれらを浴びていた黒の着流しは最早一種の鎧と言えるほどの退魔性、対物理衝撃性を備えていた。それ故、翔夜は今までずっとこの黒の着流しを着てこれた。
相変わらずそんな黒一色で気ままな旅をしている翔夜が、ふと立ち止まり、山の麓を抜けるような街道で立ち止まり、森の奥に視線を向ける。
無論そこには木々が広がるばかりの光景が映っているだけなのだが、翔夜は何かを感じたのか、首を捻るようにして森の奥へ視線を向けている。

「はぁん？　殺気？」

翔夜が感じたのは極微量の殺気。それこそ熟練の戦士ですら見逃してしまいそうな微かな殺気。
無論、妖怪と言う存在がまだ横行するこの世界で殺気と言うものは特に珍しいものではない。翔夜が気にしているのは殺気と言うものではなく、翔夜が感じた殺気の量。何かを殺そうとしているには少なすぎる殺気、だが、何かを殺そうとも思っていないのに殺気を感じるわけがない。常時少しずつ漏れ出ている様な殺気の量が、翔夜には気になった。
そして変わらず静かに佇み、青々と多くの葉を風に揺らす木々の奥に広がるまだ見ぬ存在に対して、翔夜はため息を吐き、勘弁してくれと言うように首を振る。

「今俺、一応人間だしなぁ……でも面倒なんだよな……」

特に変化らしい変化がない草木茂る森に、時折通る人は見向きもしない。その中で、森の奥を見据えるようにして街道に突っ立っている翔夜は視線を集めているが、特に気にした様子もなく、諦めたように、晴天の空を仰ぎ見る。

そして、穏やかに己の黒髪を揺らす暖かなそよ風に、軽く舌打ちを一つ。

「面倒そうなら即座に回れ右、それがいい、我ながら名案だ」

やる気があるのかないのか、判断に困る言葉を一つ呟き、翔夜の足は街道を逸れ、そよ風に吹かれ、葉と葉が織り成す演奏が耳を満たす森の中へとその足は向けられた。

茂みを掻き分け、森に足を踏み入れた翔夜の目の前には、道の様な物が広がっており、不自然なまでに草木の生えていないそれは一直線に森の奥まで続いている。茂み一つ掻き分けた先に、森の奥へと続く道が隠れていた。それはつまり、昔は使われていたと言う事。使われなくなり、茂みが道を覆い隠すほどの年月を放置された原因としては、街道が便利になった為か、或いは……。

「この道を使えなくなった大きな原因がある、とかな？」

両脇を新緑で彩られた森の道を目の前に、着流しの裾からタバコを取り出し、いつもの様に一本抜き取り箱を仕舞い、火を点け紫煙を吸い込み、吐き出す。空気に溶けて消える紫煙を、やる気のない目で見送り、その目はこれから翔夜を待ち受ける面倒臭さも相まって、更にやる気なさげな瞳へと変わって行き、最後には紫煙と共にため息も吐き出す。

眉根を寄せ、タバコを加えたまま、そこはかとなく面倒臭そうな雰囲気を全開にしつつも、翔夜の足は森の奥へと進路を取り、その足を動かす。

「あぁ……面倒だ」

その言葉を最後に、翔夜は黙々と足を動かし、歩く事３０分、開けた場所に着くまで、更に２本のタバコを吸いきり、処理を済ませた翔夜の目の前に広がったのは、山には不自然なまでに広がる丘のような緑、その丘のような広場のような場所は、木に囲まれているが、その場所だけは木が一本も生えておらず、その真ん中にあるのは、鮮やかな黄色の花弁が特徴の花。それも数え切れないほどの数がそこに咲いており、その全てが太陽へ向くように方向を揃えている。

その様子はまさに圧巻、この時代に咲いている事があまりにも違和感を感じる太陽のようなその花の名前。

「向日葵……だと？」

鮮やかな黄色が広がるその光景に目を奪われつつ、呆然と呟かれたその花の名前。背が高く、黄色の花弁、その中心は遠目には黒く映り、種がぎっしりと詰まっている事が良く分かる。間違いなく向日葵と呼ばれるその花であった。その花が何故こんな所に咲いているのかは、翔夜には良くわからなかったが、これだけは間違いなくわかる。

「誰が向日葵を？　自然に咲いているとは考えにくい」

花と花が干渉しないよう、互いが互いの成長を阻害しないようにある程度の距離を置いて咲いている向日葵。これでもかと言うほどに可憐な花弁を咲かせる姿。何をとっても人の手が入っていないとは考えにくいほどに、その向日葵達は生命力が溢れていた。

向日葵畑に奪われていた目を横にずらすと、翔夜の目には今まで

入っていなかった小さな家が見える。

「時代錯誤な家だな……」

「悪かったわ、ね！」

明らかに、洋風の技術が入った外観を誇るその家を視界に入れた翔夜が、呆れたような声を出すと同時に、女性の声が聞こえ、特に驚いた様子もなく、翔夜は左へ半歩動き身体を半身にし、元の位置から身体を少しずらす。そこを恐ろしいまでの速度で何かが通り過ぎ、通り過ぎたそれは、地面が爆発したような音と共に停止。完全に停止したそれは、踵が地面を大きく抉り取っているその尋常ではない脚力以外は人間と何も形が変わらない足だった。この時代ではありえないスカートに包まれ、草鞋ではなく靴に覆われたその足の持ち主を翔夜の視線は辿る。

まず目に付いたのは、肩口までの長さの深い緑色の髪。次いで、妙に鋭い瞳に整った顔立ち、そして、抜群のプロポーションを予感させる肢体。

至近距離にあるその美人の整った顔立ちを前に、翔夜に動揺は見られず、代わりに浮かぶのは更に面倒臭そうな表情。

「お前みたいなのが居るなんてな、聞いてねぇ……面倒な」

「私みたいな美人に向かって面倒なんて、失礼な人間ね」

地面を大きく抉り取った踵をそのままに、軽口を交わしあう翔夜と女性。その姿だけを見れば滑稽な光景だが、翔夜は相変わらずやる気のない態度で、女性から発せられる濃い殺気を感じ取っていた。

そしてその殺気は、間違いなく翔夜が森に入る前に感じ取った殺気と同じものだった。それを感じ取った翔夜は面倒臭そうな雰囲気はそのままに、女性へ向かって、へらっと笑いかける。

「俺はここに迷い込んだだけって事にしといてくれ、んじゃま、そう言う事で」

軽く手を上げ、何事も無かったかの様に踵を返し、森へと翔夜は足を向ける。が、勿論そんな事は許される事は無く、数歩森へ向かった所で翔夜はその場にしゃがみ込む。しゃがみ込んだ翔夜の頭上を、先程と同じ様な速度で蹴りが通過していく。風を切る音と共に足が通過した事を確認した翔夜は、ゆっくりと立ち上がり、はた迷惑そうな表情を浮かべ、女性に向き直る。

女性は、そんな翔夜を見て嬉しそうに、にやり、と笑みを浮かべる。

「そんなつれない事を言わないで？　久しぶりのお客さんだし、貴方強いでしょう？　おもてなしするわよ」

「どう考えても歓迎されてるムードじゃねぇんだが……」

笑みを浮かべたまま、翔夜へ右拳を叩きつけるようにして突き出すが、ぼやく様に呟いた翔夜は、女性の腕が伸びきる前に左の掌で押さえ、腕を突っ張るようにして真っ直ぐに伸ばす。これから拳を突き出そうとしていた女性の右腕は、つっかえ棒のようにして押さえられている翔夜の左腕によって、折りたたまれた状態を維持させられ、それ以上伸ばす事を許されない。

更に力を込める女性だが、その腕はぴくりとも動かない。驚いたような顔をする女性だが、翔夜はその顔を見ても、特に変わった様子はなく、やる気のない表情で腕を棒のように伸ばすだけ。

「人と同じ形を取ってるなら、この状態で腕を伸ばす事は、ほぼ不可能だぜ？　身体の構造上そう言う風に出来てんだよ」

殴る、突き、呼び方は何でも良いが、そう呼ばれる行為は、腕が

伸びきり、拳が物に当たる瞬間が、最も大きな威力を発揮する。つまり、伸びきる前の拳にはそれほどの威力はないのだ。そして、折りたたまれた腕を、つっかえ棒のように真っ直ぐと伸ばした腕で押さえるという事は、拳を押し付けたまま縦に置かれた丸太を腕の力だけで押し潰せと言っているようなもの、それに比べて、押さえている方は拳をつっかえ棒の様に真っ直ぐ伸ばすだけ、こうして押さえる方が余計な力を使わず、且つ安全に相手の動きを封じる事が出来る。最小の力で最大の効果、力を振り絞って何かをするというのが面倒な翔夜らしい戦い方である。

そんな翔夜の戦い方、と言うより、あしらい方に、翔夜の目の前に居る女性は、ますます面白そうに笑みを深くする。狙った獲物は逃さない、とでも言うように、目を細め、翔夜を見据え、女性は口を開く。

「風見幽香、妖怪よ」
「遠成翔夜、一応人間だ」
「一応ね……的を射ていると思うわ」
「全く、初対面で何てこと言うんだ、打たれ弱いんだ、泣いちゃうぜ？」
「見てみたいような気もするわ、ね！」

にやにやと笑いながら言葉を発する翔夜に、笑みの形を変えないままに、幽香と名乗った女性は左足を、へらっと笑っている翔夜の横腹へ向かって跳ね上げる。

先程の踵と言い、翔夜の頭上を通った風を切る蹴りと言い、ただの蹴りではない事は一目瞭然。一撃当たれば軽く人が死ぬ蹴りだ、そんな蹴りが迫っているにもかかわらず、翔夜は相変わらずへらへらと笑みを浮かべている。

「残念」

短くそう一言、笑みを浮かべたまま翔夜が告げた瞬間、止められていた右手を払われ、一瞬、幽香のバランスが崩れる。その瞬間、幽香の右足を軽い衝撃が襲い、同時に地面の草をこする様な音が辺りに響いた時、幽香が気がついた時、彼女の視点は空を見上げていた。

自らが現在どのような状態なのか把握した瞬間、呆けていた表情を、はっと緊張させ、身体を跳ね起こす。そして、翔夜がいた所に幽香が視線を向けた時、そこには既に誰も居なかった。

その事実に、幽香は緊張して辺りを見渡すが、何かが襲ってくる様子もなく、拍子抜けした瞬間、彼女の後ろから翔夜の声が聞こえる。

「お前の相手は面倒そうなんで、逃げる事にするわ」

「!?」

その声に反応し、即座に幽香は後ろを向くが、誰も居ない。

「背中だよ、背中」

「背中って……何これ?」

幽香が背中に手を伸ばし、確かめると、彼女の指に何かが当たり、それを掴んで目の前に持ってきてみると、一枚の紙切れのようなもの、それが何なのか分からない幽香は首を捻るが、その疑問に、翔夜の声が答える。

「それは俺が作った、符を持っている相手へ自分の声を届ける符だ」

「へぇ……便利ね、貴方、陰陽師?」

「ま、そんな所だ」

曖昧に肯定する翔夜に、そう、と短く答え、幽香は警戒を解く、わざわざこんな物を残している人物が、未だにその場に残っているはずがない。彼女はそう判断した。

自らの髪を揺らす風に目を細めつつも、幽香は理解できないと声を上げる。

「こんな物を態々張る位だし、貴方ならあの瞬間、私を2回は殺せてたわ、何故そうしなかったの？　情けをかけたの？」

自ら言っている内にプライドを傷つけられたと思ったのか、幽香の表情は苦々しい表情へ歪む。彼女の現状は空の様に青々としたものではなく、暗雲立ち込める気分だった。

だが、そんな彼女の言葉を翔夜は否定する。

「何でそんな事俺が思わなきゃなんねぇんだ、ただ面倒だっただけだ」

大体、そんな崇高な気持ちなんざ既に磨耗した、と続ける翔夜は、何ともおかしそうに笑っていた。それを聞いた幽香は、翔夜が本気でそう思っていると理解し、呆れたような声を上げる。表情も、いつもは鋭い瞳が少し垂れ下がり、毒気を抜かれた表情へと変わる。

「面倒って、貴方人間でしょ？　人間が妖怪を倒すのを面倒臭がるなんて、聞いた事ないわ」

「なんだ？　やけに追求するな？　死にたかったのか？」

そういうわけじゃないけど……と続ける幽香の声に、彼女が持っている符から、翔夜の笑い声が聞こえてくる。翔夜の笑い声を聞き、幽香はため息を一つ落とし、何となく辺りを見渡すが、特に変わらず、静かな森の音だけが幽香を包んでいた。

「ま、無駄話はここまでだ。俺も目的があるんでな、その符、燃やさせてもらうぜ。縁があるならまた会うだろうよ」
「その時は心ゆくまで相手して欲しいわね」
「やだね、めんどい」

そんなやり取りを最後に、翔夜の声が聞こえていた符は、突如発火し、それを慌てる様子もなく手を離し、幽香は符が燃え尽きる様子をじっと見据え、燃え尽きた瞬間、翔夜の手がかりが完全になくなった事を悟る。

花の妖怪、風見幽香が生まれてから今まで、彼女が目をつけた人間が生きて帰れた事はない。幽香自身が気分ではなく見逃した事はあっても、狙った者は逃した事は無い。その事を思い幽香はため息を零す。

まともに一撃当てる事無く、気が付いた時には地面に転ばされ、目を向けると逃げられていたと言う、状況的にも事実としても、風見幽香が生まれてから初めて敗北を味わった日は、夏にしては比較的気候の穏やかな昼下がりだった。

向日葵達の慰めの声に笑顔を浮かべながら、幽香は自らの家へ帰っていった。

事実上の敗北を、幽香にプレゼントした翔夜は、全力で山を降り、符を通じて幽香と会話する頃には、街道まで出て、のんびりと歩きながら、幽香と会話を交わし、符を燃やした現在は、街道を通る旅人などの休憩所、所謂茶屋にて、気候の穏やかな夏の季節を感じつつ、茶を啜っていた。

やる気の抜けきった瞳で、気持ち良さそうに風に吹かれて揺れる街道脇の雑草を眺めながら、お茶を啜るその姿はつい先程まで妖怪

に目をつけられていた人物と一致しない。

「ああ言う奴は無駄に強くて面倒な場合が多くて困るな」

黒髪を雑草と同じ様に、穏やかな風に揺らしながら、呆れたように呟く。そして、啜っていた茶を置き、運ばれてきた団子を一口。

「うまいな」

ぼそりと呟いた翔夜の一言に、従業員である女性と、店主と思われる男が、礼を述べてくる。それに対して、へらっと笑みを浮かべ、ひらひらと手を振り、翔夜は団子に集中し、３つ刺さっている内の二つまでを腹の中に収め、団子を皿に置き、茶を手に取り一口啜る。

先程の殺伐とした空気と比べて、穏やかな時間が流れる現状を感じて、平和だ……と一言呟き、団子に舌鼓を打つ。

平和の中で食べる団子などすぐに無くなるのがオチであり、３串あった団子は、あっという間に翔夜の腹に納まり、代金を着流しの裾から、じゃらり、と出し椅子の上において立ち上がり、店主や従業員の女性に礼を言う。

「うまかった、機会があればまた寄らせてもらうぜ」

「へい、ありがとうございます！」

「ありがとうございましたー」

店主と従業員の声を背に受けて、翔夜はザックの紐を右手に持ち、そのまま右肩に担ぎ、街道に出る。

高く上がる太陽を見上げ、手を上に上げて気持ち良さそうに伸びをし、その拍子に揺れるザックにバランスを崩されたような様子もなく、腕を下に下ろし、腕の力を一瞬弛緩させ、そのすぐ後にザックを担ぎ直した翔夜の顔は京のある方向へ向けられていた。

勿論、その瞳は好奇心溢れる楽しそうな瞳の色が浮かんでいる。

「さぁて、何があるかねぇ？　この世のものとは思えない程に美人の姫が居るって噂だけどな？」

明るい日の下で、くつくつと笑いながら興味深そうにそう漏らす翔夜の姿は、黒で固められた姿も相まって視線を引きつけていたが、当然ながら、翔夜に気にした様子はなく、風に揺れる雑草が人の視線が集まった所で、風に揺れる事に変わりは無いように、翔夜も、人の視線が集まった所で自分のやる事は変わらないと言う様に、ゆらりゆらりと歩みを再開する。

「京かぁ、中々面白そうじゃねぇか」

ゆらりゆらりと歩きながら、翔夜は、にやりといつもの笑みを浮かべ空を見上げる。

もくもくと、浮かび上がる入道雲が目を引く夏の昼下がりの青空、人間っぽいものが京に到達するまで、あと少し、面倒臭がり屋で気分屋で、だがやる時にはやるかもしれない、そして不器用で地味に優しいかもしれない長生きの人間っぽいものは京で、何が待っているのか？　ただ純粋にそれだけが楽しみで、変わらずゆらりゆらりと歩を進める。

そんな存在がゆらりと街道を闊歩する。今日はそんな夏の昼下がりの一日だった。

じゅうに　出発、旅の醍醐味は出会い、でもこんなのは面倒だ（後書き）

というわけで、かなり遅くなりましたが、更新です。
これから多分、こんなのんびり更新が多くなるとは思いますが、どうかご容赦をｏｒｚ

今回、幽香が出てきましたが、彼女も攻略対象にするかどうか微妙な位置づけです。
なので、さわりだけにしておきました。
ただ単にガチ戦闘に入ると長くなりそうな予感がしたからなんですけどね……。
それに接近戦は後にとっておきたいキャラが居るのです。
ちなみにそれが誰だかは、一応内緒と言うことで……何となくわかりそうだとか思った人は、出来れば内密に、よろしくです！

所で、ＤＩＶＡ　ｅｘｔｅｎｄが予約開始しましたね、作者は店舗特典が明らかになってから予約しようと思ってるので、現在情報収集中です。
もし何かそう言う情報がありましたら、教えてもらえると、私は喜びます、それも、凄く、具体的に言うなら座っている椅子の上でトリプルアクセルの後ムーンサルト決めるぐらい。

まぁ、関係ない話はここまでにして、次回は翔夜が京に入ります。
そこで誰と出会うかは、まぁ、お楽しみと言う事で……。
ではでは、また次回お会いしましょう！

あ、情報くれる方は作者にメッセージ送りつけても良いので、よろしくです。

仕方ねぇな、情報恵んでやるから感謝しろよと言われましたら、問題なくスライディング土下座と共に謝辞を述べさせて頂きます。
私のＰＣの前で。

じゅうさん　京で陰陽師、仕事干され、後スキマ

この時代、京と呼ばれる場所が国の中心だったこの時代、帝と呼ばれた人物が暮らす場所の下、貴族でもなんでもない、普通の一般市民が暮らす場所、そこに何の変哲も無いあばら家が存在していた。

そのあばら家に変わった所は無い、所々穴が開いているような木が使われている以外は、民が暮らす家とそう変わらない建物。

いや、素材がマシなだけ周りの家の方がまだマシとさえ言える。

そんなあばら家に、ある存在が住んでいた。少し前に京にふらりと現れ、誰も使っていなかったこのあばら家に住み着いた人物。

本人は流れの陰陽師だと名乗り、その談はまさしく本当で腕も悪くない、それ所か、この当時最高の陰陽師といわれていた者を凌ぐほどに素晴らしい陰陽師として、瞬く間に有名になり、一時は依頼が数え切れないほど来た事もあったが、今は閑古鳥が鳴いているように誰も近寄らない。

その理由は単純で、あばら家に住み着いたこの陰陽師は、男なのだが、容姿はそう悪い方ではない、少し鋭い瞳にさえ目を瞑ればそれなりに良い方に入る。

しかし、身形は良かろうとも、態度や言葉遣いがかなり悪い、貴族に対して膝を折らない、自分の気が向かない依頼はどんな者からの依頼だろうと蹴る。それは貴族であろうと平民であろうと変わらなかった。

そんな陰陽師に付いた評判は、腕は京一だが、口が悪く、分を弁えない陰陽師、と言ったもの。

貴族に対してその様な態度を取っていれば、当然の事ながら、刺客が送り込まれる事があるわけだが、その全てを細切れにされて、送り返されると言う事を何度も続けられては最早不干渉と言う形を取るしかない。

出来る事と言えば手を回して仕事を干す、と言う嫌がらせ程度の

事しか出来ない。
そんな、ボロいあばら家に居を構え、超一流だが仕事を選び態度が悪い陰陽師の男の名前は、遠成翔夜と言った。

噂の不良陰陽師、遠成翔夜がふらりと京に姿を現し、あばら家に居を構えてから数年。季節は過ごしやすい春を迎えた所で、桜が咲く直前の時期、気候は穏やかで、昼寝には最高の季節。
不良陰陽師であるこの男も例外ではなく、自らの家であるあばら家の中央、その地べたに、不釣合いなまでに綺麗な敷布団を敷き、これまた不釣合いなほど綺麗な掛け布団に包まり、惰眠を貪っていた。
その寝具の気合の入れようから、不良陰陽師と呼ばれる翔夜は睡眠を如何に大事にしているかがうかがえる。

「あ〜っ！　眠ぃ、もう一眠りすっか……」

包まっていた体勢を仰向けに戻し、仰向けに寝たまま腕を伸ばし大きく伸びをし、言葉と共に伸ばした腕を後頭部の後ろで組み、言葉通りもう一度夢の世界へ旅立とうとした所で、翔夜の眉がひくりと動く。
そのまま無言で身体を起こし、布団を片付け、徐に玄関の引き戸を開け、外へ出て行く。
スカスカの木で出来た引き戸は軽く、カラリ、と軽い音を立ててあっさりと開く、外へ出た翔夜の視界には、人があまり映らない。
翔夜のあばら家は京の中心から少し離れた位置にあるため、外を歩く人もそう多くない。
相変わらずの光景を、ざっと見渡し、京の中心部、最も賑わっている方へ、ゆったりと歩き出す。

「あ～……また面倒臭そうなのに……」

ぼそりと要領の得ない事をぼやきながらも、翔夜の歩みは迷う事無く、そして止まる事無く、京の中心街へと向けられている。

いくらゆったり歩いていたとしても、そこまで迷い無く歩いていれば、京の中心に到達する事など、すぐに到達する。

途中誰に話し掛けられる事も無く、さっさと京の中心まで到達した翔夜は、相変わらずの活気溢れる中心街を見渡す。

多くの陰陽師が居を構える京は、比較的安全な方に入る、陰陽師と言う存在が、妖怪達にとってストッパーのような役割を果たしているからだ。それにより、この京には、妖怪と言うものを見た事が無いという子供も多くいるし、大人でさえ見た事が無い者もいる。

そんな平和な京の町並みを見渡し、翔夜は深くため息をつく。ため息の後、活気溢れる人波の中を歩く、翔夜と言う不良陰陽師は、ここで暮らす平民の中でも顔が通っている。それも、良い意味の方でだ。

良くも悪くも、翔夜の態度は誰に対しても同じ態度なのだ、そして翔夜の身分は一応、陰陽師と言う身分。

この時代、陰陽師といえば、貴族お抱えの陰陽師か、それとも昔から続く由緒正しき家系と言う奴が多く、平民には何の関わりも無い高い身分だと言うのは言うまでも無い。そんな時代の中、陰陽師である翔夜は平民に対しても貴族に対しても変わりない態度は、平民達には受けが良かった。つまりはそう言う事。

貴族や帝それに連なるものに手を回され、平民達も翔夜に仕事を回す事があまり出来ず、多少なりとも罪悪感らしきものがあったのだが、それすら気にした様子も無く、接してくる翔夜は、今や京の平民達の人気者となっていた。

「おう、なまくら様、今日は良い野菜が入ってんだけど、どうだい？」

「おー、大将、悪ぃけど今は良いや、間に合ってんだよ」
「そうかい、まぁ、なまくら様ならいつでも安くすっから、気軽に寄ってくれよ？　何なら冷やかしも大歓迎だ」
「冷やかしに八百屋による奴が何処にいんだよ、まぁ、また寄らせてもらうぜ」
「あいよぅ！」

苦笑と共に、八百屋の親父に別れを告げる翔夜。
八百屋の親父が翔夜に言った『なまくら様』と言うのは、京の平民達の間で付けられた翔夜の愛称である。
素晴らしい切れ味を持つ刀も使われなければ鈍らと同じ、それと同じ様に、京一の腕を持っていたとしても、振るう刃を振るったり振るわなかったりする翔夜にぴったりの愛称。そして人柄も、温いと言うか、大雑把で細かい事を一々気にしない、そう言う事を総合しての『なまくら様』と言う愛称。
何気に呼ばれている本人も気に入っていたりする。
それからも、魚屋のおばちゃんに声を掛けられ、茶屋の従業員として客引きに出ている女性に話し掛けられ、大工の棟梁に話し掛けられ、最近店長になった呉服屋の若い男に話し掛けられ、人気の少ない通りでは遊郭の客引きの艶のある女性に話し掛けられ、と中心街に出てからと言うもの、あらゆる人に話し掛けられ、翔夜は思ったよりも先に進めない。特に、居酒屋の大将等は翔夜が常連である為か、話が長く、居酒屋の店員も一緒になって話し掛けてくるため、思いの他時間を食った。
だが、それも落ち着き、翔夜の歩みが段々と止まらなくなり、人気がほぼ完全に無い京の外れの通りまで来て、翔夜の足は止まり、誰も居ないか確認するように、辺りを見回す。

「よし、誰も居ねぇな」

その場で人気がゼロである事を確認すると、翔夜は、更に前進する……と見せかけて、あばら家からずっと着いてきている翔夜の後ろに居る存在の方へ振り向き、右手を振り上げ、能力を起動。

刹那の瞬間に何も無い空間へ向かって突き出された右手は、何も無い筈の空間の中に吸い込まれる。いや、何も無い筈の空間を叩き割るようにしてねじ込まれたと言った方が正しい。

そして、何も無い場所を叩き割った更に奥に翔夜の手はめり込み、何かを掴んだ瞬間、翔夜はその手を勢い良く手前に引く。

何かがずるりと出てきた時、何もなかった筈の空間は一人でにぱっくりと縦に裂け、その奥には無数の瞳が覗く、見る人によっては不快感を感じるその光景から出てきて、まず最初に目に付くのは、流れるように艶のある金色。

「きゃっ」

なにやら可愛らしい悲鳴のようなものと共に出てきたのは……。

「妖怪の……女？」

そう、女性だった、紫のドレスに、金色の艶のある美しく長い髪、整った顔立ちは今現在驚きに染まっている。

手には日傘を持った、特徴的だが、非常に美しい女性。その人物が、裂けた空間からずるりと翔夜に引っ張られ、姿を現していた。

「随分可愛らしい悲鳴だったな？」

目の前の女性の手を掴み、にやにやと笑みを浮かべ、女性を見据える翔夜。そんな翔夜の態度に、頬を赤く染めながらも、こほん、と小さく咳払いをして、掴まれている手とは逆の手で扇子を広げ、口元を隠す。

「お、お初にお目に掛かります、私、境界の妖怪、八雲紫と申しますわ」
「スルーの上に誤魔化しきれてないとか、どうよ？」
「そ、そこは流す所じゃないの！？」

何事も無かったかの様に振舞おうとする、八雲紫と名乗った妖怪に、クツクツと笑いながら軽口を叩く。
翔夜の言葉に、恥ずかしそうに頬を色付かせ、むきー、と翔夜に食って掛かる紫と名乗る妖怪。

「大体お前、俺が京に住み始めた時から見てただろ」
「き、気付いて……」
「ったりめーだろ、気付かいでか、俺は一応陰陽師だぜ？」

驚きで紫の表情が歪むが、そんな紫に翔夜は呆れたように半眼になり、ため息と共に台詞を吐き出す。
気が付いて当たり前、そう言わんばかりの翔夜の表情だが、紫にはそんな翔夜の言い分の方が信じられなかったのか、掴まれていた手を払いのけて、改めて翔夜に詰め寄り、翔夜の言っている事が本当かどうか確かめるように、翔夜の瞳を覗き込む。

「私は京の中心まで入り込んで陰陽師に気が付かれた事は無い、貴方の言う事が当たり前なら、私は貴方を尾ける事すら出来なかったはずだわ」
「ならそいつらの実力が低かっただけだろうよ」

紫の目の前に居る翔夜は、事もなさげにそう言うが、紫が能力を使い、気付かれなかったと言っている対象は、京の中でも優秀と言われる陰陽師達を指して言っている。

つまり、それらを差し置いて、紫の存在を気取った遠成翔夜と言う陰陽師は、それだけで京に存在するどの陰陽師よりも優秀と言える。そしてその裏付けとして……。

「嘘は言ってない……そんな馬鹿な……」
「勝手に能力行使して人の心中読むんじゃねぇ」

紫は自身の能力を駆使して、翔夜の心中を覗き見たが、その心中に嘘はなく、ただありのままを言葉にしている事が理解できた。その事実が、紫にとって、更に信じられない事実として圧し掛かってくるのと同時に、遠成翔夜と言う陰陽師を興味本位だけで観察していた自分に迂闊さを感じる。

そして、妖怪達にとって、そして自分にとって脅威となる目の前の男に対して、一気に警戒レベルを引き上げる。

先程の醜態とは打って変わって、翔夜を警戒する紫に、翔夜は思わず苦笑を浮かべる。

「そう睨むな、別にお前をどうこうしようなんざ思ってねーよ」
「でも陰陽師なんでしょう？」
「お前を滅する依頼なんざ受けてねぇし、俺今京の権力者から仕事干されてるからな」
「貴方を動かさないの？　京って案外馬鹿な人種が多いのね？」
「くはっ、言うねぇ」

辛辣な紫の京に存在する権力者達に対する評価に、翔夜はおかしそうに笑みを浮かべる。

解せない、と言うように眉を歪める紫は、警戒する必要もなくなった翔夜を前にして、警戒を解き、改めて翔夜と言う男を観察する。

顔は、いつも見ていたが、悪くは無い、そして身体から漏れ出ている大量の霊力、収めきる事が面倒なのだろう、翔夜はいつも霊力

を垂れ流している。それでも枯渇する事が無いのは、無尽蔵に湧いて出ているとしか思えない。そして表情や雰囲気は、軽いと言うか、何処まで行ってもやる気がない。本気と言う言葉が似合うようになればきっとそれは何かが終わってしまった時だろう。そうでなくても、本気と言う言葉が似合う状況に翔夜が陥った場合、相対してしまった相手は終わってしまうだろう、色んな意味で。

そこまで紫が観察した所で、用は無くなったと、勝手に判断したのか、翔夜は帰ろうと踵を返す。

「んじゃ、もう用はねぇな、これからは京に侵入すんなよ、滅されるぜ？」

「あら、私はそこまで弱くありませんわ……ってまだ用は済んでっ！？」

紫がその場を立ち去ろうとしている翔夜を引き止めようとした所で、紫は翔夜の姿を一瞬見失い、気が付いた時には地面に引き倒され、両手を翔夜の片手に頭の上で拘束され、地面に貼り付けられるようにして押し付けられる。

紫をそんな状態にした翔夜は紫の上にのしかかるようにして跨って、にやにやと笑みを浮かべて紫を見下ろしている。

「な？　京は危ないだろ？　このまま俺に滅されるのも運命か？」

「……好きにすると良いですわ、貴方より弱くても妖怪、陰陽師に屈する事はありませんわ」

にやにやと見下ろしてくる翔夜に、身動き一つ出来ない筈の紫は、屹然と言い放つ。が、それすらも面白そうに翔夜は紫を見下ろす。

「ま、最初にも言った通り、俺はお前をどうこうする気はねぇ、ただ京は危ないって教えただけだ」

「あら、でも私は貴方を観察する事をやめませんわ？」
「へぇ……ならそんな気が起きないように、俺がここで食ってやろうか？」
「っ！？」

紫の手を拘束している手とは逆の手で、紫の頬をゆっくりと撫で、白くハリのある紫の頬を堪能しながら、自らの顔を紫の顔に近づけ、そのまま紫の耳元で囁くようにして台詞を吐き出し、獰猛な男としての笑みを浮かべる。
そんな翔夜に、これ以上無いほど頬を赤くしながら、紫は、ぎゅっときつく目を瞑り、身体を震わせる。
これから自らを襲う事を想像し、身を固くしつつも、小刻みに震えながら覚悟を決めようとしていた紫から、ふっと掛けられていた圧力がなくなる。
その事にきょとんとしながら、身を起こすと、翔夜が紫に背を向けて、歩いていく所だった。

「ちょ、ちょっと！」
「これに懲りたらもう来んじゃねぇぞ、でないと次はホントに食っちまうかもな？」

翔夜を呼び止める紫に、言葉を投げかけながら、首だけ後ろを振り返り、普段のやる気の無い表情からは想像も出来ないほどに、野性的で、全てを飲み込むかのような、壮絶で獰猛な笑みを浮かべ、紫が黙った所で、満足そうに翔夜は元来た道を戻るようにして歩みを再開した。
そして翔夜が紫の前から姿を消してから数分、その場にへたり込むように座り込んだ紫は何かを思い出す様な表情を浮かべ、段々と頬を赤く色付かせる。

「惚れたわ……」

翔夜が居なくなり、完全に人気の無くなった通りで、そう呟いた紫の脳裏には、自らを引き倒して囁いた時と、その場を去る時に浮かべた翔夜の獰猛な笑みが浮かんでいた。

春眠暁を覚えず、こんな言葉が脳裏に思い浮かび、そして消える。眠気で翔夜の思考能力が低下している現在は、境界の妖怪と名乗った八雲紫の出来事が起こってから次の日の朝だった。

相も変わらずやる気の欠片も感じられない表情を浮かべ、布団に寝転び惰眠を貪る翔夜の姿が、京に移ってからの翔夜の家である、あばら家にあった。

昨日の紫との会合から、視線も妖気もさっぱりと感じなくなった現在、邪魔者は消えた、と幸せそうに、引き続き惰眠を貪ろうと、捲れていた掛け布団を引き上げ、仰向けだった体勢を右を向くようにして体勢を変えて寝転び、目を閉じた所で、もう既に慣れた妖気を感じ、その瞬間、翔夜が背を向けている空間が裂け、無数の瞳が見えるその空間から、昨日の出来事で懲りたはずの妖怪、八雲紫が姿を現す。

「しょ～う～やっ♪」

音符マークでも語尾に付きそうなほど、いや、音符マークが付いた上機嫌な声と共に翔夜の寝ている布団の中に侵入し、そのまま、背を向けている翔夜の背中に抱きつくようにしてへばり付き、そのまま腕を翔夜の首に回し、翔夜の顎の下辺りで、がっちりと腕を組む。

紫の電光石火の早業に、身体を横たえ、紫にへばり付かれるしか

無かった翔夜の顔は、如何にもうんざりしたような表情が浮かぶ。

「おい、昨日言わなかったか？」
「ちゃんと聞いたわ、でも私はそれでも良いと思って来たの、さ、早く私を……た・べ・て？」
「気持ち悪い」
「酷い話ですわ」
「こんな所でも俺の常套句が取られるのか……」

翔夜の背中にへばり付きながら、にんまりと笑みを浮かべ、翔夜の常套句を拝借する紫に、呆れた様にため息を吐き出す翔夜。
そんな翔夜を差し置いて、なにやら紫はすんすんと鼻を鳴らし、その後大きく息を吸い込み、吐き出す。

「これが翔夜の匂い……ちょっと興奮するわね」
「おいこら、何してやがる」
「ちょっと貴方の匂いを堪能してるだけですわ、貴方の匂い、私は好きですわ？」
「あー、そうかい」

何やら諦めたようにため息を吐きながらも、翔夜は特に気にした様子も無く、紫の存在を意識の外に追い出し、惰眠を貪ろうと瞳を閉じる。
しかし、構わず睡眠に入ろうとした翔夜の身体を、紫の手が這い回り、弄る様にして着流しの中に入ってきた紫の手に、翔夜の睡眠は完全に中断させられる。

「このやろ、てめぇ、何しやがる」
「はぁはぁ、私を食うんでしょ？　翔夜」
「てめぇを諦めさせる為の狂言だっつーの！」

「って言うか、もうそんな事どうでも良いわ、食べてくれないなら私が……っ！」
「やらせるか！」

何やら妖しく蠢く紫の手に対抗するように身体を動かし、布団の中で妙な取っ組み合いが始まる。
身体を這い回る紫の手を、牽制するように翔夜も手を動かし、何とか身体の向きを反転させ、紫と向かい合う様にして体勢を変える。
そして次々に襲ってくる紫の手を交わし、勢いが緩まった所を取り押さえ、同じ要領でもう片方の手を押さえ込み、そのまま紫を下に持って行き体の位置を入れ換え、昨日と同じ様に紫にのしかかり、最終的には紫自身を押さえ込む。
布団の中での奇妙な攻防を制したのは、やはり翔夜だったが、その表情は、如何にも疲れたような表情。逆に、紫は何処か恍惚とした表情で、敷布団に自らの金色の髪を扇の様に広げ、その姿は上気した頬と潤んだ瞳、笑みを浮かべる可憐な口元も相まって、非常に扇情的に映る。

「あぁ……遂に食べられてしまうのね」
「何飛んでやがる、食わねぇよ」
「そんな、生殺しはあんまりじゃない？」
「ホントに食っちまっても良いのか？」

行っていた事を撤回するように顔を寄せ、笑みを浮かべる翔夜に、紫は頬を染め、身体の力を抜く。

「きて……」
「押しても引いても面倒な奴だな」

囁くような、それでいて嬉しそうな声を漏らし、ゆっくりと瞳を

閉じる紫を見下ろし、げんなりとした表情を浮かべる翔夜。
　呆れた様な表情を浮かべる翔夜だが、何か縛られる事が嫌いな翔夜だからこそ、紫の誘惑をにべも無く蹴っているが、普通の感性を持つ男なら、喜んで飛び掛っている。そう思わせるだけの色香が紫には備わっていた。艶のある長い金色の髪に、ドレスの上からでもわかる豊かな胸、ほっそりと長い手足にくびれのある艶かしくも細い腰周り、美しい顔立ちは頬を赤く色付かせ、瑞々しい唇からはチラチラと赤く小さな舌が見え隠れしている。普通の男の理性を吹き飛ばすほどの色香が確かに備わっているのだ。
　翔夜はじっと紫を見下ろし、冷静にそう判断を下す。

「まぁ、お前が美人なのはわかったが……」
「なら、そんな美人を自分の物にしたいと思わない？」

　熱い吐息を吐き出しながら、小さな赤い舌で唇を舐め、瞳を細める紫の姿は、これ以上無いほどに扇情的で妖しい雰囲気を纏っている。
　だが、それでも翔夜は揺れる事無く、面倒臭ぇ……と半眼で呟く。と、そこで、中身がすかすかの木で出来た引き戸が、カラリと軽い音を立てて開く音が翔夜の耳に届き、そのすぐ後、人の声、もっと正確に言うならば、少女と思わしき声が翔夜の耳に届く。

「すみません、陰陽師の遠成さんはいらっしゃいます……か？」
「あら、見られちゃったわね？　これって既成事実になるかしら？」
「なるか、ばかたれ」

　黒く長い髪に、身なりの整った服の少女が、翔夜の家であるあばら家の玄関の戸を開け、現在の翔夜と紫の状態を目にして、完全に行動を停止していた。
　そんな少女を前にして、紫は嬉しそうに声を弾ませ、翔夜は逆に、

げんなりとため息をつくように台詞を吐き出し、互いに軽口を交わしあう。

翔夜と紫の現状を、第三者である少女が見た場合、それはどんな風に少女の目に映るのか、それは、みるみる内に赤くなる少女の顔色を見れば一目瞭然だろう。

「す、すすす、すいませんでした！」
「あら、真っ赤、処女ね」
「お前もだろ」
「良いのよ、私は、貴方に奪ってもらう予定だもの」
「恥ずかしげも無くよくそんな事が言えるな」
「恥ずかしがった方が貴方の好みだった？」
「ふぅむ、まぁ、ぐっと来るんじゃないか？」
「貴方に……その、あげ、たくて……」
「遅いわ、馬鹿野郎が」

如何にも恥ずかしそうに、そしてたどたどしく、初々しい少女の様に言葉を詰まらせる紫を前に、翔夜は冷静に、且ついつものやる気の無い表情で紫にダメだしを下す。

そんな二人のやり取りに、顔を赤くしていた少女の顔色も、いつの間にか白い肌を取り戻している。しかし、その目は非常識な物を見た様に、目が点になっている。

恐らく、二人が明らかに勘違いされるような状態を見られても平然と軽口を叩き合う二人が、余程おかしな物に見えたのだろう。

「ほら見ろ、お前のおかげで俺までおかしな目で見られてんだろうが」
「良いじゃない、元々おかしいんだし」
「はぁん？　……それもそうか」
「納得しちゃうんですか！？」

紫を翔夜が布団の中で押し倒している状態のまま、紫の言葉を肯定し、それに我慢できなくなった少女が思わず翔夜の言葉に突っ込みを入れる。
それに翔夜は、満足げな様子で一つ頷く。

「見所のあるお譲ちゃんだな」
「私、子供じゃありません、もう１５です」
「おっとそうか、そりゃあ済まなかったな、まぁいい、俺に用があるんだろ？　いつまでもそんな所じゃ何だし、上がって来い、話はそれからだ」
「は、はい、でも、その……」

翔夜の言葉に頷くも、少女の視線は、チラチラと紫を見ている。
少女が言いたい事を察した翔夜は、あぁ、と納得したような声をあげ、改めて紫を見下ろす。

「おい、八雲……」
「ゆかりんって呼んで？」

可愛らしく笑顔を浮かべながら片目を瞑りチャーミングに軽くそう告げる紫に、顔色一つ変える事無く、翔夜は紫に言葉を投げかける。

「おい、ゆかりん、取り敢えずこの家に来るのは許可する。それでこの場は納めろ」
「ごめん、私が間違ってたから、そんな淡々とゆかりんて呼ばないで、言った私が馬鹿みたいだから、普通に紫って呼んで」

顔色一つ変えずに、しかも恥ずかしげも無く、そう翔夜から呼ば

れた事で、自分の要求が途端に恥ずかしくなった紫はさめざめと涙を流しながら翔夜に懇願する。
そんな紫の様子に、翔夜は、にんまりと笑みを浮かべる。

「どうしてだ？　遠慮するなよ、ゆかりん」
「いやぁぁ、もうやめて！　私の羞恥心がもう限界よ！」

にまにまと笑みを浮かべて、ゆかりんと呼ぶ翔夜に、羞恥で身を捩る紫。そんな二人を見ながらも、話が進まないと感じたのか、少女が堪らず声を上げる。

「あ、あの！　話が進まないんですけど……」
「ん？　おぉ、悪いな、じゃ、紫、これに懲りたら話の邪魔すんなよ？」
「うぅっ……はぁい……」

話の邪魔をしないと承諾を得た翔夜は、紫の拘束を解き、少女を家の中へと上げ、適当な場所へ座る事を提示し、少女が座った事を確認すると、布団を天日干しする為に、外へ持って行き、適当に干してから家へ戻り、少女の正面に胡坐をかいて翔夜も座る。
帰るつもりが無いのか、紫は、胡坐をかいた翔夜の背中にへばり付き、顎を翔夜の右肩に乗せ、自らの頬を翔夜の頬にくっつける様にして、その場に落ち着く。

「あの……」
「言うな……おい、邪魔しないんじゃなかったのか？」
「しないわよ～、私の事は気にせず続けてくれて結構よ」
「だそうだ、こいつの事は気にしなくても良い」
「はぁ、そうですか……」

そう言いつつも、やはり気になるのか、チラチラと紫に視線を送る少女に、翔夜はいつものやる気の無い表情のまま話を進める。

「で？　何の用だ？」

「あ、はい、遠成さんは貴族やそれに連なる者達に倦厭されている陰陽師ですよね？」

「ま、間違ってねぇが」

普通なら明らかに言いにくい事を、ばっさりと言い切った少女に、特に何の感慨も浮かべず、やる気の無い表情のまま、少女の言を翔夜は肯定する。

「だからお願いに来ました」

「それを知ってるなら、俺に仕事を回すのはおかしな話だと思うが？」

「それについては問題ありません」

凛と言い切る少女の雰囲気を見て、何か思い当たったのか、翔夜の片眉がぴくりと動く。

しかし、翔夜の右頬に自らの頬をむにむにと押し付ける紫の姿も相まって、翔夜のその仕草も、真剣味が欠片も見当たらない雰囲気と化していたが、翔夜はそんな事全く気にしていない。

「お前、名前は？」

少女が、仕事を干されている不良陰陽師である翔夜に仕事を持ち込む事が出来るのか、持ち込んでも問題ないのか、その理由をある程度確信していた翔夜は、その少女の名前を聞く。

「藤原妹紅です」

その少女は、翔夜に仕事を回さない様に手を回したはずの、貴族だった……。

じゅうさん　京で陰陽師、仕事干され、後スキマ（後書き）

どうも、あっくすぼんばーです。
今回心配な事があります。
それは何か？

文章の整合性とか気にせずに、思いつくまま書いちゃったよぉぉぉ！
って事です。
と言うわけで、非常に見苦しい物になっているかもしれませんが、
どうかご容赦を……。
どうもスランプっぽいので、細かい事を考えずに取り敢えず書いて
れば知らない内に抜けるかなーとか思った苦肉の策です。

まぁ、俺の醜い言い訳はここまでにして、特に関係ない話ですが、
ポケモン、面白いですよね。
今は固体値を粘っています、カビゴンで。
仕事が終わって、文章を書く気分じゃ無い時はすぐにポケモンへか
じりついてます。
あぁ、マルチトレインやりてぇ……。

まぁ、どうでもいいですね。
取り敢えず、これから竹取物語始動と相成ります。
案外話数を重ねるのか、それともあっさりと終わってしまうのか？
それは、まだわからないという事で……。
では今回はこの辺りで、また次回お会いしましょう。

じゅうよん　依頼、偵察、そして同居人は妖怪

情緒ある京と言う都の片隅、そこに、京一の腕を持つ陰陽師が住むと噂の家があった。

いや、家と言うよりも寧ろ、ボロボロの建物だという事がわかる何かといった方が正しいと思わせるような一軒のあばら家、どう見ても、陰陽師と言う高い地位の者が居を構える場所ではないような建物が、まさしく京一の陰陽師、遠成翔夜が住む建物だった。

そして現在、ボロボロのあばら家の中では、家主である翔夜が相変わらずやる気の無さそうな表情を浮かべたまま、金色の髪が特徴的で、現在上機嫌で自らの頬を翔夜の頬にむにむにと押し付けている美女を背中に張り付かせ、長い黒髪を持つ少女の話を胡坐をかいて聞いている所。

少女は真剣な表情で、翔夜はやる気なさげに、二人の間には絶望的なまでの雰囲気の温度差があったが、翔夜も少女も気にしてはいない。

そう言う意味では、翔夜の目の前に正座している黒髪の少女――藤原妹紅と名乗った貴族の少女も、変わり者の類なのかもしれない。

最も、不良陰陽師として知られ、なまくら様と呼ばれている翔夜に仕事を持ってくる時点で変わり者である事は明白なのだが……。

「で？　貴族のお譲ちゃんが俺に何用だ？」

「はい、それは……って私、子供じゃありません」

「１５超えてても、この程度聞き流せないようじゃ、まだまだ子供さ」

翔夜の言葉にぷぅっと頬を膨らましながら反論する妹紅に、翔夜は気が抜けたようにへらっと笑いながら、貴族である妹紅に歯にも着せぬ物言い。

だが、それに妹紅は気分を害した様子も無く、表すなら、少し拗ねたような表情で、翔夜をジト眼で睨む。

「そうですわ、私の様な落ち着きのある女性を目指すと良いですわ」
「お前は黙ってろ、紫」

事も無げに、しれっと発言した紫は、未だに翔夜の背中に自身の体を張り付かせ、表情は妙に嬉しそうに静かな笑顔を浮かべている。
その表情自体は確かに落ち着きのある女性と評価しても問題ない雰囲気ではあるが、紫が現在取っている体勢は、どう考えても落ち着きのある女性とは思えない事は明白である事は言うまでも無い。
翔夜は、その紫の発言を見過ごす事が出来ずに、ジト眼と共に突っ込みを入れるが、当の紫は既に気にした様子も無く、翔夜の女性とは違った肉付きの少ない頬の感触を堪能している。

「まぁ、こいつは良いか……で？　話を戻すが、何の用だ？」
「え？　あ、はい、父についての依頼なのですが……」

翔夜は最早紫の事は気にしない事にしたのか、話を進める為、妹紅に話の続きを促す。

「父？」
「藤原不比等と言います」
「はぁん？　娘なんざ居たっけか？」

翔夜の純粋に疑問を感じた声と表情に、妹紅は少し表情を顰める。
妹紅の苦虫を噛み潰した様な表情を、翔夜は視界に収めていたが、その質問を撤回する気も無ければ、謝る気も無い。
どんな仕事でもそうだが、素性の不確かな者を信用する事は出来ない。故に、正しい素性を知る為の質問を、翔夜は撤回する気は毛

頭無い。

「私……その、妾の子で……明け透けに言うなら隠し子なんです」
「はぁん、なるほどね、ま、素性が確定した所で、改めて依頼の内容を聞こうか」

後ろめたい事実だと思って話した事を、さらりと流し、もう既に興味はないと言わんばかりの翔夜の態度に、妹紅の瞳は驚いた様に大きく広げられる。

「あの、気にしないんですか？」
「はぁ？　何がだ？」

そうおずおずと翔夜に聞いてくる妹紅の言葉の内容に、何を言っているのかが理解できないと言う態度の翔夜。
むにむにと相変わらず自分の意思とは無関係に形を変える頬に若干面倒臭そうにしながらも、翔夜の表情はいつもと同じ様にやる気の無い表情を変えない。
まるで、何の変わりも無い世間話を聞いたような反応をする翔夜に、妹紅に困惑したような雰囲気が漂う。

「私言いましたよね、妾の子だって……」
「あぁ、それが？」
「体裁が悪いとか、そんな風に思わないんですか？」

妹紅が感じた疑問を真っ直ぐに翔夜へと投げかけるが、相も変わらず翔夜の表情は変化の兆しを見せない。
それ所かますます疑問を深めているような雰囲気が感じられる。
実際の話、翔夜にとって、目の前の少女が妾の子であろうが、貴族の娘であろうが、隠し子であろうが、そんな事は知った事ではな

く、重要なのは本当に貴族の娘であるのかどうかと言う事だけ、そして妹紅が語った事実は、確かに話の上では後ろめたい事実。

であるからこそ、翔夜は妹紅の出生を信用した。

出生を態々後ろめたい嘘で固める必要は無い。只単に出生を偽って翔夜に仕事を頼みたいだけならば、その辺りの貴族の名前を使えば良いだけ、後ろめたい事実がある出生など、面倒なだけの設定に過ぎない。

そう思ったからこそ、翔夜は妹紅の出生を事実として認め、その事実が確かめられた今、翔夜にとって妹紅の出生に後ろめたい事実が付きまとっていようと、どうでもいい事でしかない。

「別に？　お前は藤原妹紅で間違いないんだろ？」

「はい……」

「ならそれで良いんじゃねぇの？　少なくとも俺に取っちゃ、その事実だけが大事なわけだしな」

あっけらかんと告げられた翔夜の本音に、妹紅の表情はまたしても驚きの色に染まり、翔夜の背中にへばりついている紫の表情は嬉しそうに笑みを浮かべ、翔夜の頬に自らの頬を擦り付ける勢いが目に見えて増していた。

摩擦によって微妙に熱帯びてくる頬の感触に、翔夜は顔を顰め、組んでいた腕を解き、左手の掌を胡坐を組んだ左膝に置き、右手を自らの頬と紫の頬が接触している間に滑り込ませ、紫の頬を少し遠ざける。

冷静に頬を遠ざけられた紫は、少し不満そうに顔を歪めるが、何か別の楽しみを見つけたのか、頬をぐりぐりと動かすのを止め、切れ長の目を閉じて、何かの感触に浸るように静かになる。

「んで？　それはもう良いから、何の用だ？」

妙な空気に少しうんざりとした表情と瞳を浮かべながら、紫の頬に添えた右手はそのままに、妹紅へ問いかける。
そんな翔夜の態度に、本当に気にしていない事を確信したのか、妹紅はようやく表情を正し、翔夜を真っ直ぐに見据える。

「はい、父を助けて欲しいんです！」
「具体的には何から？」

ぐっと拳を握りこみそうな程の勢いで翔夜へ依頼内容を語る妹紅に対して、いつものやる気を何処かへ吹き飛ばされた様な表情と態度で、翔夜は妹紅の依頼の具体的な内容を言及する。
その翔夜の声はこれ以上無いほどに何の気負いも無く、何処までも軽い。

「最近よく噂になっている……かぐや姫からです！」
「……はぁ？」

力一杯と言う表現が当てはまるほどに気合の入った妹紅の声、そんな妹紅の声とは対照的に、信じられない事を聞いたように気が抜け、既に無かったやる気すらも更に抜け、マイナス値を指し示す様な勢いすら感じられるほどの間抜けな声を上げる翔夜。
二人の声の温度差は、絶望的なまでに噛み合っていなかった。

「……妹紅さんよ、俺が一応陰陽師だと言うのは知っているよな？」
「はい、知っていますが？」

それが何か？　とでも言うような態度の妹紅に、翔夜はやる気の抜けた瞳を閉じ、現在空いている左手の指で、米神辺りを揉みこむようにして、ため息を吐く。

「だったら、何で陰陽師である俺にそんな依頼を持ち込もうと思ったんだ？」

疲れたように妹紅へそう聞いた翔夜に、妹紅は位置から説明を始める。

話を総合すると、こうだ……。

京一の美人と噂のかぐや姫と言う女性が、この京には存在し、多くの貴族や陰陽師達がその地位を利用して、そのかぐや姫と言う美女に一目お目通りを願う様になったのが数年前から。

そして、そのお目通りを願うようになったのは、妹紅の父親、つまり、藤原不比等も例外ではなく、かぐや姫と呼ばれるその存在にお目通りが叶い、そのあまりの美しさに不比等も漏れる事無く、かぐや姫の美しさに魅了された。

かぐや姫の美しさに魅了された不比等は、それから何度もかぐや姫の下へと足を運び、求婚していたが、それは叶う事は無かった。

しかしある時、ある条件を満たせば、求婚に応じるとかぐや姫は今までの意見を覆した。

その条件と言うのが、蓬莱の玉の枝を持って来る事。

それを満たせば、かぐや姫との結婚が成立する。その条件を聞いて以来、不比等は蓬莱の玉の枝を求めて彼方此方を飛び回るようになり、妹紅に構う時間は少なくなっていった。

そして肝心な翔夜への依頼と言うのが、不比等をかぐや姫の魔の手から救ってくれと言う物。

妹紅の話が一通り終わった所で、翔夜の眉間には皺が寄せられ、疲れたように米神に左手の人差し指を当てて、瞳を閉じ、大きなため息を吐く。

「要はアレだろ？　かぐや姫って言う美人に現を抜かしている父親の目を覚まさせて、お前にもっと構う様にしてくれって事だろ？」

「はい！　まさしくその通りです！」

「それは、陰陽師の仕事じゃないと思うが……その辺りどうよ？」

妹紅の持ち込んだ依頼は、ある意味翔夜には好都合な依頼だった。

元々翔夜が京に来たのは、この世の者とは思えない程に美しいと言われている人物。かぐや姫と言う女性が居ると言う噂を聞いて、一目見るのも一興、それも京に来た理由の一つだったからだ。

だが、どう考えてもこれは陰陽師へ持ってくる類の依頼ではない。

呆れた様な表情を浮かべ、問いかけてくる翔夜の言葉に、妹紅は不思議そうに首を傾げている。

「ですが、町の人が言ってました。『なまくら様は陰陽師としての稼ぎがないから、色々な人の雑務を手伝ってその日の糧を稼いでいるんだよ』って」

「あいつら……」

これ以上無いほどに人が良くて素直な町の知り合い達に、今ばかりは大きくため息を漏らす。

本当の事だが、態々それを素直にありのまま言わなくても良いのではないのか？　明らかに面倒臭そうな依頼を持ち込んできた妹紅を見て、翔夜はそう思う。

今更陰陽師としての体裁が、などつまらない事は言わないし言うつもりも無い。だが、知り合い達が素直に翔夜のやっている事を言ってくれたおかげで、こんな面倒臭そうな依頼を持ち込まれる事になった。

その事に、少しばかり知り合い達に空気読め、と言いたくなったが、起こってしまったものは仕方が無い。

そう思考を切替えようとした時、翔夜が今まで右手で接近を遮っていた紫から、クスクスと密やかな笑い声が聞こえる。

「まるで便利屋ね？」

「笑い事じゃねぇんだが、まぁ、間違っちゃいないか」

紫の漏らした言葉に、翔夜はため息と共に同意の意思を示す。

「まぁ、いいや、別にその依頼受けても良い」

「ホントですか！？」

瞳を輝かせ、上体を乗り出すように翔夜へと近付ける妹紅。

そんな興奮状態の妹紅の目の前に、ただし、と一言言葉を挟みこむ。

「方法は全て俺に任せてもらう、いいか？」

「はい、それはお任せします」

「なら、契約成立だ」

料金は言い値で構わん、と軽く言い捨てると、翔夜は話は終わったと言わんばかりに、妹紅を外へ出るように急かし、それと共に翔夜自身もあばら家の外へ出る為に、自身の城の出口の前へ立つ。

いつもの様に中身がすかすかの木の引き戸が、からりと音を立てて開き、見えた外はやはり余り人がいない。

そんないつもの光景を軽く見渡し、翔夜は先に外へ出る。それに習うようにして、妹紅も外へ出てくる。ちなみに紫は最初から翔夜の右腕に纏わりつくようにして、翔夜と一緒に外へ出ていた。

「これからどうするんですか？」

「んー？　まぁ、取り敢えずかぐや姫って奴を見に行ってみるわ」

「きゅ、急ですね」

「もう依頼は始まってるからな」

「私はどうすればいいですか？」

「は？」

一体何を言っているのか？　と言うような表情を浮かべ、疑問の意味を込めた短い単音が翔夜の口から漏れる。
そんな翔夜の様子に、今度は妹紅が首を傾げ、彼女が持つ長い黒の髪が波打つように揺れる。
「依頼を持ち込んだのは私ですから、何か手伝った方がいいのかな、と」
少し自信なさげにそう漏らした妹紅の言葉に、翔夜は珍しく呆気に取られた様な表情を浮かべた後、何が可笑しかったのか、面白そうに笑い声を漏らす。
意味もわからず笑われている事が少し不快だったのか、妹紅の頬はみるみる内に膨らみ、眉もハの字を形どっている。
そんな妹紅の様子を見て、翔夜は笑うのを止める。
「スマンな、依頼主がそんな事を言ったのは初めてだからなぁ」
「別に、いいですけど……」
拗ねたように頬を膨らませ、翔夜から視線を外すように横目であばら家へ視線を移す。
まぁ、なんだ、とまだ少し笑いをかみ殺すような声が翔夜から聞こえて来たと同時に、妹紅の頭に何かが乗る感触がし、妹紅の頭に乗せられた何かは、何度も、だが軽く妹紅の髪を梳かす様にして動く。
妹紅の頭に乗せられた何かが、翔夜の左手だと理解した時、妹紅の頬の膨らみは急速に萎み、変わりに出てきたのは何か呆けているような妹紅の表情。
「ま、何もしなくていい、取り敢えず待ってろ、経過報告を聞きに

来るぐらいなら問題ねぇからよ」
「わ、わかりました……」

少し呆然とした。と言うよりも、どうすれば良いのか分からないと言った表情をした妹紅から、返事が返って来た事を認めると、翔夜は満足そうに一つ大きく頷き、妹紅の頭から左手を退ける。
そして踵を返し、羨ましそうに妹紅を見ていた紫を伴って、京の中心方面へ姿を消した。
翔夜のあばら家の前に一人残された妹紅は、少しの間呆けたように動かなかったが、暫くして、自身の両手を頭へ持っていき、翔夜に撫でられた部分に両手を置く。

「誰かに頭を撫でられたのなんて久しぶり……」

相変わらず呆けたような表情のまま、そう呟く妹紅の声は、何処と無く嬉しそうに弾んでいるような声だった。

妹紅とあばら家の前で別れ、翔夜の足が目指す先は京の中心部。
目的が決まっているだけあって、その足取りに迷いは無い。だが、その歩みの速度はそう速くは無い、所かむしろゆったりと感じられるほどの速度。
理由としては、そう急ぐ用事ではないと言う事と、今現在翔夜の右腕に絡み付いている紫。この二つが歩みの速度を落としている原因として挙げられる。

「……歩きにくい」
「我慢して、それも男の甲斐性よ？」
「無くて結構」

うんざりした様な表情を浮かべてはいるが、実際はどうでも良いと思っているのか、紫の腕を振り解く動きは見せない。
取り敢えず振り解かれないままの腕に、紫は満足そうで嬉しげな笑みを浮かべる。

「で？　何処に向かってるの？」
「知らねぇまま着いて来たのかよ、かぐや姫の住んでるって言う屋敷を見に行くんだよ」
「見に行くだけ？　会わないの？」
「実際に会うのは夜だな、移動に便利な奴が傍に居る訳だしな」
「それってもしかして私の事かしら？」
「他に誰がいるんだ？」

何を当たり前の事を言っているのか？　と言うような翔夜の声に、少し不満げに紫は頬を膨らませる。だが、翔夜の腕を掴むその手だけは離すつもりが無いらしく、未だにがっちりと翔夜の腕を掴んでいる。
そんな紫に呆れたような表情をしつつ、何者にも拘束されていない左手を懐に入れ、タバコを取り出し、何時もの様に吸い、紫煙を吐き出す。
紫煙を吐き出し、その紫煙の行く先を少し羨ましそうに見つめる翔夜に、紫は不思議そうな視線を寄越す。

「それ、何？」
「あ？　あぁ、これか、タバコだ」

紫の不思議そうな声に、火を点けて口に咥えたままのタバコを、唇を使って上下させ紫にタバコの存在をアピールしながら彼女の疑問に簡潔な答えを返す。

「吸うものなの？」
「あぁ……吸ってみたいのか？」
「えぇ、少し興味があるわ」

紫の興味に押されたのか、軽く出した翔夜の提案に紫は瞳を輝かせて翔夜の顔を見上げる。

まるで子供の様に瞳を輝かせて翔夜を見上げる紫は、容姿とは違い少し幼く映る。しかし、見た目麗しい彼女がその様な姿を見せた所で結局評価は落ちる事はなく、美人と言う評価が、可愛いと言う評価へ変わるだけだ。

もう何百年も何千年も前に自分と一緒にいた銀色の髪を持つ美女を思い出し、美人と言われる女性は存在自体が卑怯なものだと、翔夜は少し苦笑を漏らす。

苦笑を浮かべながら、自らの口に咥えているタバコを左手の親指と人差し指で摘み、そのまま紫の口元へ持って行く。

タバコを口元に持ってこられた紫は、さっと頬を薄い赤色に染めて、少し恥ずかしそうにタバコを咥え、そして勢いよく吸い込んだ――。

「げっほ！げほ！に、苦い、って言うか苦しい、けほっ、こんなのよく吸えるわね……けほっ」

案の定、勢いよくむせた紫はタバコから口を離し、目尻に浮かべた少しの涙はそのままに翔夜を見る。

涙目のまま少し苦しそうに咳をする紫を見て、くつくつと面白そうに笑いを漏らしながら、翔夜はタバコを咥え直し、美味そうに煙と空気を吸い込み、紫煙を再度吐き出す。

「まぁ何だ、慣れだと思うが、一応体に悪いもんだし、何よりお前

には似合わないから慣れなくて良いだろうよ」
「そう言う貴方は似合うわね、その姿」

だろう？　と面白そうに瞳を歪めながらタバコを燻らせ、いつもの様に切った灰の処理をし、タバコを吸い終わる頃には人が賑わう京の中心へたどり着く。

当然、その頃にも紫は翔夜の右腕をがっちりとホールドしている。

そして翔夜は京の一般人の人気者。そんな人物が見た目麗しい女性を腕を組んで現れれば当然――。

「おぉ！？　なまくら様！　その女性はなまくら様の良い人ですかい！？」

翔夜の家であるあばら家方面から京の中心街に入ると一番最初に目に入る店が八百屋である為、八百屋の大将が翔夜と紫の姿を眼に入れ、それと共に威勢の良い声で翔夜に声を掛けた事で、翔夜と紫は一気に視線を集めることになる。

八百屋の大将が浮かべる嬉しそうな顔と楽しそうな声に、翔夜は苦笑を浮かべる。

「いや、こいつは――」
「妻ですわ」
「えー？」

翔夜の台詞を食い気味に告げられた台詞は間違いなく紫のもので、がっちりと紫の両腕でホールドされていた翔夜の腕は、いつの間にか紫の左手がそっと添えられているだけの状態へと変わっており、紫の右手は扇子を持ち、広げられたそれにより、口元は覆い隠されている。

明らかな大胆発言をした口元は、住人達には扇子で隠されどのよ

うな状態なのか見極められないが、翔夜には見えるように調節されている為、翔夜の目にははっきりと紫が面白そうに口元を歪めているのが見えていた。

「おい待て何を……」

「かぁー！　なまくら様も隅に置けねぇなぁ！　いつの間にこんな別嬪さんを捕まえたんで？」

「あら、いやですわ、美人だなんて」

明らかに自らの意見を聞く気が無いままに進められていく会話に、翔夜は面倒臭そうにため息を吐く。

「別嬪さんも大変でしょう？　なまくら様みたいな人が相手だと」

「そんな事はありませんわ、私の方がこの人に惚れたんですもの」

「へぇ！？　そりゃあそりゃあ、羨ましい事でさぁ」

明らかに振り回されているようなこの状況に、翔夜は面倒臭そうな表情が消える事はなかったが、八百屋の大将の言葉を聞いた瞬間、面白そうに、にやりと笑みを浮かべる。

そして、紫の手が添えられた右腕を振り解き、何を思ったのか紫の肩を抱くようにして力強く自らの方へぐっと抱き寄せる。

「ひあっ！？」

意味の無い悲鳴を上げながら、何が起こったのかよく分からない状況に、紫はわたわたと少し慌てるが、状況を把握し、翔夜に抱き寄せられていると分かった瞬間、頬は赤く染まり、落ち着かないように身体をもぞもぞと動かす。

だが、紫の行動を制限する様に、翔夜の腕は更にぐっと力が込められる。

「やらねぇぞ？」

八百屋の大将に向けた言葉だと思わせつつ、実は紫に向けて言われた言葉に、紫の頬は更に紅潮し、八百屋の大将は呆れたような表情を浮かべる。

にやにやと笑みを浮かべ、放たれた翔夜の台詞に、八百屋の大将だけでなく、野次馬たちの表情も八百屋の大将と似たような表情を浮かべ、翔夜と紫を見つめる。

「わかってますよ、んな事、毎回さらりと流しちまうんですから、たまにゃ素直に照れるとかしてくれませんかね？」

「生憎とそんな素直な性分じゃないもんでね」

呆れたような表情の八百屋の大将に向けて、にやにやと笑みを浮かべる翔夜。

紫は未だに力強く翔夜に抱き寄せられたまま身体を小さくして恥ずかしがっていた。

そんな紫の反応に、翔夜は満足そうな笑みを浮かべる。

「んじゃあな、大将。ちっとばっか行くとこあるからよ」

「何処へ行くんで？」

「かぐや姫って奴の住んでる屋敷に興味があってな」

「それでしたら、この辺りで一番大きな屋敷がそうでさぁ」

「おー、ありがとよ、大将」

完全に会話のペースを握り返した翔夜は、八百屋の大将とのやり取りを短く済ませ、本来の目的であるかぐや姫の屋敷へ向けてその足を動かし始めた。

紫の肩を抱いたまま。

「あ、あの、歩きづらく、ない？」

八百屋の大将とのやり取りから、ずっと肩を抱いたまま歩く翔夜へ紫は控えめに声を上げる。

らしくない紫の声を聞いた翔夜は面白そうにくつくつと笑い声を漏らし、肩を抱いたまま紫に視線を送る。

「何だ？　恥ずかしいのか？」

「だ、だって、貴方の性格上こんな事されるとは思ってなかったんだもの」

「くっく、俺をからかうのはまだまだ早いって事だ」

そう軽く笑いながら、紫の肩から手を離す。その際、紫から、あっ、と少し寂しそうな声が聞こえたが、翔夜は特に気にした風もなく歩き出す。

先に歩き出した翔夜を少し慌てて追いかけ、まだ余韻を引きずっているのか、翔夜の右腕を掴む動きは控えめと感じるそっとした動き、掴み方もそっと手を添えるようにして翔夜の右腕を捕らえる。

妙にしおらしい態度を見せる紫に、翔夜はまたしても可笑しそうにくつくつと笑い声を漏らす。

「な、何よ？」

「いや、えらくしおらしいと思ってな、くっく」

「しおらしい私は、その、嫌い？」

「いんや、別に」

恐る恐るとした紫の問い掛けに対する翔夜の声に、紫はあからさ

まにほっとした様な表情を浮かべ、それと同時に、感じていた妙な緊張感も解けたのか、ぎくしゃくしていた動きも普段の流れるような動きを取り戻す。

「にしても、でかい屋敷ねぇ……あれの事か？」

翔夜の視線の先には、少し閑散とした街並みには不釣合いに見えるほどの屋敷が存在していた。

白い塀に辺りを囲まれ、入り口は正面の一つだけ。中の様子は塀でよく見えないが、塀越しでも見える部分ですら、品の感じる装飾が組み込まれている事がわかる。

それに何と言っても、出入り口である門に列を作っている人の列に、辺りに止められている馬車や御付の様な人物も見える事から、並んでいる人物が貴族やそれに見合うだけの地位を持つ人物だと断定できる。

閑散とした風景の中に数多く地位の高い人物が並ぶ光景は一種異様であるが、それ故に、翔夜は目の前の屋敷がかぐや姫の住む屋敷であるとほぼ確信できる。

「貴方は並ばないの？」

少し楽しそうに笑みを浮かべながら紫は翔夜に問いかけるが、翔夜は、勘弁してくれと言うように首を左右に振る。

「考えるだけで息が詰まりそうだ」

世間的に地位も名誉も無いが、翔夜は目の前に広がる貴族の列に並ぶだけの資格のある人物である。

京で誰一人疑う事なく最高の陰陽師である翔夜は、存在するだけで脅威となりうる人物。その様な人物が資格が無い筈が無い。

今まで難癖をつけてきた陰陽師は実力で黙らせ、貴族達に対しても同様、帝と呼ばれる人物の保有する武力に対してもまた同じ、遠成翔夜と言う人物は、真に暴力によってその発言権を知らず知らずの内にもぎ取っていた陰陽師なのである。

権力による根回しで、実績や地位は無いものの、実力は疑うべくも無い。と言うよりも、一騎当千と言う言葉を地で行く翔夜に対して、出来る事は権力による根回しで翔夜の動きを制限する事しか出来なかったという方が正しい。

そんな翔夜が権力者達の並ぶ列に並んだ所で、文句を言える物が誰も居ない。そう言う意味で資格のある人物と言う事。

「じゃあどうやってかぐや姫の居る部屋を探るの？」

「どうやって、か……要はアレだろ？　面会を求めてこれだけの人数が来てる訳だから、人の多い部屋がわかれば良い訳だろ」

紫から問いかけられた疑問に対して、翔夜は軽い口調でそう答えると、一枚の札を取り出し、そのまま上空に無造作に投げる。

霊力を流し、術式を起動させられた札は、地に落ちる事無く空を飛び、そのまま屋敷の屋根へ張り付く。そして数秒屋根に張り付いた後、そのまま燃え尽きた。

「左側の塀に沿うような形で並んでいる部屋は6つ、その6つの部屋の内、一番奥から2番目の部屋、恐らくそこがかぐや姫の部屋だ」

「はいはい、で？　さっきの何？」

「んー？　今のは俺が作った札でな、霊力を張り付いた所から直接流し込む為の札だ。流し込む霊力の量や質を調節可能で、尚且つその札から霊力を辿っても俺にたどり着かないという優れものだ」

「それって、かなり凶悪じゃない？」

翔夜が作ったというその札の効力に紫は冷や汗を流し、同時に彼

女の脳裏に、妖怪や生き物に札が張り付き、翔夜から流し込まれた膨大な量の霊力に耐え切れず、内側から身体が爆散するような映像が浮かぶ。

そんな場面が紫の脳裏に浮かんだのを見透かしたように翔夜から声が掛けられる。

「まぁ、そう言う使い方も可能だ」

「あぁ、そう……って言うか、術の起動に祝詞も言霊も使わないのね」

「霊力の質を判別する術式も組んであるから俺以外には使えねぇし……あんま必要性感じねぇんだよな」

相変わらずやる気の欠片も感じられない表情で屋敷を視界に収めたまま、翔夜は左手で後頭部を軽く掻く。

「でも、技名って重要だと思うわ、読者的にも」

「メタな事言うな、馬鹿野郎」

「あら、野郎ではありませんわ」

「へいへい、ま、考えとく、それより、ここにもう用はねぇ、行くぞ」

「はいはい」

楽しそうに笑う紫と、変わらずやる気の無い表情の翔夜。対照的な表情を浮かべる二人は未だ権力者達の列が減らない屋敷に背を向け、あばら家方面へと足を向ける。

「あ、そうそう」

「あん？」

足を動かし始めてからそういくらも経たない内に紫から何か思い

出したような声が上がるが、翔夜も紫も歩みを止める事はなく、しっかりと足を動かしたまま言葉を交わす。

「暫く翔夜の家に住むから」
「あー、まぁ、いいか」

紫から告げられた提案に、驚いた様子も考える様子も無く、足を止めないままに翔夜は軽く了承を出す。
翔夜の許可が下りた事で、紫の表情に嬉しそうな笑みが浮かび、心なしか足取りも普通よりも軽い足取りに変化したように見える。
紫の歩調が変化した所で、翔夜の歩調に乱れは無く、変化した紫の速度に合わせて歩く。
いつでも黒尽くめが特徴的な、後に幻想郷の気ままな便利屋となる人間と、紫のドレスと金色の髪が目を引く妖怪の賢者、この二人の縁はこれから先、悠久とも言える永い時の中を紡いでいく事になる。
その事を二人はある程度確信し、片や面倒臭そうな、片や嬉しそうな表情を浮かべながら、これから暫く一緒に暮らす事になった翔夜のあばら家へゆったりと歩いていった。

じゅうよん　依頼、偵察、そして同居人は妖怪（後書き）

どうも、あっくすぼんばーです。
いやぁ、未だスランプから抜け出せてない感じがしますね。
一体いつまでこのスランプは続くのか……。
ま、先のわからない事は置いておくとしましょう。

さて、二本しか書いていませんが、私の書く主人公はどうも必殺技と言う物をあまり使わない傾向にあります。
私としてはこの傾向を貫いても良いし、技を使っても良いと言う、まぁ、ぶっちゃけて言うならばあまり拘りがある訳ではないと言う事です。
そこで、皆さんに聞いてみたいのが……。
翔夜に技名を言わせる方が良いのかどうか、と言う事です。
私の拘りの無い所は読んでくださっている方に決めてもらう方が無難かなーと思った次第です。はい。

さて、次回は取り敢えず輝夜の屋敷へ乗り込みます。
勿論紫の能力で、ですが……。
そこから先はの展開は……実は何も考えてません。
毎話毎話行き当たりばったり何と無く、と言った感じで書いているので……。

ではでは、実はかなり執筆方法が不安定な私ですがこれからもよろしく。
次回またお会いしましょう。

じゅうご　依頼遂行、あ、面倒臭い……（前書き）

ＩＳの執筆が進まない事に苛立って、思わず書き殴った。
後悔はしていない。
反省はしている。

じゅうご　依頼遂行、あ、面倒臭い……

「さてと、そろそろ良い時間か」

蝋燭の小さな光だけが部屋の中を照らす中、低めの男の声がその声の低さを感じさせない様な台詞を吐き、建物の薄い床を軋ませ、声の主である男が立ち上がる。

声と共に立ち上がった男は、遠成翔夜、今現在彼がいる京と言うこの場所で、並ぶ者のいない程に有能な陰陽師として有名でありながら、仕事を干される程に態度が悪い事でも有名な男だ。

色々な意味で京で今現在最も有名な男は、昼に来ていた黒の着流しではなく、黒のズボンに黒のシャツと言う活動的な服装。

そして、その男が立ち上がるのを追う様に、もう一つ床を軋ませる音が鳴る。こちらは翔夜が立ち上がった時よりも軽い音。

「左の塀側に並んでる6つの部屋の奥から2番目……よね？」

立ち上がってから翔夜へ声を掛けるのは、まごう事無き女性の声。辺りが暗くとも長い金色の髪はよく目立つ。翔夜の傍らへ静かに歩み寄り、蝋燭の光が照らした女性は、暗がりでもよく目立った長く艶のある金色の髪に美しい顔立ち、光量の少なさと紫のドレスが相まって妖艶な雰囲気さえ感じる。

まごう事無き美女と言っても過言ではないその女性、八雲紫は翔夜へ軽く質問を投げかけつつ、悠然と笑みを浮かべ、翔夜に寄り添うようにして、静かに翔夜の右腕を自らの腕の中へと収める。

「合ってる、が、とりあえず動きにくいから離せこの野郎」

が、翔夜の言葉と共にすぐさまその腕は振り解かれ、紫の表情は

少し不服さを感じさせるように形の良い眉がハの字を描く。
心なしか少し頬も膨れている様に見える。

「翔夜は冷たい！　女の子にはもう少し優しくするべきだと思うわ！」

「女の……子？」

「その間と疑問を持つべき場所的にこれは喧嘩を売られてると考えても良いのよね？」

紫の発言自体が信じられないと言う様な表情と共に翔夜から発せられた言葉に、紫はこれ以上無いほどに綺麗な笑顔を浮かべると共に、額には一杯一杯我慢しているであろう事の現れの青筋が浮かんでいた。

笑顔を浮かべながら途方も無いプレッシャーを当ててくる紫に、翔夜の表情は特に変化を見せず、紫のプレッシャーも軽く受け流していく。

紫の我慢が臨界点に達する寸前に、翔夜は何かに気がついた様に掌を打つ。

「おぉ、前言撤回だ、女の子と言う表現で良いぞ」

「はへ？」

「俺から見りゃあまだまだ小娘だしな」

翔夜がからからと笑い飛ばしながら放った台詞に、紫は気の抜けた様な声を上げ、翔夜の言葉をよく理解出来ていない様に、呆けた表情で翔夜を見返す。

紫の視線を独り占めしている翔夜の表情はいつもと同じ様ににやにやと笑みを浮かべている。

だからこそ紫は混乱する。翔夜の表情と言うのは、実の所そうバリエーションが多くない。喜怒哀楽はそれなりにハッキリしている

のだが、それを表す為の表情が圧倒的に足りていない。
纏う雰囲気は真剣な物ではあるが、にやにやと笑みを浮かべていたり、悲しい現実が目の前にあるのに不敵に笑みを浮かべたり、楽しい場なのに、デフォルトのやる気の無い表情だったり、そう言う男が遠成翔夜と言う男である。
大きく分けると、やる気の無い表情、無表情、にやにやと浮かべる笑み、不敵な笑み、苦笑。
これぐらいしか翔夜の表情にはバリエーションが無い。
無論驚いたりする事もあるが、その場合、あまり表情に出てない場合が多いのも事実。
つまり何が言いたいのかと言うと、遠成翔夜と言う男は、表情のバリエーションが少ない為、浮かべる表情で何を考えているか、どう思っているか、そう言う事が非常に読み取りにくい男であると言う事。
勿論これは翔夜自身が意図してやっている事であるのは言うまでも無い。

そんな男を前に、妖怪の賢者と呼ばれる事になる境界の妖怪、八雲紫は頭を悩ませていた。
翔夜の言った言葉が嘘なのか、それとも真実なのか、常識的に考えれば、翔夜の言っている事は嘘だ、人間が紫を越える程に長生き出来るなど聞いた事が無いし、今まで紫が見てきた人間も、長生きできて４０年と言う所。
それが人間と言うものだし、その寿命にも紫は何の疑問も持っていなかった。
なれば、翔夜の言っている事は嘘だと断言するのが本当なのだが……。

（読めないのよね……嘘なのか本当なのか、敵に回したくないタイプだわ……そんな所も素敵だけど）

自分の思考に羞恥心が浮かんだのか、頬を赤らめ、温度の上がった頬を両手で押さえ、きゃっ、と恥ずかしそうに声を上げ、肢体をくねらせ始めた紫を、翔夜は冷めた様な眼差しを浮かべた無表情で見守る。

そんな翔夜の様子に気がついたのか、少し乱れたスカートを押さえ、口元に扇子を、バサッ、と勢いよく広げると共に瞳を瞑り、咳払いを一つ。

「こほん、じゃ、じゃあ、貴方の正確な年齢を教えてもらえますかしら？」

「……スルーした方が良いか？」

「お願い、何も言わずに質問に答えて……こう見えて心を許した人物からの責めなら良いけど、攻撃には打たれ弱いの」

思い人からの攻撃には打たれ弱い、意外と乙女な八雲紫である。

なんだか痛々しい紫の様子に、翔夜はため息を一つ吐き出すと、無表情からいつものやる気の無い表情へと移行し、紫からの質問に答えてやる事にする。

「あー、そうだな、２０００から先は数えてねぇ」

「２０００でもそれだと別に私とそれほど離れてるわけじゃないと思うわ……精々2、３００年じゃない？」

「ちょっと待て、今逆算するから」

翔夜からの静止の言葉に、逆算が終わる数秒、紫は大人しく翔夜の返答を待つ。

やる気の無さそうな表情を浮かべながら計算している翔夜からの返答は思いの外早く、素早く計算されて出された翔夜の答えは全くもって信じられないような答えが返ってくる事になる。

「そうだな、ざっと計算して、多分だが、２５億前後だと思うが」
「えーっと……今、何て？」
「多分２５億前後だ」
「……」
「……」
「ホントに？」
「あぁ、多分な」

俄かには信じがたい事実が翔夜の口から発せられ、腕を組みながらいつもの様にやる気の無い表情の翔夜を紫は静かに見返す。
嘘を言っている様子は、紫から見た所、ない。
艶は少ないがしっかりとした黒色の髪、鋭い瞳、肌は柔らかくは無いが、鍛えられている為弾力があり少し焼けている。皺も少なく、外見の年齢で表すならば２２歳前後。
どう見ても２５億も生きているとは思えない。

「人間、よね？」
「一応な、神力も妖力も持ち合わせていない」

飄々とそう答える翔夜を見て、不思議そうに首を傾げる紫だが、そこで何かに気がついた様に翔夜を見る。

「能力……私のスキマを割った時に使った能力、どんな能力なの？」

確信を篭めたような紫の声に、翔夜は、にやりと笑みを浮かべる。
暗がりの中でもはっきりと見えた翔夜のその笑みに、紫は、自信の予想に対する確信がますます深まっていく事を感じる。

「『ありとあらゆるものを突破する程度の能力』だそうだ」

「範囲は？」
「文字通りありとあらゆるもの、だ」

悠然と笑う翔夜から返って来た言葉に、紫は今まで謎だらけだった遠成翔夜と言う人物のパズルのピースが、一部分ではあるが、かちりと嵌ったのを感じる。

「道理で霊力に底が見えないわけね……霊力の量も上限が無い、それだけの霊力を受け入れる容量の上限も無い、文字通り無尽蔵ね。そんな物の上限すら突破するんだから、勿論の事ながら寿命も老いも無いのも当然ね」
「よく出来ました、とでも言えば良いか？」
「良いわよそんなの、でも少し嬉しいかもね」
「あん？」
「少しでも貴方を知る事が出来た」
「そうかい」

蝋燭の小さな明かりだけが頼りの部屋の中で、翔夜はにやにやと笑みを浮かべながら、紫は口元を扇子で覆いながらも嬉しそうに目元は微笑みの形を作る。そしてその目は互いに互いをしっかりと捉えていた。
だが、その穏やかな見詰め合いも数秒の事。仕切りなおすように翔夜は組んでいた腕を解き、紫に声をかける。
わざわざ辺りが寝静まるまで起きていたのは理由があるのだ。

「さて、面倒だが、行くぞ」
「もう少し雰囲気って物を味わっても罰は当たらないと思うわ」

頬に餅を膨らませながら、ぶーぶーとぶーたれる紫に半ば呆れながらも、今はそれに構っている時ではない。

そもそも、かぐや姫と言う人物がどのような人物なのか見極める為にこんな時間まで起きていたのだ。

このタイミングを逃しては、翔夜の睡眠時間をただ削っただけと言う、翔夜としては不愉快極まりない結果だけが残ってしまう。

「うっせ、ほれ、さっさとスキマ、俺はさっさとやる事済ませて寝たいんだ」

「あっあっ、じゃあじゃあ！　一緒に寝ても良い？　良いなら文句言わずに働くわ！」

「はぁん？　どうせ布団は一式しかないんだ、別に構わねぇが？」

特に悩む事無く紫の意見を肯定した翔夜に、うしっ！　などと明らかに女性がやるような気合の入れ方ではない声を発しながら腰だめにガッツポーズ。

上品な紫のドレスを纏った美女が、これ以上無いほどに力一杯拳を握ってガッツポーズを決める様は非常に滑稽である。握った手は力の込めすぎなのか若干震えている。

「じゃあさっさと行ってさっさと終わらせるわよ！」

「へいへい、俺もそうしたいぜ、んで寝たい……」

先程とは打って変わって気合十分な紫と、終始一貫してやる気の欠落した翔夜、二人の目の前に二つのリボンによって縦に裂かれた空間の裂け目が現れ、奥に無数の瞳が覗く。

翔夜と紫は、方や軽い足取り、方ややる気の無さがよく現れている足取りでそこに入っていく。

共通しているのは、見るものが見れば嫌悪感すら抱くその空間に足を踏み入れる事に、何の疑問も気負いも抱いていないという事だった。

翔夜と紫がスキマを抜け、出た先には、無人の空間が広がっていた。

障子から差し込む月の光が照らすその部屋は、どうやら謁見に使われるような部屋である事がわかる。

畳が敷き並べられた床に、襖と障子に挟まれた部屋。部屋の中には一段高い場所があり、その上には簾が並べられている。

恐らく、噂のかぐや姫に謁見する際には、その一段高い場所にかぐや姫が現れる事が予想される。

だが、現在は面会時間などとうに過ぎているため、貴族も、護衛も、目的であるかぐや姫も存在しては居なかった。

「多分この近くよね？」

「だろうな、合理的に考えれば寝室とこの部屋は近いほど良いはずだ」

「見当はつく？」

紫からの疑問に、右手で口元を隠しながら思考を廻らせようとした翔夜の頭に、遙か昔に聞いた一文が思い浮かぶ。

それはまだ翔夜が世界を渡り、普通の人間として過ごしていた時に聞いた御伽噺、『かぐや姫』に関する一文。

「かぐや姫は月を見上げる……ん？　そこはかとなく嫌な予感がするな……」

この世界での遙か昔に関して、翔夜の頭の中で月と言う単語が引っ掛かり、月に関しての決定的な何かを思い出そうとした所で、紫から声が掛かる。

「心当たりがあるなら探さない？」
「ん？　あぁ、多分この部屋を出た所の庭だろうな」

何かが引っ掛かりそうだった思考を断ち切って紫の声に答える。
無駄な事に思考を割いている暇など無い。何故なら遠成翔夜は眠いのだ。
かぐや姫と接触する為に、翔夜と紫は躊躇無く外へと続く障子を開き、廊下へと足を進める。
無論足音は最小限に、身体の軸を使って床に掛かる重さを分散させ、足音を消す。
外へと出た翔夜と紫の目に飛び込んできたのは、見事なまでに手入れの行き届いた庭が目に入る。
庭と言うのは見る者によっては一種の芸術のようなもので、そこに植えられている草木、作られた池、池の中に存在する鯉、他にも岩や敷き石、色々あるが、その全ての配置には意味があり、少しでもズレがあるならばそれは既に芸術品としての調和を乱しており、美しい庭とは言えない。
そこを行くと、翔夜から見てかぐや姫の屋敷の庭は正に芸術のように映った。

「枯山水にも勝るとも劣らねぇな、この庭は」
「確かに素晴らしいとは思うけど、目的はそっちじゃないでしょ？」
「あぁ、わりぃな」

庭の景観に目を奪われていた翔夜だが、紫の一言に意識を戻し、改めて視線をめぐらせる。
翔夜が予想した通り、目的の人物であろう人はすぐに見つかった。
艶のある長い黒髪、ほっそりとした輪郭、それだけでも美女である事は予想がつくほどにキメが細かく白い肌、この時代の美しい着物で着飾られた姿は人目を惹きつけるには十分、背はあまり高くな

く、顔立ちも確かに美しいが、どこか幼さが抜けていないような雰囲気も感じる。

総合的に見て、美女と言うより、美少女といった方が正解であろう。

確かに、この少女は美しい、それはまごう事無き事実であろう、貴族達が夢中になる気持ちもわからないでもない、そんな美少女だ。

この世の者とは思えない程に美しい姫、確かにその評価は正しい、『人間にしては』翔夜はそう思う。

（ま、こんなもんか）

呑気にそう思う翔夜は、何も美的感覚が狂ったわけではない、ただ単に目に映るかぐや姫と比較している翔夜の頭の中の対象が問題であろう。

かぐや姫の美しさと言うのは、翔夜の中では、この世の者とは思えない程の美しさではない。

本当にこの世の者ではない者の美しさとは、そう言う次元ではないのを翔夜は知っているのだ。今翔夜の隣に居るこの世の者ではない者、八雲紫と言う妖怪も、まさしく美女と言うに値する美しさだ。

人間ではどうあがいても届かない程の美しさ、それが人外と呼ばれるものには総じて備わっている場合が多い。容姿だけではなく、人ならざるものが発する色香。それが例外なく備わっているのだ。

それでなくとも、遠成翔夜と言う男は、人ならざるものが横行している世界の王であった男。この世の者ではない美しさと言うものは、既に珍しいものではないのだ。

京へ来た目的の一つのかぐや姫をまじまじと翔夜が観察していると、紫から軽く肘鉄を食らう。

「あんな小娘に何見惚れてるのよ」

そう言いながら小声で糾弾してくる紫の頬は、七輪に乗っている餅の如く膨れ上がっていた。
紫の様子に、翔夜はまたにやにやと笑う。

「嫉妬か？」
「そうですけど？」

からかうつもりで掛けた言葉に、間髪居れずに紫から肯定の言葉が返って来たことに、翔夜は少し目を見開くが、すぐに、フッと短い息と共に笑い、紫の後頭部を軽く叩く。

「この世の者とは思えないって評価がどの程度か確かめてただけだ、そう言う意味じゃ、お前もこの世の者とは思えないほどに美しいぞ？」

翔夜自身は飽くまで客観的な評価として紫への評価を下したつもりではあるが、紫自身はそう受け取らなかったようで、紫の顔は一瞬にして赤く染まる。
餅は消えたが、林檎が出てきたようだ。

「い、いきなり何よ？」
「別に、正しい評価を下したまでだ、さて、そろそろ接触するぞ」

翔夜としては別に紫を口説いている訳ではないので、余韻と言うものは無く、さっさとかぐや姫の下へと歩を進める。
そんな翔夜に多少の不満があったのか、もう、と少しばかり頬を膨らませながら、だが、比較的素直に翔夜の後を追いかける。

かぐや姫、そう呼ばれている人物、本名としては蓬莱山輝夜と言う。

輝夜は、この地上が気に入っていた。そこに住む人物も、輝夜の面倒を見てくれていたお爺さんやお婆さん、求婚に来る貴族達はこの上なく疎ましかったが、それを考えの外に置いたとしても、良い人達が多く、暖かい場所だった。

蓬莱の薬を飲み、罰として地上に送られ、穢れていると言われた地で生活していたが、輝夜にとっては、故郷である月よりもこの地上の方が自分が生きていると言う実感があった。

有り体に言うならば充実していたのだ。

そしてこの心地良い土地を気に入っていた矢先に、罪を償う期間が終了するという事実。

それはつまり、輝夜の月への帰還を意味していた。

まだまだ日数はあるが、着実にその日は近付いている。

この地上から離れたくない、だが抵抗すれば、ここに住む人達に無駄な犠牲が出てしまう。

それは輝夜としては望む所ではない。

毎回堂々と巡る思考をしながら見上げる月は、輝夜にとって憎々しいものとなっていた。

「ままならないものね……」

「何がだ？」

唐突に後ろから掛けられた男の声に、輝夜は驚き、即座に後ろを振り返る。

そこには、黒のズボン、黒のシャツ、やる気の無い表情だがそれなりに鋭さを感じさせる瞳が印象的な男が一人立っていた。

「どなたでしょう？」

即座にかぐや姫としての仮面を被り対応するが、男は何やら可笑しそうにクツクツと笑う。
そんな男の態度にピクリと眉尻が動く輝夜だが、そこは自制する。と、笑っている男の後ろからもう一人、ゆったりと人影が現れる。金色の髪が目を引く妖艶な美女だ、口元を扇子で覆い、そこはかとなく胡散臭い雰囲気を感じる。

「こんばんわ、お嬢さん、良い夜ですわね？」

ゆったりとした口調で輝夜に話し掛けながらも、未だに笑っている男へ向けて肘鉄を繰り出す。
女性が繰り出した肘鉄はあっさりと男の掌へ吸い込まれ、受け止められるが、それをきっかけに男の笑い声は止まり、男は輝夜へ向き直り、にやりと笑みを浮かべる。

（夜に、愛されてる？）

不敵に笑みを浮かべる男に、輝夜はそんな印象を受ける。

「妖怪と人間なんて、珍しい組み合わせですね？」
「そうだろう？　まぁ、こいつが勝手に付き纏ってくるだけなんだが」
「酷いですわ？　私はただ貴方に夢中なだけですわ」

輝夜の牽制のつもりで放った言葉にも動揺する事無く、悠然と笑みを浮かべ、更に輝夜の発言に乗り、妖怪と思わしき女性を責めに入る男。
女性はそんな男の発言に傷ついた様子も無く微笑みながら言葉を返している。
得体の知れない男と女、二人とも共通しているのは、底が知れな

いという事。輝夜自身が大きな声を上げればすぐさま二人を囲めるというこの状況でこの余裕。部外者が屋敷に侵入しているというのに誰も騒ぐ気配が無い事。

それらの事実を総合して、只者ではないと感じることが出来る。

輝夜は自分が死なない事などわかっているが、それにしてもじっとりと嫌な汗が吹き出てくる。

「それで？　私に何の用でしょう？」

「別にとって食いやしねぇよ、後、普通に喋ってくれて構わんぜ？」

「何の事でしょう？」

「一瞬ではあるが、最初、少し眉が片方動いていたぜ？」

男が指摘した点、それは輝夜が大昔に教育係である女性に言われた癖の一つであった。

無論、それを指摘されてから、出ない様に勤めたつもりではあるし、直すように意識してからは教育係であった女性にも公に指摘された事は無かった。

その小さな動きすら見切れる男にはもうどう取り繕っても無駄だろう。

そう結論付けると、輝夜は肩の力を抜く。

「そこまでバレてるなら、隠す意味は無いわね」

「お、ようやく話が出来るな」

肩の力を抜き、本来の話し方で言葉を紡ぐ輝夜を見て、にやにやと笑みを浮かべながら腕を組む男。

その男の傍らに寄り添う妖怪の女は口元に扇子を開いて、相変わらず明確な表情が掴めない。

「で？　かぐや姫ってアンタで合ってるか？」

「えぇ、そう呼ばれているわ、本来の名前は蓬莱山輝夜」

輝夜の本名を聞いて、何やら思う所があるのか、男は右手で口元を隠し、しきりに首を傾げている。

そんな男と話し始めて輝夜は思っていた事がある。

初対面であるはずの男のこの雰囲気と言うか、言葉には上手く表せないが、何処かで聞いたような見たような、初対面である事は確実な筈なのに何処かで知っている様な、既視感の様なものを感じる。

「まぁ、いいか、で？　何がままならないんだ？」

考え事は既に諦めたのか……いや、どうやら男の隣に居る妖怪の女性にせっつかれていた様だ、その証拠に、未だに口元を扇子で覆っている女性の身体が軽く男の身体にぶつかる様にゆらゆらと揺れている。

「私はね、この地上が好きなの、でも、まだ先の話だけど、月へ帰らなければならない。ここを離れたくないけど、抵抗したらここの人達が犠牲になる。そんなのは嫌、でも、月へ帰って閉じ込められるのも嫌なのよ」

底が知れない二人の男女を前に隠し事は無駄だと悟ったのか、輝夜は先程まで考えていた事を吐露していく。

輝夜の目の前に居る二人、特に男の方は何処と無く輝夜の教育係を髣髴とさせる雰囲気を感じるので、隠しても無駄と言う思考に至ったのかもしれない。

と、自己分析をしていた輝夜の頭に、ふと引っ掛かる事があった。

輝夜の教育者である女性、それによく似た雰囲気を感じる男。

「月へ……帰る？　いや待て、落ち着け、俺、それは早計だ」

輝夜が思考を回転させている時、男も輝夜の発言に何か引っ掛かる所があったのか、何やら少し面倒臭そうな様子でぶつくさと独り言を呟いている。

「月へ帰る、貴女月人なの？」
「そうだけど……知ってるの？」

妖怪の女性が確認を取るように問いかけてくる言葉に、肯定の意を返すと、男が更に面倒臭そうに表情を歪める。
黒尽くめの男は完全にやる気の抜け切った表情で、右手で口元を隠し、何かを思案するかの様に視線を虚空へと彷徨わせ思案中。

「知っていますわ、ちょっと覗きに行った事がありますの」

この地上から月までは途方も無い距離がある事は月では常識だ、その距離を知っていながら覗きに行った事があると、妖怪の女性は信じられない事を言った気がするが、結局の所、そう言う事が可能な能力を持った妖怪なのだろう。
地上から月までの距離を軽く散歩でも行って来たという様に軽く言うこの妖怪の女性は、実際の所強力な妖怪なのだと推測がつく。
輝夜の推察も間違ってはいないという事だ。
と、言葉を発する事無く頭を悩ませていた男から唐突に声が上がる。

「よし、紫」
「何？」

どうやら妖怪の女性の名前は紫と言うらしかった。
同じ様な名前を陰陽師から聞いた事があるような気がする。と輝

夜はぼんやりと頭の中で思う。

「今回の依頼は無かった事にしよう、妹紅のお嬢ちゃんには依頼失敗と言う報告をしよう、あぁ、それがいい」

「ちょ、ちょっと何言ってるの!?　この依頼こなさなかったら食費危ないじゃない!?」

力強く諦め宣言を爽やかな表情で言い切った男に、妖怪の女性―

―紫がいきなり所帯じみた台詞で男に詰め寄る。

輝夜の中で、得体が知れず、底も知れなかった超人的な存在の様にすら思えていた二人の男女が一気に俗世臭くなった様に感じられ、二人のやり取りに呆然。

「その位街の手伝いで稼げば良いんだ！　だが、月人は駄目だ！面倒臭そうな展開が待ってるに決まってる！」

紫の責めるような言葉に、断固拒否の姿勢を見せた男。

その男の言葉は、月人と言う存在を知っているらしかった。

と、そこではたと気がつく。

そして、未だに紫と押し問答をしている男をじっと見てみるが、妖力は感じられない。神力も勿論感じられない。感じるのは途方も無い霊力、と、何故か魔力。

そこまで思考を進めた所で、輝夜の中でキーワードが繋がっていく。

（地上人、月人を知っている、途方も無い霊力と魔力、やる気の無い表情……）

「何だったかしら……そう、確か……えん、遠成……遠成……しょう、翔夜……だったかしら?」

その名前を言った時、反応したのは男ではなく、何故か紫の方。

「何で初対面のお嬢ちゃんが貴方の名前知ってるのよ……私と言うものがありながらこんなお嬢ちゃんにまで手を出してたのね！？面倒になるってこう言う事だったんでしょう！？」

「あぁ……肯定しやがった、もうこれで逃げる事も出来ねぇじゃねぇか……それに勘違いすんな輝夜嬢ちゃんとは間違いなく初対面だ」

紫の肯定により、男の方の名前は遠成翔夜だと言う事が判明する。

遠成翔夜――月人にとってこの名前は、これ以上無いほどに有名な名前である事を輝夜は知っていた。

月人の民がまだ地上に居た頃、輝夜はまだ生まれていなかったが、その頃から今でも月人からの憧れや畏怖を集める名前だ。

地上人でありながら悠久の時を生き、月人の兵器も物ともしない超人的な戦闘能力、そして何より、月人の誰もが認める天才――八意永琳の最初で最後の護衛で思いを寄せた男。

月人の誰もが憧れ、誰もが尊敬し、誰もが恐怖し、誰もが慕った、月人の間では伝説的な人物。

輝夜の教育係だった女性と言うのが、八意永琳だった事もあって、遠成翔夜と言う人物については耳にタコが出来るほど聞いた。

その中で、輝夜も遠成翔夜と言う人物に憧れを持ち、そして尊敬していた。

永い時を生きる事に、退屈しか見出せなかった輝夜とは違い、永い生の中で楽しく、格好をつけた言い方をするならば、常に自らが輝くように生きている、そんな翔夜の生き方に憧れたのだ。

自らが楽しく、輝く様に生きるためなら、誰から嫌われようと蔑まれようと疎まれようと関係ない、そこまでの覚悟で生きている翔夜に憧れた。

輝夜自身は、退屈は嫌いだが、そこまでの覚悟を持って輝けなかったから。

「じゃあ、貴方があの遠成翔夜で間違いないのね？」
「誰の事を言ってるのかわかりかねるな？　俺は確かに遠成翔夜だが、お前が知っているのは同姓同名の別人だろう」
「私は他に霊力と魔力、両方とも持ち合わせている人間の遠成翔夜なんて聞いたこと無いわ？」
「……えらく俺の事に詳しいじゃねぇか」
「貴方は月人の間では有名だもの、特に八意永琳と言う女性の中では、永い時を経ても忘れられない程に有名みたいよ？」

輝夜は自らの頬が楽しそうに笑みの形を作っている事を自覚しながら言葉を吐き出していく。
輝夜の口から永琳の名前だ出た瞬間、男――翔夜の顔が明らかに面倒臭そうな雰囲気を感じる表情へと変化していく。
そしてこれ以上無いほどに面倒臭そうな表情をしている翔夜の二の腕を、永琳の名前が出た瞬間、紫が力一杯抓っている。

「紫、いてぇ、若干爪刺さってるから」
「おほほほ、やっぱり他に女が居たんじゃない！」
「お前に会う前の事だし、そう言う関係でもない、つーか、普通にお前が俺の女面してるのにも驚きだ」
「あら？　違ったかしら？」
「了承した覚えは全く無い」
「良いじゃない、私の心は既に貴方の虜よ？」
「俺の心はお前の虜じゃない」
「連れないわね……」
「連れなくて結構」
「何やってるのよあんた達……」

先程から全く噛み合っていない会話に輝夜は呆れた声を上げる。

女性からの誘いの言葉や甘い言葉をにべも無く斬り捨てる翔夜。
そんな行動に、自らが記憶している月人の間で有名な遠成翔夜と言う人物で間違いないと、己の考えに確信を得ていく。
輝夜の教育係であった永琳も、翔夜と言う男は女性に流される事の無い程に自分の生き方を大切にしている男だと言われた。
永琳としては、そんな連れない態度も燃えると言われたが、輝夜としては、実際のその場面を目の前にしてみてもその感覚は理解出来そうになかった。
紫はどうも永琳と同じ様な感覚の様で、連れなくされてもそれがマイナス評価に繋がる事は無い様だが……。

「とにかく、今回の依頼はお流れだ」
「そうよ、それ、依頼って何なの？　私にも関係ある話？」

翔夜の発言に輝夜が食いつくと、翔夜の表情はあからさまに面倒臭そうと感じている表情へと変化する。
こう言う表情をしている時は梃子でも何も答え無いと言う事を永琳から聞いていた輝夜は即座に質問を変える。

「依頼内容は話さないのが原則でな」
「じゃあ、質問を変えるわ、その依頼が無くなったらアンタもうここに来ないの？」
「まぁ、来ないだろうな、必要性がないしな」

ぼけっと考えながら軽く、そして適当に返って来た答えは、輝夜にとって望ましくないもだった。
いつか、遠成翔夜と言う男に会った時、輝夜には聞いてみたい事が山ほどあったのだ。永遠を楽しく生きるためのコツだとか、永琳の昔の事だとか、月人が地上に居た時の話だとか、まだまだ聞きたい事はあるのだ、だからこそ、その依頼を断る事は輝夜としては認

めるわけにはいかない。

「その依頼、断っちゃ駄目よ」
「そうよ！　生活費に困るわ！」
「えー？　打ち合わせも無しに同盟とか勘弁しろよ」

輝夜の意見に賛同するように紫から援護射撃が入る。
二人からの攻撃を受けた翔夜はげんなりとした表情。
夜空に浮かぶ星と月を仰ぎ見るその姿は本当に勘弁してくれと言っている事がよくわかる雰囲気を醸し出していた。

「アンタには聞きたい事が山ほどあんのよ」
「例えば？」
「永琳の事とか、昔の月人の事とか……永遠の生き方とか」
「はぁん？」

例を上げて行く輝夜の声に篭められた感情に何か引っかかるものを覚えたのか、鋭い瞳を細めて輝夜を見据える。
見た所、輝夜の雰囲気や抑揚に変化は無い、だが、そこに篭められた何かを確かに翔夜は感じ取っていた。
それは紫も同じらしく、催促する様に翔夜のわき腹をしきりに肘で突っついていた。

（永遠の生き方、ねぇ）
「わぁったよ、そう突っつくな、紫」
「別に、彼女にはここで恩を売っておいた方が良いと思ったのよ、私の目指すものの為には、ね」

小声でそう言う紫の言葉に嘘は無いのだろう、紫は妖怪、そして彼女は何か大きなものを追いかけている。

それが何か、今の所翔夜の興味外ではあるが、彼女はそうほいほいと軽く義理や人情、同情で動く妖怪ではない。
その事を翔夜は何となく理解していた。
翔夜の事に関してはどうも彼女の中で例外の様だが……。

「ったく、自分の目的の為に俺まで犠牲かよ」
「人聞きが悪いわね、確かに私は私の理想でも動くけれど、貴方の為にも動くわ、そして将来的に貴方の為にもなる」
「そうかよ、んじゃま、期待するか」
「期待しておいて」

にこやかな表情の紫とのやり取りを軽く終えると、翔夜は肩を竦ませ、やれやれ、と聞こえて来そうな様子で輝夜へと向き直る。
相変わらず表情はやる気が抜けきっているが……。

「何か、やたらと紫からせっつかれてるし、依頼の破棄は撤回って事になった」
「ホント!?」
「あぁ、んで、依頼続行の為に聞きたい事が幾つかあるんだが良いか？」
「えぇ、私の分かる範囲でなら」

依頼を続行すると聞いて安心したのか、翔夜の提案に一も二もなく輝夜は頷いてみせる。

「おし、んじゃまぁ、藤原不比等、知ってるよな？」
「えぇ……」

翔夜からの質問に頷いてみせる輝夜だが、その表情には、それがどうかしたのか？　と言う雰囲気がありありと浮かんでいる。

わかりやすいまでの輝夜の反応。
そう言う事を悟らせない為に紫はいつも扇子で口元を隠している。
とどうでも良い考えが翔夜の頭に浮かぶが今は捨て置く。
夜はそう長いわけではないのだ。

「不比等に要求したのは、蓬莱の珠の枝、これも間違いないか？」
「えぇ、間違いないわ」

蓬莱の珠の枝、東の海に存在すると言われる『蓬莱山』そこにある枝で、根は白銀、茎は黄金、実は真珠で出来ている木の枝、と言われている。
だが、そんなものは存在しない。その事を翔夜は知っているし、輝夜も承知しているだろう。
存在していないものをもってこいと言う輝夜の主張を卑怯だとも最低だとも翔夜は思わない。要はそれだけ輝夜が結婚を嫌がっていると言う事だろう。
翔夜としてはそんな事はどうでもよく、そもそも聞きたい事はそれではない。

「よし、ならそこで聞きたいんだが、不比等ってのはどんな感じの奴だった？」
「へ？　え、えぇ、えっと、悪い男じゃないわよ？　有能で容姿も整ってる」
「ふぅん……なら何で求婚を受けないんだ？　良い男なんだろ？」
「私は別に結婚したくないし、向こうも、多分そんなに乗り気じゃなかったわよ」
「何？」
「どう言う事かしら？」

輝夜から聞かされた真実に、紫と翔夜は首を傾げる。

妹紅の話だと、不比等は輝夜の美貌に虜になり、自発的に求婚を申し込んでいる。と言う風に聞いていた。
だがここで、妹紅と輝夜の話で食い違いが出てきた。

「んじゃあ、不比等が蓬莱の珠の枝を求めて彼方此方飛び回ってる話、聞いた事があるか？　聞いたとすれば本当の事だと思うか？」
「えぇ、聞いた事あるわよ？　多分本当じゃないかしら、人柄とかを総合して考えると偽物を作って持ってくるような人物じゃないのは確かみたいだし」
「はぁん？　なぁんかキナくせぇ話になってきたな？」
「そうね……」

やる気の無い表情はそのままに紫と思案に入る翔夜に、輝夜は疑問だった事を口にする。

「って言うか、依頼って言ってるけど、遠成、仕事何やってるの？」
「あん？　一応陰陽師」
「私はその助手～」

輝夜の疑問に軽く答える翔夜、翔夜に続いて嬉しそうに紫が声を上げる。
その状況に、輝夜は目元がひくひくと痙攣したように小刻みに動く。

「陰陽師の助手が妖怪って……」

ポツリと呟いた輝夜の発言に、紫が頬を膨らませて反論する。
信じられない、と言うように呟かれた輝夜の台詞が余程不満だったのだろう。

「良いじゃない！　陰陽師に惚れる妖怪が居たって！」

明らかな美女が頬を膨らませて反論する様は非常に可愛く映るが、輝夜にとって、天敵同士が仲良く肩を並べあって仕事をしている現状が明らかに不自然に見えて仕方が無かった。

だが、結局、紫も翔夜もそんな事を一々気にする性格でもないのだろう。

輝夜は無理矢理自分をそう納得させる。

「ま、まぁ、それは良いわ、遠成が陰陽師やってるなら、仕事が忙しくて仕方ないんじゃない？」

「いや？　んな事ねぇぜ？　貴族達の根回しで俺今仕事干されてるし」

「翔夜を使わない何て信じられないでしょ？」

あっけらかんと言われた翔夜の言葉と、仕事を干されている本人よりも遺憾さを露にした紫の言葉に、輝夜も驚きを隠せないのか、開いた口が塞がらない。

翔夜が仕事を干されている事を全く気にしていない事や、干されている本人よりも妖怪であるはずの紫が怒りを露にしている事など、ツッコミ所は多彩だが、輝夜が驚いているのは紫と同じく、翔夜ほどの人材を起用しない貴族達に対してだった。

「し、信じられない……月人達の話を聞く限り、妖怪退治にこれ以上無いほどの逸材でしょ？」

「あー、言葉遣いや態度が悪いんだと、俺は依頼主選ぶからなぁ」

「全く、器の小さい貴族ばっかりね、嫌がらせを受けても文句一つ言わない翔夜の器を見習って欲しいわ」

輝夜の言葉に、紫の怒りは更に燃え上がり、翔夜は変わらず気に

していないような態度で貴族達が気に入らない部分を分析している。
確かに翔夜は輝夜から見ても、器が大きく見える。
かつて輝夜の教育係であった永琳も言っていた。翔夜の一番の魅力はあらゆる人を知らぬ間に包み込んでいるその器の大きさであると。
言わなければならない時はきちんと言って締める。
ただ言われた事を気にしないだけで、全てを安穏と受け入れ、波風立たない様に流され過ごしていく様な小さな人間ではなく、自分がした事で負の感情を抱かれようとも、それすら受け止める覚悟を持った器が一番の魅力。
そう言って楽しそうに、それでいて嬉しそうに、そしてこれ以上無いほど綺麗な笑顔で笑っていた永琳の表情を輝夜は未だに忘れられない。

「まぁ、んな事はどうでもいい」

本当に小さな事だと言うように翔夜の口から出た言葉にも、確かに気にしているような色は無く、輝夜もこの時は永琳の言っていた事が理解出来た。
貴方の言ってた事、間違い無かった、確かに遠成翔夜と言う男は客観的に見て良い男よ、と永琳の意見を賛成しながら楽しそうに輝夜は笑う。

「新たに調べなきゃなんねぇ事が出来たな、取り合えず今回はこの辺か」
「そうね、翔夜じゃないけど、面倒臭そうね……」

翔夜の頭の中は既に、貴族達から仕事を干されていると言う些事など既に頭に無いのか、面倒臭そうに、新たに浮き彫りになった事実にため息を吐きつつも思案している。

紫は翔夜の口癖が移ったのか、明らかにダルそうにしてため息を一つ。
そうしてほんの少しの時間思案していた翔夜だが、考えても拉致があかないと思ったのか、考える事をやめ、輝夜に向き直る。

「んじゃまぁ、今回はこれで帰るわ」
「わかったわ、色々聞きたい事があるからまた来なさいよ？」
「あいあい、んじゃま、帰るか、紫」
「えぇ」

翔夜の帰るかと言う言葉が紫の琴線に触れたのか、機嫌良さそうに翔夜の言葉に答える。
その瞬間、紫と翔夜の背後に二つのリボンが現れ、そのまま上下に別れると、空間に裂け目が生じ、その奥には無数の瞳。
翔夜と紫は、それに気にした様子は無かったが、輝夜はその空間の不気味さに一歩後ずさりしてしまう。
その際、庭に敷き詰められた小石が擦れるような音が辺りに響き渡り、その音を聞いた翔夜と紫は目を合わせ互いに苦笑を交し合う。
二人の様子に輝夜は恥ずかしかったのかうっすらと頬を染める。

「じゃあね、月人のお嬢ちゃん」

輝夜の様子に突っ込む事無く、機嫌が良さそうな弾んだ声で輝夜に別れの言葉を送った紫は軽い足取りで、無数の瞳が支配するその空間へ消えていく。
月夜に反射しながら波打つ金色の髪は何よりも幻想的で、確かにこの世の者とは思えない程に美しい後姿だった。

「んじゃ、またな」

紫の様に弾んだ声ではないが、友人に別れを告げるような軽い台詞を発する低めの翔夜の声に、輝夜はあ手を軽く振る事でそれに答える。

月夜に反射するような艶が無い後ろ姿だったが、それでも月の光や夜の闇は、翔夜の後姿を見守っているような雰囲気がしていた。

そうして完全に二人が姿を消した夜の庭で、輝夜は一つ息を吐き、言葉を漏らす。

「遠成翔夜、不思議な奴ね、人間なのにとても夜と言う時間に愛されてるみたいだった」

夜に愛されている。その表現が誇張でも何でも無い程に、遠成翔夜と言う男は夜と言う時間に自然と溶け込んでいた。

と、そこで紫と翔夜が並んでいる姿を思い浮かべて、輝夜は月を見上げながら苦笑を刻む。

「貴女の言った通り、遠成の虜になった女が居たわよ、永琳、貴女もうかうかしてられないわね？」

誰も居ない芸術品の様な庭で月に向かって静かに、それで居て楽しそうに語りかける輝夜は、確かにこの世の者と思えぬ程の神秘さと美しさを兼ね備えていた。

「で、帰って来たわけだが……」

翔夜の家であるあばら家に帰ってきた翔夜は、現在暗闇が支配するあばら家の中の中心部に向けてこれ以上無い程に面倒臭そうな半眼を向けていた。

「何で帰って来ていきなり布団敷いてスタンバってんだ？」
「一緒に寝てくれるんでしょ？」
「確かに言ったが、お前欲を隠さなさすぎだろ」

翔夜の発言通り、翔夜の面倒臭そうな半眼の視線が向かう先には、翔夜自身が睡眠の為だけに集めた高級寝具を敷いて、その中に潜り込み、形の整った鼻から上だけを掛け布団から出した状態の紫が、翔夜が布団の中に入ってくるのを今か今かと待ちつつスタンバっている光景が映っていた。

紫は現在いつも被っている帽子を脱ぎ、小さな顔にあった頭が布団から突き出ており、それだけで新鮮な様に感じられ、そんな状態の紫は非常に可愛らしく映るが、翔夜にとってはぶっちゃけそんな事はどうでもよく、布団の中に入った後の紫への対応の面倒臭さに意識が行っている。

ワクワク、と聞こえて来そうな紫の態度に、ため息を吐きながらも、伸びを一つして欠伸と共に布団へと近付く。

「い、いよいよね……」

生唾を飲み込む音が聞えて来そうなほどに期待している紫を視界に収めつつ、布団の傍らに到着し、翔夜は徐に口を開く。

「明日以降の予定だが、何か意見あるか？」
「特に無いわ、多分考えてる事は翔夜と同じだと思うしね」
「なら、明日以降、妹紅の嬢ちゃんが報告を聞きに来た時に不比等の屋敷を探る、でいいか？」
「えぇ、問題ないわ」

翔夜から提示された予定に、異論を挟む事無く紫は頷く、その反

応に満足した翔夜は特に躊躇する事無く布団を捲り、紫の右隣へと滑り込む。

「ふぁ……」

翔夜が滑り込んできた瞬間、何かを感じ取ったのか小さく紫の鼻が動き、感じ取ったものに陶酔するかの様な短い音が紫の口から漏れ出す。

そのまま仰向けで紫と翔夜は二人並んで寝転ぶが、何かに気がついた様に、翔夜の手が紫の首の後ろへ回る。

唐突な翔夜の行動に、少し驚いたのか、紫の瞳がきゅっと瞑られるが、紫が感じたのは自らの髪が首の後ろで緩やかに束ねられる感触だった。

金色の艶やかな髪を束ねているのは、間違いなく翔夜の手だが、紫としては翔夜の意図が把握できなかった為、少し混乱気味。

「え、えっと、何？」

「身体を横に向けろ、せっかくの髪が俺の身体にも下敷きにされてるぞ」

翔夜の言葉に、意図がようやくわかったのか、身体を浮かせ、翔夜の身体にも下敷きにされている髪を抜く。

その際翔夜が身体を浮かせたため、髪を引き抜くことはしなくても良かった。

身体を翔夜の方へ向け、髪が体の下敷きになっていない事を確認すると、翔夜は満足したのか、髪から手を離し、再び仰向けへと体勢を変える。

一連の翔夜の行動は、紫の髪を気にしての行動だったと、すとんと理解した紫は、急にくすぐったくなって来たのか、身体をもぞもぞと動かしながら、翔夜の右腕を緩やかに捕らえる。

「ズルイ、翔夜はズルイわ」
「何が？」
「翔夜が布団に入ってきたら色々して既成事実を作ってやろうとか思ってたのに、先にこんな事されたら何も出来ないじゃない」
「はぁん？　それはスマンな」

紫の翔夜を責めるような言葉に、翔夜は横目で紫を見やるが、翔夜の肩に顔を押し付け、辛うじて見える耳は林檎もかくやと言う色だ。

「翔夜の卑怯者……」

翔夜を責めるような内容の言葉も、勢いは無い、と言うより、嬉しいのだが恥ずかしい、それを何処へ持っていけば良いのかわからない、そんな気持ちが現れているような、そんないじらしい声音。
そんな紫の声を耳にした翔夜は、変わらずにやにやと笑みを浮かべ横目で見た紫から視線を外さないが、紫も翔夜の肩に顔を埋めたまま、顔を上げる気配は無い。

「へぇへぇ、良いからもう寝ろ」
「うん……」

妙にしおらしい紫の声を耳にしながら、夜に愛された人間、後に幻想郷の気ままな御意見番となる人物と、妖怪の賢者。
幻想郷の大物になる二人の同居一日目の夜は、特に何事も無く、静かに過ぎていく。

じゅうご　依頼遂行、あ、面倒臭い……（後書き）

と言うわけで、最近更新停滞が著しいあっくすぼんばーです。
スランプですねー、全く抜けてる気がしません。
文章がすらすら浮かんでこないのはスランプって事で良いんだよね？　そうだよね？

と言うわけで、ＩＳが形になっていないのに東方書いちゃってる俺。
何やってんの？　ホントに何やっちゃってんの？
自分でも果てしなくそう思いますが、どうかご容赦を。

そして今回……あれ？　何か長くね？
スランプを抜け出すために、とりあえず思いつくまま書いていたらこんな量になっていました。
いつもの４～５割り増しぐらいの増量。
駄目ですねぇ、スランプ中はどうもスマートに纏められて無い気がします。
内容もよく分からない事になっちゃってるかもしれませんが、許してください。
悪気は無かったんです。
スランプ抜けようと必死だったんです。
話の展開はまぁ……どうでしょう、安っぽいですかね？
その辺りの評価は読者の皆様に任せましょう。

ではでは、今回はこの辺りで、次回もお会いしましょう。
あっくすぼんばーでした。

じゅうろく　遠成翔夜、その男謎につき、まぜるな危険（前書き）

ＩＳの方が、良い展開が浮かばないんです。
書いてない訳じゃないんです。

じゅうろく　遠成翔夜、その男謎につき、まぜるな危険

朝、と言うよりも、もうそろそろ正午へと差し掛かろうとしている時間。

京の片隅にあるあばら家に住んでいる男。

京と言う大きな都の中で、並ぶ者が居ないと言われながらも、主な依頼者である貴族達から最も疎まれている、色々な意味で京一有名な陰陽師である遠成翔夜は、腹の上に感じる違和感と、あばら家の雑な作りによって出来た壁の隙間から入る日の光によって意識を覚醒させていた。

だが、完全に覚醒したわけではなく、自らを起床と言う拷問の様な行動へと駆り立てる日の光とお腹の上の重圧を無視して、完全に意識が浮上せぬ間に、襲い来る睡眠欲に身を任せようと、もう一度意識を沈めに掛かる。

「起きて……翔夜」

睡眠欲に身を任せ、意識を沈めようとした翔夜を妨害したのは、お腹の上から降って来る女性の声と、ゆさゆさと身体を揺さぶられる感覚だった。

翔夜にこんな事をするのは、状況的に考えて、成り行きで翔夜のあばら家に居ついた妖怪、八雲紫であろう。

そんな事は翔夜にも分かっていたし、お腹の上に乗っている悩ましいお尻の感触に免じて起床してやりたい所ではあるが、如何せん、翔夜は眠いのだ。

「俺は、眠ぃんだよ……」

「せっかくご飯作ったのに、冷めちゃうわ？」

紫に対して返答しつつ、寝返りを打とうとして、失敗。
彼女がお腹の上に乗っている状態で寝返りを打てる訳が無かった。
寝返りを打つ事を諦め、仰向けのまま、もう一度意識を落としに掛かる。

「冷めても、飯は食える……人種だ」
「もう……あ、起きないならこのままキスしちゃうけど、いい？」
「勝手にしろ……俺は眠い」

翔夜の適当と言うか、寝起きだからこその投げやりな返答に、お腹の上に居る紫から息を呑む気配が感じられる。
そして紫は、現在翔夜の胸板に乗せられているほっそりした指を胸板の上に滑らせるようにして移動させ、最終的には翔夜の両頬に優しくその手は添えられ、翔夜の輪郭を確かめるようにして僅かに手が動き、満足したのか、頬に添えたまま両手の動きは止まる。
いつもはやる気の無さそうな雰囲気と表情で緩和されている鋭い瞳は静かに閉じられ、浅く呼吸を繰り返す口元、普段は隙がある様に見えて、実はそんな物は存在しない遠成翔夜と言う男が無防備に寝ている様を見下ろしながら、紫は生唾を飲み込み、その頬は気のせいではなくしっかりと紅潮が見て取れる。
よし、と小さく気合を入れた紫は、翔夜の両頬に手を軽く添えたまま、緊張した面持ちで上体を傾けていく。
ちぅ……。

「ひょわわわわ！　ぎゃん！」

紫の唇が翔夜の薄い唇に軽く吸い付いた瞬間、掛け布団が勢いよく捲れ、翔夜と一緒の布団に入ったまま翔夜のお腹に乗っていた紫が飛び上がったように跳ね起き、そのまま大の字で寝ていた翔夜の足の間に尻餅を着き、妙な奇声と共に勢いよく後ずさり、あばら家

の壁に激突。

「掛け布団とんなよ目覚めちまったろ……あぁ、眠ぃ、つか、ホントにやりやがったな」

何故か仕掛けた筈の紫が驚き、壁に激突しているのに対して、仕掛けられた筈の翔夜は、掛け布団が無くなった事に不満を訴え、掛け布団が無くなった事で完全に目が覚めてしまった翔夜は、横たえていた身を起こし、伸びを一つすると同時に、大口空けて欠伸。

そのまま布団の上に胡坐を掻き、片手を首の後ろに当てて首を回す。

冷静そのもの、と言うよりも、明らかにいつも通りな翔夜を目の前にして、紫の顔は赤く染まりながらも震える指で翔夜を指しながら、あまりにいつも通りな翔夜に抗議の声を上げる。

「翔夜が勝手にしろって言ったんじゃない！　って言うか、何でそんなに普通なのよ！　もっと反応があるでしょ！？　何で仕掛けた方の私がこれだけ慌ててるのよ！　普通逆じゃない！？　私が馬鹿みたいじゃない！」

「慌てるほどの事じゃねぇからな」

これ以上無い程に頬を紅潮させながら捲くし立てる紫の様子に、翔夜はいつも通りのやる気の無い表情。

そのまま開かれた口で、捲くし立てる紫をばっさりと切り捨てる。

翔夜のその言葉に、頬の赤みは抜けないままに、紫は不満そうに唇を尖らせる。

「翔夜は初めてじゃないから慌てないの？」

「さぁ？　どっちだろうな？　想像に任せる」

にやにやと笑いながらいつも通りに紫を見返す翔夜に、む～、と唇を尖らせたまま子供っぽく唸り、翔夜を睨みつける紫。

余裕の態度を見せ付ける翔夜と、自分から仕掛けたのに何故か一杯一杯の紫による睨み合いがしばし続くが、結局折れたのは紫の方で、ため息を吐きながら立ち上がり、翔夜の傍にすとんと座り込み、自らの指で翔夜の指を恥らうように突付く。

翔夜を見ながら、仕方ないと言う様に苦笑する紫の頬は未だに赤かった。

「まぁ、今の所は私の初キスが翔夜で良かったと思う事にしておくわ」

「初めてだったのか、そりゃ後馳走さん」

相変わらず動揺の欠片も無く、にやにやと笑う翔夜の手の甲を軽く抓り、この件に見切りをつけたのか、紫は立ち上がって台所へ歩を進めながら、翔夜へ言葉を投げかける。

「布団、直しておいて、ご飯持ってくるから」

「あいよ」

紫の言葉に軽く答え、彼女によって吹き飛ばされた哀れな掛け布団を回収して、敷布団と一緒に三つ折、その上に枕を無造作に置き、黒のシャツと黒のズボンと言う時代錯誤甚だしい服装から、黒の着流しへ着替える。

その後、窓を開けてつっかえ棒で板が落ちてこないように留めてから部屋の中心に胡坐を掻いて座る。

玄関の引き戸にある障子や、開けた窓から差し込む光を面倒臭そうに見ながら、時刻は正午辺りか、とあたりを付けつつ、もう一度大口を開けて欠伸。

と、そこで台所から姿を現した紫。

彼女の手にはお膳が二つあり、その上にはそれぞれ二人の朝食…
…いや、時間的に言うならば昼食が正しい、が乗っている。
紫の持っている二つのお膳は、明らかに艶のある塗りが施され、
かなり値の張る高級品だという事がわかる。
恐らく地べたに食べ物を置いて食べるのは行儀が悪いと考え、自
分の家から持ってきたものだろう。と断定。
この家にはあのような高級品などあるわけが無いのだ。寝具を除
いて、ではあるが。

「はい、これ、翔夜の分」
「おぉ、ありがとよ」

嬉しそうに笑いながら渡されたお膳を受け取り、翔夜は自らの前
に置く。
その様子を見届けた紫も翔夜の正面に正座し、その前にお膳を置
く。
翔夜は紫が座るのを見届けると、自らの前に置かれたお膳へと視
線を配る。
白いお米に、小皿に乗った漬物、汁物、メインの焼き魚にはご丁
寧に大根おろしが乗せられ、醤油が適量掛かっている。正に日本の
朝食と言うに相応しいメニューに、翔夜の頬も少しばかり緩む。
そんな翔夜の様子を見た紫は、少し安堵したように一つ息を吐き、
口を開く。

「どうかしら？　翔夜の好みがわからないから無難な物にしてみた
んだけど」
「見た目は文句無い、美味そうだ」
「そう、良かったわ」
「んじゃま、いただくぞ」
「えぇ、どうぞ召し上がれ」

取り敢えずの評価に安心して胸を撫で下ろす紫だったが、間髪居れずに翔夜からの食膳の挨拶が聞え、またしても少し身を硬くして、翔夜の声に答える。

紫は自分の箸に手をつける事無く、その視線は翔夜の口に運ばれていく料理から視線を外さない。

ご飯、焼き魚、ご飯、漬物、ご飯、汁物、順番に一通り食べていく翔夜、箸を動かす中で、紫の視線に気付きその意図に気がつく。

「十分美味い、心配するな」

改めて翔夜からの味について評価を聞くと、そこで本当に安心したように大きく息を吐き、胸を撫で下ろす。

そしてようやく、自分の箸を取り、昼食に手をつけていく。

「全くもう、美味しいならすぐに言ってよ、無駄に心配しちゃったわ」

「そいつぁ、すまねぇな」

上品に箸を動かし、口を小さく開けてご飯や焼き魚を放り込みつつ、眉はハの字を描いており、少しばかりの不満を翔夜へ向ける。

が、全体的には嬉しそうな雰囲気の紫。

昼食を上品に口へ運ぶ紫とは対照的に、さっくり魚を解体し、醤油と大根を絡めつつ、無造作にご飯の上へ乗せ、そのままご飯を掻き込み、漬物を取り口の中へ放り込みぽりぽりと噛み砕き、そのまま飲み込む。

ご飯粒を溢したりしている訳ではないし、迷い箸もすることが無いので、下品ではないが、紫と比べて野性的と言うか、見ていて気持ちの良い食べっぷりである。

そんな翔夜の姿を見ている紫も、嬉しそうに笑顔を浮かべている。

「ご飯、残ってるか？」
「えぇ、あるわよ、一応多めに炊いておいたから」
「気が利くな、んじゃま、御代わりな」
「はいはい」

紫の返答を聞いて、相変わらずやる気の無い表情で茶碗を紫に突き出す翔夜の茶碗を受け取り、嬉しそうに台所へパタパタと駆けていく様は、強大な妖怪としての雰囲気は微塵も無い。
そうこうして戻ってきた紫の右手には、ご飯を盛られた翔夜の茶碗、もう片方にはご飯が入っているであろう御櫃を抱えている。

「はい、どうぞ」
「あぁ、あんがとさん」

礼を一つ言って茶碗を受け取った翔夜を確認して、抱えていた御櫃を紫は自らの傍らに置いて、翔夜の御代わり宣言にいつでも応えられる状況を作ると、自らも食事を再開する。
その様は相変わらず上品さを感じさせる。

「ね？　今日妹紅のお嬢ちゃん、来ると思う？」

相変わらずおかずとご飯を勢いよく食べていく翔夜の姿を見ながら、食事を再開した紫が口を開く。
紫からの問い掛けに、一旦ご飯を掻き込むのを止め、少し思案するように中に視線を彷徨わせ、唐突に箸を動かし、ご飯を食べる事無く漬物をぽりぽりと齧り、飲み込む。

「どうだろうな、大分切羽詰ってたみたいだからな……多分来るんじゃないか？」

「来なかった時はどうするの？」

翔夜の示した可能性とは逆の可能性を示す紫の質問に、取り合えず汁物を、ズズッと啜り、飲み込む。

「来なかった時か……そうさな、散歩にでも行くか？」

「は？」

汁物の入った器をお膳に置き、にやにやと笑いながら軽く言った翔夜の言葉に、紫は開いた口が塞がらないのか、箸を動かす手を止めて、翔夜の顔をじっと見返す。

だが、相変わらずにやにやと笑いながら紫から視線を逸らさない翔夜の心の内は読めない。

台詞の通りに受け止めるならば、この男は依頼を遂行する気が無いのか、ただの楽観的な男でしかない。

しかし、紫はどうもそれだけだとは思えなかった、確かに遠成翔夜と言う男は常にやる気は無いし、楽観的と言うか享楽的と言うか、そう言う所があるのは事実である。

「散歩だよ、散歩、この京をのんびりとな」

そう言ってにやりと笑みを浮かべて、また箸を勢いよく動かす遠成翔夜と言う男は、それだけではない何かを感じさせる。

少なくとも知性無き愚者で無い事だけは確実だ、紫は会ってそんなに時間が経っていないにも拘らず、根拠の無い自らのその考えを否定する気にはなれなかった。

紫がそう考える理由、それは、長く生きた妖怪である筈の紫自身をもってしてみても翔夜と言う人間の底知れなさを感じているのが、大きな理由。

紫はそう結論付け、御代わりの催促である茶碗を受け取った。

朝食兼昼食を、紫、翔夜、共に食べ終わり、妹紅がどう出るか、それを確かめる為に、取り合えず待ちの姿勢を取ろうと言う事で意見が一致した紫と翔夜。

あばら家に待機と言う事で、翔夜と紫は手分けして布団を干したり、洗い物をしたり、洗濯をしたり掃除をしたりと雑務をこなしていた。

だが今、それも全て終わり、今はあばら家の中で、胡坐を掻いた翔夜と両足を揃えて折りたたんで座る紫が、向かい合わせになり、ゆるゆると雑談に勤しんでいる。

正確に二人の会話内容を言うならば、雑談と言うより、互いに対しての質問会と言った方が正確な表現で、その内容も、翔夜が紫に質問するよりも紫が翔夜に質問する回数の方が圧倒的に多く、その度に紫は楽しそうに笑ったり瞳を好奇心で輝かせるのだ。

「翔夜が今まで生きてきて一番困った事って何？」

「あ～、そうだな……日が昇る事」

「ふふっ、何それ？」

「いや、お前、夜が終わるんだぞ？　睡眠時間終了のお知らせだぞ？　毎朝絶望感じるしかねぇよ」

普通の人や妖怪からすれば当たり前の事として享受している世界の理、月が沈めば日が昇り、日が沈めば月が昇る。

極々当たり前といえる事が、翔夜にとってはこの上なく困った事だと言う。

その価値観の違いと言うか、世界自体に喧嘩を売っているしか思えない発言が新鮮だったのか、少し可笑しそうに笑う紫。

基本的には上品な振る舞いをする彼女だが、気心知れた者が相手

だと、どうも無防備になるようで、いつもはクスリと小さく笑うか、扇子で口元を覆いながら笑うか、はたまたふわりと上品に微笑むか、と言う風に笑うのが常なのだが、翔夜のように心を許している相手だと、鈴の鳴る様な声でコロコロと笑うのだ。

その様はとても可愛らしい女性だと言う事がよく分かる絵なのだが、翔夜がそれを意識した様子は無く、朝日が昇り、自らの視界に光が差し込む瞬間を思い出したのか、疲れたような雰囲気が漂うばかり。

「後はそうねー……翔夜の失敗談とか聞きたいわね」
「失敗などない、って言いたいんだがなぁ……」
「あ、その反応はあるわね？」
「まぁ、ある事はある」

面倒臭そうに表情を歪める翔夜だったが、もう既に紫は聞かせてもらえるものと思っているのか、瞳を輝かせて翔夜を見つめている。

そんな紫に更に面倒臭そうにため息を吐き、勘弁してくれと言うように顔の右半分を掌で覆い隠し首を振るが、話すまで次の話題には行かないと言う様に、じっと翔夜を見つめ続ける紫に観念したのか、渋々ながら口を開く。

「失敗と言うか、あー、黒歴史なんだが」
「えぇ、その黒歴史って言うのはどんなのなの？」
「かなり昔に、あれだ、大魔法なんて物を作った事があってな、それが黒歴史だ」
「へ？　それの何処が？　むしろ凄い事じゃないの？」

大魔法を作った事の何処が黒歴史なのか心底わからないと言うように紫は首を傾げる。

その際、豊かな金色の髪もそれに合わせてゆらりと揺れ、その際、

日の光を受けて鮮やかに色付いた様に見える。
翔夜の失敗談の何処が失敗なのか思案する様に瞳は宙を彷徨う。

「いやいや、大魔法だぞ？　詠唱とか恥ずかしすぎるだろう？　厨二臭いだろう？」
「何を言ってるのかよく分からないけど、大魔法なら詠唱があるのは当たり前じゃない？」
「仰々しくて面倒臭い、何より恥ずかしい」
「良いんじゃない？　大魔法なんてそんなものでしょ？　大体、翔夜も技に名前ぐらい付けた方が良いわよ」
「しかしなぁ……」

紫からの提案に翔夜の顔にはありありと難色の色が出ている。

「確かに翔夜の術は詠唱や言霊が無くても強力だけど、やっぱり言霊位は使った方が良いと思うわ、イメージしやすいし、発動速度も威力もかなり違うしね」

生徒に物を教える先生の様に説明口調になりながら、紫は人差し指をぴんと立てた右手を持ち上げ、その指を宙で円を描くようにくるくると回す。
そんな先生の様な紫を目の前に、面倒臭そうに眉をハの字に歪ませる翔夜。

「んな事は百も承知だが……」

翔夜が紫の意見に反論を加えようとした瞬間、それにね？　と翔夜の発言を食い気味に言葉を重ねる。
その顔は少し悪戯っぽい印象を抱く笑みだった。

「詠唱や言霊を破棄して術を使うのはかなり高度な技術よね、それをして強力な術が使える翔夜は、この先目立つんじゃないかしら？」
「よし、これからは言霊位は使おう」

遠成翔夜と言う人物は、元々そんなに多くの人目を集めたい人間ではない。
それは何故か？　人目を集めれば集める分だけ自らの動きが制限されるからだ。
有名になると言う事は、常に誰かに注目されると言う事。そうなれば、いくら人目を気にしない翔夜だと言っても、起こした行動によって知らぬ間に敵を作る可能性があり、その様な面倒臭い事態は翔夜の望む所ではない。
この方程式が紫の発言によって瞬時に頭の中に浮かんだ翔夜は、今までの抵抗は何だったのかと思う程の速さで方針を転換。
翔夜の変わり身の早さに驚く所か、それとも翔夜の性質を上手く使った紫を褒める所か、悩める所ではあるが、これは短い間で遠成翔夜と言う人物を理解しかけている八雲紫と言う妖怪を褒める所であろう。

「とってもいい事だと思うわ」

翔夜の変わり身に、にこにこと嬉しそうに手を合わせて喜ぶ紫。
結果的に翔夜は紫の思うように動かされた形になったが、特に気にした様子は無い。
受け入れるべき意見は文句無く受け入れ、害になり受け入れられない意見は受け入れない、単純ではあるが、それが翔夜の中で重要な事だった。
遙か昔、遠成翔夜が魔王と呼ばれていた時代も、周りの意見を受け入れる柔軟な思考があるからこそ、世界を統べる事が出来ていた。
王に慢心はつきものだが、それだけではただの暴君、全てを受け入

れる事の出来る器があってこそ、慢心と言う物は威厳と言う名の評価へと昇華される。

胡坐を掻いている膝を右手で、ぱんっ、と打ち、にやりと笑みを浮かべて紫を見据える翔夜。

「貴重な意見だ、参考になった。褒めてやる」

「え、えぇ、どう致しまして」

かなりの上から目線での発言ではあるが、魔に属する者の笑みよりも更に妖しく笑い、細められた鋭い瞳に捉えられた紫は、その尊大な言葉を何の違和感も無く受け入れていた。

その事に疑問を覚える事無く翔夜の言葉を受け取った自分に、紫自身、不思議に思ったが、それも一瞬の事。

人間の翔夜が浮かべたその笑みは、どう見ても人間の浮かべる笑みではない。

強大な、それも神すらも矮小な存在に見える程強大な魔を思わせるその笑み、それを人間である翔夜が浮かべているその不思議さに、紫は魅せられていた。

「翔夜は、人間、よね？」

「あぁ、そうだが、それがどうかしたか？」

遠成翔夜は人間、陰陽師、その事実に自信が持てなくなった紫は、思わず翔夜に対してそんな疑問が口をつき、紫の質問に、くつくつと妖しげに笑いながら肯定する翔夜。

その肯定の返答を受けても、やはり翔夜の浮かべる妖しげな笑みは、どうしても人間の浮かべる笑みには見えなかった。

妖しく哂い続ける翔夜から何を感じ取ったのか、ぶるりと身を震わせながら、同時に頬も紅潮していく紫だった。

そして、頬の紅潮と共に膨れ上がる得体の知れない興奮が臨界点

に達する直前、笑い続けている翔夜の何かが変わった。
確かに何かが変わった。具体的に何が変わったかと聞かれると、紫自身その変化を言葉に表す事が出来ないが、翔夜の何かが変わったと紫が理解した瞬間、魔としての笑みにしか見えなかった筈の雰囲気は霧散し、今も紫の目に映る翔夜の笑みは、ただ悪戯っぽく笑っている人間の翔夜にしか見えなくなっていた。

「翔夜、貴方は、一体？」
「何だろな？　正解したら一つだけ何でも言う事を聞くぜ？」

紫の疑問に、悪戯っぽい笑みでそう応える翔夜の姿に、頬の紅潮は一瞬引き、それからはまた別の興奮が紫の感情を支配し、再び紫の頬は紅潮していく。

「言ったわね？　『何でも』よ？　やっぱり無しとか言っちゃ駄目だからね？」
「おぉ、いいぜ？　ただし、時が来たら俺はその事実を口にする。それがタイムリミットだ」

いいな？　と笑みを浮かべながら念を押す翔夜に、紫は一瞬考え込む。
総合的に見て、これは分の悪い賭けではない、分が悪かったとしても、この賭けは紫にとって餌が豪華すぎる。
思い人が『何でも』言う事を聞いてくれるのだ、提示された条件はタイムリミットだけ、翔夜の言う『時』がいつを指すのか見当はつかないが、紫と翔夜が生きる時の永さから考えて、今からだとかなりの猶予があると見ても良い。
要はそれまでに翔夜の正体を突き止めれば良いだけだ。
そこまで考えて、紫は、やはりこれは乗るべき賭けだと結論付ける。

自身の魅力で翔夜を虜にする自信が無いわけではないが、保険は掛けて置いた方がいい。

多少卑怯でも、いや、何が何でも手に入れたい。そう思うほど、紫にとっては、遠成翔夜と言う存在は魅力的に思えるほどの存在だった。

それこそ、翔夜に惚れたと思った瞬間から、紫の想いは一欠片も色褪せてはいない。

「いいわ、その賭け乗るわ」

「おーし、賭け成立だな」

上体を翔夜の居る方向へ傾けながら、にやりと笑みを浮かべ、翔夜に挑戦するように右手の拳を軽く突き出す。

紫の笑みを見て、翔夜もにやりと笑い、紫の顔を正面から見る様に顔を近付け、笑みを交し合いながら、紫から突き出された拳に、翔夜も右手の拳で応え、こつん、と軽くぶつけ合う。

「負けたくないからって直ぐに答えを言う様なズルしないでよ？」

「するかよ、んな事、少なくとも向こう千年は言うつもりねーよ、そっちこそ、負けたからって泣き言はきかねーぞ？」

「上等」

人間っぽいものと妖怪の美女による、小さく永い賭け事は、現代の京都が、まだ京と呼ばれた時代のいつかの夕刻頃、その京と呼ばれた都の片隅にあるあばら家で静かに幕を開けた。

人間っぽいものと妖怪の美女の間で、小さな賭け事が成立した後、翔夜と紫は相変わらず他愛も無い雑談を交わして、妹紅が姿を現す

時を待っていたが、一向に現れる気配は無く、時刻は完全に夕刻へと突入。
開けられたあばら家の窓や、玄関の扉に申し訳程度に張ってある障子から差し込む光は、陽だまりの明るさから、妖しさを感じる橙の光へと変化していた。
完全に橙の光に変わった外の風景を目に入れた翔夜は、雑談を止め、瞳を細めて少し思案する様に右手の掌で口元を覆うと、ポツリと呟く。

「来なかった、か、当てが外れたな」
「そうね、でも、私には十分有意義な時間だったから、構わないわよ」
「そうかい、まぁ、妹紅の嬢ちゃんも来なかった事だし、予定通り散歩に行くか」

紫の声に翔夜がそう答えると、紫は少しばかり目を丸くして、意外な物を見るかの様な視線を翔夜へと送る。
そんな紫の視線に目敏く気がついた翔夜は、口元を覆っていた右手を外し、紫の視線に答える。

「何だ？」
「いえ、あれ、本気だったの？」
「当然だろ」

意外だと言わんばかりの紫の反応に、やはりにやにやと笑みを浮かべながら、翔夜はそう答える。
紫の言葉に対して簡潔に答えた翔夜は、あばら家の床を軋ませながら、立ち上がり、一人さっさと玄関の方へ向かい、引き戸の手前で止まり、微妙に展開についていけない紫の方を振り返り、行動を促す。

「何やってんだ？　行くぜ？」
「あ、え？　わ、わかったわ」

少し慌てた様子の紫が翔夜を追いかけ、翔夜が右手で玄関の引き戸を、すかすかの木が鳴らす『からり』と言う軽い音と共に開ける頃には、翔夜の左手を紫の右手が、きゅっと捕らえていた。
いつもの様にやる気の欠落した表情の中に、少しばかり不思議そうな色が混じり、外が見えている玄関前で不思議そうな感情の色はそのままに、紫へ視線を送る。

「今日は手を繋ぐだけで良いのか？」
「えぇ、ずっと同じ姿勢じゃ飽きるでしょ？　身体を重ねるのも飽きない程度の刺激が必要なように、普段の行動にも刺激が必要なのよ」
「処女の癖に時折変態が混じるな、お前は」
「もう処女を捧げる相手は決まってるから、心は処女じゃないわ」
「へぇへぇ、そうですか」

自信満々に発言しつつ、紫は自らの指先を握った翔夜の手の指に妖しく這わせる。
ゆっくりと形を確かめるように翔夜の指を這う紫の指。
何か思いついたのか翔夜はにやにやと笑みを浮かべると、そのほっそりとした紫の指を優しく捕まえるようにして、逆に蠢かせてやる。
互いに這うような動きをした指は妖しく絡まりあい、忙しなく動く。

「っ……はぁっ、何だか興奮してきたわ、良いわねこう言うのも」

熱に浮かされたように熱い溜め息を大きく吐く紫の頬は赤く染まり、何かに陶酔するかの様に妖しい笑みを浮かべながらも、その瞳は揺ら揺らと宙を彷徨っていた。
明らかに何か変なスイッチが入ってしまった紫を視界に収め、翔夜は面倒臭そうな表情を浮かべる。

「そう言えばこう言う奴だった。こう言う方面でからかおうとするのは地雷だったか」
「ね、ねぇ？　翔夜、散歩はまた今度にして、今すぐ家の中に戻って布団敷いて寝ない？」

息も荒くそう提案してくる紫の瞳はこれ以上無く妖しい色を帯びている。
紫の体全体から感じる妖しい雰囲気と色香は、人目のつきそうな外で出す雰囲気にしては、この上なく有害な事は間違いない。
人ならざる者の色香と言うのは、ただの人間にとってはかなり危険なもので、情欲と言う物に火を点ける起爆剤となりかねない。
要は、その色香に当てられた人間の異性は、己の身を焦がす狂おしいほどの獣欲に支配されてしまうのだ。
もっとわかりやすく簡潔に言うならば、人ならざる者の色香は、人間に対して無差別に効果を発揮する媚薬の様な物で、それに支配された人間は発情する。
つまりはそう言う事。
そんな状態の紫を連れて、京の中を散歩など、正気の沙汰ではない。そんな事をすれば、翔夜が覚えている昔の人間、子孫繁栄の意識が羞恥心を上回っていた時代へとこの京が一時的に遡ってしまう。

「ね？　翔夜……」

相変わらず握った指先を妖しく蠢かせつつ、身体全体を翔夜の方

へ向けながら、その肉体を翔夜へと押し付け、空いている左手で、翔夜の顔をほっそりした指でゆっくりとなぞる。
普通の人間の男がやられれば一発で虜になってしまうような紫の雰囲気と行動に対して、翔夜は面倒臭そうに溜め息を一つ吐くと、着流しの裾から一枚の符を取り出し空中へと無造作に投げる。

「はぁ……心符『春風』」

翔夜が軽く呟いた言霊に反応し、無造作に空中へ投げられた符は地理も残さぬほどに四散する。
その瞬間、紫は春先に吹く、何処か安心感を感じさせる暖かい風が吹き抜けていった『様に感じた。』それを紫が感じとった瞬間、紫を弱く、しかし確実にじりじりと炙っていた筈の情欲の炎が跡形も無く『吹き消される。』
それを自覚した瞬間、少しずつ紫から漏れ出していた妖力も完全に収まり、紫の瞳にも理性の色が戻ってくる。
理性が返って来た紫が浮かべた感情の色は疑問。

「今、何をしたの？」
「別に大した事じゃねー、符を媒体にして少しだけ感情に働きかける術を使っただけだ」

相変わらずやる気の無さそうな表情のまま、事も無げにそう言う翔夜だったが、紫としては翔夜が今しがたした事がどれだけ高度な事か正確に理解出来た。
感情など目に見えないもの、炎や水と言ったものに干渉するのとは訳が違う。
妖怪を滅する為の破魔の力などは確かに目には見えないが、意識として明確な敵意が自分の中に存在する為、強いイメージのある力と言うのは制御も干渉もしやすいもの。

そう言った強いイメージの無い感情に干渉する事など、決して容易な事ではない。
もし、完全に他者の感情に干渉し操れるのなら、もうそれは無敵と言って良いほどのものだ。

「本当に少しだけだ、符って媒体の限界が今ぐらいだ、だから符が跡形も無く四散した。もっと深くの感情に干渉するためには、もっと丈夫な魔術・霊術的な媒体が必要だ」
「もしそんな物があるとするなら……完全に他者の感情を操る事は……」
「無論可能だ」

他者の感情を完全に自分の制御下に置き、操る事。
それはとても恐ろしい事だ、自らの感情を誰かの思惑通りに操作され、更にそれは自分の感情だと疑う事も無く信じるため、操られている事にすら気がつかない。
そんな事が理論上可能だと言う翔夜が、紫は初めて恐ろしいと思った。
……しかし、同時に、妖術と霊術という畑の違いはあれど、術を操る一人の妖怪として、これ以上無い程に尊敬の念を抱いた事も、また事実。

「信じられない……」
「霊術を長年研究してきた俺の集大成の極み、その一つと言って良いな」
「まだあるの！？」
「当たり前だろ……まぁ、安心しろ、これに関しては、媒体が無い、霊術的技術から言って、この符と言う媒体が人間の限界だ」

しれっとそう答える翔夜に、ひとまず胸を撫で下ろす紫だったが、

ここでまた一つ、遠成翔夜と言う人物が持つ謎の引き出しが増えてしまった。
その事実に、またか、と呆れる自分と、まだあるのか、と嬉しがる自分がいる事を自覚して、紫は思わず笑みを浮かべる。

「何だ？　いきなり笑って、気持ち悪い」
「失礼ね！　ってそうじゃなくて、退屈しないなって思ったのよ、翔夜と居ると」
「そうかい」
「そうよ」

やる気の欠落した翔夜の眼差しと、好奇心に満たされた紫の瞳が絡み合う。
先に視線を外したのは紫の方で、握っていた翔夜の手をきゅっと握り締めて、前へ足を踏み出し、翔夜の手を引く。
その時、翔夜の方を振り返りった紫の夕日に照らされた表情は、これ以上無いくらいに楽しそうな、満面の笑顔だった。

「ほら、散歩、行くんでしょ？」
「おぅ」

散歩と称して夕刻に差し掛かった時間からあばら家を出て、現在は夕日も沈み、辺りは月の光と提灯の光が頼りなほどに闇が覆っている。
黒尽くめの男、遠成翔夜と豊かで艶やかな金色の髪を持つ女性、八雲紫は、未だに散歩を続けている。
翔夜の行っている事だから散歩と称した何か意味のある事なのだろうと思っていたが、時間が経つにつれ、紫の表情には言葉に表せ

ない不満がありありと浮かんでおり。
夕日が沈んだ現在、月の光を浴びて幻想的で一層輝いている様に見える豊かな金色の髪とは対照的に、紫の表情はこれ以上無い程に不機嫌と言う感情が表に出ていた。
散歩と称して、京の街を回ったこの行動。
結論から言えば、本当に散歩としか思えなかった。
ゆらりゆらりと京を巡り、頻繁に話し掛けてくる人達と世間話をして、時には市場を覗いたり、時には呉服屋で着物を覗いてみたり、紫が期待したような裏がある何かと言う行動は特筆できなかった。

「ホントにただの散歩だったなんて……私の買い被りだったの？」
「何の話か知らねぇが、多分そうなんだろう」

不機嫌そうに眉を顰める紫の言葉にも、特に反応を見せずゆらりゆらりと気の無い返事を返す翔夜。
そんな翔夜を見て、紫は更に眉を顰めるのだが、どんなに不機嫌になろうとも、あばら家からずっと繋いでいる翔夜の手を離す事は無く、今も全く離そうとはしていない。

「私、一応貴方の助手なんだけど？」
「自称な」

ジト眼で睨んでくる紫を、翔夜は軽くかわしながら、歩を前に進める。
夜道を照らす月の光は不安になる程の光量、と言うほどではないが、それでも昼間に比べれば頼り無いのには変わりない。
妖怪である紫は、夜こそが本分のようなものである為、夜目は利く、そのため足取りもしっかりしているのは頷ける話なのだが、その紫の隣を歩いている翔夜の足取りもしっかりしたものである。
夜と言う時間がよく似合う男女が、人通りの少なくなった道をゆ

らりゆらりと歩く。
と、そこで、何か笛の様な音や、何かを叩くような音が二人の耳に入る。
その瞬間、翔夜の右側に立ち並ぶ家屋と家屋の隙間から、転がり出る位の勢いで人が出てくる。
丁度そこに差し掛かった翔夜とあわや激突かと思われたが……。

「ん……」

転がり出てきた人物が翔夜と激突する直前に、翔夜は後ろへ一歩身を引き、その際、翔夜の左側にいた紫もちゃっかり一緒に後ろに一歩身を引いている。
そして右側から勢いよく走ってきた人物の足に、引っ掛ける要領で翔夜は軽く足払いを入れる。
無論、そんな事をすれば、走り出てきた人物を前へ推し進めるベクトルを止める物等無く……。

「うぉぉぉっ！」

声の主からして、どうも男らしい、焦ったような男の声は翔夜の右から左へ勢いよく吹き飛んでいき、大きな音を立てて、左側にあった家屋と家屋の隙間へなだれ込んでいった。
大きな音からして、その家屋と家屋の隙間には何が物が置いてあったのだろう。
翔夜が覗き込んでみると、木材やら何やら色々な物に埋もれている一人の男が気絶しているのが目に入る。

「すいません！　こちらに妙に慌てている男が来ませんでしたか？」

気絶している男を、瞳を細めながら、翔夜が見ていると、翔夜と

紫に何やら話し掛けてくる声。
二人が声の方向へ視線を向けると、そこには普通の着物ではない服装の男が2、3人居り、その内代表の一人が翔夜と紫に話し掛けていた。
普通とは違う服装の男、それを翔夜は知っていた。
京というこの京にも、現代で言う警察のような物はあった。
これはその組織の制服の様な物である。

「あの人ではありませんか？」

翔夜が口を開く前に、こんな状況でも翔夜の左手を握り締め、いつの間にか広げた扇子で口元を隠している紫から声が上がる。
紫の声に反応した男達は、紫の方へ視線を送るが、扇子で口元を覆っていても隠し切れない紫の美貌に、男達はしばし見惚れ、そのまま翔夜と繋がれている手に視線が移り、最後に翔夜へ視線が固定され、どうにも羨ましそうな色を帯びた視線が翔夜へ突き刺さる。
面倒臭そうにため息を吐いた翔夜は堪らず声を上げて、気絶している男を指差す。

「仕事をしたらどうだ？　男ならそこで気絶している」
「あ、はい！　失礼しました。ご協力、感謝します！」

面倒な男達の視線から逃れた翔夜は面倒そうに息を吐き出し、それを少し面白そうに見つめる紫。
気絶した男はしっかりと縄を巻かれ、警邏の男達に運び出される所。
その光景を見た翔夜は警邏の男達に一言だけ質問を投げかける。

「その男は何をしたんだ？」

その翔夜の質問に、間髪居れずに男達の一人、最初に翔夜と紫に声を掛けた男が反応する。

「盗みですよ、全く、人の物を盗むなんて言語道断だ」
「そうか、あんがとさん、仕事頑張ってくれ」
「ありがとうございます。では、私達はこれで」

別れの台詞を吐きながらも、男達の視線は未だに翔夜を捕らえながらも、どうしても気になるのか、チラチラと紫へ視線へ送りながら、後ろ髪引かれている様な動きでその場から退場していった。
その男達の姿が見えなくなった瞬間、すっと瞳を細めて、右手で口元を覆いかける翔夜の耳に、紫の笑い声が届く。

「何だ？」
「ふふっ、いえ？　翔夜にもアレぐらいの可愛げがあっても良いんじゃないかと思って」
「残念、そんなもんはもうとうに擦り切れてなくなった」

少し機嫌が直ったのか、翔夜へからかう様にして接してくる紫を軽くいなしながら、翔夜は家屋の立ち並ぶ通りの奥を見て瞳を細める。
そこには、輝夜の屋敷にも見劣りしないような屋敷が、どんと居を構えていた。
普通の貴族の構える屋敷の規模ではないその建物を視界に収めて、翔夜は満足そうに一つ頷き、その表情はにやりと笑みを浮かべていた。

「さって、ゆっくり帰って、飯でも食うか」
「はぁ……今日ホントに散歩だけで終わっちゃったわ、私の期待を返して」

ため息を吐きながら肩を落す紫からは見えないタイミングで、屋敷の傍を通る瞬間、翔夜の視線はざっと屋敷の外観の見える範囲に巡らせられ、屋敷を通り過ぎる時には、翔夜の表情は不敵に笑みを浮かべていた。

あれから本当にゆったりと回り道をしながらあばら家へと戻ってきた紫と翔夜、あばら家を出た時とは違って、片方は少し不満そうな表情を浮かべていたが。

結局最後に自らの作った料理を、美味い、と一言褒められた瞬間、その機嫌は鰻上りに上昇した。

安いものである。

「結局今日は何だったの？」

「散歩だ」

かちゃかちゃと箸を動かしながら食事を続ける翔夜と紫。

紫から問いかけられた疑問にも、箸を止める事無く、翔夜は簡潔に、そしてしれっと答えてみせる。

相変わらず表情のバリエーションが少ない翔夜の考えは、紫には見えてこない。

裏がある様にも見えるし、ない様にも見える。

相変わらず頭を悩ませる紫に、翔夜はにやにやと笑みを浮かべながら、唐突に爆弾を投下。

「んじゃ、こう言えば良いか？　何となくデートしたい気分だったんだよ」

「……うへぁ？」

翔夜のその発言に、理解が及ばなかったのか、紫の口から、上品な女性が出してはいけないような音が漏れたような気がするが、翔夜は特に気にする事無く、箸を動かす。

段々とその言葉の意味を理解してくると、紫は信じられないものを見るかの様に目を丸くして翔夜を見つめ、口をしきりに開閉するも、言葉が出ないのか、声は漏れてこない。

勿論頬は……いや、顔全体はまるで林檎の如く、赤く染まりきっている。熟れ時のようだ。

「そ、それって、わ、私とって事よ、ね？」

「他に誰が居るんだ？」

紫の動揺しきったような台詞にも、動じる事無く箸を動かし、翔夜はしれっと答える。

翔夜の台詞に、紫の箸は完全に止まり、はた、と冷静さを取り戻しかけている頭でもって、翔夜を訝しげな視線で捕らえるが、翔夜はいつも通り。

「でも、どうして？」

「どうして？　変な事を聞くな？　いい女と一緒にデートがしたいという欲求は、男として当然だろ？」

翔夜の言う、いい女と言うのが、自らを指している事を自覚し、紫の頭の中でその一言が反芻し、冷静になりかけた頭が冷静ではいられなくなり、白さが戻ってきていた頬がまた赤くなった事を誤魔化すように、紫は一心不乱に箸を動かす事に勤める。

そんな紫の様子を見ながら、面白そうに、くつくつと翔夜も笑いつつ、箸を動かし、食事を終わらせに掛かる。

（ま、一般論だがな、くっく）

夜も深まる京の中で、結局誤魔化された事に気がついていない妖怪の美女は、この食事の後、就寝段階になって暴走し、翔夜と布団の中で一悶着あった事は言うまでも無い。

結局、今夜も翔夜の勝利で終わり、紫が泣く泣く夢の世界へ旅立つ事になるのだが、こんな二人が、まだ遠い未来に幻想郷の気ままな御意見番、気まぐれな夜、などと呼ばれる様になる男と、妖怪の賢者、幻想の境界などと呼ばれる事になる妖怪の女性。

幻想郷の大物の座に、緊張感の無いこの二人が着く事等、誰も予想のつかない事だった。

じゅうろく　遠成翔夜、その男謎につき、まぜるな危険（後書き）

どうも、あっくすぼんばーです。
案外と短い期間で更新しましたが、結局ＩＳの方を犠牲にしているような形になってしまいました。
原作が絡んでる話でオリジナルの話を作って盛り込むって、難しいものなんですねぇ……他の作家さんはどうやって書いているのでしょうか、とても気になります。

さて、今回の話ですか……。
何か、ただ翔夜の謎が増えただけの様な気がしますね。
そしてそれは多分間違いじゃないです。

紫可愛いよ紫。
ちょっぴり変態な紫も、またよし。
こんな感じの紫でこれから書いていこうと思ってるので、私の書く紫をどうかよろしくお願いします。
出来れば邪険にしないで上げてくださると幸いです。

ではでは今回はこの辺りで、あっくすぼんばーでした。

じゅうなな　永遠と扇子、気を付けて下さい。改造済みです。

京を散歩した日から2日後の昼。

気まぐれ且つやる気の欠落した不良陰陽師と、金色の髪が人目を惹き付ける妖怪の美女が居を構える京の片隅のあばら家で、二人――翔夜と紫が待ち望んだ待ち人が、ようやく現れる。

その待ち人と言うのが、現在部屋の中心付近で品の良さが分かる服装に正座と言う状態で、翔夜と紫が並んで座っている正面に居る藤原不比等の妾の子供、藤原妹紅である。

狭く、そしてボロいこのあばら家に、胡坐を掻いて、やる気の無い表情の陰陽師と、足をそろえたまま折りたたんで上品に座り、口元に扇子を広げて、妹紅を見据える妖怪の美女、長い黒髪に上品さを感じながらも、煌びやかと言うほどでは無い着物に身を包み、ぴしりと背筋を伸ばして正座している少女。

そんな3人が存在しているこのあばら家の許容量は既に限界一杯一杯だった。

が、そんな事は気にしない紫と翔夜、家主が気にしないならば客が気にしても仕方ないと、妹紅。

「何か進展はありましたか？」

そう静かに翔夜と紫に問う妹紅、その質問に、やる気の欠落した表情だった翔夜の顔に、楽しそうな、何かを企んでる様な色が見える、にやにやとした笑みが浮かんでいる。

「あぁ、少し状況が変わってな」

「状況が変わった？　どうかしたんですか？」

にやにやと笑いながらそう言う翔夜の言葉に首を傾げる妹紅。

翔夜の艶の無い黒髪とは違い、しっかりと手入れされているのか、妹紅の艶のある豊かな黒髪が、妹紅の頭の動きにつられてふわりと生き物のように動く。

紫は翔夜の報告内容を聞きながらも、横目で翔夜へと視線を向けて、じっと場の成り行きを見守る体勢。

前回に妹紅が来た時のような落ち着きの無さは微塵も無く、静かに翔夜の隣に座っている姿は、何処かの貴族と間違えられてもおかしくない様な雰囲気を纏っている。

「この間、件のかぐや姫に会ってきたんだが……」

「会って来たんですか!?　どうでしたか!?　性格悪かったですか!?」

「何をヒートアップしてんのか知らんが、別に普通だったな」

「そんな筈ありません！　あの女は……」

「ちょい待ち、それに関係するが、変わった状況を言っておきたい」

「あ、はい、すみません……」

輝夜の名前を出した瞬間、尋常では無いほどに喰らいついてくる妹紅を押し止めるように、ぴしゃりと言い切る翔夜の言葉に、身を乗り出して捲くし立てていた妹紅は、自らの行いを反省しているのか、肩を少し落とし、しゅんとしている。

艶のある黒髪も少しばかりへにゃっと元気がなくなったように感じる。

そんな美少女が落ち込んでいる事など、全く気にしていないように翔夜は続きを話すために口を開く。

「まぁ、そのかぐや姫と会って話をした訳だが、そこで嬢ちゃんの言っていた事と食い違いが出てきた」

「と言うと？」

だが、翔夜の報告が再開されると、落ち込んでいた様子は何処かへ吹き飛んだように、表情に強い意志が宿った凛々しい顔が戻ってくる。

この時代では、既に妹紅は大人ではあるが、多くの世界、多くの時代を見てきた翔夜からすれば、今の妹紅の表情や態度も、少女が背伸びしている様にしか見えない。

そんな風に感じる自分自身に、内心苦笑を浮かべつつも、きちんと聞く体勢をとった妹紅に安堵の気持ちも浮かぶ。

表情を正した妹紅は、一言も聞き逃さないと言う意気込みが感じられる気合の入った瞳を翔夜に向けつつ、ずいっと身を翔夜の方へと押し出し、完全に聞く体勢。

「聞くに、どうやら不比等は今回の話に乗り気ではないらしい、無論かぐや姫の方もだ」

その翔夜の言葉に、妹紅は口を開きかけるが、翔夜の手に押し止められ、発言を許されない。

結局発言を止められた妹紅の様子に、翔夜は満足そうに一つ頷き、続きを述べていく。

「この話が信憑性があるかどうかの判断はこちらで行う、嬢ちゃんは身内事だからな、視野狭窄に陥って、公正な判断が下せない」

「そ、そんなの分からないじゃないですか！」

「じゃあ聞くけどよ、父親の事抜きにしてかぐや姫を見る事が出来んのか？」

「うっ……それは……」

「だろ？」

苦い表情で言葉に詰まる妹紅に、翔夜はにやりと笑みを浮かべる。

実際の所、翔夜が言った事は間違いではなかったようで、図星を

突かれた形になった妹紅は、興奮して身を乗り出していた姿勢をゆっくりと戻し、元の正座の姿勢へと移行していた。
もっとも、その肩は最初のぴしりとした姿勢の正座とは比べるべくも無く、両肩が落ちたように見えるが……。
そんな分かりやすいほどの喜怒哀楽の起伏がある妹紅は、翔夜や、口元を扇子で隠し悠然と、しかし、物静かで上品に座る紫の二人からしてみれば、まだまだ子供と言う評価を付けるのに何の躊躇も無かった。
本人の知らぬ内に、まだまだ子供と言う評価をつけられた妹紅は、正座の姿勢のまま肩を落としつつ、力無く呟く様に、翔夜へと問いかける。

「では……これからどうするんですか？」
「んー？　そりゃ勿論不比等に会う」
「父にですか？　ですが今日父は屋敷にはいませんが」

不比等が現在屋敷にいない事実を、眉を顰めて苦々しく語る妹紅。
蓬莱の珠の枝を探し回って各地を飛び回る不比等が、妹紅の目には、かぐや姫に虜になっている様に見えるのだろう。

「まぁ、それならそれで、少しばかり屋敷の中を一通り見て回りたい、頼めるか？」
「それは、構いませんが……」
「んじゃま、頼むわ」

妹紅からの許可が取れた所で、翔夜は立ち上がる。
悩む事無く屋敷への入出を許可出来たと言う事は、妹紅は屋敷の中でそれなりの存在を認められてると見ても良い、翔夜としては最初に妹紅が、妾の子だから世間体が……などと言っていた事からして、屋敷の中でも相当に低い位置にいると予想していたのだが……。

屋敷の出入りを個人で許可できるという事は、屋敷の中でもそれなりの我侭が通るほどの発言権はあるのだろう。

翔夜の中での一番心配だった事が、妹紅の地位が屋敷内でも低く、妹紅の言葉では屋敷の出入りに関しての許可が取れず、屋敷に入れ無いと言う事を一番危惧していたのだが、それも杞憂に終わった。

その結果を総合して言える事、藤原不比等という男は、妹紅の事を大事にしているようだ。

つまりは、それなりに親馬鹿な男であるらしい。

この時代、貴族にとって、側室と言う存在は珍しくも無く、それによって子供が何人もいるというのも珍しい事ではない。

だが、側室の子供であり、更に女である妹紅に、それなりの発言権を与えるという事は、やはり親馬鹿と言うしかない。

街で聞いた、優しく、やり手で、大らかな貴族と言う藤原不比等の評価を下方修正しつつ、翔夜はあばら家に存在する唯一の出入り口に向かい、御馴染みの、からり、と言うすかすかの木が鳴らす音と共に、扉を開く。

そこで初めて、今回は大人しく話の運びを静観していた紫が、扇子をぱちりとたたみ、それを持ったまま、静かに翔夜の隣へと並ぶ。

「いつもその調子だと面倒無くて良いんだが……」

「私は貴方の真意が知りたい、今日こそは見極めさせてもらいますわ」

そう言って珍しく、扇子を広げないままに翔夜へ不敵な笑みを送る紫。

そんな彼女に、仕方が無いとばかりに肩を竦めて、翔夜は妹紅へと視線を送ると、彼女も履き物を履き、翔夜へと近付き、そのまま外へと出る。

妹紅が外へ出た事を見届けた翔夜は、紫を伴い、妹紅を追って外へ。

「それじゃあ、案内しますね？」
「おぉ、よろしく頼むわ」

言葉と同時に、出た時同様、あばら家の戸は、またしてもからり、と軽い音を立てて出入り口を閉ざした。

妹紅の案内で着いた場所。
それは、いつぞやの散歩で、最後に立ち寄った辺り。つまり、翔夜と紫が盗人の逮捕劇に遭遇したあの場所と程近い場所にある大きな屋敷。
そこに着いた時、紫の瞳が意味ありげに細められ、後に彼女の右隣をゆったりと歩き、妹紅の後ろを歩いている翔夜へと向けられる。
紫が目を向けた先にある翔夜の表情は……本当に珍しい事に、少しばかり驚きに目を見開いていた。
滅多に見ない翔夜の驚く姿に、紫自身の瞳も驚きに見開かれる。

（驚いてる？　翔夜が？　と言う事は前の散歩は本当にこれを意図していなかったというの？）

ともすれば拍子抜け、若しくは紫の買い被り過ぎと言う評価が浮かび上がってきそうな翔夜の表情に、思わず紫は思案に入り、視線を翔夜から逸らし、前を静々と歩く妹紅の後姿へと移される。
その瞬間、驚きの色と共に見開かれていた筈の翔夜の瞳から、驚きの色が消え、面白そうな色が浮かび上がり、眉根を寄せて思案する紫へとチラリと視線を向けられる。
先程までの驚きに見開かれた瞳は何だったのかと言うほどの変わり身の早さで、にやにやと言う表現がよく合う形に歪められた瞳。

それと共に、口元もおかしそうににやにやと歪められている。

（まだまだ若いな、紫、くっく……）

表情に浮かび上がったにやにやと意地の悪い笑みは数瞬で消え、誰にも見られる事無く、その笑みが浮かんでいたという事実は闇へと葬り去られる。

内心では未だに意地の悪い笑い声を上げていたが……。

そんな誰も知る事の無い紫と翔夜の駆け引きに、人知れず翔夜に勝利が輝いた所で、屋敷の門前へと到着。

門番らしき人物が二人、門の脇に立っており、二人の手には、さすまたが一本ずつ握られている。

簡易的な鎧で包まれた肉体は、どの程度鍛え上げられているのか予想もつかないが、共通しているのは精悍な顔つきに、辺りに気配を配るその空気。

その二つの要因だけである程度の練度は予想できる。

ぱっと見た感じの評価としては、中々悪くない門番だという事。

「お帰りなさいませ、妹紅様。そちらのお二人は？」

「私の客人です。門を開けてもらえますか？」

「はっ」

妹紅の屹然とした振る舞い、それに何の疑問も抱かず妹紅の要求に応える門番。

主の命に疑問を挟まず、主の言葉に忠実に従う、それは主に対して全幅の信頼を置いているからこその行動であり、それを何の躊躇も無く行えるこの門番二人は、態度、雰囲気、立ち振る舞い、それらを総合して考えるならば、これ以上無いほどに優秀であると言えた。

門番からの開門の声に、重たげに開かれる門。

開かれた門に何の疑問も抱く事無く、堂々と、だが静々と通っていく妹紅は着ている上品な着物も相まって、確かに貴族としての気品に溢れていた。

堂々と門を通る妹紅に続き、翔夜と紫もそれについていく、その足取りに何の迷いも無い。

それ所か、翔夜に至っては、妹紅と同じほどに堂々と、そして屹然とした雰囲気を感じ取れる足取りで妹紅の後を着いて行く。

無論、雰囲気だけであって、表情は明らかにやる気が欠落しているいつもの表情だったが……。

目の前に広がる石畳の道の先にある屋敷の玄関、その光景に物怖じしていない翔夜の瞳は、門を通り過ぎる際、一瞬だけ門番へと向けられる。

だが、門番の視線は既に翔夜達を見ておらず、門の外へとその視線は向けられていた。

己の主が直々に連れてきた客人を警戒すると言う事は、間接的に己の主に対しての忠誠を疑う事だと言う事実を正しく認識していると言う意識の表れ、その事がよく分かっている。

（本当に優秀だな……昔を思い出す）

何処までも優秀な門番の様子に、翔夜の頭の中を一瞬、遙か昔に住んでいた城の門が過ぎるが、そのイメージもすぐさま霧散させる。

もう翔夜は王ではなく、そして吸血鬼ですらない、ただの人間、遠成翔夜なのだ。

部下達に任せてきた世界を想う存在では、もうない。

（そうは思っても、ままならんねぇ……）

一目見ればその作りの精巧さが分かる玄関を抜け、使用人が歩く音すら微かにしか聞えない廊下を歩みながら翔夜はそう思う。

もう王ではなく、妖――吸血鬼でもなく、ただの人間、翔夜自身そう思ってはいるし、自覚もあるのだが、彼の魂に既に根付いている王の器。

王として過ごして来た彼の人生と言い換えても良いそれが、翔夜と言う一人の人間が纏う雰囲気とは思えない空気を時折醸し出す。

それも仕方のない事、魂に根付いた王としての万年、億年の記憶は消え去りはしない。

その事実に、珍しく翔夜は苦笑を浮かべる。

（ただの人間……にしては過ぎた態度と性格なんだがなぁ）

世界を統べる王としての風格と一人間として取る行動や纏う空気に差異を感じる時もあるが、それも既に諦めと共に受け入れた。

これからも結局どうにかなるの姿勢で生きていくしかないのだろう。

そんな事を考えている内に、ある一室に通される。

どうやら客間の様で、生活感がなく清潔な空気を感じさせる雰囲気のある部屋。

敷かれた畳には一つの染みもなく、艶の損なわれていない畳が敷かれている。

定期的に交換されているのだろう。

通された襖とは逆側に存在している障子がぴっちりと張られた戸は開け放たれ、そこから藤原家の庭を拝む事が出来る。

流石に大きな貴族の屋敷であり、それに見合うだけの芸術的な庭が――。

「あん？」

開け放たれた障子から覗く庭を目に入れた瞬間、違和感を感じた翔夜は、眉根を寄せ、思わず疑問の声を上げる。

「どうかした？　翔夜」

翔夜の声に反応して、連鎖的に紫から声が掛かるが、その声に翔夜は頭を振る。

「いや……ここの庭には池がねぇのかと思ってな」

不信感を感じていた筈の疑問から、答えが出て一気に気が抜けたような声音で、違和感の正体を言葉にしつつ、既に正座で腰を落ち着けている妹紅に向かい合う形で胡坐を掻く。

貴族の屋敷に来ていると言うのに、緊張もせずに、堂々と胡坐を掻く翔夜は、間違いなく普通の神経ではない。

だがそれは翔夜だけに限った話ではなく、翔夜と共にいる紫も同じ様なもので、緊張など欠片もなく、いつもと同じ様に、足を揃え、足先を左側に出すように折りたたんで座る。

翔夜と紫の、貴族の屋敷に来ていると言う事実を感じさせないような態度に、妹紅は目を見開き、その後、少しおかしそうに手を口元へ当て、楽しそうに笑う。

「どした？　急に」

「い、いえ……ふっふ、ホントに身分を気にしない人だと今ようやく実感しまして」

翔夜の疑問に、妹紅は変わらず可笑しそうに笑いながらその疑問に答える。

「まぁそうだな、だから……」

「翔夜に緊張や敬意なんて似合うと思うかしら？　お嬢ちゃん」

「何でお前が答えんだ……」

翔夜の台詞を喰い気味に、扇子をばさっと広げながら紫も楽しそうに答える。
最も、翔夜は楽しそうな紫とは対照的に、翔夜自身の事をさも当たり前の様に紫が答えている事に、若干面倒臭そうに溜め息をつく。
「確かに、似合いませんね、ふっふ」
そう言って可笑しそうに、だが、上品に笑う妹紅と、いつもの様に扇子で口元を隠しながら、ふわりと笑う紫。
二人が笑みを交し合っているが、それに口を挟む事無く、二人の自分に対しての評価を甘んじて受け入れながら、いつものやる気の欠落した表情。
部屋に通されたと同時に出された茶を啜りながら、一瞬だけ、横目でもう一度庭を一瞥して、茶を皿へと戻す。
その間に笑みを交し合うやり取りは終わったのか、妹紅が姿勢を正し、翔夜へと向き直る。
「それで……ここを見て回りたいと言う話ですが、案内しましょうか？」
少しばかり真剣な表情の妹紅からの提案に、んー、と気のない声を漏らしながら、やる気の欠落した瞳を虚空へ向けつつ、思案する様に首を捻る。
だが、それもつかの間、すぐに答えは出たのか、翔夜は迷う事無く口を開く。
「いや、案内はいらねぇわ、今から調べるから」
「ここから？　ですがどうやって……」

妹紅からの尤もな疑問に、翔夜はやる気の無い表情を崩す事無く、着流しの袖から、符を一枚取り出し、それを緩やかに、そして明らかにやる気の抜けた動作で虚空へ投げる。

いや、むしろその動作からすれば、投げ捨てる、と言う表現の方がぴたりと当てはまるのかもしれない。

そうして、一枚の符が投げ捨てられるのと同時に、翔夜の口から言霊が紡がれる。

「流符『流力散花』」

紡がれた言霊に反応したように、虚空へ投げ捨てられた符は、意思を持ったかのように部屋の天井へと張り付き、数秒張り付いた後、何事も無かった様に剥がれ、翔夜の手の中へと戻ってくる。

この術を一度見て、説明を受けた紫はともかく、陰陽師の行使する術自体を始めてみた妹紅には、何をやったのか理解できていない。

ただ妹紅の見た光景で理解できたのは、翔夜の言葉と共に、文字が書かれた一枚の紙切れが意思を持ったように動き、天井に張り付き、また翔夜の手に戻るという、常識ではありえない光景があった事だけが、妹紅が唯一理解出来た事だ。

ある種の矛盾を孕んだ思考と共に、妹紅の瞳は驚きに見開かれる。

驚きの色に染まるその瞳の奥には、隠しきれない好奇心が見え隠れしており、そんな現状を目の前にした妹紅にとって、何をしたのか翔夜に問う事は、最早必然。

「何をしたんですか？」

「大した事はしてねー、符を介して俺の霊力で作り出した擬似的な眼をこの屋敷中に飛ばしただけだ」

「さも当然の事の様に言ってるけど……それ、十分凄いと思うわよ？」

「そうかぁ？」

本当に大した事はしていないと言う様にやる気のない声で言った翔夜の台詞に、紫から呆れたような声音のツッコミが入る。

それに対して、翔夜は不思議そうに首を捻るが、この場合、一般的な観点で見るならば、大多数の陰陽師は紫の意見を支持する。

これは術全般に言える事だが、何を行使するにしても、重要なのは術を制御する事。

その点において、相手を攻撃する破魔の力や、霊力を叩きつけると言った物理的な戦闘行為に用いられる術と言うのは、大体が大雑把な術式でも発動するものが多いため、そこまで制御に困る事はない。

扱う霊力が多すぎる、等の例外はあるが、大体はそこまで制御に重きを置かないと行使できない攻撃術はあまりない。

あるとすれば禁術等の類だろうが、そもそもそれを扱うだけの霊力と才能を持った者が中々居ない為、これも例外の一つ。

つまり、攻撃に関する術は大雑把な制御でも大体は問題ないという事。

対して、先程翔夜が行った様な、擬似的な眼を走らせ、情報を得る等と言った術は、規模が小さく簡単な術のように思えるが、これがそうでもない。

操る対象に全くと言って良いほど質量がなく、目に見えない、つまり、行使するには想像力が必須となる。

多数の視覚と言うのを明確に想像できなければ術は発動しない。

もし発動出来たとしても、それにより頭の中に入ってくる情報を整理しながら、視覚と言う想像しにくいイメージを保ち続けなければならない。

想像しにくいイメージと、入ってくる情報の整理、この二点から、制御を保つのが難しいのだ。

傍目から見れば、小手先の技術の様に見えるが、これは超高度な技術の視点から見た意見である。

実際やるとなると、大雑把と評価した攻撃術も、新米の陰陽師等には制御の難しい術である事は言うまでもない。

「はぁ……私には想像も出来ない世界ですね……」

そう言って息をつく妹紅だが、その意味は、呆れか驚嘆か、判断の難しい所である。

まぁ、これぱっかりはな……と相も変わらずやる気のない表情のまま妹紅の言葉を翔夜は肯定。

実際に、陰陽術など、目には見えない力を行使する感覚と言うのは本人か、同じ様な力を使う存在にしかその感覚は理解されないものだ。

故に、妹紅が、術を行使している光景を見せられても、目に見えた事しか理解できないのもおかしな事ではないし、当たり前の事。と、妹紅が考えを深めている瞬間、ある事が頭を過ぎる。

それは、ここへ来た目的。

「あの……」

「んお？」

「さっき、この屋敷を調べたんですよね？」

「おー、もう調べ終わった」

「じゃあ、もう既に今日の目的って終了してません？」

「してるぞ、もうここでやる事はない」

「言い切っちゃったわね……」

おずおずと翔夜に問うて来る妹紅の言葉に対し、変わらず気の抜けた声でありながらも、ばっさり言い切る翔夜、それに対して呆れを隠せていない紫。

マイペースに茶を啜りながら、この屋敷にもう用はないと言い切った翔夜の様子に、妹紅は目に見えてわたわたと慌てる。

先程までの上品な貴族然とした振る舞いは何だったのか、と疑問を持てる光景だが、こうして見ていれば、結局妹紅は、翔夜の中で、まだ１５歳の少女だという事だろう。

「あの、えっと、じゃあ、これからどうしますか？」

わたわたと慌てながら問いかけられた妹紅の言葉に、翔夜は意図が理解出来ないと言う様に眉根を少し寄せ、首を捻る。

腕を組んで首を捻る翔夜の二の腕に軽い衝撃が二回、擬音で表すならば、つんつん、と言う音がよく合う。

果たしてその正体は、折り畳まれた扇子の先が原因であり、それを持って翔夜の二の腕を軽く突付いている人物は、翔夜の左隣に座る紫であるのは明白の事実。

紫からの主張に対し、翔夜は紫へと視線を向ける。

「お嬢ちゃんは調査が思いの他早く終わって、これから自分がどうすれば良いのかわからないのよ」

「んー？　おぉ、そういう事か」

「そう言う事よ」

当たり前といえばこれ以上無いほどに当たり前な意見を説明した紫に、やっと理解したという表情で手を打つ翔夜。

やはり、翔夜は、いや、当たり前の事で悩む翔夜の事を、疑問も持たずに理解出来ている紫も含めて、何処かがズレているのだろう。

そんなズレた翔夜は、少し落ち着いてきた妹紅に、もう一度視線を向けて、軽く口を開く。

「雑談でもしてれば良いんじゃね？」

「……えぇー、それで良いんですか？」

「やる事終わって、他にやる事がない、なら話でもするか、自然な

流れじゃね？」
「そうなんでしょうか？」
「そうだろ」

さも当たり前の事の様にどうでも良い理論展開をする翔夜の言葉に、いまだ疑問を抱いている妹紅に対しての返事も、やはり投げやりと言うか、適当。

翔夜の軽い意見に、疑問を持っている妹紅を差し置いて、翔夜は雑談をする体勢。

只でさえ力の抜けたような表情だったものが、更に体全体の力を弛緩させるようにして、胡坐を掻いた膝に肘を置いて、それでもって体勢を維持する。

なんともやる気の無さが体全体から感じられる体勢である。

そんな翔夜を目の前にして、状況の展開についていけていない妹紅を見かねたのか、開いた扇子で口元を隠していた紫が、ぱちんと態々扇子を閉じ、仕方ない、と言う感情がありありと見て取れるような笑みを浮かべながら、妹紅へ向けての助言を語る。

「目の前にある現実を受け止めて、素早く変化の波に乗る、これが翔夜と付き合う上で一番疲れない方法よ、お嬢ちゃん？」
「簡単に言うとどんな感じですかね？」
「本当に簡単に言っちゃうと、細かい事は気にするなって事」
「……成る程、よく分かりました」

翔夜との合わせ方を紫から伝授された結果、妹紅と紫は思わず苦笑を交し合う。

そんな女性二人の反応に、勿論の事、翔夜は気にした素振りはなく、出されたお茶の御代わりを、部屋に待機していた使用人に要求していた。

自分の欲求に素直な翔夜の意見をすぐさま叶える様に、お茶の御

代わりを持ってくる使用人に、やはり優秀だ、と内心で評価を下しながら、出されたお茶を、ずずり、と一啜り。

茶器を置き、その流れで、開け放たれた戸から見える庭。

庭師がせっせと働いている庭のある一点を一瞥、すぐさまその視線を、苦笑を交し合う妹紅と紫に戻し、鼻下を人差し指の腹で撫でるように口元を掌で覆い隠す。

その一瞬、確かに口元は何かを確信したかの様に、にやり、と笑みを浮かべる。

だがそれも、掌が口元から離れた瞬間には霧散し、いつものやる気の欠落した表情へと戻っていた。

「さぁて、聞きたい事があるなら何でも聞きな、探し物の相談から、世界の真理まで、何でも答えてやるぜ？」

やる気の無い表情から、にやにやと人を食ったような笑みを浮かべながら、紫と妹紅に言葉を投げかける翔夜に、妹紅は片頬をひくひくと引き攣った様に痙攣させる。

辛うじて笑みは浮かべられている。と言っておこう、妹紅の名誉の為に。

「は、幅が広すぎませんか？　と言うより……世界の真理、って冗談ですよね？」

「さぁ？　どうだろうな？」

「またそんなー、って笑い飛ばせない所が怖いです。この人……」

そんな引き攣った笑みと共に、震えた声でそう言う妹紅とは対照的に、翔夜はにやりと笑みを浮かべる。

翔夜と妹紅のそんなやり取りなど意も介さない様に、紫は、扇子で口元を隠しながら、瞳を伏せ、よよよっとあまりにもわざとらしく泣き崩れるような演技をし、何でも答えると言った翔夜へ相談す

るように、声を上げる。

「くすん、とあるあばら家の家主である不良陰陽師として有名な男性が振り向いてくれないんです……」

「あー、それは諦めた方が良いですね」

「連れない！　翔夜は連れない！　そんなんじゃ伴侶に愛想着かされるわよ！」

「今の所、その男性は伴侶を作るつもりはないようですね？」

「何でよ！　作ろうとしなさいよ！　そしたら私が立候補するわよ！　尽くして尽くして尽くしまくるわよ！　何処までも着いていくわよ！」

「さっき自分が言った事と矛盾してるじゃねぇか……」

弱々しく声を上げる紫に対し、翔夜は、相談を受ける医師の様に淡々と、しかし、ばっさりと紫の相談を斬り捨てる。

あまりと言えばあまりな翔夜の言葉に、紫は、もうっ、と頬を膨らましながらぷりぷりと怒っていますよーっとアピール。

だが、後に続く台詞の内容的に、本気で怒っているとは到底思えない。

翔夜に想いを寄せると言う事は、それなりに打たれ強い精神でなければならないと言うことだろう。

追う者と追いかけられる者のやり取りに妹紅は苦笑を浮かべつつも、最後まで世界の真理については聞けなかった。

怖すぎて。

闇が辺りを覆い、暗く吸い込まれそうな夜空に浮かぶ幻想的な月の光だけが頼りな時間。

夜と呼ばれる時間に、翔夜と紫は、輝夜の屋敷にお邪魔しており、

現在、三人並んで縁側に座り、土産である団子を分けて食べながら、月を見上げている。

いつものやる気の無さそうな表情を浮かべながら左手で団子を持ち、もくもくと口を動かし団子を食らう翔夜、その右には、翔夜の右肩に背中を預けるようにしてもたれ掛かって座る紫。

輝夜は、翔夜を守るように座る紫の右側に座り、隙あらば甘えようとする様な紫と、そんな隙は全く見せない翔夜、そんな二人をうんざりしような視線で捉えながら、土産として持ってこられた団子を上品に口に入れている。

翔夜としては、色々と話を聞きたいという、輝夜の要望に応えて、こうして輝夜の屋敷へ参上したわけで、屋敷の主からそんな面倒臭そうな視線を向けられる謂れはない。

まぁ、結局はそんな小さな事を一々気にする器でもないので、最後には状況に順応してどうでもよくなる。

面倒そうな状況でも状況に応じて立ち回りを考えれば良い事、結局これが翔夜のスタンスである為、一時の感情で不用意な事はしない。

そうした方が状況的に面白そうならその限りではない所が、この翔夜と言う男の予測できない所ではあるが……。

「で？　ここに来たって事は色々と聞いても良いって事？」

「だからこうして来たんだ」

溜め息と共に輝夜から問われた言葉に、肩を竦めようとして紫がもたれ掛かっているので失敗。

結局、瞳を軽く伏せて一つ息を吐きながら答える事で、翔夜自身が感じた感情を表現する。

紫は翔夜の身動ぎにも動く事無く、口をもきゅもきゅと動かし、現在口の中に入っている団子を頬張る事に集中している。

その様は少女の様で非常に愛らしさを感じられる光景だが、結局

体勢を変える事はなく、半眼で輝夜を睨むようにしている視線も緩和する事はない。
自らの知らない翔夜の一面を、僅かでも知っている輝夜を警戒対象として外すつもりはない。そう言わんばかりの視線。

「じゃあ聞くけど、永琳とはどれ位一緒に居たの？」

輝夜から問いかけられるその言葉に、視線は緩和させないままに、紫の耳がぴくりと動き、集中する様に口の中の団子をごくりと飲み込む。
問いかけられた翔夜は、特に表情を変える事はしないままに、軽く答えを返す。

「１０７年だと、そう言ってた記憶があるな」
「ふーん、じゃあ、結婚の約束したって聞いたけど？」

輝夜の口から出た驚愕の事実に、紫の視線は翔夜へと移り、その視線は嫉妬に塗れた鋭い視線。
だが結局、普通なら怯みそうなその視線を受けても、遠成翔夜にとっては何処吹く風。
一個人の視線でどうこうなるほど、この男の神経は細くはない。

「約束ってのは飛躍しすぎだな、求婚されてるだけだ」
「応じる気は？」
「今の所ない」
「聞き様によっては最低な男ね……」

翔夜を責めるような半眼のジト眼と共に、言葉を送る輝夜。
そんな非難する様な輝夜からの視線と言葉にも、翔夜は揺らいだ様子もなく、やる気の欠落した表情で夜空を見上げている。

「違うわ、だからこそ良い男なのよ？　翔夜は」
「はぁ？　どういう事？」

酷評に反応したのは紫。
翔夜は柳に風と言うように、気にした気配もなく空を見上げ、茶を啜ってから団子を口に運び、美味い、と一言漏らす。
緊張感の欠片もない男である。
そんな翔夜を庇う様に、はたまた、まだまだ分かっていないと言う様に、紫は輝夜に向かって余裕たっぷりに笑みを浮かべる。

「じゃあ逆に聞くわね、その永琳って女性から翔夜の話を聞いて、最低な男だって思った事あるかしら？」
「……」

紫から問いかけられた言葉に、輝夜は沈黙でもって答える。
つまり、思った事がある、と強く答えられないという事。
実際、永琳から、何度も求婚を断られたと聞かされたが、その話をしていても、永琳の表情は、仕方ないなぁ、と包み込むように笑っているのだ。
そんな表情を浮かべる永琳を見ていると、何故か不思議と、遠成翔夜と言う話だけでしか聞いた事のない生きる伝説は、悪い人間ではないと思っていた。
それはきっと、永琳自身が、遠成翔夜と言う男の事を、これ以上無いほどに楽しそうに、それでいて嬉しそうに話すから。

「一所に縛られたくない、自由に生きたい、それを折れる事無く貫いて生きている。だから魅力的で、そんな翔夜に惚れた。だから自分に応えてくれなくても良い、でも、諦める事なんて出来ない」
「それは、何でよ……」

理解が出来ない、そう言いたげな感情がありありと浮かんでいる輝夜に向かって、紫は楽しそうに、そして嬉しそうに笑顔を浮かべる。

輝夜には、似ても似つかない筈の紫と永琳の表情が、何故かその一瞬、とてもよく似て見えた。

「どうしようもなく好きだからに決まってるわ」

輝夜には、夜と言う暗闇が支配する時間であり、そんな闇に愛されている妖怪である筈の紫が、自信満々に言い放った表情が、とても眩しいものに見えた。

そんな眩しい笑顔を浮かべる紫や永琳が少し、ほんの少し羨ましくて、負けると分かっているが、少しだけ抵抗を試みる。

「でも……それって、自分勝手じゃない？」

「違うわ」

輝夜のささやかな抵抗にさえ、遠慮する気は無いのか、紫は輝夜の言葉に対して、ぴしゃりと否定の言葉を言い放つ。

その表情は、やはり嬉しそうな満面の笑顔。

「自由なのよ、何処までも、それはとっても素敵な事だわ？」

そんな紫の言葉、盲目的、視野狭窄、そんな言葉が輝夜の脳裏を過ぎる。

だが、次の瞬間には、それでも良いのかもしれない、そう思ってしまう。

それはきっと、そう思ってしまう程に、紫や永琳の浮かべる、満足そうで、嬉しそうで、楽しそうな笑顔が魅力的だから。

だから多分、良いんだろう。

「惚れた弱みってのも、案外良いものよ？」

「理解できないわよ」

楽しそうに笑みを浮かべながらそう言い放つ紫に、溜め息をつきながら苦笑で応える輝夜。

柔らかで幻想的な月光の下で楽しそうに笑顔を浮かべる紫は、輝夜の眼には妖怪である前に、一人の女性としてこれ以上無い程に美しく見えた。

苦笑と笑顔、種類は違うが、笑みを交し合う二人の女性の間に、空気を読まない男性の声が混じる。

読めないのではなく、読まない、これは間違いではなく、漂う空気を壊す事に躊躇を覚えないという意味。

そんな空気を読まない男の声。

勿論その声の持ち主は翔夜以外にはいない、そしてその言葉の内容は、二人に掛けられたものではなく、独り言、若しくは現状をただ言葉にしただけの意味の無い一言だった。

「団子がもうねぇ……」

幾分か残念そうな内容の台詞、だが、その声音は別に残念そうな色など感じさせない。

そんな翔夜の声に、比較的柔らかな空気だった紫と輝夜の空気を完膚なきまでに破壊する。

そして、輝夜は苦笑から、にやにやと意地の悪そうな笑みを紫に向ける。

「こんな男で良いの？」

「違うわ、こう言う男だから良いのよ、魅力的でしょ？」

「始末に負えないわね」

からかう様な輝夜の笑みと言葉に、堪えた様子も無く紫は楽しそうに笑みを浮かべてその言葉に答える。

紫の嬉しそうに放たれた言葉に、輝夜は、やれやれと肩をすくめて苦笑を浮かべため息を一つ零す。

と、始末の負えない紫に向けて浮かべていた苦笑を消し、幾分か真剣な表情を浮かべて、輝夜は密かに背筋を伸ばし、姿勢を整える。

そんな輝夜の変化に、紫は嬉しそうな笑みから一転、興味深そうな視線と、長く生きてきた妖怪としての余裕のある笑みを浮かべて、扇子を広げ、口元を覆ういつものスタイル。

興味だけが先行している様に感じられる輝夜の視線は、翔夜へと注がれ、その視線を一身に受けている翔夜が感じたのは興味ではなく、ある種の真剣味。

興味の色で上手く隠しているようだが、結局翔夜には、その真剣さは筒抜けであり、これから問われる事が輝夜が本当に聞きたかった事。

疑う余地も無く翔夜はそう結論付ける。

だが、そんな輝夜の視線を受けている翔夜は未だにやる気の欠落した表情で空を見上げている。

「永遠って、どうやって生きれば良いの？」

静かな夜の時間に、虫の鳴く声と共に放たれた輝夜の言葉に対して、翔夜はすぐさま答える事は無く、袖口から煙草を取り出し、一本口に咥えていつもの様に火を点けて一吸い。

肺にたまった煙と共に息を吐き出し、月光の見守る暗闇に揺らめいて融けていく紫煙を眼で追う。

数秒考えるような時間の後、発した翔夜の言葉は、これ以上無い程に軽いものだった。

「好きな事をして生きる。それだけだ」
「は？」

考える事も無いような意見を発した翔夜に、一瞬輝夜は理解が及ばなかったが、翔夜の言葉を理解した瞬間、輝夜の胸の内に浮かんだのは、赤く激しい感情。

激情とも言えるその感情をぶちまける為に輝夜の口が開かれようとした瞬間。

今まで空を見上げていた翔夜が、煙草を口に咥えたまま輝夜の方へ顔ごと視線を向ける。

その視線を輝夜が感じた瞬間、言い様も無い寒気、怖気のような物が背筋に這い回り、輝夜の口から結局言葉が出てくる事は無い。

感じた寒気を隠したいのに身体は震える。

荒ぶる激情を言葉にしたいのに、怖気が喉を侵食して動かす事が出来ない。

視線は翔夜を注視する事が出来ず、あちらこちらを彷徨った結果、紫に固定され、紫の状態を輝夜の瞳は捉えるも、紫は動じた様子も無く、それ所か、心地良いと言う様に瞳を細めて翔夜の纏う空気をその身に受けている。

理解出来ない。

確かに今まで遠成翔夜と言う男は人間だった。

やる気が無くて、人を食った様に笑い、紫をからかい、夜に愛され、強大な霊力と魔力を持っている。

だがそれでも一人の人間だった。

それが一瞬にして、そうとは感じられない何かに変わった。

少なくとも輝夜はそう感じる。

強大な霊力や魔力で圧を掛けた訳でもなく、威圧しているわけでもない、視線が鋭くなったわけでもなく、その黒い瞳は今までと同じ様にやる気の欠落した瞳である。

だが、確かに何かが変わった、そうとしか考えられない、そうでなければ月人で、永琳と言う規格外の人物に教育された輝夜が一個人に寒気を感じるわけが無い。

そんな輝夜の正常に纏まらない思考すら奪うように、人間である筈の『何か』がいつもと同じ様な軽さで口を開き、いつもと同じ様な低くめの声でありながら軽い口調で言葉を発する。

「好きな事をして生きるんだよ、誰かから嫌われようと嫉まれようと感謝されようと好かれようと怨まれようと蔑まれようと崇拝されようと、それも楽しめ。したい事をしたい時にしながら生きるんだよ、そうして、自分が感じた感情、自分に向けられた感情を楽しんで生きる」

そう言って、にやりと笑みを浮かべながら輝夜を見る翔夜に、いよいよ輝夜は身体の震えが収まらなくなり、ぐっと歯を食いしばり歯が鳴るのを抑えるが、それだけ、両肩は小さく震え、きつく握り締めた拳も震えている。

そんな輝夜の様子など関係ないと言う様に、翔夜は更に笑みを深めて言葉を紡ぐ。

「感情を楽しむんだよ、自分が感じた感情を楽しみながら好きな事をする。その過程で誰かが傷ついたならその悲しみを楽しみ、誰かと幸せになったならその幸せを楽しみ、誰かから怨まれたならその怨みを楽しむ。こうすれば退屈しない、な？　世界は、楽しい事ばかりだろう？」

ある種当たり前、好きな事をして生きる。

この言葉を実行すれば、確かに楽しいのだろう。

だが、翔夜の言う、好きな事をして生きる、と言う言葉は、正に壮絶と言う他なく、自分がしたいと思った事をして、それを実行し

た後についてくる状況の変化や、感情の変化すらも自分のしたい事として取り込むという事。

したい事をして、誰かから嫌われた、しかし、したい事が出来た上に、嫌われるという負の感情を受けて自分の感じた悲しみと言う感情すらも、自分がしたかった事として取り込んで、楽しめ。

つまりはそう言う事を言っているのだ。

「そ、れが、永遠、を、生きる……って事、なの？」

自らの感情も、他人の感情も、全てをひっくるめて楽しむ。

普通ならば、いや、普通の神経ならば理解出来無い程に壮絶なまでの享楽。

正も負も全てを掌握して自らの楽しみとする。そう言う話なのだろう、ここに来て輝夜は漸く、永琳の言っていた、全てを知らない内に包み込んでいる、と言う意味を理解した。

切れ切れに言葉を発する輝夜の言葉に、笑い、いや、哂いながら、翔夜は頷く。

「そうだ、それが俺流、退屈な永遠の楽しみ方ってやつだ」

そう言って翔夜は、にやにやと哂う。

受けた感情も、思った感情も、全てを背負って掌握して、自らの内に取り込んで、楽しむ。

そう語る翔夜の言葉を理解するには、輝夜は姫であり過ぎ、子供であり過ぎた。

輝夜に今まで向けられていたのは、悪意であれ好意であれ、それは指向性を持った感情であり、見返りを求める物でもあった。

だからこそ理解出来た、分かりやすかった。

好意を向けられているのは、好かれたいから、悪意を向けられているのは、疎ましく思っているから。

どれだけ汚い感情も、どれだけ綺麗な感情も、嗜好性のある、見返りを求める感情だからこそ理解出来た。

だが、『これ』は今の輝夜では理解出来ない。

何せ、見返りなど何も求めていないのだ、相手がどう思おうと、その結果を背負い包み掌握し、最後には自分が楽しんで終わり。

その過程で翔夜が相手に求める物など何も無い、翔夜のした事に対して見返りを施すならばその結果を受け入れ、見返りが無いのならその結果も受け入れる。

何を楽しんでいるのかが分からない、強いて言うならば、やはり翔夜の言う様に、感情全て、状況全てを楽しんでいるのだろう。

その考えを理解するには、やはり輝夜では無理だった。

誰かに優しくするのも自分がしたい事だから、誰かに厳しくするのも自分がしたい事だから、誰かを嫌うのも自分がしたい事だから、誰かを好きになるのも自分がしたい事だから。

そうして自分の行動全てに自分が責任を負い、その結果、どんな事になってもその責任は自分にあると考えられる程、輝夜は覚悟がなかったのだ。

責任を負う対価は自らが楽しんだ事、そう思う翔夜はまさに壮絶。

「私には……理解でき、ないわね」

辛うじてそれだけを言い切った輝夜の台詞を切欠に、輝夜が感じていた寒気、怖気は消え去り、翔夜の視線も空へと戻っており、すぅ、と咥えている煙草を一吸いして、夜空に向けて紫煙を吐き出す。

その表情は先程までのにやにやした哂いは消え去り、苦笑が浮かんでいる。

「してもらおうなんざ思ってねーよ、これは俺だけのもん、結局生き方なんざ自分で見つけるのが正しいってこった」

「随分と厳しいのね？」

「当然だろ？　俺はお前じゃねぇ、お前の生き方なんざ知った事か」

くつくつと笑う翔夜の言葉に、輝夜は少しばかり納得したような表情を浮かべる。

煙草を燻らせながら空を見上げて笑う翔夜の黒の着流しを、きゅっと掴む感覚に、翔夜は顔をその方向――紫の方へと向ける。

翔夜が視線を向けた紫の表情は、頬が赤く火照り、何処か夢を見ている様にその瞳はゆらゆらと揺らめいたまま翔夜を捉えている。

「翔夜は、何でそんなに素敵なのかしら？」

頬を紅潮させたまま、着流しの裾を掴む左手はそのままに、紫の右手は翔夜の頬を撫でる様にゆっくりと動く。

そんな紫の様子に、翔夜はあからさまに面倒臭そうな表情を浮かべて、煙草を投げ捨て、いつもの様に処理を済ませる。

どうすんだよこれ、と言う様に翔夜から視線を飛ばされた輝夜は、苦笑を浮かべるしかない。

「知らん、俺が素敵かどうかなんざ、どーでもいいだろ」

「よくないわよ！　出来ればその魅力を私だけの物にしたい所だわ！」

「そんな力入れる所かねぇ……」

「そこに力入れなくて何処に力入れるつもり！？」

「えー？　何で俺怒られてんのよ？　そこが理解出来ない」

翔夜の事に関して、翔夜自身が紫に怒られるという訳の分からない状況に溜め息をつきながら、どうにかしろ、と言う意味を込めた視線を輝夜へと送る。

その期待に応える様に、輝夜が慌てた口調だが口を開いて、話題を別の方へもって行こうと試みる。

「え、えーと、そう！　紫ってその扇子いつも持ってるの？」
「え？　えぇ、持ってるわよ？」

明らかに苦し紛れな輝夜の話題に、紫は疑問を挟む事無く乗ってくる。
話題の変更に成功した輝夜はほっと一息、そして、この流れを切らない様に、翔夜もその話題に乗っていく。

「その扇子、予備とかあんのか？」
「見た所高そうだし、無いんじゃない？」
「あるわよ」
「あるの！？」

輝夜の予想を軽く裏切るように紫は、小さなスキマに手を入れて、暫く何かを探すようにして手を動かして、目的の物を掴んだ手応えを感じると、スキマから手を抜き、予備の扇子の存在を主張する。
２本の扇子が紫の手に持たれ、それをしっかり視界に収めた翔夜の表情は、何かを思い出したような表情が浮かび、口を開く。

「前からそれ良いと思ってたんだよなぁ、どっちかくれねぇか？」

思い出してからすぐに口に出したような軽い翔夜の口調に、紫は２本の扇子に視線を注ぐ。
考え込むように押し黙る紫だが、翔夜に譲るかどうかを悩んでいるわけではなく、どちらを翔夜に譲るかどうかで悩んでいる。
ちらちらと紫の視線が２本の扇子を行き来する事１７秒。

「はい、こっち」

嬉しそうに紫が翔夜へ差し出したのは、先程まで紫自身が使っていた扇子だった。

特に何かを感じている様子もなく、翔夜は紫に軽く礼を言って差し出された扇子を受け取る。

扇子を受け取った翔夜は、本当に珍しく上機嫌なのが分かるように軽く鼻歌を歌いながら、扇子を畳んだ状態で目の前に掲げて手を離す、だが、扇子は地に落ちる事無くその場に浮かび、黒い靄が扇子を包み込むようにして扇子を空中で支えている。

そのすぐ後、翔夜の鼻歌と共に、何かが小さく削られるような音が聞えるようになり、暫くすればそれも止んで、翔夜は空中に浮かんでいた扇子を手に取る。

輝夜と紫は、翔夜が何かをした事は理解出来ても、何をしたのかは理解出来なかった。

そんな二人の表情に、翔夜は楽しそうに笑みを浮かべる。

そして貰ったばかりの扇子を二人の方へ向けて開く。

「相変わらずくだらない様に見えて凄い技術よね……」

「私にはものすんごくくだらない事に全力を注いだって事しか分からないって……」

紫は翔夜のやった事を理解しながら、その内容の技巧に対して溜め息を吐き、輝夜は相変わらず翔夜のやった事を理解出来ないが、使われた技術に対して、結果が落胆を呼ぶその光景に対して溜め息を吐く。

そんな二人の目の前に開かれた扇子には、見事な達筆で、天晴れ、と言う黒く光っている文字が浮かんでいた。

そう、書かれていたのではなく、浮かんでいた。

一度扇子を閉じ、もう一度開いた扇子には、良き哉、と言う黒く光っている文字が、やはり見事な達筆で浮かんでいた。

「で？　何をしたの？」

呆れたような輝夜の声に、翔夜は扇子を見ながら満足そうに一つ頷いて、口を開く。

「大した事はしてねぇ、扇子の柄に極小の魔法陣を刻んだ、陣の効果は、通した魔力を文字や絵に変換させる効果だ」

心なしか誇らしそうにそう語る翔夜の様子に、輝夜は溜め息を吐き、紫は興味深そうに、元自分の扇子へ視線を注ぐ。

翔夜から言われた陣の解説に、心なしか期待外れと言う様な溜め息を吐く輝夜に、翔夜は少し眉を顰める。

「馬鹿にするなよ？　お嬢、これはこんな事も出来るんだぜ？」

眉を顰めたまま、翔夜は扇子を閉じて、今度は空へ向けてもう一度開く。するとそこには、黒ではなく、紅い光、そして浮かんでいるのは文字ではなく、複雑怪奇な円を基本とした図。

それを輝夜と紫が認識した瞬間。

闇が広がっていた筈の空へ向かって凶悪なまでの熱の塊、つまりは業火と言っても良いほどの熱量を持った炎の塊が3つ、扇子に浮かんだ図の中心から緩く弧を描くようにして軌跡を残しながら凄まじいスピードでそれぞれ飛んで行き、そしてその3つの炎は集約し、衝突、爆散、3つの炎は夜の京に昼を出現させ、飛び散る火の粉は幻想のようにして霧散していった。

今目の前に起きた出来事に、輝夜は、とても美少女がしてはいけないような表情で、まさしく開いた口が塞がらないというような大口を開けており、紫は元自分の扇子が、凶悪な武器、いや、兵器へと変貌を遂げた事に溜め息を吐く。

「ななな、何したのよ！？」

目の前で起きた事が信じられないように慌てながら、翔夜へと声を掛ける。

余程動転しているのか、翔夜の着流しの合わせ目をぐいぐいと引っ張っている事にも気がつかない輝夜の様子に、翔夜は楽しそうににやにやと笑みを浮かべる。

「別に？　扇子に流し込んだ魔力で魔法陣を描いて魔法を使っただけだ」

事も無げに言う翔夜の言葉に、輝夜は徐々に冷静さを取り戻し、翔夜の言葉の意味を理解する。

つまり、魔力を文字や絵に変換出来るならば、魔法陣を描けない道理は無いという事。

「詐欺にあった気分だわ……」

「心外な……紫は俺の言葉をきちんと理解していたぞ？」

「だから私は言ったわよ？　くだらない様で凄い技術だって」

「あんた達二人やり難くて面倒臭いわ！」

「失礼ね、私はそうでも無いでしょ、翔夜の方がやり難いわ？　真意を量り難いもの、今日も結局そうだったわ」

ぷぅ、と頬を膨らませながら翔夜にジト眼を送る紫に、翔夜は悠然と笑みを浮かべる。

そんな二人のやり取りに、輝夜はげんなりとした表情。

「私にとってはあんた達どっちでも面倒だわ……」

相手の真意を探りあうような翔夜と紫に、輝夜は疲れたように溜

め息を吐く。
紫のジト眼と言葉を受けても、翔夜は揺らぐ事はなく、悠然と笑みを浮かべるが、その余裕の笑みは、何かを思いついたような表情に変わり、その後、楽しそうににやにやと笑みを浮かべる。

「俺の真意が知りたいと言った紫に、面白い事を教えてやろう」
「あら、何かしら？　是非知りたいですわ？」

翔夜はにやにやと笑い、紫はふふっと真意を感じさせないように微笑む。
輝夜はやはりその雰囲気に疲れるのか、下がった肩が更に下がる。彼女の肩は何処まで下がるのか。
未だに紅い光で描かれた魔法陣の浮かぶ扇子をぱちんと閉じ、もう一度、バッと勢いよく開かれた扇子には、黒く光る達筆な文字で、愉快、と浮かび上がっていた。

「実は俺の頭の中では、妹紅の嬢ちゃんから受けた依頼は解決してる」
「……は？」
「後は不比等が屋敷に居る時に解決するだけだ」

軽く翔夜の口から告げられた新たな新事実。
その意味を理解した瞬間、紫の口から意味の無い一音が飛び出し、それ以降塞がらなくなった様に口を開けたまま固まる。
紫のそんな間抜けとも言える姿を楽しそうに笑いながら翔夜は見据えて、口を開く。

「敵を騙すには、まず味方から、ってな？」

後には、やはり面倒臭そうに肩を落とし、溜め息を吐く輝夜と、

告げられた事実の衝撃に開いた口が塞がらなくなった紫。
そして、夜空に向けて、あっはっは！　と楽しそうな笑い声を惜しげもなく上げる珍しい翔夜の姿。
そんな三人の姿を見つめている月は、何故か誰かが溜め息をついた様に見える。
今日の夜はそんな不思議な夜だった。

じゅうなな　永遠と扇子、気を付けて下さい。改造済みです。（後書き）

はい、お久しぶりです。
あっくすぼんばーです。
活動報告にて今日更新します。などと言っておきながら結局日を越えてしまいました。
ちなみに、さっきまで友達に誘われて釣りに行ってました。
はい、趣味です。
釣果はそれほど芳しくありません。下手糞なもので……（てへぺろ

活動報告のコメントにて態々私の更新再開を喜んでくださって本当に有難うございます！
これからも頑張っていきますので、よろしくお願いします。

さて、この話で気が付かれた方もいると思いますが……。
この小説の主人公、特定のキャラから何かしら貰っております。
永琳からは着流し、紫からは扇子、実はこの二人、ある共通点があります。
え？　それは何かって？　作者のお気に入りのキャラだという事です！
……どうでもいいですね？　まぁ、これからもこの方針は続けていくので、主人公に何か物をあげてるキャラがいたなら『あぁ、このキャラお気に入りなんだ……』と思っていただければ幸いです。
さて、次に主人公に物を贈るキャラは誰なんでしょう？　それは作者である私だけが知っている。
としておきます。

さて、ここからは雑談なのですか、最近よく釣りに行っております。

そして夜釣りばかりなので、何と言っても……そうですね？　言う事はただ一つ……寒い。

これに尽きます。

ですが釣果が良かった時は自分で捌いたりもしているので、最近家の包丁ではよく切れず、やきもきしていました。

そこで遂に、買っちゃいました！　出刃包丁と刺身包丁！

これで魚を捌くのも幾らか楽になるはずです！

さて、作者のどうでも良い近況による雑談を終わらせて、今日の所はこの辺りで……。

最後に、作ったアジフライが凄く美味しかったです、マル

じゅうはち　三尾と人間……あー、面倒臭い予感

翔夜が紫に、輝夜の屋敷にて驚愕の新事実を披露した日から5日後の丁度昼頃。

いつものあばら家に訪ねて来た妹紅から、屋敷に不比等が帰って来ていると報告を受けて、翔夜と紫は、前回と同じ様に、妹紅に連れられて彼女――藤原家の屋敷にお邪魔していた。

前回通された部屋と同じ部屋に通された翔夜と紫は、そこで屋敷の主、藤原不比等と対面。

優しそうな光を宿す柔らかな目元が印象的な貴族。それが翔夜が不比等を見て最初に感じた感想である。

実際、物腰は柔らかく、部屋に入った瞬間に作法も何もない様な雰囲気で、不比等の前にどっかりと腰を落ち着け、胡坐を掻く翔夜に対してただ柔らかく笑みを浮かべるだけ。

屋敷の住人、つまり、使用人などは、翔夜の態度に抗議の声を上げようと口を開いていたが、それも、不比等が静かに押さえ込んでいた。

そんな不比等の様子に、翔夜は思わず、にやりと不敵な笑みを浮かべ、それに対して不比等も静かに微笑む。

見えないやり取りをしている翔夜と不比等、それぞれの隣には、紫と妹紅が静かに座っている。

最も、妹紅は久しぶりに父が返って来たとあって、嬉しそうに笑顔を浮かべているが、紫は、この前の衝撃の事実が未だに少し不満なのか、心持ち、むすっとした表情。

結局最後まで詳細を語らず、のらりくらりと追求を交わす翔夜に、せめて今回の機会に真意を見せてもらうつもりなのか、今は何も言わない。

「アンタが不比等か」

「そう言う貴方は、娘が世話になっている陰陽師様ですね？」
「世話した覚えはねぇがな」
「いえいえ、娘がご迷惑を掛けているようですから」
にやりと笑いながら、不比等と言葉を交わす翔夜に対して、不比等は笑みを崩す事無く物腰丁寧に対応する。
確かに、やり手の貴族で、大らかな人格者と言う街の住人からの評価は間違いないようだ。

「そう思ってるなら、手綱を握ってもらえると有難いんだがな……」
「はっはっは、これは痛い所を突きますね」
翔夜からの一言にも動じた様子はなく、その一言を甘んじて受け入れているようだ。
保身ばかりを考える普通の貴族とは、確かに器が違う。
この様な人物が、地位や名誉を既に確立しているこの状況下で、自ら一人の女性に入れ込む、と言うのも確かにおかしな話ではある。
こういった人物は、自らの手に入れた地位や名誉を、自ら捨てに行くような行動を安易に行う愚かな人物ではない。
それも、言ってしまえば、美貌に溢れた高が一人の女性を求めて、自らの身を破滅させるのはどうも身の丈に合わない。
その程度の計算が出来ない人物ではない。
不比等の評価を、それなりに高く評価した翔夜の隣から、何やらせっつく様に肘が当てられる。

「さて、妙にせっつかれてるんでな、本題に入らせてもらう」
「隣の美しい女性にですか……失礼ですが、どういったご関係ですか？」
「ただのいそ……」
「妻ですわ」

「しれっと嘘吐いてんじゃねーぞ」

不比等からの質問に、翔夜が軽く答えようとした瞬間、扇子で口元を隠したいつものスタイルで静かに座っていた紫から、翔夜の台詞に被せ気味で答えが返ってくる。

その瞬間、翔夜の不敵な笑みは一気に格好を崩し、いつものやる気の無い表情が戻ってくる。

紫と翔夜の軽いやり取りから、何となくどの様な関係なのか察した不比等は、そうですか、と穏やかに微笑む。

「話の腰を折ってしまって、申し訳ありません。続きをどうぞ」

「あぁ、そんじゃまぁ、単刀直入に行く。アンタ、脅迫されてるな？」

ある種の確信を篭めたような声音と共に、翔夜の瞳が細められ、不比等をじっと見据える。

不比等は、特に動揺した様子はなく、ただ静かに笑っているだけ。

翔夜からの言葉に、動揺を示したのは、たった今脅迫を受けていると言われた不比等の娘、妹紅だった。

「そ、そんな！　父上、一体誰に……」

声を荒げてあからさまに慌てる妹紅に、不比等はすっと手を翳し、それ以上の妹紅の発言を許さない。

翔夜の言曰く、脅迫を受けているらしい不比等に、焦りの色はなく、ただ静かに翔夜の瞳を見返している。

その様子は、先程までの優しそうな色を帯びていた柔らかな瞳ではなく、翔夜と同じ様に相手を見極めようと、スゥと細められていた。

不比等の視線の変化を感じた翔夜は、内心関心していたが、それ

も表に出す事はなく、翔夜はただ不比等からの視線を逸らす事無く見据える。

「何故、そう思うのですか？」

当然の疑問、翔夜の言は根拠も何も無い、ただ結論から入っている。

それでは相手から本当の言葉を引き出すには弱い。

例え翔夜の言った事が本当の事だったとしても、不比等は直ぐにボロを出す訳が無い。

脅迫と言うのは、簡単に言ってしまえば、対象の何か大切な物を盾に取り、対象に要求を飲ませる方法だ、そしてその場合、脅迫されているという事実を第三者に知られると言う事を犯人は良しとしない。

故に、その事実を隠し通そうとする動きが、脅迫された者には大なり小なり表れる。

当然の心理ではあるが、翔夜は、藤原不比等と言う貴族が、その心理を理解していないとも思えない。

その上で、明らかに何かありますよ、といった風な態度の不比等。

心理を理解し、どうにもならない心の動きを自らの理性で統括してこそ、一流同士による腹の読み合いが出来る。

その心の動きを自在に操れ無い程にレベルの低い人物であるとは思えない不比等が、この様な何かを匂わせるように神妙な顔つき。

（試してんな？　俺が不比等を救えるだけの人物かどうか……）

翔夜がその考えに至った瞬間、にやり、と傲岸不遜で唯我独尊、周りに敵は一つも無し、と言った雰囲気が感じ取れる不敵な笑みが自然と広がる。

「別に？　アンタは街でも有名だ」

不敵な笑みを浮かべ、その根拠を説明する為に翔夜は口を開くのだが、周りから聞けば、特に関係の無い言葉が飛び出す。

それを不思議に思っているのは当然の事で、証人の為に置かれた必要最低限の使用人も首を傾げ、妹紅の反応もそう変わりは無い。

翔夜の、自称相棒である所の紫すらも、意図を把握できないのか、翔夜の言葉に口を挟もうとしている。

が、それは翔夜が紫に貰った扇子を広げる事で阻止される。

開かれた扇子には、黒い光で、口出し無用と浮かんでいた。

「優しく、やり手で、影響力の大きい貴族だってな？」

「これはまた、お恥かしい、そこまで評価されているとは……私も知りませんでしたよ」

街の住民からの声を、翔夜から通して聞いた不比等は、恥かしくも嬉しいのか、はにかむ様にして頬が緩んでいる。

自らの地位に胡坐を掻いて権力を使い回るような単純な人物ではない不比等は、非常に謙虚な人物で、反面貪欲な人物と言えた。

どれだけ治安良く領地を治めていても、まだ足りないと不比等は思う。そしてまた努力を繰り返す。

謙虚と言う言葉は、聞こえは良いが、裏返して見てみると、満足の出来ない人間なのである。

「まぁ、確かにこの辺りの治安は良い。だが最近、この辺りで窃盗事件があった」

「お恥かしい限りです」

いつかの散歩の時に遭遇した事件の事で、その時既に、何が起こっているかと言う思考は翔夜の頭の中で張り巡らされていたと言う

事だ。
その事を今にやにやと笑みを浮かべながら話す翔夜に、紫は不満そうな表情が表に出てきて、その不満を表すように、腕を組んでいた翔夜の二の腕を軽い衝撃が何度も襲う。
しかし、そんな紫の不満を、翔夜はまるで聞いていないと言うような、にやにや顔で華麗に無視。

「そんな治安のいい場所で起こる窃盗。この辺りの治安が良いのは、アンタが居たからだ、蓬莱の珠の枝を捜していてもそれだけでは治安は悪くはならなかった筈。ならば何故か？　アンタ、そこまで見る余裕が無かったんじゃねぇのか？」
「……」
にやにやと言う音が似合いそうな笑みを下げて、不敵な笑みを表に出した翔夜の口からすらすらと出てくる根拠。
その根拠を前に、不比等は押し黙るしかない。
と言うより、ただ押し黙っているわけではなく、驚きで言葉が出ないといった方が正しいのかもしれない。
その証拠に、多少の事では動じない不比等の瞳が軽く見開かれている。
不比等の様子を、細めた瞳で見ていた翔夜だが、ここで瞳の険を潜め、目を軽く伏せながら軽く笑みを浮かべ、やれやれ、とでも言うように肩をすくめながら頭を振る。

「だが、ただの脅迫なら問題なかった。人物を特定できればアンタなら叩き潰す事も出来ただろう。なのにそれだけ余裕が無かった理由は極単純。見つからなかったんだろ？　犯人が」
「……怖い人だ、貴方は。まるで私の行動をずっと見られていたようだ」

すらすらと翔夜の口から出てくるいくつもの根拠に、不比等は溜め息と共に言葉を吐き出す。

その内容は、間接的に翔夜の言葉を肯定するような内容。

つまりそれは、不比等が何者かに脅迫されていたと言う事実を、不比等自身が肯定したという事に他ならない。

不比等から出た肯定の言葉に、翔夜は満足そうに一つ大きく頷き、いい加減二の腕に途切れる事無く与えられる衝撃に飽き飽きしたのか、その場を立ち、庭へと続く障子のぴっちりと張られた戸を開け放ち、柱に背を向けるようにしてもたれかかり、腕を組む。

不満の元凶が横に居なくなった紫は、またしても表情に不満そうな色が広がっていく。

「所で、この屋敷には結界が張られてるんだが……それが何か分かるか？　不比等」

「はぁ、妖怪を寄せつけない為の結界ですが……」

「えっ？」

唐突に問いかけられた翔夜の言葉に、不比等は今度こそ意図がわからないと言う様に首を傾げながら、この屋敷に張られている結界の種類を説明するが、そこで疑問の声が上がる。

疑問の声を上げた人物――八雲紫の不思議そうな表情を見て、翔夜は楽しそうに笑みを浮かべる。

口出し無用と黒い光の文字が浮かんだ扇子を、パチン！　と勢い良く閉じ、懐にしまいこみながら、翔夜は紫へ問いかける。

「んじゃ紫、今張られてる結界の種類は何だ？」

「見えざる力、霊力や妖力を霧散させる結界でしょ」

「そんな馬鹿な！？」

紫から与えられた答えに、不比等は思わず声を荒げて驚愕する。

それも当然の事で、不比等は見えない力を行使するような存在ではなく、優秀な一般人である。
そんな彼が、結界の種類など分かるわけが無い。
ならば何故、彼が結界の種類を答えられたのか？　簡単な事、結界を張れるような人物にその効力を教えてもらったに他ならない。
藤原家は大きな貴族だ、そんな所がお抱えの陰陽師と言う存在を抱えて居ない訳が無い。

「お前が抱えている陰陽師、最近来なかったか？　そうだな……かぐや姫の存在が有名になりだした辺りに」
「まさか……ですが何の為に？」

この場合の不比等が指す意図は色々な意味がある。
何の為にそんな結界を張ったのか？　陰陽師が犯人だとすれば、何の為にかぐや姫との婚姻を要求してきたのか？
その他諸々の、何の為に？　と言う問い掛け、その意図を正確に理解しているのか、翔夜は不敵な笑みを崩さない。

「かぐや姫ってのは、数年で今の姿まで成長したらしいな？　さぞ特殊な人間なんだろうよ」
「ちょっと待って、翔夜、貴方まさか……」

不敵な笑みを浮かべ、柱に背を預けながら自信満々に、何か意図を含めたような言葉を発する翔夜に、紫が何かに気がついたような声を上げる。
その事に、翔夜の笑みは益々深まり、不比等は何のことだか理解が至らないように首をかしげている。
妹紅は、話の途中で既に理解できていなかったのか、既に事は終わっているかのように出されたお茶をしきりに啜っている。
翔夜の言う、特殊な人間、それは、特殊な力を持っている人間と

言う事であり、その特殊な力を手に入れて得をするような存在、それは……。

「そーいうこったな、犯人は人間じゃなく、妖怪だ」

「そんな……ですが妖怪は私の屋敷には入れない筈ですが……」

呆然としたように呟かれた不比等の言葉に、何が面白いのか、翔夜はクツクツと声を上げて笑う。

そして、閉じていた扇子を広げ、脇が甘い、と黒の光で構成された達筆な文字の浮かぶ扇子を不比等たちに見せながら、不比等の勘違いを正す。

「何か勘違いしてるようだから言っとくが……その陰陽師、とっくに死んでるぜ？」

唐突に翔夜から飛び出した物騒な言葉に、不比等は驚愕で声も出ない。

それは、平和な空気の中育ってきた妹紅も同じ様で、死と言う単語が聞えてきただけで、身を固くして翔夜へ顔を向けている。

だが、その結果を冷静に受け止めた不比等の頭に、物事の展開が広がっていく。

今まで不比等は、藤原家が抱えている陰陽師が生きている事を前提に話を進めていたが、その前提が既に間違っているとしたら？

最近この屋敷に来た時既に陰陽師が死んでいたとしたら？　そうなれば話は変わってくるし、妖怪が入ってこれた道理も通る。

基本的に陰陽師の術と言うのは、術者が死ねば、その効力が消える。

「では、私が見た陰陽師と言うのは……」

「まぁ、そう言う事だな」

自らの思い違いに気付き、その事に驚愕したように、右手で自らの顔の右半分を覆い隠すようにして項垂れる不比等。
結界が綻んでいるので直しに来たと言ってこの屋敷に陰陽師が来た時には、既にその陰陽師は殺されており、その時に今の結界を張ったのだろう。
そして、その結界の効力は、見えざる力、霊力や妖力を霧散させるという結界。
それの意味する所は、つまり……。

「今もこの屋敷に居るって事？」
「はい紫正解」

呟くように、確かめるように言われた紫の言葉を、翔夜は軽く肯定する。

「え？　あれ？　もしかして私達危ないんじゃないんですか？」
「わははっ、面白い事を言う嬢ちゃんだな？　絶賛危険の中に決まってんだろ？」
「笑いながら軽く言わないでくださいよ！」

漸く今現在も危険の渦中にある事を自覚した妹紅からの、何処か現実味の無いような問い掛けに、翔夜は軽くその意見を肯定する。
笑いながら自らの言葉を肯定された事に、妹紅は、がーっと食って掛かるが、当然のように翔夜は何処吹く風。
答えた様子は微塵も無く、その雰囲気は余裕そのもの。

「では、その妖怪は一体……誰に？」

不比等から問われた言葉は、何処に、では無く、誰に、この言葉

の意味する所はつまり、不比等は既に妖怪と言う存在が、どう言った存在なのか正しく理解したという事だろう。
つまり、常識が通用しないという事。
その事を、考える様に右手を自らの顎に当てている不比等は理解したという事だ。
不比等からの問い掛けに、翔夜は満足そうに、にんまりと笑みを浮かべる。
表情のバリエーションが少ない翔夜にしては、非常に珍しい事だが、紫以外はその事実を知らない。

「そうだな……所で、この庭、調和が取れていないと思わないか？」

にんまりと笑いながら、唐突に翔夜から問われた言葉に、その場に居る全員が庭に目を向ける。
庭に関する芸術が良く分からない妹紅は首をかしげているが、この屋敷の主である不比等は、その表情を苦々しく歪めていた。

「何と醜い庭でしょうか……」
「玄人の仕業とは思えないな？」
「では、庭師が……？」

何かを揶揄する様な翔夜の言葉に、不比等は庭師が犯人だと結論付けようとしたが、翔夜はその意見に首を振る。

「俺の予想では……共犯には違いないが、犯人じゃねぇな」
「では誰だというのです？」

穏やかな表情の多い不比等にしては珍しく苛立ったような声で翔夜へと問いかける。
そんな不比等が珍しいのか、妹紅や使用人達は、幾分か驚いた表

情で不比等を見ている。

「あー……そこの岩とかな？」

にやにやと笑いながら、庭の中央にどんと置かれた大きな岩に指を向ける。

それは、違和感。

不比等と翔夜が庭に感じていた違和感は、正にその岩。

本当ならば、もう６０ｃｍほど右にあるのが正しい姿の筈の岩は、岩の後ろに植えられている木をその大きさで完全に隠してしまっている。

大きな岩の後ろから見え、密かに木がその姿を見せる様こそ、この庭のあるべき姿の筈だったのだ。

その違和感自体を翔夜が指摘した瞬間、その大きな岩から突如として白い霧が大量に噴出し、全員の視界を奪う。

しかし、翔夜は未だに笑みを崩さない。

「逃がすか……」

白い霧が噴出する直前から、翔夜は懐に仕舞ってある札の一枚を取り出し右手でそれを掴んでいた。

視界の一面を白が覆い尽くす世界、その場に居た使用人達や妹紅の悲鳴が響き渡る中で、呟く様に紡がれた翔夜の声が他のどの声よりも辺りに響き渡る。

「封符『四方結界』」

声量自体は小さい筈だが、どの声よりも良く通った低めの声が辺りに響いた瞬間、空気が大量に入った袋を破裂させたような音が４つ。

視界が塞がった状態で、そんな音が４つ立て続けに響いた事で、使用人達と妹紅の精神は混乱を極めたように感じるが、当然翔夜にとってそんな事は知った事ではない。

音が４つ響き渡った瞬間、それに混じって、分厚い鉄板に硬球が勢い良くぶつかった様な音が一つ聞えた瞬間、視界を覆っていた霧が晴れ、視界が戻ってくる。

戻ってきた視界を頼りに見えたのは、塀の近くでごろごろと転がりながら頭を両手で押さえて悶える人物の姿が目に入る。

その人物は男の様だが、普通の人で無い事は、頭に見える茶色っぽい動物の耳と、腰辺りから生えている様に見える3本のシャープな尻尾。

「3本か、そりゃ負けるな」

「どうでもいいけど、この絵面、真剣味に欠けて仕方ないわ」

「こまけぇこたぁいいんだよ」

いつの間にか翔夜の隣に並ぶようにして立っている紫。

勿論その片手には扇子が広げてあり、口元を隠す所までいつも通り。

そんな紫から、術が解ければそこには頭を押さえてあまりの痛みに転がって悶えている人型を形どっている妖怪が一匹いました。と言うようなシュールな光景にツッコミが入る。

鋭い紫からのツッコミを勢いで誤魔化そうという魂胆の翔夜から勢い任せの発言。

今までのシリアスな推理場面は既に彼方へ飛んで行ってしまった。

「いてぇだろ！　このクソ陰陽師！」

頭蓋が見事に砕けそうな激しい痛みから立ち直ったのか、まだ頭を片手で押さえながらも、翔夜を指差し抗議の声を上げる妖怪。

頭にピンと立った茶色っぽい三角形の耳に、三本のシャープな尻尾。

鋭い瞳に開いた口には発達した犬歯が見え隠れしており、人ならざる者の気配を振りまいている。

破裂音が響き渡り、視界を覆う混乱から解き放たれた使用人達や妹紅は、突如襲ってくる怖気に身を震わせる。

不比等も、何とか表情には出ていないが、肩が小さく震えている。

今まで張られていた結界、見えざる力を霧散する結界が、翔夜の結界によって上書きされた事によって効力を失い、今まで霧散させられていた妖力に当てられた事が分かる。

妹紅などは、精神が十分成長しきっていない為か、小さく歯が鳴っている。

その状況に、翔夜は面倒臭そうに溜め息を吐く。

「おい、紫」

「分かってるわよ、お嬢ちゃんを守ればいいんでしょ？」

短く翔夜から掛けられた声に篭められた意図を理解したのか、紫は小さく溜め息を吐き、妖怪が人間を守るだなんて……などと聞こえない声で呟きながらも行動を起こし、妹紅の近くに陣取る。

妹紅を守れと指示を出したのは、善意からではない、翔夜はそこまで甘い人間ではないのである。

守れといったのは妹紅だけ、後はどうなろうと知った事ではない。

勿論紫は翔夜のその考えを理解した上で、妹紅の近くへと陣取ったのだ。

妹紅を守るように紫に指示を出したのは、妹紅が翔夜の依頼人だからであり、その他の人間を守る事は、依頼の中に入っていない。

依頼内容の中に入っている以外の事を自発的に行う様な優しい人間ではないのだ。

「狐か……面倒な」
「ちっ、陰陽師め……まぁいい、殺せば済む事だな」

本当に面倒臭そうに、いつものやる気の無い表情で溜め息を吐く翔夜に、狐と言われた人物は、片手で頭を摩りながら憎々しげに舌打ちを打つ。

殺せば済む、などと物騒極まりない事を言っている狐だが、頭に大きなたんこぶを作り、それを片手で撫でている光景は、何か大切なシリアス要素を欠いているように思えて仕方が無い。

だがそんな気の抜ける光景も、辺りを覆う濃い妖力を浴びている一般人には、その滑稽な絵でも、滑稽さを理解出来ない状況である。

「おい、コン太」
「このクソ陰陽師！　誰がコン太だ！」
「じゃあ名前、聞いてやるからさっさと言え」
「信じられねぇぐらい上から目線だなこのクソ野郎……本当なら陰陽師なんぞに名乗りたくねぇが、白葉（はくよう）だ」

如何にも面倒臭そうに着流しの裾に手を突っ込みながら、目の前の妖狐を見据える。

鋭い瞳に、形の整った高い鼻、薄い唇に茶色の髪の毛は腰まで伸び、その色合いは優美で豊か、艶のある髪に合わせて身長も高い。

藍色が鮮やかな着物に身を包んだその体躯は細身だが、その外見からは想像も出来ない力があるのは疑うまでも無い事。

醸し出す魔としての雰囲気も合わさり、絶世の美を感じさせる狐の男は、その不本意さを表情の全面に押し出しながら白葉と名乗る。

フフン、と聞えそうなほどに鼻高々で白葉が名乗っている間に、翔夜は突っ込んでいた裾から煙草を取り出し、いつもの様に火をつけ一吸いして、肺に満たされた紫煙を空気中へ吐き出す。

「って名乗ってんだから真面目に聞けよ！」
「聞いてるって、そう熱くなるな、コン太」
「聞いてねぇじゃねぇか！」
「聞いてるって、呼ばねぇだけで」
「人おちょくって楽しいか！　クソ陰陽師！」
「楽しいに決まってんだろ」
「人として最低じゃねぇか！」
「あっはっは！　最低大いに結構」

何故か妖怪である白葉に人としての在り方を説かれている翔夜だが、結局気にする事無く、それ所か大きく声を上げて笑っている。
翔夜と言葉を交わすたびに、白葉の鋭い瞳が物凄い速度で急角度に釣り上がっていくが、それでも翔夜は気にする事は無い。
人を食った様な言動をする翔夜に、我慢が出来なくなったのか、腰から生えていると思われる尻尾がピンと立ちながらも茶色っぽい毛が膨張している。

「もう我慢ならねぇ！　さっさと死ね！　炎狐！」

地団駄すら踏みそうなほどにヒートアップした白葉が叫んだ瞬間、3本の尻尾がくるりと丸まり、その中心に炎の塊が出現する。
尻尾の毛を燃やす事無く表れた炎は、白葉の命令通りに、標的としている翔夜へと殺到するが、その光景を目の前にしても、翔夜は動く気配を見せず、じっと見ているだけ。
そして炎の塊が目の前に来た時、翔夜は指に挟んでいた煙草を呑気に口元に咥え、肺一杯に紫煙を吸い込む。
その時の翔夜の瞳は、いつもと変わらず、やる気の無い眼差しだった。

「遠成さん！」

「ほーら、お嬢ちゃん、動かない。翔夜は大丈夫だから」
「でも！」

目の前に明らかな危険が迫っても動こうとしない翔夜に、思わず妹紅が悲鳴を上げるが、悲鳴と共にその場を動こうとした妹紅を紫が押し止める。

妹紅が紫に抗議の声を掛けようと紫を視界に入れた所で、妹紅は思わず言葉を失う。

明らかに翔夜に思いを寄せていると分かる紫は、妹紅から見て、明らかに翔夜に危険が及んでいるその状況下でありながらも、全く気にしていないと言う様に微笑を浮かべていた。

穏やかに微笑む紫から、ほらね？　と軽い調子で掛けられた声に、妹紅は翔夜へと顔を向ける。

紫の声に顔を翔夜へ向けた妹紅の視界に飛び込んできたのは、一般人である妹紅にとって、信じられない光景だった。

「う、うそ……」

呆然とした声を上げる妹紅の視界には、確かに翔夜へと迫る凶悪なまでの炎の塊があった筈だった。

それが、翔夜へと当たる瞬間、翔夜の懐から、大量の札が飛び出し、一枚一枚に赤い光を纏った札が炎に当たった瞬間、炎の塊は何事も無かったかの様に消え去り、ちりちりと火の粉だけが翔夜の周りを舞っていた。

炎の塊に触れた筈の札は燃える事無く存在し、赤い光を纏いながら大量の札が、そのまま翔夜を中心に無数の円を描くように一人でに廻っていた。

そして、札の赤い光に照らされ、火の粉を纏うように立つ翔夜の表情は、口元がニィと釣り上がり、獰猛な獣の様な笑みを覗かせていた。

「凄い……」

炎の塊を難なく退け、火の粉を纏いながら笑みを浮かべる翔夜に、妹紅は確かにその瞬間、憧れの様な感情が胸の内を過ぎる。

思わず口をついた様に、妹紅はいつものやる気の無い表情を全面に押し出した雰囲気の翔夜を、この一瞬、本当に凄いと思っていた。

赤い光を纏う札に囲まれ、火の粉を纏いながらもその表情は余裕の笑みを崩さない。

それ所か、これから先どれだけ頑張っても目の前に居る妖狐には勝ち目が無いと言う様にただそこに立つ翔夜に、妹紅は本当に凄いという感情しか浮かばない。

光と火の粉を纏いて戦場の中に立っている翔夜の姿、妹紅はどうしても敗北と言う言葉が浮かばなかった。

「あん？　これで終わりか？」

「ちっ！　爆炎陣！」

余裕の笑みで問いかけられた翔夜の言葉に、舌打ちを打ちながら白葉は次の術の発動に入る。

白葉が言霊を言い終えた瞬間、無数の炎の球が翔夜の周りに浮かび上がり、隙を与えないように翔夜へ殺到していく。

視界を埋め尽くすほどの赤を見て、翔夜は慌てる事無く言霊を呟く。

「壱ノ符『風』」

それほど大きくない声で呟かれた言霊に反応して、赤い光を纏った札は、急速に回転速度を高める。

それと共に、翔夜へと殺到していた炎の球はその回転に乗せられ、

次々とその回転に飲み混まれ、最終的に全ての炎がその回転に飲み込まれた時、そこには翔夜を中心とした炎の渦が出来上がっていた。
常識外のその光景に、妹紅は瞳を煌かせて翔夜を見つめ、対峙する白葉の顔は蒼白と言って良いほどの顔色へと変化していた。

「何なんだよ……テメェ……」
「何って、ただの不良陰陽師だ」
「そう言う事を聞いてるんじゃねぇ！」
「あん？　って言うと？」
「本当に人間か？　テメェ？」
「えっ……やだ……人を見る目……」
「何で、えっ？　信じられない、見たいな目ぇしてんだ！　そんな目したいのはこっちだ！」
「視覚……死んでる？」
「おめぇが非常識なだけだ！」

驚愕の渦に飲まれている白葉は、思わず声を荒げるが、余裕の笑みを崩さない翔夜のペースにのまれている。
まるで漫才の様なやり取りが戦闘の最中繰り広げられるが、それは白葉が翔夜の調子に合わせられているからで、白葉の心中としては全く穏やかでもないし、悉く自分の妖術を無効化する陰陽師を前に余裕と言う文字すらない。
戦闘中とは思えないやり取りをする翔夜に浮かぶ笑みは未だに消えない。
炎の渦を纏いながらも一つも焼けていない札に、その回転に乗せられている白葉の炎。
先程から、白葉は、翔夜から、炎の制御を奪おうとしているのだが、今の所それは叶う事無く炎は翔夜のそばに存在し続けている。
煌々と炎の渦を作るその炎は、既に白葉の術ではないという事なのだろう。

「ほらほら、戦闘中に動き止めるとあぶねぇぞ？」
「くそっ！」

戦闘指南をする様な翔夜の口調と共に、炎の渦は動きを見せる。
高速で回転する炎の渦の中から、３つの炎の塊、いや、炎を纏った翔夜の札が射出される。
射出された札は炎の軌跡と火の粉を舞い散らせながら、直線的軌道で白葉へ迫る。
炎でさえ燃えなかった札を核とした炎、白葉は自らの術で相殺させると言う案を即座に却下し、すぐさまその場を離脱。
右へ軽く飛んだそこへ、またしても別の札が２つ迫るのを視界に収め、尻尾を地面へと触れさせ、そこを基点に後ろへくるりと回転する。
地面へと触れた筈の炎は他の物を燃やす事無く霧散し、札のみになり、力なく地面へと落ちる。
白葉が先程の３つが飛来した場所を見てみると、そこにある札も同じ様にただの札となって地面へ落ちていた。

「まだまだ行くぞ、呆けてんじゃねーぞ」

軽い調子の声が聞こえた瞬間、３つの札が少し距離を開けて飛来。
白葉はそれを、左に大きく回避する事で３つの札を回避する。
憎々しく、炎の渦を纏う翔夜を睨みつけるが、それで事態が好転するならば簡単な事。
翔夜の霊力によって力を与えられているあの札をどうにかしない事には、白葉に勝機は来ない。
間髪入れずに飛来する炎の札を息つく暇も無く必死に回避しながら、現状で取れる方法を考えてみる。

（あのクソ陰陽師をどうにかして倒す……無理だな。あの札が尽きるまで回避……保留）

考えを巡らせながらも、回避の行動は怠る事は無い。

空中への回避は現金、妖力で空を飛ぶ術を行使する間に打ち落とされるのが落ちなのは明白で、専らの回避方法は、とにかく一箇所にとどまらない事。

幸いここは、動ける範囲が絞られている為、それは同時に狙いを付けられる範囲も限られているという事。

そして、白葉にとって幸運だったのは、翔夜の後ろに妹紅が居た事だった。

守るべき依頼人が居たからこそ、避けられる隙間の無い殲滅を重視した戦い方をしてこない。

それによって白葉は、今まで生きながらえているのだ。

（どうにかこれを掻い潜って接近戦に持ち込むか？　……どの道、この札が尽きてからじゃねぇと無理だな）

接近戦による戦闘も考えたが、結局白葉が近付くまでに多くの札が残っているなら、その札を使って避けられないほどの密度で射出された札を向けられる事が容易に浮かぶ。

とにかく今は避け続けるしかない。

白葉の見た所、翔夜を中心に構成されている炎の渦の色が段々と薄くなり、その先の翔夜の姿がはっきりと見える。

既に白葉の足や手は、がくがくと震えそうになっているが、それを何とか抑え、妖力を手足の強化へ回し、回避に専念する。

そして遂に、白葉が求めたその瞬間が来る事になる。

「あん？　無くなっちまったか」

「この時を待ってたぜぇ！　クソ陰陽師がぁ！」

翔夜を中心に構成されていた炎は消え去り、それに伴って翔夜に着き従うように翔夜の周りを回転していた大量の札も全て屋敷の庭の地面へ落下していた。
白葉はそれを好機と見たのか、妖力で強化された足を使い、高速で迫り、札が無くなった事で拍子抜け、と言うような表情をした翔夜に拳を叩き込もうと右手を握りこむ。
が、翔夜は白葉の吼える様なその声に、にやぁと笑みを向ける。

「俺の封印術はな『夢想』を『封印』すると書く」

白葉から見ればこの上なくいやらしい笑みを浮かべた翔夜に、理性は警告を鳴らす。
しかし、既に走り出した足は止まらず、白葉の身体が、無数の札が敷き詰められた庭の中央に到達した瞬間、突如として札が一斉に赤い光を纏い、白葉に殺到する。

「行け！　モン○ター○ール！」
「さっきの思わせぶりな発言は何処にいったの！？　言霊全然違うじゃない！」

翔夜の後ろで妹紅を守るような位置に陣取っている紫から鋭いツッコミが入るが、翔夜は気にせずにやにやと笑みを浮かべる。
その雰囲気は何処と無くやりきったような雰囲気を感じる。
訳のわからないやり取りを紫と翔夜がしている間にも、白葉に向かって、無数の札が殺到し張り付いている。
そして、白葉の姿が札で見えなくなるほどに覆われた瞬間、札の中から白葉の悲痛な叫び声が辺りに木霊する。

「うおぉぉぉ！　こんなふざけた封印の仕方で封印されたくねぇぇ

！」

あまりに悲痛といえば悲痛すぎる叫び声に、藤原家の使用人達や、不比等が、その目尻に輝くような一滴を煌かせていた。

心からの叫びを最後に、白葉を包んだ札は一気に収縮し、掌サイズの球へとその大きさを縮めた。

そして辺りには妖力も炎も存在しない、藤原家屋敷の庭が戻っていた。

掌位の大きさの球体に収まった札の塊を掌で弄びながら、特に何事も無くそこに立つ翔夜の陰陽師としての腕前は、確かに文句の付け所の無い程に一流だった。

自らの力を最小限に使い、相手の術を逆に利用した攻撃方法、術の制御、発動速度、強固な封印術や結界術に多様な術形式、翔夜を疎ましく思っている人間からも京一の陰陽師と言われるだけの事はある。

先程までとは違い、やる気の欠落した表情で白葉を封印した札を弄びながら屋敷の中へ向かってくる翔夜の横に並ぶ紫。

「流石、といった所かしら？　でも、何で殺さなかったの？」

扇子を広げて口元を覆いながら、興味深そうに紫は白葉に掛けられた封印術をまじまじと見ながら翔夜へと疑問を投げかける。

翔夜の底が知れない雰囲気、底を読ませない雰囲気を間近で感じてきた紫は、この程度はやれて当然と言うような態度。

実際、当然だ、翔夜としては、尻尾が3本しかないような若い妖狐を封印する事など造作も無い。

今回の事に何の不思議も感じていない紫の疑問に対して、翔夜は珍しく、本当に不思議そうな面持ちで首をしきりに傾げている。

「いやまぁ、俺にもよくわからねぇが……何か、狐には世話になっ

てるから殺しちゃ駄目だと天啓が降りてきたような気がしてな」
「貴方が神を信じるようになったらいよいよこの世も終わりかもしれないわね……」

珍しくはっきりと要領を得ない翔夜の言葉に、紫の表情は、本当にこの世の終わりが来たような絶望感を全面に押し出している。
あまりと言えばあまりな紫の発言に、失礼な、と短く一言発するが、その表情は特に失礼とも感じていないようないつものやる気の欠如した表情。
そんな紫と翔夜に、たたたっと屋敷の中から駆け寄ってきた妹紅。
着物の裾を踏むような可能性もあったのだが、その辺りは特に考慮していないような足取りで翔夜へと駆け寄った彼女の瞳は、きらきらとした尊敬の眼差しが浮かんでいた。

「凄かったです！　遠成さん！」
「んー？　あー、まぁ、このぐらいはな……」
「陰陽師の方って皆あんな事が出来るんですか？」
「どうだろうな？　実際お前の家お抱えの陰陽師はこいつにやられたわけだしな」

妹紅からの純粋なまでの疑問に、翔夜は掌にある白葉の封印を軽く掲げて妹紅の疑問に曖昧さで持って答える。
白葉に殺された陰陽師の話題を出した瞬間、妹紅の表情が苦々しく歪み、それは使用人達も不比等も各々沈痛な表情を浮かべている。

「陰陽師の方には本当に申し訳無い事を……」

不比等が沈痛な面持ちでそう発言するが、翔夜にとって、不比等のその言葉は、かなりの的外れであった。
確かに、人一人が妖怪によって死んだのだ。

不比等のその気持ちも分からない事は無いが、それでも無意味なまでに苦しみ過ぎている様に翔夜は感じていた。

「あんま気にすんな」

軽い調子で言われた翔夜の言葉に、流石の不比等も黙っていられなかったらしく、不謹慎だと眉を吊り上げている。

「人が一人死んでいるんですよ！？　貴方は……」

「知るか、それはそいつが弱かっただけだ。それにもう居ない奴の為に悲しんだ所で何の意味も無い。そいつは何もしてくれない。何よりその悲しみ、哀れみは、全力で戦って届かなかったそいつに対しての侮辱以外の何者でもねぇ」

にべも無く言いきる翔夜に、不比等は思わず押し黙るしかなく、妹紅も如何声を掛けて良いのかわからないようにおろおろと翔夜と不比等を見比べている。

紫は人間同士の言い争いに興味は無いのか、マイペースに扇子を口元でゆらゆらと揺らめかせている。

そんな気楽そうな紫に、現在進行形で面倒臭い出来事に直面している翔夜は恨みがましい視線を送っているが、翔夜の近くにずっと居た紫にとってそれは既に何処吹く風と言うような雰囲気。

応接室としての役割がある部屋の空気は一様に重い。

「それに、こんな世界に身を置いているって事は、それなりに覚悟があってこその事だろうよ、その覚悟をアンタは無かった事にすんのか？」

「そんな事は……！」

「だったら、気にすんな、そいつは自分に出来る事をした。それを賞賛してやれば良いだけだ」

何で俺がこんな事を……面倒くせぇ……と全く隠す気も無いような声量で翔夜は、面倒臭そうに右手で後頭部をぽりぽりと掻きながら溜め息を一つ溢す。

実際、数多の死を見てきた翔夜からすれば、誰かの死を悲しむ事に意味は無い。

悲しんだ所で死んだ奴が戻ってくる事も無ければ、何かをしてくれる訳でもない。

そして残酷な事に、誰かの死によって感じる悲しみは、時間と言う誰しも平等に与えられる概念が癒してしまう、はっきり言ってしまえば、磨耗してしまうのだ。

その事を理解している翔夜は、悲しむ事に意味は無いと言い切る事が出来る。

だが一方で、翔夜は、人間として悲しみを感じずにはいられないと言う事も分かっている。

だからこその折半案として、悲しむのではなく賞賛しろと言ったまでの事。

遠成翔夜と言う男は、決して善人ではない。

それ所か、一般的に見れば、どちらかと言うと悪と言われる様な人間である。

「わかり、ました……」

人間らしい感情を感じている不比等は、苦しそうに翔夜の言葉を肯定するが、やはり心中を整理する為には時間が要るのだろう。

人間なのだから、仕方の無い事ではある。

しかし、そこは腐っても大貴族、すぐさま表情を屹然とした物に戻すと、不比等は迷う事無く翔夜へと話を持ちかける。

「私の抱える陰陽師の方の場所が空いてしまいましたが……どうで

しょう？　遠成さん、私の家の陰陽師として雇われてはもらえないでしょうか？　幸い妹紅も貴方が気に入っているようですし」

「ぜ、是非！」

屹然とした表情で、藤原家お抱えの陰陽師と言うポストを埋めるために、妹紅の頭をそっと撫でながら、翔夜へと不比等は提案を持ちかける。

妹紅もそれを望んでいるのか、不比等に頭を撫でられ、幾分か慌てた様子で翔夜へ頭を下げる。

藤原家と言う大貴族は、この時代の京に、大きな影響力を持つ。その様な家で専属の陰陽師として活動出来ると言う事は、地位も名誉も、金も約束されたような物だ。

普通の陰陽師ならば、この話を断る事などまずしない。

「あ、それ無理」

「……理由をお聞かせ願えますか？」

特に考える様子も無く、不比等からの提案を軽く拒否する翔夜に、ある程度予想はしていたのか、不比等は落胆の様子を見せず、理由を問いただしてくる。

妹紅はあからさまに肩を落としていたが……。

「俺一箇所に縛られるとか耐えらんねぇんだわ。地位にも名誉にも興味はねぇし、金は必要最低限あればそれで良いしな」

これ以上無い程に自分勝手な理由ではあるが、藤原家に入るメリットを蹴る理由としては、これ以上無い程に翔夜らしい理由だった。

そんな翔夜の事情に、不比等は、そうですか、と特に気にした様子も無く、薄い笑みを浮かべる。

これで話が決まってしまいそうな様子の場に、何か慌てたような

雰囲気で、妹紅が翔夜の着ている着流しの袖を両手で握って引っ張る。

「あ、あの、じゃあ、時々で良いですから、ここに遊びに来てください。に、に、兄様」

「別にそれぐらいなら構わねぇが……ん？」

妹紅からのお願いに、基本的に暇な翔夜は、軽く了承しようとして、明らかにおかしな発言があった事に今更気がつき、それに釣られる様に妹紅を見下ろすと、きらきらと期待したような表情を浮かべた妹紅が居た。

これ以上無い程に、憧れていますよー、と視線を送ってくる妹紅の様子に、溜め息を一つ吐く。

そんな翔夜の様子に、妹紅は不安を感じている様に眉根を寄せる。

「あ、えっと、だ、駄目でしたか？　嫌だったら普通に呼びますけど……」

などと言いながらも、その表情はこれ以上無い程に残念そうな表情ではあった。

「別に嫌なわけじゃねぇが……あー、もう面倒くせぇから好きに呼べ」

考える事を放棄した様に投げやりに答える翔夜に、妹紅の表情は嬉しそうな満面の笑顔が広がっていく。

そんな妹紅の様子に、少し安心したような不比等の表情。

見た所、結構なファザコンであった妹紅が、他の男性に懐いた事に、少しばかり安堵しているのだろうが、娘が可愛いのは不比等も同じ様で、これ以上無いような面倒臭いプレッシャーを不比等から

感じた翔夜は、またしても面倒臭そうに溜め息を吐く。
先程から一言も発してはいないが、翔夜の後ろで扇子を操っている紫からも、面倒臭そうな雰囲気が飛んできているのを少し前から自覚していて、それにも面倒臭さを感じる。

「はぁ、面倒くせぇ……とりあえず今日の所はこれで帰るか。これで脅迫も受ける事ねぇし、かぐや姫の事に関してもそっちで勝手に断るなりなんなりしてくれ」
「わかりました、この度は解決していただきありがとうございました」
「別に構わねぇさ、妹紅の嬢ちゃんからの依頼だったわけだしな。報酬は言い値で構わんから好きに決めてくれ、後日取りに来る事にするわ」

札の球を弄びながら、まだ少し日の高い空を屋敷の中から見つつ、これからの行動を軽く打ち合わせ、屋敷を後にしようとした所で、紫から声が掛かる。

「所で、それ、どうするの？」

ぱちんと閉じた扇子で指された先には、翔夜の掌で弄ばれている白葉の封印が存在した。
紫としては、封印した狐を如何するのか興味があるのだろう。

「あー、どうすっかな……考えてねぇわ」

白葉を封印した後、それをどうするか全く考えていなかった翔夜は、困ったように軽く呟く。
掌で弄ばれている札の球を、翔夜の傍に居た妹紅が、興味深そうに覗き込んでいるが、特に不都合は無い。

「式にでもするの？」
「式かー、そうそう、丁度欲しいと思ってたんだよねー」

等と言いながら、札の一枚に手を掛けた瞬間に手を止め、屋敷の庭までもう一度出て、いまだ日の高い空を見上げて、唐突に掌に持っていた札の球を空中落下させる。

そして身体の後ろへ足をスゥっと持ち上げ、丁度足の甲辺りまで落ちてきた瞬間、勢い良く持ち上げていた足を振り子の要領で振り、そして強烈なインパクトが足の甲と札の球の間で起こる。

所謂蹴ると言う行動でもって捉えられた札の球は、当然の如くベクトルは足の甲が向いている先、具体的に表すなら京の外に尋常ではない勢いで飛んでいく。

「式は欲しいけど男の式なんざいるかー！　どうせならもっといい身体付きした女の式の方が良いに決まってんだろこんのクソ野郎がっ！」

翔夜の叫び声と共に、強烈なインパクトで蹴り出された札の球は、勢い良く飛んで行き、既に京の外まで飛んだにも拘らず、その勢いはまだ衰える事は無い。

そして遂に、点すらも見えなくなった札の球を満足そうに見送り、翔夜は屋敷の中に戻ってくる。

「私なんかどうかしら？」
「ツッコミとか飛ばしていきなりそれか、歪みねえ程ぶっ飛んでるなお前」

屋敷の中に戻ってきた翔夜に、軽く第一声を掛けた紫の言葉に、思わず翔夜は呆れたような表情を浮かべる。

そして辺りを見渡すと、あんぐりと口を開けて翔夜の所業に、信じられない物を見たような驚愕の表情を浮かべる使用人達。
特に気にした様子も無く、薄く笑みを浮かべる不比等に、やっぱり兄様は凄い！　と尊敬の眼差しを強くする妹紅がそこにいた。
藤原家の血が入った者は、それなりに神経が太い様子。
狐の入った封印を翔夜が蹴り飛ばすと言う衝撃の展開を最後に、この事件は解決と相成った。

いつかの散歩と同じ様に、だが時間帯はまだ日の高いその時間、京を散歩するような遠回りのルートで帰りの道をゆらりゆらりと歩く翔夜と紫。
翔夜の表情はいつもの様にやる気が欠落し、紫の表情は何処か不服そうな表情を浮かべていた。

「んだよ、まだ今回の件秘密にしてた事不満なのか？」
「別にそれはもう良いわ、どうせその方が面白そうだとか思ったんでしょ？」
「よくわかってんじゃねぇか」

唇を軽く尖らせ、頬を膨らませながら発した紫の言葉に、にやにやと笑みを浮かべながらその意見を肯定する翔夜。
この時間は今だ多くの住民で賑わう時間帯。
その中で優美な金色の髪を陽光によって煌かせる紫と、光の反射があまり無い黒の髪の二人は目立つ筈だが、今現在はそんな事は無く、住人達も気にしていない様に普段通りの様子。
その理由は極単純で、既に住人達はこの金色の髪と黒の髪のコンビを見慣れているので、今更まじまじと視線を寄越すほどでもないのだ。

無論、見た目美しい紫は、今でも男性から多くの視線を集めるが、それも既に慣れたもの、今更気にするような事でもない。

「そうじゃなくて、お嬢ちゃんの事よ」
「あん？　妹紅の嬢ちゃんがどうした？」
「貴方に憧れていたわ。これ以上無い位に……」

先程まで藤原家の屋敷に居た妹紅の事を、不満そうに唇を尖らしながら紫は語る。
確かに妹紅は翔夜に憧れの眼差しをこれ以上無い程に向けていたが、純粋にそれだけだった。
翔夜としては紫がそこまで不満に思うようなことは無かった筈、と考え込む。

「そりゃわかったが、別にそれだけだったろ？」
「今は良いわよ、今は、憧れが恋慕に変るなんて良くある事だわ」

落胆の溜め息を吐く紫が懸念している事、それは今現在の事ではなく、これから先の妹紅の感情の変化に対してだった。
確かにそう言われてみれば、これから先、妹紅が翔夜に抱く感情がどう変わるかなど、翔夜や紫があずかり知らぬ事ではある。
その感情の変化を紫は気にしているだけで、その気持ちも良く理解できる。
紫の言うように、憧れが恋慕へと変化を遂げる事など良くある事なのだ。
いつも通りに日常を過ごす住人達の生活を目で追いながらも、翔夜は紫の言う事も最もだと考えるが、やる気の欠落した筈の表情に、にやにやとした笑みが宿る。

「ま、そうなったらなったで悪い気はしねぇな、俺は。将来あの嬢

ちゃんは美人になるだろうしな」
「あ、このっ、また直ぐそんな！　私の身にもなりなさいよ！」
「くっくっ……」

着流しの袖ごと二の腕の皮膚を抓られながらも、にやにやとした笑みを崩さない翔夜に、紫が溜め息を吐くパターンも最早いつも通りの光景である。

だがやりすぎると、変なスイッチが入ってしまったりしてその辺りの加減が難しい事も理解している。

随分と前に一緒に暮らしていた銀色の髪が印象的な人物も、やりすぎると変なスイッチが入る所は、同じだったと思い出す。

だが、実際に見てみると、紫と、銀色の髪の女性――永琳が随分違う事がわかる。

誘うくせにいざ押したら簡単に倒れてしまい、肝心な所で押しが足りない、行動も大胆にはなりきれない所があったのが、天才と言われている八意永琳と言う女性。

誘いに乗るとそのまま誘いっぱなしで、押しの強弱が極端、反応が頬を膨らませたり唇を尖らせたりと少し子供っぽい所のある、隙間の妖怪、八雲紫。

普通に見ればどちらも魅力的な女性である事は違いないが、結局どちらも微笑ましく、今の所、どちらも翔夜を振り向かせるに至っていない。

似ても似つかない二人の女性が共通している所は、そこと、もう一点、どちらも翔夜と言う人物にどうしようもなく魅せられているという事。

そんな二人の女性の事が、ふと頭の中に浮かぶ翔夜は、その事実に嫌な予感を覚えていた。

（あー、面倒臭い事が起こりそうな予感がする気がするな……）

そんな嫌な予感を抱えている翔夜だが、結局数分後には、どうでも良いか、と思い直す。

まだ見ない先の事を考えるのは楽しいが、結局起こってみない事には分からないのもまた事実。

いざそうなった時に自分の立ち位置はどう定めるべきかを考えながら、まだ日の高い京の街を、のらりくらりと紫と並んでいつもの様に闊歩している不良陰陽師。

そんな陰陽師が携わった事件後の昼下がりだった。

じゅうはち　三尾と人間……あー、面倒臭い予感（後書き）

はい、昨日から引き続いてあっくすぼんばーです。
さて、フラグ的に妙な展開を見せているこの作品、迷走しているのかしていないのか……微妙な所ではあります。
いえ、この展開は頭の中にあったので、私の中では迷走していないのですが……読者の方々がどう感じるかは、私の関与する所では無いですしね。

さて、実は犯人は狐だったと言うオチでしたが、封印と言う手段を取ったのは翔夜が本編で言った通りです。
狐には世話になっているので……特に銀色とか、ね？
それに、藍も控えていますからね、なるべく穏便に済ませたかったと言うのも本音です。
さて、次かその次か、その辺りには永琳との再会が成る訳ですが……修羅場うまく書けるかなー、修羅場っても翔夜動じそうも無いんだよねー、怖いね。

本編の事にこれ以上触れると、思わずネタバレっちゃいそうになるので、ここからは雑談。
寒いですよね。最近。私は田舎に住んでるので、車の窓が凍ってるだとか、凍ってる鉄の溝蓋の上ですっ転ぶ、何て事がざらにあります。
ですがまぁ、確かに寒いのは嫌いなんですが、冬の空気は何処となく好きです。
澄んだ静かな空気が、静寂を打ち破る何かが起こる前触れの様な、そんな風に感じるので好きです。
あれ？　そう感じるのって私だけですか？　そうですか……。
でも、ワクワクしますよね。冬。

今でも雪が振ると大喜びです。そう若いわけでもないのに無駄にはしゃぎます。

積もったら今でも嬉しそうに雪だるま作ります。いや、ホントに。

まぁ、積もる事なんて早々無いですが……。

ではでは、今回はこの辺で。

あぁ……かまくらの中で鍋してぇ……。

じゅうきゅう　永遠の信頼、開通してます。私も！　私も！

何でも屋の様な仕事から始まり、最終的には久しぶりの陰陽師としての仕事となった、ちょっとした事件から数ヶ月。

季節は一つ進み、蒸し暑い辺りの気温に、強い日差し。

耳が痛くなるほどにうるさく鳴いている蝉が見られる季節である夏へと移り変わっていた。

何千回何万回と味わってきたこの季節を、京の片隅にあるあばら家で迎えた腕は一級品、態度は粗悪品な不良陰陽師、遠成翔夜は、現状に対して面倒臭そうな溜め息を吐き、どうしてこうなったのか……と肩を落としていた。

その原因は……。

「兄様！　兄様！」

引っ切り無しに翔夜の着ている黒の着流しの袖を引っ張り、主人にじゃれ付く子犬の様に翔夜の事を何度も、兄様と呼ぶ少女に原因があった。

この時の現状をうるさいまでに鳴く蝉の声が掻き消してくれないかと、ありえない幻想を抱いてあばら家にある小さな窓から外へ視線を向ける。

しかし、未だに着流しの袖を引っ張る回数は減る事無く、それ所かどんどんと回数が増え、引っ張られる間隔も短くなってくる。

今やその勢いは、着流しの肩部分から袖が千切れるのではないかと思うほど。

右の袖が勢い良く引っ張られる度に、首に当たっている布部分が擦れて若干痛い、などと思いながら、漸くその原因へと視線を移す。

明らかに面倒臭そうな空気を纏う翔夜の瞳に移ったのは、色合いは派手ではないが、上品な仕立てだと分かる着物。

豊かな黒髪に、まだ少女の面影を残す顔立ち、少し切れ長な瞳は、彼女自身が持っている艶やかな黒と同く黒い瞳。
あのちょっとした事件以来、何やら妙に翔夜の事が気に入ったらしい彼女の名前を、翔夜は漸く口にする。

「妹紅の嬢ちゃん……」
「はい！　兄様！　ようやっと私の家に来てくれるのですか？」
「何でそうなる……俺はここが気に入ってんだよ」
「そうですか……」

翔夜からの返答に、心持ち肩を落とす少女。
先程翔夜が口にした名前の通り、彼女の名前は、藤原妹紅と言う。
何やらあの事件以降、妹紅は陰陽師として桁外れの実力を持つ翔夜が気に入ってしまったらしく、こうして用も無いのに、翔夜のあばら家へ遊びに来る事が最近増えてきている。
その際、毎回自分の家専属の陰陽師になってくれと頼まれているが、当然ながら翔夜は断り続けている。
最初はにべもなく断るばかりの翔夜に、肩を落としてばかりだったが、最近はどうも耐性がついてきたようで、先程の様に断られても、直ぐに持ち直すのが普通になりつつある。

「まぁ、いいです。それでですね、兄様！」

この様にすぐさま笑顔を浮かべ、またしても子犬のように翔夜へと纏わり着いて来るのだ。
翔夜の中では、事件が終了し、後日報酬を貰いに行った後は、後腐れなく引き上げるつもりだった。
ちなみに報酬は言い値で良いと言ったのだが、その意図をきちんと不比等は理解していたようで、過剰なまでの報酬を差し出してきた。

不比等自身はそれでもまだ足りないぐらいだと言っていたが、それはつまり、不比等は己の娘である妹紅に、それだけの価値を見出しているという事。

妹紅からの依頼であるが、最終的には彼女の危機をも救った事も加味してその報酬と相成ったわけである。

己の娘が絡んだ依頼の報酬に、足元を見ず、更に糸目も付けずに多額の報酬を払う不比等は、言うまでも無いが、親馬鹿である事は間違いない。

翔夜が面倒くさそうにしている結果だけを言ってしまえば、別に妹紅の相手をするのが嫌なわけでも、面倒な訳でもない。

ただ単に、妹紅がこうしてじゃれ付いてくる度に起こる、負の連鎖が面倒なだけ。

今もその連鎖は現在進行形で起こっており、その証拠に、左側から明らかなジト眼を向けられている視線をひしひしと感じているし、何より、これでもか！　と言うほどに力一杯二の腕を抓られているのが何よりの証拠。

妹紅の話を軽く聞きながら、翔夜は視線の原因へと瞳を移動させる。

そこに居たのは言うまでも無い。

自称翔夜の相棒であり、隙間の妖怪。

豊かな金色の髪に、美人と称される顔立ち、女性としての魅力を詰め込みすぎた身体つきを紫を基調とした服に身を包む、八雲紫と言う女性だった。

現在紫は、言うまでもなく、妹紅の話を聞いている翔夜へ責めるようなジト眼を向けている真っ最中である。

「良いご身分ですわね？」

「まぁ、両手に華と言うのは悪くは無ぇな」

「こんのっ……ぬけぬけと言ってくれて！」

片方はまだ蕾だけどな、と悪気もなく言い放ちながら、にやにやと笑う翔夜に、紫は持っていた扇子でもって胡坐を掻いている翔夜の膝を、べしべしと何度も叩く。

普段は落ち着いている筈の紫も、翔夜が絡んでくると途端に行動がガラリと変わってくる。

それは無論、翔夜に他の女性が近付いてくるのが気に入らないからである事は明白。

妹紅に関しては、現状はまだ純粋な憧れからくる物と分かってはいるのだが、それが何時恋慕へと返るか……翔夜に惹かれる一人の女である紫にとっては気が気では無い。

顔も知らないが、既に永琳と言う容疑者……いや、被害者か？

どちらでも良いが、そう言う存在が居るのだ、これからも気は抜けない。

「姉様は兄様が好きなのですか？」

「いいえ……愛しているのよ！」

「わざわざ声を大にして言いやがったな」

恥かしげもなく持っていた扇子を勢い良く広げながら、紫はそう言い放ち、翔夜はそんな紫に半ば呆れている。

豊かな胸を、むふん！　と張りつつそう宣言する紫に、妹紅は楽しそうに笑顔を浮かべながら、自らの胸の前で、ポンと軽く掌を合わせる。

「わぁ！　それは素敵な事です！」

「何時までそうやって純粋に嬉しがってくれるのかしら……？」

「？　何か言いましたか？　姉様」

「いいえ、何でもないわ？」

楽しそうに笑顔を浮かべて、紫を応援する妹紅に対して、ぼそり

と聞えぬように呟く紫。

紫の思惑通り、何を言ったのか聞えなかったのか、愛らしくコテンと首を傾げて不思議そうな表情を浮かべる妹紅に、紫は何でもないと軽く手を、ひらひらと振る。

今は純粋極まりない妹紅を見ながら、内心、後二～三年後までそう言っていられるかしら？　などと思いながら、広げていた扇子をぱちりと閉じる。

齢十五を数えるともう立派な大人として見られるのが普通ではあるのだが、その中でも妹紅は、女性である為、貴族としての覇権争いに噛む事無く、藤原家と言う大きな貴族の娘と言う事で、政治の駒として使おうにも影響力が大きすぎる為使えない。

そして何より、不比等に守られて育ってきた妹紅は、悪く言えば箱入り、良く言えば純粋。

勿論貴族としての教育は受けているため、振る舞いなどは問題ないのだが、自らの感情に対して純粋な物で固められた妹紅は、子供らしい子供と言っても差し支えない。

今まで、数多の妖怪や人間を見てきた紫だが、この純粋なまでの妹紅が、これから先翔夜に対してどの様な感情を抱くかは、彼女でも予測できない。

純粋な憧れのまま終わるのか、それとも別の感情へと成長を遂げるのか……。

（とにかく今は様子見ね……）

結局、消極的ではあるが、静観と言う行動しか取れない自分に少しもどかしさを感じる。

唯一の救いは、例え妹紅の感情が恋慕へと転がった所で、肝心の翔夜が一所へ落ち着く事を良しとしない事が救いと言える。

同時に、紫自身の恋路で最大の壁が、翔夜の持つその性質であるという事が最大の皮肉でもあるのは言うまでも無い。

「では、兄様はどうですか？　紫姉様の事、好きですか？」
「あん？」
「……ッ」

翔夜の魅力であり、紫が翔夜に惹かれた部分が一番の障害である事実に、若干憂鬱になりながら、蝉の声が引っ切り無しに聞こえてくる外へと視線を向け、暑さと共にこの憂鬱な気持ちも一緒に吹き飛んでくれないかと扇子を広げ、翔夜の隣で優雅に仰いでいた紫の耳にそんな妹紅の言葉が耳に入る。

その瞬間、心なしか扇子の扇ぐ勢いが弱まり、風の音が小さくなったのは仕方の無い事。

別に何とも思ってないという風を装う為、外へ視線を向けたままだが、完全には隠しきれていないのか、紫の耳が心なしかぴくぴくと小さく動き、その耳はうっすらと赤く染まっている。

紫自身から、好きだ、愛していると主張し、それを軽く受け流されても、悲しいとは思った事は無いし、翔夜の言葉やその時の顔が何となく好きだったりして、基本的には恥かしいとも思ったことは無い。

しかし、改めて第三者が翔夜の気持ちを聞きだす、と言う場面は何処となく気恥ずかしい物がある。

翔夜に対して問いかけた妹紅の表情は、純粋に疑問に思っただけのようで、小さな顎に人差し指を当てて、軽く首を傾げている。

翔夜からの答えを期待しているような色も、その瞳には見受けられるが……。

投げかけられた純粋な疑問に対して、翔夜は特に悩む素振りを見せず、問われた時には既に口を開いていた。

「そうだな、好きか嫌いか、この二択で答えろって言われたなら、どっちかって言うと好きなんだろうよ」

「わぁ、素敵な事です！」

考える事無く言われた翔夜の言葉に、紫は喉が引き攣るような感覚を覚えながらも、何とか咳き込む事は回避する。

その際、金色の豊かな髪が、ふわりと揺れ、今の紫が思っていることを表すように、波打つ。

紫とて、翔夜には及ばずとも、長く生きてきた妖怪であり、翔夜の言いたい事は理解できているが、そう言う意図がなかったとしても、紫にとって翔夜から出た『好き』と言う言葉は何よりも比重の重い言葉であった。

（い、今好きって！　翔夜の口から好きって！　いや、違うのは分かってるのよ？　それでも好きってぇ！）

優雅に扇子を仰ぎ、如何にも余裕そうに外へ視線を向ける紫だが、その内心はそこまで余裕と言うわけではなく、人目がなければその豊かな金色の髪を身体に巻きつけるほどの勢いで、床を転がり回りながら狂喜してしまう自信があるほどに喜んでいた。

どういった意味合いで翔夜がその言葉を言ったかは重要ではなく、翔夜自身の口から『好き』と言う言葉が出た事自体が紫にとっては重要なのだ。

翔夜の言った言葉に、妹紅は純粋に嬉しそうな笑顔を浮かべる。

そんな妹紅に対して、珍しい事に幾分か落ち着いた目元の翔夜。

基本的にこの男は、何だかんだで、妹分や子供には甘い所があるのである。

「けどな」

小さい子供に言い聞かせるような声音で、純粋に喜ぶ妹紅を押し止めるような翔夜の言葉に、妹紅は不思議そうに首を、くりっと傾

げる。
そんな妹紅に翔夜は、仕方ねぇな、とでも言うように苦笑。
そのまま首を傾げる妹紅の黒く艶のある豊かな髪を、くしゃっと軽く撫でるように手を置き、兄が妹に優しく言い聞かせるように語りかける。

「嬢ちゃんの思っている『好き』と俺が今言った『好き』って言葉は意味が違う」
「どういう事ですか？」

軽く、そして心持ち優しく頭を撫でられるその感触の心地良さに身を任せつつ、妹紅は苦笑を浮かべる翔夜の言葉が良く分からなかった。
目を向けてみると、妹紅の反対側に座る紫も、少し困ったように笑みを浮かべている。
紫と同じような色の笑みを浮かべる翔夜に、ゆっくりと頭を撫でられながら、妹紅は翔夜の言葉に耳を傾ける。

「好きだけじゃない。『悲しい』も『辛い』も『苦しい』も『嬉しい』も『楽しい』も、全てその場その場で意味が違う。それは俺達が感情と言う不安定な物を持っている生き物だからだ。だが、同時にそれが素晴らしい事でもある」
「う～……兄上の言う事は時々難しくて、よく分かりません」
「くっく……これから先いくらでも分かる。嫌と言っても分からざるを得なくなるもんだ」

言っている意味がわからないと言う様に、妹紅の整った眉はハの字に歪むが、それに気にする事無く、翔夜は楽しそうに笑みを浮かべ、撫でていた手を止め、軽く妹紅の頭を、ポンと叩き手を引っ込める。

これから先嫌でもわかる、と言う翔夜の言葉と共に頭に感じた軽い衝撃。その衝撃に反応したのか、妹紅の瞳はぱちくりと一度瞬きを終える。

この話は終わりだと言うような翔夜の行動に、妹紅は少しばかり納得できない部分があったが、結局最後には、翔夜と話す事が楽しいと思い直し、次の瞬間にはやはり子犬の様に翔夜へと纏わり着くのだ。

やたらと懐いてくる歳の離れた妹の様な感覚で、妹紅を相手しつつ、着流しの懐から煙草を一本取り出し、何時もと同じように火を点け、灰を紫煙で満たす。

ゆらりと煙草の先から立ち上る煙に、妹紅は鼻を軽く、すんと鳴らし、はっとした表情。

「この匂い……兄様の匂いと同じ……」

「煙草って言うらしいわよ？」

「はぁ……たばこ、ですか」

翔夜が口に咥え、燻らせる長細い物体の名称を上げた時点で、それを吸った時を思い出したのか、紫の眉はハの字に歪む。

紫煙を立ち昇らせる物の名称を紫から聞き、軽く相槌を打ちながら、くんくんと鼻を鳴らすその様は、全くもって子犬を連想させる仕草である。

そして、その匂いを嗅げば嗅ぐほど翔夜の匂いを強く感じるその物体に興味が湧いたのか、妹紅の瞳は段々と好奇心を煌かせる目付きへ変わっていく。

キラキラとした好奇心を瞳一杯に煌かせながら、満面の笑顔で翔夜を見上げるその表情には、あからさまに翔夜と同じ事がしたい。同じ匂いをさせてみたい。

そういった感情が前面に押し出されていた。

妹紅の浮かべる表情の真意に気が付き、翔夜は思わず苦笑を浮か

べつつ、指に煙草を挟み虚空へ紫煙を吐き出す。

「子供にゃまだはえー、諦めな」

「むぅ！　兄様、私、子供じゃありません！」

「くっく、この程度の発言を流せねぇようじゃ、まだまだ子供だ」

頬を膨らませ、自らの不満をありありと表し、翔夜から顔を背けてそっぽを向く妹紅に、翔夜はからかうように笑みを浮かべ、それ見た事か、と言わんばかりの態度。

どうあっても翔夜は妹紅に煙草を口にさせる気は無いらしく、既にその腹の中は妹紅の追及をのらりくらりかわす体勢に入っている。

ふぃー、っと紫煙を吐き出しつつ悠然と笑みを浮かべる翔夜に、どうあってもそれを口にさせるつもりが無い、と言う意思を完全に理解したのか、妹紅は頬を膨らませながら、もういいです……と諦める。

「それでいい。大体、身体に悪い物には違いねぇ、吸わない方が良い」

「身体に悪いとか言いつつ、私にはあっさり吸わせたわよね……」

「お前は大丈夫だろ」

「相棒である私の身体をもっと気遣うべきだわ！」

「自称な……」

妹紅に言い聞かせるように、身体に悪い物だと言う翔夜に対して、紫がその意見に抗議の声を上げるが、それに対しても、面白そうな笑みを浮かべながら、いけしゃあしゃあと言い切る。

そんな翔夜の態度に、次は紫が軽く頬を膨らませながら、ぶーぶーとぶー垂れる。そんな互いに遠慮する様子が欠片も無い二人に、妹紅は少し羨ましそうな視線を向ける。

しかし、最終的には羨ましさよりも、楽しさが勝ったのか、二人

の会話を楽しそうに聞いている。
妹紅にとって、翔夜は尊敬する陰陽師であり、同時に本当の兄のような存在で、紫は自分の知らない事を教えてくれて、少し困った所もある姉だった。
自らが尊敬する二人が、仲睦まじくじゃれあっている様な空気は嫌いではないし、その輪の中に妹紅自身が居る事が、何よりも楽しい事であるのは間違いない。
そして何より、あの事件以来、手に入れたのは兄や姉だけではなかった。

「えっと、兄様、姉様。輝夜の所に行くんですよね？」

そう、輝夜である。
妹紅の勘違いから始まり、敵視すらしていた輝夜とは、まるで友達のような関係にまでなっていた。
切欠は妹紅が勝手に輝夜を勘違いしていた事への謝罪の為に、彼女の屋敷へと赴いた事から始まり、その際、一緒に着いて来て欲しいと頼み込んだ翔夜達と共に謝罪へ赴いた。
結果としては、それで何か実害があったわけではないので気にしていない、と輝夜は本当に気にした様子もなかった。
それでも妹紅の性格がそれで良しとせず、その旨を一緒に来ていた翔夜へ伝えた所、やはり何時もの面倒臭そうな表情で……

「じゃあ、友達にでも何にでもなって、自分の納得するまで輝夜の嬢ちゃんに付き合ってやればいいんじゃね？」

と軽く言われた言葉の内容に、妹紅自身衝撃を受け、その意見に基づいて輝夜と友達になったのだ。
貴族としての振る舞いを身に付けさせられ、いくら父親から大事にされていたと言われても、如何せん貴族の子供と言う肩書きは消

える事は無い。
そして貴族の子供である妹紅が、平民の子供達と仲良くなれるわけもなく、同年代の友達と言うものが妹紅には居なかった。
そんな彼女には、翔夜の言葉は衝撃的であり、結果的に輝夜と言う同年代の友達を得る事も出来た。
無論、輝夜は実年齢的に妹紅とかなり離れてはいるが、要は見た目や雰囲気として、妹紅は同年代だと思っていると言う事である。
輝夜と友達になり、同じ年のお友達が出来ました！　と翔夜へ嬉しそうに話し掛ける妹紅に、同年代……ぶふっ！と軽く呟きながら、笑いを一生懸命堪えているような表情で輝夜へと視線を向けていた翔夜の真意を、妹紅が知る事は、勿論無かった。
その際、輝夜が睨み殺す様な視線で翔夜を見ていた事も、勿論妹紅は知らない。

「そう言えば……そんな約束もしてたわねぇ」
「すっかり忘れてたな」
「姉様、兄様……」

悪びれもなく、扇子を揺らめかせながら思い出すように言う紫と、あっけらかんと軽く忘れていたと言い放つ翔夜に、妹紅は幾分か肩を落とす。
この二人が、大抵の事では動じる事も慌てる事も無いと分かってはいる妹紅だが、もう少し慌てて欲しいと思うのは仕方の無い事だろう。
はぁ……と溜め息を吐きつつも、あの事件以来手に入れた翔夜と紫の傍は、妹紅にとってとても居心地の良い場所となっていた。
そんな居心地の良い二人の傍を離れないままに、友達の屋敷へと行く、間違いなく妹紅は幸せだった。
妹紅の幸せに共鳴するように煩く蝉は鳴き、時間が経つごとに蒸し暑くなっていく空気。

だが、そんな季節にも、妹紅の黒髪は艶を失わず、表情も楽しそうに輝きを増していくばかり、大切な物が出来たこの季節が、妹紅は好きになっていた。

蒸し暑く、蝉の声が煩いこの季節、それは蓬莱山輝夜という、見た目は少女の住む大きな屋敷も変わらない事で、当然彼女の屋敷だけ涼しいという事などある訳が無い。

その暑さに耐えかねた輝夜の取った行動が、庭に面した廊下で少しでも涼む事であった。

相も変わらず立派な庭を、ぼう……っと何を考えるわけでもなく見詰め、頭の中を空っぽにして涼しくなる事に集中している。

夏の蒸し暑さに対抗する為の小細工を施している真っ最中である輝夜の耳に、数人の足音が飛び込んでくると同時に、屋敷の出入り口から続いている廊下側の襖が開け放たれる。

襖を開け放った人物は、輝夜の客人であり、約束したにも拘らず、かぐや姫とまで呼ばれた彼女を待たせ、しかもその表情は遅れてきた事に恥を感じているような表情ではなく、いつも通りのやる気の欠落した面倒臭そうな表情。

悪びれた様子など微塵も無い。

そんな傍若無人な男が恐縮した様子もなく堂々と部屋へと足を入れ、そのまま庭に面している廊下に入る直前の部屋の端にどっかりと腰を下ろし、胡坐を掻く。

「来たぞ、輝夜。取り敢えず、茶」

「アンタ……ここを茶屋か何かと勘違いしてない？」

やる気の欠落した面倒臭そうな表情の男――遠成翔夜の態度に、思わず顔を向け輝夜が呆れるのも致し方ない事だろう。

翔夜が部屋に腰を下ろした事から、一緒にきていた人物二名も部屋に入り、腰を落ち着ける。

紫は翔夜の隣へ、妹紅は輝夜の隣へ、輝夜と同じ様に、足だけを庭に下ろすようにして座る。

明らかに呆れたような輝夜の半眼など物ともしない翔夜の態度、連れである紫も特に気にした様子もなく、扇子を開き、近くに居た使用人にお茶とお茶請けまで頼んでいる。

これ以上無い程に図々しい翔夜と紫とは対照的に、妹紅は困ったなぁ、と言うように苦笑を浮かべる。

「翔夜に紫、少しは妹紅を見習おうとは思わないの？　この子はこんなにも控えめなのに」

「か、輝夜……そんな事無いってば」

溜め息を吐いて、妹紅を見習えと半眼を向けてくる輝夜に、褒められたのが嬉しかったのか妹紅が頬を少し赤らめて掌をわたわたと体の前で忙しそうに振る。

今現在、輝夜からの非難の対象になっている筈の翔夜と紫は、そんな状況にも拘らず、悪びれた様子もなく、不思議そうな表情。

紫と翔夜は顔を見合わせ、互いに首を傾げている。

貴族である妹紅の方が恐縮したような態度で、陰陽師とは言えそれほどの地位は無い翔夜とその助手である紫の二人は逆に堂々とした態度と言うのもおかしな話ではあるが、結局過ごした歳月が違いすぎるのだろう。

永く生きている翔夜と紫にとって、時間とはそう貴重な物ではない。

紫は生まれた時から既に長寿である事が決まっている妖怪であり、翔夜に至っては、性格的にも最初から時間に対しての執着が無い上に、実際に何億年もの永い時間を生きてきた事実がある。

それらの要因から、紫と翔夜は、元々時間に対しての執着が無い

為、時間と言うものをあまり重要視していない。
自らの興味を引く事柄に制限時間があるならば、翔夜にとってその限りではないが、それ以外ならば、時間と言う物は二人にとって道に落ちている石と何ら変わりが無い。
何せ翔夜と紫には、ほぼ無限に時間はあるのだから。

「お前が来いっつーから来てやっただけだぞ？」
「別におかしな事は無いわよね？　立場的には頼まれた方なんだから、私達の方が寧ろ立場上じゃないかしら」
「あんた達って、ホントに……」

遅れて来たことに何の悪気も感じていない、それ所か何故文句を言われるのか理解出来ないと、不思議そうに首を傾げる二人に、輝夜は額に掌を当てて、首を左右に軽く振り、呆れて物も言えないと言わんばかりの態度。
時間を重要視していない翔夜と紫にとっては、約束を守ったと言う事が重要なのであり、時間通りに来なかった事を呆れている輝夜とは、その時点で価値観にズレがあるのだ。
ふーむ、と首を捻っている紫と翔夜、そんな二人に呆れている輝夜、そんな状況に苦笑を浮かべる事しか出来ない妹紅。
この場の空気は何とも形容しがたい空気に陥っていた。
そんな微妙な空気を払拭するべく、妹紅が健気にも、胸の前で両手を合わせながら、無理矢理作ったような笑顔で話題を提供する。

「わ、私、何で輝夜が今日ここに呼んだのか気になるなぁ！　ね？　兄様、姉様！」
「いや？　別に、どうせ妹紅にも話しておこうと思ったんだろ？　色々と」
「アンタ……そこまで私の魂胆見切られてると薄ら寒いわよ」

翔夜の言葉に、妹紅は頭にいくつものクエスチョンマークが浮かんでいて、それだけでは理解出来ていないような表情だが、輝夜は違ったのか、翔夜の面倒臭そうな表情と声音で語られた言葉に目を見開いている。

面倒臭そうな表情で面倒臭そうにだらりと座り、面倒臭そうに話す翔夜の隣では、これぐらい分かって当然、と言った余裕の表情で、紫が扇子を操っている。

優雅に扇子で自らを扇ぐ紫へ、翔夜は視線を動かし、茶を啜る右手とは逆の、何も持っていない左手を掌を上に向け、腕を横へと差し出す。

すると、音もなく黒色の直系３０ｃｍ程の魔方陣が翔夜の左手の掌と平衡になる様に出現し、黒い靄を吹き上げて消え去ったと見えた次の瞬間。

翔夜の左手には、紫が仰いでいる扇子と同じ物が握られており、それを、パンッと勢い良く広げる。

そして何事も無かったかの様に自らを仰ぐ扇子には『暑い！』と力強く達筆な文字の形をした黒い魔力が浮かんでいた。

夏なので結局風はそれなりの温度を伴っているが、風が流れないよりはマシだと思ったのか、扇子から発生する風に、翔夜は瞳を細める。

紫とは違い、無造作に扇子を仰ぐ翔夜の姿に、少し嬉しそうに紫はその瞳を細める。

「で？　お話があるなら早く話しちゃう方が良いんじゃないかしら？」

「アンタに言われなくても分かってるわよ」

「あら、それは御免なさい」

うふふ、と扇子で口元を隠しながら優雅に笑う紫に、輝夜は憮然とした表情を向ける。

無論、そんな事をした所で、輝夜よりも更に永く生きた紫の余裕を崩せるわけはなく、結局軽く舌打つ程度しか輝夜に出来る事など無い。

そんな二人の視線の交わしあいの傍ら、翔夜は庭に視線を向けながら、入れられたお茶を飲みつつ、自らを仰ぎ、あちーっとこれ以上無い程にだらけているし、妹紅はそれとは対照的に、妹紅自身に話がある事は察したのか、じっと輝夜の方を見据えている。

生を愉しんでいるが、今一考えを読みきれない翔夜はさて置くとしても、妹紅の瞳の色は見た事があった。

それは、輝夜も昔は秘めていた輝きの色、生きる事に精一杯になっている瞳の輝き。

短い生が決まっている地上の人間が皆等しく浮かべる命の輝き、それが今の輝夜には眩しかった。

「何かお話があるなら、話して？　輝夜」

「……ええぇ」

心なしか姿勢を正した妹紅の瞳が真っ直ぐに輝夜を捉え、そんな妹紅の瞳の輝きに、輝夜は眩しそうに瞳を細める。

そんな二人を尻目に、翔夜は大口を開けて如何にも眠そうに欠伸をかまし、そんな翔夜に対して紫は苦笑を浮かべて、流石ね……等と面白そうに翔夜を視線に捉えている。

約二名によって、幾分か場の空気は解れた、と言うか、シリアスな空気に入りそうな場が、完全に崩れ去ったが、そのおかげなのか、思っていたよりも輝夜の口はすらりと開き、言葉もスラスラと出てくる。

自らが不死人であり、月から来た月人の姫である事。今は蓬莱の薬を飲んだ事による罪を償う為に地上で暮らしていると言う事。もう直ぐその罪を償う期間が終わり、迎えが月からやってくる事。

そこまでを話し終えて、輝夜は一つ息を吐き出す。

取り敢えず話が一段楽したと見たのか、軽く相槌を打ちながら輝夜の話を静かに聞いていた妹紅がその小さな口を開く。

「輝夜は……」

「ん？」

「輝夜は、月へ帰った後どうなるの？」

「今の話、信じたの？」

「当然だよ。友達の言う事だし、それに嘘をついてる顔じゃなかったし」

そう言ってにっこりと笑う妹紅に、やはり輝夜は眩しそうに瞳を細める。

同時に輝夜は思う……。

（地上の人は、本当に成長が早いわね……）

妹紅が先程言ったように、表情から嘘ではないと悟った。恐らくそれは本当の事なのだろう。つまりこの短い間で妹紅は、他人の表情から何かしらの感情を読み取れるまでに成長したと言う事だ。

それは妹紅の成長速度が速いのか、それとも……そこまで考えて、やはり面倒臭そうなやる気の欠落した表情で胡坐を掻き、茶を啜る翔夜と、小さな口を開き、優雅にお茶請けを口にする紫、その二人へと視線を向ける。

結局、要因はその二人なのだろう、と簡潔に結論を出した所で、妹紅からの問い掛けに、輝夜は口を開く。

月へ帰った後、自らがどうなるのか、と言う問い掛けの結論。

予測でしかないが、輝夜はそうだと思っている予測を、妹紅に話す為に口を開く。

「多分、色々と調べられるわ、月人でも不死では無いから。不死の

私をあらゆる手段を使って調べるわ」
「それは……勿論何があったかとか聞いて来る訳、じゃ、ないよね？」
「えぇ、多分身体の隅々まで私の身体がどうなっているのか、不死の原因を調べる為に色々されるわ」
誰だって死にたくないものね……そう言って軽く笑う輝夜の横顔は、どう見ても妹紅と同じ年の女の子が浮かべる雰囲気の笑みではなかった。
儚く、決定しているこれからに、諦観の感情しか抱いていない。そんな表情だった。
寂しく、そして諦めの感情を込めて笑いを浮かべる輝夜が、妹紅の目には悲しく映る。
可哀想ではなく悲しい、そう妹紅は悲しかった。
輝夜の境遇が、ではなく、輝夜が既に諦めてしまっている事がとてつもなく悲しかったのだ。
姫と呼ばれた筈の気高い彼女はそこには居らず、その諦めの背中は、妹紅よりも小さく、そして狭く見えた。
今が夏だとは……蝉がうるさく鳴く、騒がしい、そんな賑やかな夏だとは思えないような静かな空気が、妹紅と輝夜の間で流れていた。
蝉は夏の炎天下の中、お祭りでもあるかの様に騒ぎ立てているのに、輝夜の背中はその喧騒も聞えていない華の様に寂しそうで静か。
そんな姫らしくない輝夜が、妹紅は段々と許せなくなってきた。
妹紅が勘違いしていた事で謝りに言った時、実害は無かったから、と苦笑を浮かべながら妹紅を許した大きな輝夜は何処へ行ったのか？
多くの貴族と相対しながらも、屹然と自らの考えを言う、高貴な輝夜は何処へ行ったのか？
妹紅自身が見ていた輝夜は幻想だった。他ならぬ輝夜自身からそう言われている様な気がして、我慢のならなくなった妹紅は、感情

に任せて口を開こうとした。が、しかし、その行動は思わぬ方向から遮られる事になる。

「はい、取り敢えずそこまでね。翔夜が何か言いたそうに口元ぴくぴくさせてるから」

「くっそ、何で言うんだよ。放っておいた方が絶対おもしれーじゃねーか」

「良いじゃない、それぐらい。言ってあげたら？」

今までの輝夜と妹紅の間で流れていた空気を破壊するかのごとく、紫からの声が落ちてきて、妹紅と輝夜の視線は嫌でも、紫と翔夜に集中する。

自身の考えていた事をどう考えても話さざるを得ない状況になってしまった事に、翔夜は、しゃーねぇな、と一つ溜め息を吐きながら口を開く。

翔夜の瞳は面倒臭そうな何時もと同じ色の瞳。そんな瞳が輝夜を捉える。

今まで心なしか背を丸めて見えた輝夜の姿勢は、それだけでビクン！　と正される。

「じゃ、まず月に帰ったら何されるって？」

「それは……実験動物に……」

「本当にそう思うか？」

「え？　ち、違うの？」

「そう思いたきゃ思っていても良いぞ」

輝夜からの疑問に、笑いながらあっけらかんと言い切る翔夜に、妹紅から少し厳しい視線が突き刺さるが、翔夜は当然そんな事知った事ではない。

楽しそうに笑いながら少し意地悪に言葉遊びを始める翔夜の二の

腕を、いい加減にしろ、と言う様に紫が肘で突いて来る。

「まぁ、そう言う可能性もありえると言えばありえる」

「じゃあ、他の可能性って何なのよ？　たった数年で終わるような刑なんて、裏に何かあるとしか思えないじゃない」

「じゃ、仮に、本当にそれだけだったら？　数年の追放刑で済む位の罪であって、その後何も無かったら？」

「それは……」

当然無いとは言い切れない。

今まで蓬莱の薬を飲んだ物は居なかったし、それによる罰を受けた者も居なかった。

蓬莱の薬に関係する罪人は今の所輝夜だけなのだ。

他に罪人が居て、その末路を知っているというのなら、輝夜の意見は確固とした証拠があるという事なのだろう。

だが、蓬莱の薬に関連する初めての罪人である輝夜の末路など、誰も予想のしようが無い事であり、前例の無い事なのだ。

もし、輝夜の言う事が違い、月人はそこまで貪欲と言うわけではなかったら？

不死のメカニズムなどに、大半の者は興味が無かったとしたら？

もしそうだったのなら、輝夜の予測は的を外れる事になる。

そう仄めかすだけで、明確な何かを言ってこない翔夜の表情は、相変わらず飄々と輝夜をからかう様に、緩く笑みを浮かべて楽しそうな雰囲気。

逆に輝夜は、情報を小出しにするような翔夜の言葉によって思い浮かぶもう一つの可能性との板挟みで、頭を抱えている。

そんな二人の構図に、今まで真剣だった筈の妹紅の表情は既に呆れたような表情へと変わり、紫は紫で楽しそうに、それで居てつまらなそうな雰囲気で笑っている。

相も変わらず読み難い妖怪である。

「目……目よ、私を送り出す時の目、あれはそう言う目だったわ」
「お前の思い込みって可能性もある。視野狭窄ってのは誰にでもありえる事なんだぜ？」
「……いい加減にして。惑わせるだけ惑わせて、あんたは私に何が言いたいのよ！」

眉根を寄せて、怒っているのか泣いているのか、どっちとも付かない表情で叫ぶように言い切る輝夜に、翔夜は、仕方ないと言うように瞳を軽く伏せて肩を軽く竦める。

「俺が言いたいのは、永琳の事だ」
「永琳？　何でその名前が出てくんのよ？」

翔夜の口から、永琳と言う月人の天才の名前が出た瞬間。
紫は眉根を寄せて、閉じた扇子をぎりぎりと握り締め、妹紅は純粋に首を傾げ、輝夜も不思議そうに翔夜を見返す。

「アイツは天才だ。掛け値無しのな」
「そんな事知ってるわよ。だから、何の関係があって、アンタは何を言いたいのよ……」

誰かを褒める事など滅多に無い翔夜が、手放しでべた褒めする永琳の評価に、紫が悔しそうに扇子を握り締めるが、当然そんな事は関係なく事は進んでいく。
あまりにも緊張感に欠ける紫の態度だが、輝夜はそんな事を気にしている余裕はなく、夏の炎天下にも勝るとも劣らない熱視線で翔夜を視界に入れている。
そしてその眉根は、やはり情報を小出しにしている翔夜に苛立っているのか、ぎゅっと寄せられ、眉間に皺が出来ている。

「そう熱い視線で見るな。照れんだろ？　後眉間、皺取れなくなるぜ？」
「どーでもいいし！　大きなお世話よ！」

この空気でボケる事が出来る翔夜は、明らかな大物である。
翔夜とは対照的に、際限なくヒートアップしていく輝夜を見て、面白そうに笑みを浮かべる翔夜。

「兄様ってば、悪趣味です」
「でも素敵……私もああやって翔夜に遊ばれたいわ……」

何故か妙に恍惚とした表情の紫に、妹紅は呆れたような表情を浮かべるが、直ぐに輝夜と翔夜へと視線が向けられる。
変わらず輝夜がヒートアップし、翔夜は楽しそうに、そして反応の良い輝夜をこの状況下で弄くるように笑うだけ。
翔夜のやっている事は、明らかに悪趣味である事は分かっているが、何故かそこで、妹紅の頭の中に妙なビジョンが過ぎる。

妹紅は現在、自らの屋敷で翔夜を講師に、色々と習っている所だ。
だが、翔夜は教えるのは上手いのだが、如何せん厳しく、どんな問題も最低限のヒントしか与えてくれない。
今は外での振舞い方や、貴族達に対しての対応などを習っている。
広い部屋には他に誰も居らず、翔夜と妹紅の二人だけ。
翔夜はどっかりと胡坐を掻き、妹紅はその正面に静かに座っている。
授業形式としては、翔夜に言われた通りの状況を頭に浮かべ、その状況の中でどう振舞うのが一番正しいか、それを考え、出した答

えを翔夜に採点してもらうという形式だ。

「そうだな……例えば、地位は自分よりも低いが、初対面の貴族たちがお前の前にいる。まず何に気をつける？」

「むむむ……身形、でしょうか？」

「バッカ、身形に気を使うのは当たり前だ。会った瞬間にまず何を言うべきか、そう聞いてるんだ」

仕方ないな、と言うように小さく笑みを浮かべながら……いや、にんまりと笑いながら妹紅に答えを急かす。

翔夜に急かされた妹紅は、当然あわあわと慌て、それに比例する様に、黒くくりっとした瞳は右往左往し、釣られたかのように頭が動き、連動して豊かな黒い髪もゆらりゆらりと揺れる。

チラチラと翔夜を見てみるも、にんまりと笑っているだけ。こう言う時の翔夜は、自ら質問しないとヒントもくれないし、そのヒントも限定的なものだ。

これ以上ヒントを上げると簡単に分かると察すれば、もうヒントは貰えない。

そういった意味で、翔夜はとても厳しかった。

「え、えっと、初対面の貴族たちですよね？　必ずしなきゃならないんですか？」

「当然だろ？　上に立つからにはしないとな」

「あ、あうう……」

「くっくっ……」

軽く困った表情で呻く妹紅の表情を見て、少し意地の悪そうな笑みを浮かべる翔夜。

翔夜は何もしていないのに、妹紅は段々と居場所の無い何処かに追い詰められているような気がする。

目的地もハッキリしない何処かへ、意地悪そうな笑みを浮かべた翔夜に追い立てられて、ゆっくりゆっくりと逃げ場をなくされる。

「に、兄様ぁ……」

「駄目だ、これ以上質問は受け付けない」

「あうぅ……」

上目遣いでお願いしてみるも、ニヤニヤと笑う翔夜からは、にべもなく質問を打ち切る言葉が出てくる。

自らの望まない展開に、思わず妹紅は涙目になるが、翔夜は当然許してはくれない。妹紅が正しい答えを出すまで楽しそうに笑みを浮かべながら、早く、と急かしてくるのだ。

だが、そんな時間も長続きするわけがなく、妹紅が時間内に答えられないと、容赦なく妹紅はお仕置きを喰らう。

「はい、残念、時間切れだな？」

「あわわ……こ、答えは何なんですか！？」

「答えはな……何も言わない。だ」

「な、何も言わないんですか？」

時間内に答えられなかった事で、妹紅のお仕置きが確定し、翔夜がその身を、じりじりと妹紅へと近づけていくが、妹紅もお仕置きは嫌なのか、後ずさりしながら少しでも時間稼ぎをするために、翔夜へ答えを問う。

妹紅からの答えに、簡単に答えながらも、その距離が縮まる速さは、一向に落ちてくれず、妹紅は遂に壁際まで追い詰められ、へたり込んでしまう。

あ、あはは……と笑いながら、翔夜を見上げる妹紅に、翔夜は、ニヤリと笑みを浮かべる。

「地位が下の者に、気安く此方から声を掛けてはならない。権力者と言うのはある種の気高さが無いと勤まらないんだよ。不比等が自分から下の者に声を掛けている所を見た事あんのか？」

「な、無かったと思います……」

そう、不比等はああ見えて、大きな貴族の頂点であり、気安く下の者に声を掛ける人間ではないし、声を掛けてはいけない人物なのだ。

権力者にとって、一番してはならない事が、軽く見られる事であり、そう誰にでもホイホイと声を掛けているようでは、軽く見られても仕方が無い。

故に、声を掛けるのは用事がある時のみ、後は黙して語らず、とは言わないまでも、そう気安く口を開かない人物と言う評価が無いと、威厳は着いてこない。

良く喋りながらも、上手くその切り替えを使って威厳を纏う人物が居るが、これは基本的に人間の中では稀な方の性質だ。

結局そういった性質は、永く生きた経験に基づいて、自然と出来ていく切り替えな為、人間ではそれを身に着けるまでの寿命が圧倒的に足りない。

「さぁて、答えも出た所で、お仕置きの時間だな？」

「あ、あ、あっ……」

ニヤリと笑みを浮かべながら、妹紅の前にしゃがみ、近付いてくる翔夜の笑みに、妹紅は身体を震わせる事しか出来ない。

だが、しかし、これは答えられなかったお仕置きであり、妹紅に拒否する権利は無い。

そんな妹紅に、翔夜が容赦なくお仕置きを――

「あ、あ、あ……（そんな兄様も……）姉様、良いかもしれません」

輝夜が翔夜を睨み、翔夜がそれを面白そうに笑みを浮かべながら見据える現実へと、妹紅が帰還し、第一声がそれであり。

唐突にそんな事を言う妹紅に、不思議そうな表情を浮かべる紫。

対して帰還したばかりの妹紅は、何処かふわふわしたような、地に足が付いていないような、そんな雰囲気だ。

翔夜に対して、悪趣味だと呆れていた少女の表情では無い。

「そ、そうね、良いかもしれないわね」

「えぇ、とても良いです」

何処か焦ったように、と言うか、実際妹紅が唐突に何を言っているのか理解できなかった紫としては、取り敢えず慌てながらも、妹紅の意見を肯定するしかなかった。

視線は妹紅を捕らえておらず、翔夜と輝夜のやり取りに視線を向けている。無論、何か少し怖いのでそこから視線を動かす気は毛頭無い。

妹紅に視線は向けずに扇子で口元を隠しながら、妹紅の意見を肯定した紫の耳に、やはり少し陶酔した様な言葉と声が届く。

でへへ～と言う、大方女性が上げてはいけないような笑い声を上げている妹紅の声を耳に入れながら、紫は必死で翔夜と輝夜から視線を離さない。

「で？　永琳がどうしたってのよ？」

「俺が言いたいのはだな……お前がそうなるって分かってて、アイツが本当にそれを見過ごしたのか？　って事だ」

「……でも実際止められなかったわ、私を」

「お前、本当に思ってるのか？　お前みたいな小娘が、あの天才を

出し抜けると、本気で？」

今までニヤニヤと笑っていた表情を消し、いつも通りの面倒臭そうでやる気の欠落した表情で、呆れた様な声音で、輝夜にそう問いかける。

翔夜は永琳を過大評価もしていないし、過小評価もしていない。

そして、輝夜の話では、彼女の教育係は永琳だったと聞いている。だとしたら尚更輝夜が永琳を出し抜けるとは思わなかった。

銀色の大きな一本の三つ編みが印象的な美人の天才は、少しの間でも輝夜の傍に居たなら、その人格性格をプロファイリングしている筈だ。

そこから、輝夜が何に悩み、どう言う行動をするか、その程度分からない筈は無い。

不死の身体に興味がある誰かからの手引きがあったとしても、それも丸めて見通す事が出来る。

翔夜はそう確信している。いや、確信ではなく、そう決まっているのだ。

天才と言う一言は、伊達ではないし、普通の考え方では天才の考えている事は分からない。

１を知って１０を読む天才、１を知って１０を識る鬼才。

このどちらなのか分からない程に、八意永琳と言う女性は天才なのだ。

「何か問題があったとか……永琳だって万能じゃないんだし」

「そうだな、止められない何かがあったかもしれねぇ。だが、これから先に問題があったのなら、態々それを見過ごす女じゃねぇのも確かだ。違うか？」

「……」

自信満々にニヤリと笑いながら、胡坐を掻いている膝を使って、

左手で頬杖を突き、翔夜の意見によって沈黙した輝屋を黙って見据える。

翔夜の隣に居る紫は、無条件で信頼しているかの様に次々と言い切っていく翔夜を見て、悔しそうに眉根を寄せている。

実際に永琳と呼ばれる女性を、翔夜は言った通りに信頼しているし、その女性も翔夜が言った程度の事はやってのけるのだろう。

永琳は翔夜の信頼を裏切る事は無いし、その逆もまた然り、そんな現実に、紫は下唇を強く噛み締めたくなったが。

横目で飄々と、しかし余裕をもって輝夜を見返している姿を視界に収め、落ち着く。

（そうよ、この位予想された事。今更悔しがるなんて、おかしな話ね）

すぅっと小さく息を吸い、思考を整理する紫。幾分か冷静になった頭でもう一度考えてみれば、当然の話だった。

永い時を生きて、色々な人や色々な物を見てきた妖怪である八雲紫を、一瞬にして魅了した男なのだ、ならば、自らと同じ様な女性が居ても何ら不思議ではない。

それ所か、もし居ないのならば、こうして翔夜を追いかけている八雲紫と言う長命の妖怪の目がおかしいという事になる。

軽く瞳を伏せて、人知れず静かにそう考える紫、高が天才なだけの女がそこまで信頼されるのなら、同じ様に翔夜からの信頼を勝ち取るなど、自らが出来ない訳は無い。

結局、紫は永琳から翔夜の信頼を奪いたいわけではなく、翔夜から信頼を貰いたいのだ。そう答えが出ると、紫の思考も晴れ、今繰り広げられている話を聞く余裕を取り戻す。

そうして取り戻した余裕でもって、軽く伏せていた瞳を開くと、翔夜が視界に入り、ニヤリと笑ったまま、チラリと一瞬だけ紫の方へ視線を送る。

そんな翔夜の視線は明らかに、やれるもんならやってみな？　と挑発的に語っていた。

無論、そんな視線を投げられて黙っていられる紫ではない。日常的に翔夜から妖怪としてのプライドを粉々にされている紫でも、流石に翔夜を想う一人の女として、女のプライドを砕かれるわけにはいかない。

（上等じゃない？　この八雲紫を挑発するなんて……）

そう思った瞬間。紫は扇子の内側で、翔夜と同じ様に、ニヤリと笑みを浮かべ、視線を交わしあう。

笑みと視線を交し合って、互いに視線を逸らしたのと同時に、紫は扇子をぱちりと閉じて、膝に両手を置いて、またしても静観の姿勢を取る。

翔夜は外した視線を、俯いて何も言えない様に震えている輝夜を、やはりニヤニヤと笑みを浮かべて見ている。

「け、結局、私の一人相撲だった、って事？」

「さぁな？　どうなるかはわからんが、俺はその可能性が高いと思うって話だ」

「～～～っ！　少し前に真剣そうに語ってた自分を殴り殺してやりたいわ！」

顔をバッと上げて、羞恥で顔を赤くさせながらじたじたと暴れる輝夜に、翔夜は面白そうに笑みを浮かべ、死なねぇだろ、などと軽く突っ込みを入れる。

それに対しての輝夜は、それぐらいの気分って事よ！　と肩を怒らせて翔夜へ声を上げる。

そんな輝夜を見て、翔夜はまたしてもゲラゲラと笑い、何が可笑しいのっ！？　とヒステリック気味に叫んだ輝夜の姿がまた面白か

ったのか、一層ゲラゲラと笑う。

「くのっ！　くのっ！」

「いへぇから……ぶっふぅ！　くっくっ……誰だって死にたくはないものね……ぶっくっぶふぅ！」

「その口閉じろー！」

ゲラゲラと笑い声を上げる翔夜に、輝夜が飛び掛り、それでも笑いを止めない翔夜の頬を輝夜が引っ張りまわす。

それに対して軽く、痛いと抗議を上げながらも、途中で輝夜の物真似を入れ、それにまたぶり返したのか、普段の翔夜からは考えられないほどツボに嵌ったような笑い声を上げる。

微妙にシリアスっぽさを感じさせそうな場面から、怒涛の展開を見せ、もうギャグ以外の何にも見えない翔夜と輝夜の遠慮の無いやり取りに、紫は、翔夜らしい、と苦笑を浮かべ、妹紅は着いていけない様で、呆けたような表情を晒していた。

笑い転げる翔夜の上に馬乗りになり、顔を真っ赤にさせながら翔夜の頬を必死に引っ張る輝夜。

その顔は既に何かを諦めたような色ではなく、今を楽しく生きる少女の顔だった。

あれから暫く翔夜は輝夜を弄り倒し、それが落ち着いてきた所で話し込み、辺りは綺麗な月が浮かぶ夜へと移行していた。

昼間に五月蝿く鳴いていた蝉の声は鳴りを潜め、鈴虫と梟の声が織り成す静かなオーケストラが辺りに響いている。

その中で、闇に紛れない艶のある黒と、闇と相反するような金色、そして闇と同化する様な黒色が、並んで歩いていた。

言うまでも無く、妹紅と紫、そして翔夜である。

輝夜の屋敷で離していた雰囲気は明るい物だったが、こうして静

かな夜の中を歩いていると、先程までのやり取りを冷静に考えてしまう。

そんな事を考えているのは、言うまでも無くこの中で一番人生経験が短い妹紅である。

妹紅は、誰だって死にたくはない……そう言った輝夜の言葉が、引っ掛かっていた。

誰だって死にたくはない。当然の事で、帝すら不死の方法を探していると耳にした事もある妹紅は、そのことについて考えていた。

死にたくはない。しかし、妹紅は誰かが目の前で死を迎えた所を見た事も無ければ、当然死んだ事もない。

死を目の前にした誰かが何を思うか、誰かの死を見て自らが何を思うのか、そんな事考えた事も無かったし、考えても答えは出ない。

こうして目の前に広がる闇を見ていると、死と言うものについて考えてしまう。

死ぬと自分は誰かは、何処へ行くのだろうか？　その時何を思うのだろうか？　死は悪い事なのだろうか？　そこに一片の救いもないものなのだろうか？

本当は目の前に広がる闇に差し込む、一縷の月光の様な救いがある死もあるのではないか？

どうしてもそんな事を考える。だがやはり答えは出ない……。

だからこそ、妹紅は聞いた。今一番尊敬している兄へと……。

「兄様、死はいけない事ですか？　どうしても回避しなければならない事ですか？」

純粋な瞳で、翔夜を見上げてくる妹紅の疑問に、翔夜は、ほぉ……と興味深そうに短く呟く。

そして、感慨深そうに妹紅を見据えて、視線を妹紅から外し、正面を向く。

「中々深い質問だな。だがまぁ、その答えは死んだ本人しか分からねぇさ」
「死んだ本人にしか、ですか？」
「おぉ、死にたくなかったなら、そいつにとって死とは悪だ。死にたかったのなら、そいつにとって死は救いだ」
「はぁ……」
「だからこそ、この問答には意味がない」
「意味が、ない……」
「何故なら、死と言う概念に善も悪もないからだ。悪になる死もあれば、救いになる死もある。な？　意味がねぇだろ？」

ふっと笑みを浮かべながら言われた翔夜の言葉に、妹紅は頷く。
それはそうだ、死と言う一つの概念なのに、救いも悪もある。相反する性質を一つの概念が持っている。
そんな事柄に対しての問答など、無意味であり、結局最後には、自らの考え方や価値観によって、悪と捉えるか救いと捉えるしかない。
むむ……と一瞬眉根を寄せて考えてしまう妹紅の頭に、何かが軽く乗せられ、頭に乗った何かは、妹紅の豊かで艶のある黒髪をゆっくりと撫で付ける様に動く。
その感触に覚えのあった妹紅は、直ぐに隣の翔夜を見上げる。
当然翔夜はそこに居り、妹紅の頭に乗っている感触も、翔夜の左手が原因であると確認。
視線をついっと翔夜の右奥へと動かすと、紫が珍しく扇子を口元に当てないままに微笑を浮かべ、妹紅を見ていた。
見慣れない紫の微笑みに、あわあわと翔夜へ視線を移す、そこでも翔夜が滅多に見せない微笑ましい物を見るような笑みを浮かべていた。
その笑みの珍しさに、ぼぅと見惚れていると、妹紅の頭に乗せられた翔夜の左手がゆっくりと動き、それと連動するように翔夜の口

も動き、その視線は妹紅から闇が広がる空へ移動し、そこから月へ固定される。

「だが、言えるのは、死があるってのは幸せな事って事だ」
「幸せな事、ですか？」
「あぁ、死は全ての終わり。そこには何も無い。そんな所へ行けるのは幸せな事だ。何も考えなくて良いんだからな……」
「何も無い……」
「だからもし、お前の大切な奴が死にそうな時、死んでも悔いは無いと言ったなら」
「言ったなら？」
「それを止めてやるな。全てを飲み込んで見送ってやれ」

そう言って月から妹紅に視線を戻した翔夜の顔は、今まで見た事も無い様な表情で、表し様の無い表情だった。
空虚がありつつも、それを何かで埋めた後がいくつもいくつもいくつもある様な、そんな言い表しようの無い表情。
悟りと言う諦めの境地ではなく、足掻きと言う運命に抵抗する感情ではなく、悲しみと言う何かを悲観する表情ではなく……。
言うなれば、全てを包み込む様な、受け止めるような、そんな優しい無だけが存在していた。
この時の妹紅には、翔夜の言っている意味はよく理解出来なかったし、何だか得体の知れない大きな物に包まれるような感覚が怖かった。
だが、後に妹紅がその意味を理解できる様になる言葉は、白く輝く月が浮かぶ闇に融けていった。

じゅうきゅう　永遠の信頼、開通してます。私も！　私も！（後書き）

はい、ストック切れたけど、ストック吐き出してる内に何とか一本書き上げたあっくすぼんばーです。

さてさて、いよいよ本格的に永琳の事が翔夜の口から出てきているわけですが……いやー、紫、嫉妬してますねーw

そんな彼女が可愛いわけですがw

そして、月人の設定、少し弄りました。と言うより、輝夜が京を去る件の展開をガラリと変えてみました。

どうなるかは、次回をお楽しみに。

あ、いよいよ永琳再登場です。

さてさて、ここからはもう既にここ数回で恒例となった雑談コーナーです。

ではお約束……。

あ、あの！　これ……読んで下さい！　私、ずっと待ってます……。

はい、お約束も終わった所で雑談に入りましょう。

最近弟夫婦が甥を連れてよく遊びに来るんですが……いやはや、やっぱり可愛いですね、赤ちゃん。

こう見えて私、子供好きですので、凄く甥と遊びます。

ですが赤ちゃんはミルク飲んで寝るのが仕事。寝てしまった時凄く残念で仕方ありません。

もう何やってても可愛いですね、キャッキャ笑ってても可愛いですし、こいつ誰だろう？　見たいな目も可愛いです。

抱っこしてたら毎回、お父さんみたい、と弟夫婦から言われるのですが……。

それはつまり、子供がいてもおかしくない様な雰囲気と言う事で

しょうか？　えぇ、そうなんでしょうね。
そんな、良いお父さんみたい、と言われる私、非リア充の未婚ですが？
まぁ、そんな事はどうでも良いですねｗ
実はこの私の子供好き、翔夜にも忍ばせていますｗ
翔夜も隠れて実は子供好きなのですよｗ

ではでは、今回はこの辺りで……。
娘より息子が良い……娘とか嫁にやりたくねぇー……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5994u/

東方魔王伝～人間だけど吸血鬼～

2011年12月24日12時52分発行